超意識心理學

フロイド精神分析大系

最近の學界を惡魔の如く攪亂し神の如く驚倒歸依せしめたる

大膽奇拔の新學說『精神分析』とは何ぞや

こは……人間行爲の錯誤、夢の諸現象を分析闡明する微妙なる心理研究の結晶である。

こは……人間の現實生活を左右する驚くべき恐るべき潜任意識の摘抉である。

こは……神と惡魔とを同時に忌憚なく暴露し人間內奥の眞を示す新しき哲學である。

こは……勃起恐怖、中絶性交、潜在的同性愛、近親相姦等精神と性慾の聯關交錯を立證せる新しき實驗科學である。

こは……恐怖、假面、催眠狀態、死の象徵、詩的描寫、處女錯綜、夢の怪奇性、罪惡意識等精神作用の神祕を解明せる新心理學である。

こは……狂氣、ヒステリー、一切の精神病の原因を分析し、適切なる療法を明示せる最新の醫學である。

豫約に非ず選擇隨意

Freud · Metapsychologie ·

Freud

超意識心理學

林 髞 訳

フロイド
精神分析大系
13

アルス 刊

譯序

フロイドは自分の業蹟を人類が今までに經驗した三つの痛事(いたごと)の一つであると言うてゐる。コペルニクスに依つて、先づ地球中心の夢が破られた。ダアウヰンが、人間は猿から由來したのであると證明したのは、神を象つてゐるとの人類の自惚を痛く傷つけた。更に、人間は自分の自我を統一してゐる事が出來ぬばかりか、「無意識」に引きずられてゐる哀れな動物である事を明かにして、フロイドが第三の痛事を人類に與へたのであると豪語してゐる。そして此の「無意識」を基調とした彼の心理學をメタプシコロギイと稱してゐる。本書第一の譯は、一九一三年より一九一七年に亙つて書かれ、後、一書にせられた彼の著 "Metapsychologie" の全譯で、全集の第五卷より譯出したものである。私はこれを永い間考へたあとで、「超意識心理學」と譯することの最も良譯なるを信じ、字義に忠實なるためには「後心理學」又は「超心理學」となす可きであらうが、フロイドの場合には、それ等を捨てたのである。

フロイドは、その後、自分の心理學を、"Tiefenpsychologie"「深部心理學」とも稱してゐる。

此等の名稱は共に、意識は自我の極めて表面にあるもので、その下、深いところ、無意識のなかに、

我々の精神生活が尙存在してゐることを主張してゐるものである。

フロイドの精神分析學を、いやに性的事物にのみ結合してゐるとの點で、心よからず思ふ一般の人人に對しては、此の如き理論的の著述は、フロイドへの改宗を齎す機緣ともなるであらうが、フロイドの精神分析療法は、治療上には確かに効果があるが、その學說は信ずるを得ないとなす、多くの精神病學者、又は醫師に對しては、益々難解な、益々不信なものに見えるであらうも知れぬ。然し一介の醫家にして、此の如き心理學上の體系を有し、しかのみならず、これを以つて從來の心理學に挑戰するも厭はずとなすフロイドの姿は壯快とせざるを得ぬであらう。譯者は生理學を專攻してゐるものであるが、大腦生理學、或は一般に中樞神經系統の生理學に對して、本書の一章に於てフロイドが勇敢に中樞局在說を捨て去つてゐるのは、ケーラー、コフカ等に依つて唱へられてゐる形態心理學が、同じやうに中樞神經の生理學に問題を提供してゐるのと相俟つて、著しく敎訓的であると考へる。思ふに、生理學上の成果と、心理學上の探求との間に橫はる、今は幽闇の一路を、さらに客觀的にして、更に思索的なる光の下に照し出すためには、明皓なる頭腦の幾つかをなほ要するのであらう。

本書第二の譯は一九二六年に書かれた、"Hemmung, Symptome und Angst" を全集第十一卷より譯出したもので、やはり理論的方面に於けるフロイド晚年の業蹟である。但し、讀者にとつて

は、この論文を讀む前に、必ず、一九二三年に公にせられてゐる「自我とエス」なる一論文を讀んで置くことが必要とせらるるであらう。(本叢書中の一つに、久保良英博士の譯がある)「超意識心理學」に始められた、これ等理論的方面の著述は、「快感原理の彼方へ」及び「自我とエス」なる二論文を經て、此の「制止、症状、及び、恐怖」に至つて、フロイド最近の思想を傳へてゐるものので、フロイド學説の進展を知らんとする人々にとつては、此等の諸論文は必讀とせらるるものである。

第三、第四の譯は共に、一九二二年より、一九二四年に亘つて、必要に應じて、フロイド自ら、我が學説の抄著をなしたもので、比較的最近に屬する點に於て、且つは、最も短く、最も正しく、フロイド學説の梗概と、その發達史とを知らんとする意味に於ては、此の二抄著に若くものはないであらう。

本書のうちでは譯語の統一を心懸けたのは言ふまでもないが、尙推敲の時間少かつたのを遺憾とする。同じ語を別々の場所で異る邦語とせざるやう、種々なる語を同一の邦語で譯さざるやう出來るだけ注意をしたが、唯 Einstellung と言ふ字だけは、種々なる場所で種々なる邦語を以つて譯したのは止むを得なかつた。

本書成るにあたつて、友人、文學士大山廣光、醫學博士秋場隆一、兩君の助言を得たるところがある。記して謝意を表する。

附　記

本書の譯稿は共に昨年三月にこれを完了し、出版書肆に渡して置いたが一年を經て漸く出版の運びとなつたものである。本書の校正を始めた頃、友人の注意により本書第二の論文は昨年中に邦譯が出來てゐた事を知つた。之を瞥見して見るに、同じ原文に對しかほど迄異る邦譯二つがあり得るのであらうかと驚く程である。然し此の驚きが寧ろ譯者をして本書の譯の存在が十分意義ある事を自信せしめた。

譯者は學命により四月初め渡歐の途につかねばならぬので、校正も十分になすを得ず、且つ恐らくは本書の出版をも見ずして日本を離れなくてはならぬであらう。上記の序文は今敢て之を改めず、身なほいまだ遍歷の時代にあり、なほいまだ飜譯の時代にあるかと自ら悲しみながらも、一種の感慨と共にこの附記をなすに止める。

昭和七年三月二十五日

東京郊外代々木にて

譯　者

目次

超意識心理學

精神分析學に於ける無意識の概念

精神分析學に用ひられてゐる**無意識** Unbewusstes なる言葉、然り精神分析學に於てのみ用ひられる此の言葉には、凡そ如何なる意味が與へられてゐるか、簡單に、而も出來るだけ明瞭に、余は先づこの事を說明せねばならぬ。

一つの表象が――他の總ての心理的要素でも同樣であるが――現在余の意識のうちに存在し、次の瞬間に意識から消え去る。然し或る時間の後同じ表象が全く變らぬ形で再び浮んで來る。新しい感性知覺がなくとも、記憶と我々の呼び習はしてゐるもののうちから浮んで來ることが出來る。此の事實を考へると、其の表象は或る時間の間、我々の精神のうちには現在するが、我々の意識に對しては潛在してゐて現れなかつたとの假定が必要とせられる。精神のうちには現在するが、意識のうちには現れて來ぬとすると、その表象は如何なる形で存してゐるのであらうか。我々は此の事に關しては何等の臆測をも打ち立てる事が出來ない。

此の點に關しては、更に哲學上の驗論にも遭遇することを覺悟しなくてはならぬ。卽ち玆に潛在す

る表象と言うてゐるものは、心理學の對象とせられたことは曾つて無かつたもので、これはその心理的現象の、即ちその同じ表象が再現するための、器質的素質の事を言うてゐるに過ぎぬではないかとの駁論である。然し、これに對しては、斯かる說と雖も、既に本來の心理學の領域を遙かに踏み越えてゐるではないか、と答へればよい。何故ならば、此の說は意識的 bewusst と言ふ言葉と、心理的 psychisch と言ふ言葉とが、全く同じ概念を有するものであるとなして、單に問題を避けてゐるに過ぎぬのであるし、又、心理學上普通の事實なる、記憶の如き事實をも、心理學固有の手段で說明する權利を心理學から奪ひ去らんとする明かに不當な說であるからである。

さて、意識のうちに現在し、且つ我々が認め得る表象を、「意識的」bewusst と名付けよう。而も意識せらるると言ふ言葉の意味を斯かる表象にのみ限定せしめよう。これに對して、潛在してはゐるが、精神生活のうちに存在する――恰も記憶の然るが如く――と確かに假定し得る表象は「無意識的」unbewusst なる言葉で現すことにしよう。

意識せられぬ表象とは、我々が現在認める事は出來ぬが、然しその存在が、他の表現となり、又は他の證跡となつて現れ得るに依つて知り得る如きものを言ふのである。

この意識せられぬ部門に關しては、記憶とか聯想とかの事實がある外は、何等の經驗も知られて居

らぬならば、これは全く興味のない記載學又は分類學上の事柄として濟んで了ふであらう。然し「催眠術術後暗示」posthypnotische Suggestion なる、あの有名な實驗が、意識と無意識との區別が重要であり、且つ價値高きものであることを我々に知らしめるのである。

ベルンハイムの行つた此の實驗は、一人の人間を一度催眠狀態となさしめ、そして眼覺めさせる。彼は催眠狀態のうちで醫師から、一定の行爲を或る定まつた時間に、例へば半時間後に爲せと命令せられる。覺醒後、見たところでは勿論完全に意識があり、平常の通り理解力もある。唯催眠中の記憶が無い許りである。然るに與へられた時間が來ると、或る行爲を行はうとする衝動が心のうちに浮び來り、その行爲を完全なる意識を以つて、而も何故であるかは知らずに遂行するのである。此の現象は、次の如き說明より外にはどうしても與へることが出來ない。卽ち此の人の精神のうちに潛在した形、言ひかへれば無意識に存在してゐた企圖が、定められた時間が來るや否や直ちに意識せられるに至つた。然しその全體が意識のうちに現れ來つたのではない。行はんとする行爲の表象だけが現れ來つたのである。此の表象に伴ふ總ての聯想、卽ち命令や、醫師の支配の下に在つたことや、催眠狀態の回想等はまだ全く無意識に止まつてゐるのである、と。

此の實驗から、更により以上の事が學び得る。單純なる現象の記載のみではなく、此の現象の力學

的理解に迄導かれる。催眠狀態に於て與へられた、或る行動の觀念は定まつた時間に意識の對象となるばかりではなく、實行となるのである。だから此の事が此の事實のうちで最も著しい部分である。意識がその觀念の存在を認めるや否や、直ちにそれは實行に移される。此の際、此の行動の實際的の衝擊は、醫師の命令なのであるから、命令された觀念が、實際化したのであると言ふ事はどうしても認めざるを得ぬであらう。

此の思考は意識のうちには確かに受け容れられてはゐない。唯その思考の誘導體 Abkömmling 卽ち行動せんとする觀念が現れて來たのである。此の思考は終り迄無意識に止まつたのであるから、無意識にして同時に實行的であると云うて可い。

此の催眠術術後暗示は、單に硏究室內の產物、人工的に作られた事實であるが、自然の事實にも同じ事が澤山ある。最初に、ジヤネーによつて建設せられ、ついでブロイエル及び余に依つて硏究された、ヒステリー現象に對する學說を許すならば、催眠術術後暗示の心理學的特質を、十分明瞭に、又著明に示してゐる自然の事實が、澤山にそのなかに存在してゐる。ヒステリー患者の精神生活は、意識せられざる、然し乍ら實行的である思考に充たされてゐる。而も、此の思考から總ての症狀が出て來てゐるのである。ヒステリー症の精神構成の、最も著しい特質

は、無意識の表象に支配せられてゐると言ふ點に在る。或るヒステリーの婦人は、故なく荐りに嘔吐したが、これは姙娠してゐると言ふ觀念からの結果であつた。而も彼女は此の觀念に對しては何等知るところなく、精神分析學の手法を行ふことによつて、始めて彼女の精神生活のうちに此の觀念を發見することが出來、且つこの觀念を彼女自身にも知らしめることが出來たのである。ヒステリー症の婦人は、その「發作」であるところの、痙攣。竝に、姿體、をなす時に、自分が企圖した行爲であると意識してこれを表象することはなく、あたかも、路傍の觀察者の如き無關係の感情を以つてそれを見る。だから、その行爲は彼女の生涯の何日かにあつた情景を、芝居の如く再現し、彼女はその時の我が持ち役を行つてゐるに過ぎないことを精神分析によつて見出すことが決して少くはない。而もその生涯のうちの一情景の記憶は、その發作の間でも、意識のうちにはなく、而も實行せられてゐるのである。實行的で而も無意識の觀念の支配は、他の總ての型の神經症の心理にも實際に存するものであることが精神分析學によつて初めて闡明せられた。

我々は神經症の諸現象を分析することに依つて更に、此の潛在する、即ち意識せられぬ思考は必ずしも、決して弱いものでは無いこと、及び斯かる思考がその精神生活の内に現存してゐることは、信服せしめ得るやうな確かな間接證明があり、而もこの間接證明は意識に依つて得られた直接證明と全

く同價値のものである事等を知るのである。斯くの如く我々の知見が增加するに從つて、此の潛在し、從つて意識せられぬ思考の種々なる種類のうちにも、更に截然たる區別を與ふ可きであると言ふ、我我の分類は正當であることがわかる。人々は潛在する思考は總て弱い故に潛在するのであつて、一度力を得れば忽ち意識せられて來るものと考へる習慣がついてゐる。然し今や我々は、或る潛在思考は、如何に強くとも意識のうちにはひり來ぬものもあると言ふ事を信ぜねばならぬ。前者の如き潛在思考の一群を前意識的 vorbewusst と名付け、後者の如き一群、卽ちこれは神經症患者に多く見る所であるが、この方を無意識（固有の意味に於ける）として區別す可きである。「無意識」なる言葉は、前には唯文字通りの意味を有してゐたに過ぎなかつたが、斯くて更に廣い意義を有するに至つた。卽ち此の言葉は、單に一般的に潛在する思考を現すのみならず、特に、強く且つ實行力があるにも拘らず、意識から遠くに置かれてゐる如き、特定の力學的特質を有する潛在思考をも示すのである。

論述を續ける前に、余は、此の點に關して擧げられると豫想せられる二つの駁論を、論じて見よう。その第一のものはほぼ次の如く言ふことが出來る。意識せられざる思考、それについて我々は何等知らず、且つ慣れてもゐない無意識の思考があるとの假說を建る代りに、意識に區別があると假定する方が良いではないか。卽ち或る思考又は精神過程は、特別の意識を形成するもので、これは意識

的なる心理的活動の主群とは離れて、別種となつてゐるのである、と假定した方が良いではないか。現に、アザム博士が示した、有名な病理學上の例に於ては、意識に分離があるとの考へは必ずしも空想的の想像ではないことを示してゐるではないかと。

余は此の説には反對せざるを得ぬ。此の説は、單に「意識」なる語の誤用から來てゐる。我々は、言語の意味を、無暗と擴げる權利はない。卽ち意識なる語が、その所有者の知らぬものを示す筈はないのである。若しも哲學者が、意識せられざる思考の存在を信ずるのに困難ありと言ふならば、余も亦、意識せられざる意識の如きものを理解し能はぬと言はねばならぬ。アザムが報告した如き、意識の分離の例は、意識の彷徨として見るのがよいであらう。卽ち二つの異る心理的複合の間の作用が――作用が何であつても宜しいが――或る時は彼方、或る時は此方と複合の間を移動し、相互に交々、或は意識のうちに入り或は無意識となるとする方が宜しいであらう。

第二の駁論として豫想せられるものは、主として病的狀態の研究からの推論を、正常心理學に應用すると言ふ非難である。此の駁論に對しては、我々が同じく精神分析學に負ふ所の事實に依つて答へることが出來る。或る機能障害、卽ち正常人も甚しく屢々經驗する Lapsus linguae（口滑り）とか、記憶の間違ひ、言ひ間違ひ、名前の忘却、等は、容易に、强い而も無意識の思考が及ぼす作用に歸す

ることが出來ること、恰も神經症の症狀の場合と同樣なのである。この事に關しては、本章の終りに於てもう一度確實なる論據を擧げて論ずるであらう。

前意識的思考及び無意識的思考の兩者を區別することは、單なる分類上の領域に意味があるのではなく、我々をして、心の働きのうちにある機能的及び力學的關係に對して一見解を形成せしむる點に意味がある。我々は、實際上の前意識は、難なく意識の中に移行して行くものであるが、實際上の無意識は、いつまでも無意識に止まり、而も、意識とは全く峻別せられてゐることを知る。

我々は、此の二つの心理的活動が、果して最初は同一のものであつたか、或はその本性上旣に初めから全く相ひ反するものであるかどうかを知らぬ。然し何故に此の二つは心理的過程の經過としては異つて出て來るものであるかとの質問を提起する事が出來る。此の疑問に對しては、精神分析學が、躊躇なく明かなる答を與へる。實際に無意識から生じたものが意識のうちに入り込む事は必ずしも不可能なのではない。然しこれが行はれるためには、一定の努力を費すことが必要である。若しも我々自ら試みて見るならば、我々は打ち勝たねばならぬ明瞭なる防禦感 Abwehr に氣付くであらう。又若し或る患者に於て、これを呼び醒まさうと試みるならば、我々は、決して曖昧ではない、我々の依つて以つて抵抗と呼びなすものの現れるのを知るであらう。斯くて、我々は無意識の思考は、意識か

ら生きたる力によつて閉め出されてゐること、この力は無意識の思考を受け入れる事には極力反抗するが、然し他の思考卽ち前意識的の思考に對しては、何物も障碍物を置かないと言ふ事を知るのである。精神分析學によれば、此の無意識的思考の拒絕は、その思考の內容が有する傾向如何に依つて呼び起されるものであることは決して疑ひがない。其處で現在の我々の知識の狀態に於て建設し得る最も手近い、而も許され得可き學說は次の如きものである。無意識は、心理的活動に依つて生ずる諸過程が先づ必ず受けねばならぬ、且つ避くるを得ざる一つの相である。總ての心理的活動は無意識として始まり無意識に止まるか、或は進んで意識に迄發展するかする。卽ちそれが抵抗に遭遇するか或は遭遇せぬかするのである。依つて前意識的活動と、無意識的活動との區別は、一次的のものではなく、防禦作用が生じ來つて後に初めて與へられるものである。意識のうちに現れ、又時として再び前意識に歸へることとの出來る前意識的思考と、此の事が決して出來ない無意識的思考との間の區別は、斯くて始めて理論的にも、實際的にも價値を有することになる。意識的活動と、無意識的活動との此の假說的關係についての大まかな、然し甚だ適當な譬喩が、通常の寫眞術から得られる。寫眞の第一階段は陰畫（ネガチブ）である。總ての寫眞は先づ「陰畫的過程」を通らねばならぬ。そして斯かる陰畫の見本（プルーフ）の中で良いものだけ「燒付過程」に置かれ、そして寫眞となるのである。

然し、此の前意識的活動と無意識的活動との區別、及びこの區別をなす事によつて初めて生じて來た境界の知識こそは、精神分析學的探究の、最終の、そして最も意味深き成果であつた。正常人にあつても屢〻遭遇し、そして、妄想狂 Wahnsinn の荒唐無稽の考へに著しい類似を有し、哲學者には妄想狂それ自身よりも理解し難いであらう心理的生産物がある。即ち余は夢のことを意味してゐるのである。精神分析學は、夢の分析にその根據を有する。夢判斷こそは、此のまだ科學として若くはあるが、精神分析學が今日迄鋭意なし來つた、最も完全なる業蹟である。夢が形成される最も定型的なる場合は、次の如き場合である。即ち日中の精神的活動に依つて、或る思考列が生じ、而も何かその實現可能性からは保留せられてゐたとする。睡眠を誘ひ、且つ睡眠に對する精神的の準備となる一般的興味低下の作用から、此の思考列はのがれて居たとする。斯かる思考列は夜陰に乘じて人の精神生活中に幼年時代より現存し、而も平常は壓迫せられ、彼の意識としての存在からは閉め出されて居つた、何か無意識の願望と結合せられる。斯くして此の意識せられぬ支持者から借り來つた力に依つて日中生活の殘留物なる此の思考は、再び實現力を得、意識の中に夢の形で浮び出づるのである。だから夢では次の如き、三つの事柄が生ずる。

（一）此等の思考は變形 Verwandlung 變裝 Verkleidung 變造 Entstellung 等を受けて、意識せら

れぬ結合者の一部分の姿を描き出す。

(二)此等の思考は、さなくば近づき得難かつたが、斯くて一定時間意識を充塡することが出來る。

(三)然らざれば不可能であつたらうが、斯くて意識せられざるものの一部も意識のうちに浮び出ることになる。

斯くて我々は「晝の殘物」Tagesreste や、潛在する夢の思考等を引き出す術を知つた。實現した夢の主內容との比較によつて思考が蒙つた變形、及び如何なる方法及び樣式でそれが生じて來たか等の判斷をなすことも出來る。

此の潛在する夢の思考は平常の意識的精神活動の生じ方から區別することは出來ない。卽ち此の者も亦前意識的思考と言ふ名に値する。そして事實、眼覺めてゐる生活の或る一時點に於ては意識せられてあつたこともある。然し、夜に至つて無意識的努力と結合するに及んでは、全くこれと同化して了ひ、或る程度迄は無意識思考の狀態に迄抑壓せられ、依つて無意識活動が從ふ所の法則に同じく從ふやうになる。此處に於て我々は、無意識的精神的活動の法則は、意識的精神活動の法則とは全く別であると言ふ事、判斷とか經驗的知識などと言ふものを以つてしては決して推測し得ない事を學ぶ機會を持つのである。我々は、夢の詳細なる硏究によつて、無意識の特性に就ての知見を得る。そして

更に、夢の形成過程の根本的の研究によつて尙多くを學ぶことが出來る。

此の研究は今尙その半ばをも終つてはゐない。又現在に至る迄に得來つた結果の說明すら、夢判斷の縱條極りなき問題に觸れずしては不可能である。然し余は、此の叙述をば、我々が夢の精神分析學的研究に負ふ處の、無意識に對する我々の理解の進步及び變化に少しく論及することなしには中絕することは出來ない。

無意識は最初は單に、或る定まつた心理的過程の謎の如き一特質であると思はれた。然し現在では更に深い意味がある。卽ち此の過程は、他の更に重要なる特性によつて知られてゐる一つの心理的範疇の、本性に關與してゐることである。これは正に我々が十分注意を拂はねばならぬ心理的活動の一つの系統に屬す可きである。一つの系統の索引としての無意識の價値は、特質としてのその意義よりはるかに重要である。此等個々の無意識の過程は集合してゐることの證據によつて知り得た此の系統を、我々は、適當な、曖昧ならざる語のないために、やはり「無意識」das Undewusste と名付けねばならぬ。此の系を略するには Ubw なる綴り文字で現す。

以上の事は、無意識なる言葉が、精神分析等に於てかち得た、第三の、而も最も大切なる意味である。

本能、及び、本能の運命

凡そ科學なるものは、明瞭な、正確に定義づけられた基礎概念の上に建設せられなくてはならぬとは、我々の屢々聞く處である。然し、實際に當つては、斯かる定義、正確極りなきものによつて始められた科學などは一つもない。科學的活動の眞の始まりは、多くは唯現象の記載であり、ついで此等が分類せられ、順序づけられて、互ひの關係を明かにせられたものである。而も、此の記載に當つては、全く新しい經驗だけではなく、何れかから持ち來つた、一定の抽象觀念を、先づその材料として應用する事を避けるわけにはゆかないのである。斯くの如き觀念は――遂にはその科學の基礎概念となるのであるが、――その素材を更に進んで處理する場合にも避ける事は出來ない。此等の觀念の最初は、一定度迄不定であるのは止むを得ないが、その內容を全く書き換へるやうなことはない。斯くの如き狀態である間は、その觀念の意義に關しては、その觀念が引き出されたもとの經驗素材、この實際は、何れが觀念で何れが素材か見わけがつかぬが、その經驗素材が、繰返し示される事によつて、理解せられるのである。此の觀念は、嚴格に言へば因習的特質を所有してゐる。然しそれは、人爲的

に選ばれたものではなく、具體的な素材に對して重要なる關係があることが認められ、且つ證明せられ得るより前に逸早く推しあてられて了つたものである。故に、與へられた現象領域をより根本的に研究した後に、始めてその科學的基礎概念が判然と理解されて來る。且つ漸次にその概念は變改せられ、遂には廣い範圍に用ひられ、斯くて全く異論なきものとなることが出來るのである。從つて時としては、概念が定義に拘束されることがある。然し、知見の進歩は、定義の硬化を許さぬ。物理學が輝くやうに例を示してゐる如く、定義の中に固定せられた「基礎概念」も不斷の內容移動を經るのである。

心理學に於て避ける事の出來ぬ、斯くの如き因習的な、而も尙當分は不明瞭な基礎概念の一つは、**本能** Trieb である。我々は諸方面より、此の概念の內容を充す事を試みて見よう。

第一に生理學の方面よりは如何。生理學は我々に刺戟の概念及び反射模型の概念を與へて呉れた。これに依つて、外から生活組織(詳しく言へば神經物質)に與へられた刺戟が生ぜしむる反應をたよりに、外から內を推測することが出來る。斯かる場合の反應は、刺戟を受けた物質を、刺戟の作用より遠ざけ、刺戟作用の及ばぬ領域に隱し去ると言ふ合目的性を示すのである。

さて「本能」は「刺戟」に對して如何なる關聯に在るであらうか。本能の概念と刺戟の概念とを一

緒に包括するに、妨げとなるものは何もない。何故ならば本能は、心理作用を有するもの das Psychische に對して、とに角一種の刺戟であるからである。然し本能と心理的刺戟とを混同してはならぬ。卽ち心理作用を有するものに對しては、本能的刺戟の外にも明かに、刺戟があつて、生理的刺戟と酷似した作用を有する。例へば強い光線が眼を射す時の如き、或は咽頭粘膜の乾燥が感ぜられる時、或は胃粘膜の燒灼感（註）等であるが、此等は決して本能刺戟ではない。

（註） 斯かる內部過程は、煩渇及び饑餓等の要求の器質的根據であると言ふ事が假定してある。

精神作用を有するもの das Seelische に作用する本能刺戟と、他の（生理的）刺戟との間には區別があると云ふ證據は次の如くである。第一に、本能刺戟は外界から出て來るものではない。生物自身の內界から生じ來るものである。だから精神に對して作用するにも違つた樣式であるし、その除去に對しても亦別の反應が起る。第二には次の點である。卽ち刺戟に固有なるもののうち最も大切なる點は、刺戟は區限りある一度の衝擊として與へられることである。そして區限りある一度の、而も合目的の反應によつて落着する。例へば刺戟の源から逃避する運動の如きがその適例である。勿論此の如き衝擊も、繰返されるし、且つ重加する事はある。然し斯くの如き事ありとも、その過程の理解に對して、又は刺戟の終る條件に對しては何も變る所はないのである。之に反して本能は、瞬間的の衝

撃の如きものではなく不斷の力である。而もそれは外界からではなく、身體の內部から生ずるのであるから、これより逃避することは出來ない。本能刺戟は、だから寧ろ「欲求」Bedürfnis と呼ばれるのが一層よいかも知れぬ。此の欲求を終らしめるものは「滿足せしむること」である。卽ち內的刺戟の源が、目的に協ふやうな（適合した）變化を得ねばならぬのである。

殆ど全く賴る處なき、卽ち此の世界に對してまだ全く指南力のない生物の立場に立つたと想像して見よう。而も今や此の生物が刺戟を受けたとしよう。此の如き生物は直ちに、最初の識別、最初の指南を得るに至るであらう。此の生物は一方では，筋反應（逃避）で避け得るやうな、卽ち外界より來る刺戟を感知する。然し他方斯くの如き反應の何等役立たぬ、而も不斷に壓倒する如き性質ある他の刺戟をも感知する。斯くの如き刺戟が內界の證左であり、本能欲求の存する證據である。生物の認識に對しては，斯くして、筋活動の有効さ如何が、外界と、內界とを分つ手がかりの場所となるのである。

本能の本性について、我々は先づ第一にその主特徵、卽ち生物內界に存する刺戟源より生じ來るものなること、不斷の力として現れることを知つた。又上述のことより當然出で來る更に一つの目標、卽ち逃避反應によつて避けることが出來ない性質を有する事をも知つた。此の叙述の間に我々は更に

承認せざる可からざるものがあるのを知る。即ち我々は心理學的現象界の處理をなすためには、我々の經驗材料に對しての基礎概念として、唯單に、一定の因習的觀念を要するのみならず、尙多くの複雜なる前提が必要であると言ふ事である。此の必要なる前提のうち、最も重要なるものは旣に誘き入れたが、尙それを明確に主張して置かねばならぬ。それは傾向 Tendenz の概念（時として合目的性の概念）として現されてゐる生物學的の性質である。曰く神經系統は、到達した刺戟を、再び取除く裝置である。これがためには、それを出來るだけ低い水準に引き下げるか、或は、若しも出來るならば、全く刺戟としての價をなくなさしめて了はうと欲するのである。今此の觀念の不定さに對しては暫くの間何等の抗議なきものと假定して、神經系統に對して此の任務、即ち一般的に言へば——刺戟克服作用 Reizbewaltigung ありと假定しよう。斯く假定すると、本能を導入することに於て、單純な生理學的反射模型が如何に複雜化せられるかがわかる。外界よりの刺戟は、唯單に之を避ける可き任務を課するだけである。而もそれは筋運動によつてその目的を達することが出來、從つて合目的で、遺傳せられる性質となる。然るに生物の內界に於て發生した本能刺戟は、此の同じ機制に依つては除かれぬのである。本能刺戟は、尙益々神經系統に對して要求をなし、縺れた、互ひに相補足する諸活動への誘因となる。この活動たるや、外界とは全く異るもので、この內的の刺戟源に對しては滿

足を與へることを要求し、何よりも先づ、その理想的企圖たる刺戟より遠ざかることを斷念せしめねば止まぬ。何故ならそれは避くるを得ざる、不斷の刺戟供給をなすのであるから。斯くして我々は、本能こそは、外界よりの刺戟にあらざるにも拘らず、神經系統をして、現在の發達の高さに迄、無限に能力を增し來らしめた進歩の根源的動因であつたと言ふことを結論することが出來る。勿論、本能自身が、少くとも一部分は宗族發生の道程に於て、生物に變化を與へるやうに作用した外界よりの刺戟作用の沈澱殘渣であるに違ひないとの假定に對しても、別に抗議せずともよい。

さて次に、高度に分化した精神裝置は、快感原則 Lustprinzip に從ふ、卽ち、快及び不快の感覺によつて自動的に整理せられるのを見る時に、更に此等の感覺は、恰も刺戟克服の行はれると同樣な樣式を有するとの前提を拒否することは出來ぬ。確かに、刺戟の高まることは不快感と關係あり、刺戟の靜まることは快感と關係がある。此の前提の、甚だ不定である點については、快、不快と、精神生活に作用した刺戟の大さの變化との間の關係樣式を、とも角も推定し得るに至る迄そのままにして置き度いと思ふ。恐らく此の關係は極めて複雜であつて決して單純なものではないであらう。

さて今や我々は生物學的の側面より、精神生活の觀察に移らう。さすれば、直ちに我々は、實にこの「本能」なるものが、精神と體質との間の限界概念であることを知るであらう。本能は身體內部よ

り生じて、精神に迄到達した刺戟の心理的代表者であり、且つ又、身體との關係に從つて精神に負はせられた、活動要求の證である事がわかるであらう。

本能なる概念に關聯して必要なる二三の語彙を論ずる必要がある。例へば、促迫 Drang 目的 Ziel 對象 Objekt 本能の根源 Quelle des Triebes 等である。

本能の**促迫**とは運動性の要素、力の重積、或は活動要求の證跡、等を意味する言葉である。促迫せられると言ふ特性は、本能の一般的特性で、寧ろ本能の本態である。總ての本能は、とに角、活力である。例へば若しも範圍を擴めて、受動的本能について語るとしたところで、受動的目的を有する本能との義より外の何物でもないであらう。

本能の**目的**とは、常に滿足を意味する。この滿足は本能の根源に存する刺戟狀態の終止によつてのみ達せられるものである。然し、假令、總ての本能に對して、終局目的は、變りはないとは言ふも、諸種の道より、同一の終局目的に達する事も出來る。故に一つの本能に對して、互ひに近き又は中間性の目的が與へられ、相互に組合はされ相互に交錯することがある。尙又經驗によるに、「目的制止の本能」zielgehemmte なる語を用ひねばならぬ事がある。例へば一程度は、本能の滿足の方向に走らしめられ、やがて一の制止又は轉向 Ablenkung の經驗せらるる場合である。斯くの如き經過の場合

には、部分的の滿足がある場合と假定してよいであらう。

本能の**對象**とは、それに依つて、或はそれを通して、本能がその目的に到達するが如きものを言ふのである。これは本能について最も變化のあるもので、最初は、その本能と結合してゐなかつたものでも、やがてそれにより滿足が可能となつたことから、それに歸せられたものもある。これは必ずしも他物である必要はない。自己自身の身體の一部分である場合もある。生涯に於ける本能の運命經過にあつて、時々自由に變換することがある。而も本能に於ける此の變化の甚しき部分が、最も重要意義のある役目を演ずることがある。或る場合には、同じ對象に向つて、多くの本能が同時に滿足を求めること、例へばアルフレド・アドラーの「本能交叉」Triebvrschränkung の如き例がある。特に、本能がその對象に親近して形成せられた場合は、本能の固定 Fixierung と稱せられる。斯くの如きは屢々本能發育の早期に現れて、本能の動搖を全く生ぜしめぬやうに固定され、これより解放せられることに強く反抗するやうなことがある。

本能の**根源**とは、一つの器官又は身體の一部の、その刺戟が本能として精神生活のうちに現出する如き總ての體質的過程を云ふのである。此の過程は規則正しく化學的性質のものであるか、或は他のもの、例へば機械的の力に結合してゐるものであるかはきまつてはゐない。此の本能の根源を研究す

ることは、もはや心理學には屬さぬのである。假令、體質的の根源からの發生が、本能と言ふものに對して最後の決定權を有するものであるとしても、精神生活のうちには、唯本能の目的となつて現れて來るばかりである。故に本能の根源の更に精細なる知見は心理學研究の目的のためには必ずしも重要なものではない。多くの場合本能の目的から此の根源への歸結が確められてゐるに過ぎぬ。

身體の方から發生し、精神の方へ作用する本能が種々雜多であるのは、質的に雜多の樣式を以つて、精神に働きかけるからであると假定す可きであらうか。それは正當でないやうに思はれる。却つて、本能は總て同じ性質であるが、その作用は唯興奮の大さが異るためである、卽ち特定の機能は量に依存すると云ふ、極く簡單な假定で足りるであらう。個々の本能の、心理的の働きに、互ひに區別があるのは本能の根源の雜多なるに歸す可きであらう。本能の性質の問題については、後章に於て初めて明かにせられるであらう。

如何なるものを本能となす可きであらうか。又本能の數は幾つあるのであらうか。此處にも亦任意に定む可き餘地がある。若しも遊戲本能、破壞本能・社交本能等の概念を、その具體的對象があるとし、且つ心理學的分析の制限が許すとして提唱する人があるとするも、これに對して抗議することは出來ない。然し、一方に於て斯くも多く特殊に分たれる本能動機も、本能の根源から考へて、これ以

上分割せしめられず、從つてより以上分割せしめ能はざる原本能なるものがあり、これが眞の意義を有するのではないかとの疑問は看過してはならぬ。

余は、斯かる原本能 Urtrieb を二つの群に分つ可きことを提言したい。卽ち自我本能、或は自己保存の本能と、性的本能との二つである。然し必要なる前提、例へば精神裝置の生物學的傾向に關する假定（上掲）の如きものの意義も、此の提言に歸せられると言ふのではない。此の提言は單に長くは固執せらる可からざる補助構成であつて、これが有用である間、卽ち他のものに依つて置換せられても、我々が記載し且つ順序づけた業蹟の結果に對しては變りがない間だけ用ふ可きものである。此の提言の根據は精神分析學の發生史から來てゐる。卽ち精神神經症 Psychoneurose 殊にそのうち「轉授神經症」Uebertragungsneurose と呼ばれる一群（例へばヒステリー症、及び强迫神經症）を最初の對象とし、遂に、斯かる病症に於ては、性慾の要求と、自我の要求との間の軋轢がその根柢に横はるものとの判斷に到達した事に在る。他の神經症的疾患（そのうちでも自己愛性精神神經症、及び精神乖離症 Schizophrenie の如き）を更に詳しく追究研究してゆくと、此の方式は訂正を要し、從つて原本能を他の分類に依つて分つ可き必要があることになるかも知れぬ。然し現在のところでは、我々はまだその樣な方式を知るに至らず、少くとも、自我本能と性的本能とを對立せしむることに對

して不都合なる點はまだ少しも見出しては居らぬのである。

單に心理學的の材料の研究のみを根據としては、本能の區別及び分類に對する、決定的の指圖が得られるや否やは甚だ疑はしい。斯かる研究には、本能生活に關する一定の假定を、却つてその材料へと與へることが更に必要なのではないか。而も斯かる假定を、他の領域より取り來り、依つて心理學の上にそれを與へることがより望ましいのではないか。生物學がこれまで得來つた處は、自我本能及び性的本能を區別することが決して反理でないのを示してゐる。生物學は、性慾は個體の有する他の諸機能と同列に置かる可きものでない事を敎へる。何故ならば性の傾向は、個體を超えて出づるもので、他の新しい個體の生產、卽ち種屬の保存をその內容として所有するものであるから。生物學は更に自我と、性慾との間の關係は二つの意義を以つて、併立是認せられるものである事を敎へる。その一つの意義は、個體が主人で、性慾は、彼の一つの行爲、卽ち性慾の滿足をその要求として有する一つの行爲であるとの意義であり、他の一つは、個體は略不死なる生殖細胞の、一時的の、且つやがて消失し去るべき附屬物であり、生殖細胞は假りにその代だけその個體に自分を委託してゐるに過ぎぬとの意義である。性慾機能は、他の身體過程とは別の特別の化學機制 Chemismus を有するとの假定が、余の知る範圍に於ては、同じくエールリヒの生物學的研究の前提をなしてゐるものである。

本能生活の意識からの研究は、何等打ち越え難き困難は呈さない。故に此處では、精神病者の精神分析的研究が、我々の知見の主なる源となるのである。然し精神分析學はこれまで、その發達の道程に應じて、更に性的本能に關してのみは稍滿足す可き指針を我々に齎した。これは、この本能群のみが、神經症に於て、分離して觀察し易いからであつたであらう。精神分析學を他の病症に對して擴張應用すれば、自我本能に對する我等の知見も亦基礎を得るであらう。假令この別の研究領域に於ては、その觀察が從來と同じやうに好都合にゆくと言ふことは、疑はしいとは言うても。

性的本能の一般的特質については、先づ次の如く言ひ現すことが出來る。性的本能はその發生について は數多くの雜多な有機的根源を有し、最初は互ひに無關係に實行に移り、後に至つて始めて完全なる合成 Synthese を現出するものである。此の各々が目指す目的は、**器官快感** Organlust の到達である。合成が完成して後初めて、繁殖機能に奉仕する。斯くの如くなつて初めて、性的本能として現在一般的に認められ居るものになるのである。性的本能は、最初の發生に於ては、自己保存の本能に依存してゐるが、漸次にこれと別れゆき、對象の發見によつて、自我本能が指示する方向へと別れてゆくのである。性的本能の一部分は、一生涯自我本能と同居し、自我本能にリビド性の因子を添加する。これは正常機能に於ては容易に看過せられるが、一度病症となる場合には明瞭となつて來る

のである。性的本能は、甚しく、代理的に相互に入り込み易く、又容易にその對象を變換する。此の特性により、更にはるかにその起原的目的行爲より遠ざかつた動作をもなし得るに至るのである。

(昇華作用 Sublimierung)

一般に本能が、その發育の道程に於て、又はその生涯に於て、如何なる運命を辿るかを研究するに當つて、我々によく知られ居る性的本能を限つて取り上げて見よう。此等の觀察は、本能には次の如き幾つかの運命がある事を敎へる。即ち

反對者への交錯 Verkehrung ins Gegenteil

自己自身への轉向 Wendung gegen die eigene Person

壓迫作用 Verdrängung

昇華作用 Sublimierung

昇華作用については此處には述べない。壓迫作用については別に一章として之を論ずる。依つて茲には初めの二つの項について記述と討論とをなして見よう。先づ、本能の直接的進捗に對抗する動因があることを考へれば、本能の運命は、本能に對抗する防禦が現れたものとして示すことが出來る。

反對者への交錯は、詳しく觀察して見ると、二つの異る過程であることがわかる。その一は能動か

ら受動へと本能が變轉することであり、他の一つは、內容上の交錯である。此の兩過程は、その本態を異にするから從つて別々に取扱はれねばならぬ。

第一の過程に對する例は、虐待嗜好症（サディスムス）被虐待嗜好症（マゾヒスムス）との對立及び瞠視嗜好症と被瞠視嗜好症（露出症）との對立の如きである。この交錯は本能の目的についてのみ起る。能動的目的、卽ち虐遇すること、瞠視することが、受動的目的、卽ち虐遇せられること、瞠視せられること等になり代るのである。內容上の交錯とは、愛が憎みに變化する如き例である。

自己自身への轉向が生ずるのは、被虐待嗜好症は、自己の自我に對しては卽ち虐待嗜好症であり、露出症は結局自己自身の身體を瞠視することに當ると言ふことを考察すれば、先づ近づいたことになる。分析的觀察もこのことを成立せしめる。卽ち被虐待嗜好症者（マゾヒスト）は自身への憤怒を同時に味はひ、露出症者は、自己の露出そのものをも同時に味はふのである。此の過程についての本質的のものは、目的は變化せぬが對象の變換があると言ふ點である。此の自己自身への轉向と、能動より受動への轉向とは、此等の如き例にあつては共同することもあるし、或は互ひに崩壊することもあるといふことは見逃すことが出來ぬであらう。此の關係を明瞭にするためには根本的の研究が必要である。

虐待嗜好症對被虐待嗜好症との對立に當つては、その過程は次の如くに現すことが出來る。

(a) 虐待嗜好症は、他人を對象として、それに對する暴力行爲及び權力行爲實行によつて成立する。

(b) 此の對象が放棄せられ、そして自己自身によつて代置せられることがある。此の自己自身に對する轉向によつて、能動的本能目的が、受動的本能目的へと變換する。

(c) 或る時は新しく全く異る人を對象として求める事がある。此の新しい人は、目的變換の結果、主體の役目を假りに受取るのである。

此の(c)の場合が一般に被虐待嗜好症（マゾヒスムス）と呼ばれてゐるものである。滿足は此の際、起原的には虐待嗜好症と同じ方法で得られる。卽ち受動的なる自己は想像的にその前の位置、卽ち他の主體に委讓せられてゐる位置に自らを置くのである。直接的の被虐待嗜好症的滿足なるものが存するや否やは全く疑問である。起原的の被虐待嗜好症は、卽ち上述の如き方法によつて、虐待嗜好症より發生し來つたのでなければ存在しないやうに見える。（註）

（註）後に於ける業蹟によつて、余は、本能生活の問題に對して、全く反對な理解を得た。「被虐待嗜好症の經濟的批判」を參照せよ〔此の註一九二四年に追加す〕

前項（b）の階段を假定することは決して無駄ではない。それは强迫神經症に於ける虐待嗜好症から

確める事が出來る。斯かる場合に自己自身への轉向があり乍ら、受動性は新しいものに向つてゐない例がある。これは變換が唯(b)階段で止まる場合である。虐待嗜好症より出でて、自己虐待、自己懲罰、とはなるが、被虐待嗜好症にはならぬ。他動詞は自ら決して受動詞に變化せぬ、唯再歸動詞に變化するのみである。

虐待嗜好症では、本能がその一般的目的の外に(恐らくはその範圍內でと言ふ方が宜しいであらう)全く特殊な目的行爲をなさんと努める點があるので、理解を妨げる。意氣銷沈、壓抑感等の外に、苦痛の添加がある。精神分析學は、此の苦痛の添加は此の本能の起原的の目的行爲のうちには入つてゐないことを示す。虐待嗜好の小兒は、苦痛を與へることを考慮しないし、且つ、企圖しもしない。然し一度被虐待嗜好に入ると、受動的な被虐待嗜好目的として苦痛が入り來る。故に苦痛は他の不快感覺と同樣に性的興奮に薇ひかかり、快感の狀態を生ぜしめ、そのために人は苦痛の不快を却つて好むやうになると云ふことは十分假定する根據がある。若しも一度苦痛の感覺が、虐待嗜好の目的となつたならば、虐待嗜好の目的にも、苦痛を與へることが逆に移入せしめられるに違ひない。他のものに苦痛を與へることは同時にその惱む對象と同化することによつて自ら樂しむことになるからである。而勿論、何れの場合に於ても苦痛自身を樂しむのではない。苦痛に伴ふ性的興奮を樂しむのである。

も此の事が、虐待嗜好症者には特に適合してゐるのである。苦痛を樂しむことは起原的の被虐待嗜好的目的であるとしても起原的虐待嗜好者に於てのみ、本能目的となることが出來るのである。

說明を完全にするために付け加へ度い事は、此の同情 Mitleid と言ふことは虐待嗜好症に當つては本能變換の結果として記載せらる可きものではない。寧ろ本能に對する**反動形成** Reaktionsbildung（この區別は後によく述る）として解することが必要である。

本能の他の對立卽ち瞠視及び露出を目的に有する對立の硏究によつて、も一つの、單純なる結果が導かれる。（性慾倒錯の意味に於ける瞠視者及び露出者）此處にも亦前の場合と同樣なる諸段階を見ることが出來る。

(a) 瞠視が能動者として他の對象に向けられること、

(b) 對象の放棄、卽ち瞠視本能が、自己の身體の一部に對して轉向すること、斯くて受動へと交錯し、從つて新しい目的、卽ち瞠視せられることの目的を思ひ付くこと、

(c) 新しい主體の設立、その者に自らを示し、且つその者より瞠視されること、

能動的の目的が、受動的の目的より早く現れること、卽ち瞠視の方が被瞠視よりも先行することは、何等疑ひないところである。然し虐待嗜好症の場合と異る最も重要なる點は、瞠視本能には、(a)

に記載せられた處よりも更に前の段階が存すると言ふ點である。瞠視本能は、その實踐の始めに於ては、自己色情的（autoerotisch）である。確かにそれは對象を持つてはゐるが、それを自己の身體の中に見出すのである。其の後初めて（自己の身體と他人の身體の比較をなさんとして）その對象を他の身體の類似部位に換置するのである。（斯くて(a)段階となる）。斯くの如き豫備段階は、結果として生じて來る對立の兩方の情況が、其の豫備段階に由來してゐる點で特に興味がある。卽ち後には、何れか優位をなして變換するのである。從つて瞠視本能を模型的に示して見ると次の如くになる。

（イ）自分で性器を視る＼（ロ）自分で他人の對象物を見る（能動的瞠視慾）
　　＝
自分の性器が視られる／（ハ）自分の對象物が他人によつて視られる（指示慾、露出慾）

斯くの如き豫備段階は虐待嗜好症にはない。虐待嗜好症では子供が、自分の肢體の主人とならんとして骨折ることから、それを構成せしめると考へるのも、大して誤りとは言へないであらうが、寧ろ初めから他の對象に向けられる。

（註）前掲二九頁の注意を參照

此處に擧げられた二つの本能例に對しては、本能の變換は能動が受動に交錯すること、及び自己自身へと轉向することによつて生じ、而も本能衝動の總體としては、本來決して變化してゐるのではないと言ふことがわかるであらう。曾つて能動であつた本能の方向は或る程度迄、新しく生じた受動と共に存在する。假令本能變換の過程が十分豐富な結果を呈した場合でもさうである。だから瞠視本能に對する、唯一つの正しい表現は、次の如くである。此の本能の總ての發育段階は、自己色情的豫備段階を、その能動的又は受動的最終形態と共に同時に併立所有すると言ふ事である。斯くの如き斷定は、本能行爲の代りに、その滿足される時の機制を判斷の根據に置いて見れば直ちに明かとなる。恐らくは此の外に尙も一つの理解樣式、又は表現樣式も是認されるであらう。總ての本能生活は、時間的には異るが、現れる（卽ち與へられた）瞬間に於ては、全く同じ樣な二つの推進方向に分つことが出來、恰も繼續して現れる熔岩噴出の如く、互ひに相ひついで現れるであらう。故に最初の、起原的の本能噴出は必ずしも變化なく繼續し、而も何等發達を經ないことがある。次の推進に當つては最初から變化を生じ卽ち受動への轉換が生じ、そしてこれが、新しい特質を以つて前のものに加はる。斯くの如くして進んでゆく。依つて試みに本能興奮を始めから或る一定の停止點迄見渡すならば、上記の如き推進の繼續が本能の一定の發育像を呈するのを見るであらう。

本能發育の或る一定後期に於ては、その本能衝動の外に、それと反對の（受動的の）ものをも見ると言ふ事實は、ブロイエルの始めて言ひ出した適切な名稱、卽ち對立兩存性 Ambivalenz なる名稱に依つてその特質を示すことが出來るであらう。

本能の發育は、本能の發生史の證據及び中間段階の永續性の證據等によつて我々の理解に近づきつゝある。此の對立兩存性の外延を調べて見ると、經驗によつて見るに、個人によつても人間團體によつても、人種によつても著しく異つてゐる。今日の人間に時として見られる豐富なる本能の對立兩存性は古代よりの遺殘物と考へることが出來る。何故ならば我々は本能生活の變換し難き能動的興奮の一部分は原始時代に於ては、今日の平均よりもはるかに大であつたに違ひないとの假定に對して十分の根據を有するからである。

自己色情症 Autoerotismus と 自己愛症 Narzissmus とは、ほんたうは區別せねばならぬのであるが、此處では先づ議論せぬこととして考ふれば、自我の早期發育狀態、卽ちその性的本能を自己色情的に滿足せしめんとする時期を、自己愛症と呼んでもよい。斯くすれば自己自身の身體を對象として瞠視慾を有する、卽ち瞠視本能の豫備段階は、自己愛症に屬するものと言ひ得るし、これを自己愛的形成と呼んでよい。此のものから能動的の瞠視慾が生じ來り、遂に自己愛症を棄て去る。然し受動的

瞠視慾は自己愛的對象を固く所有しつづける。同様に虐待嗜好症が、被虐待嗜好症に轉換するのは、自己愛的對象物への復歸を意味する。此の兩者の場合自己愛的主體は、自分をも亦他の自我をも同一視することによつて錯覺せられる。斯く構成せられたる虐待嗜好症の自己愛的前階段を顧ることによつて次の如き一般的判斷に近づくことが出來る。卽ち自己自身の自我へと變換する本能の運命と、能動より受動へと交錯する運命とは、自我の自己愛的統帥期に於て互ひに關係するものであつて此の時期の烙印を互ひに所有するものである。これは恐らくは自我發育のより高い段階に於て、他の方法をもつて遂行せられる防禦企圖に相應するものであらうと思はれる。

これ迄我々は二つの本能對立群、卽ち虐待嗜好症對被虐待嗜好症及び瞠視慾對被瞠視慾との二つのみを說明にとり來つたものであることを忘れてはならぬ。それは此等のものは最もよくわかつてゐる對立兩存的に現れ來る性的本能であるからである。後期の性慾機能に屬す可き他の因子は、分析に於て上記と同様に論ずるためには倘未だ十分に說明が出來てゐないのである。其等のものに就ては、極く一般的に次の如く言ふことが出來る。卽ち同じく自己色情的に實現するが、その對象がその本能根源であつた器官の中へと消失し、此のものと共に全く合一してしまふのである。瞠視本能の對象は、初めは自己の身體の一部であるけれども、その本能根源は眼そのもののみではない。例へば虐待嗜好

症の例では、その根源となる器官は、恐らくは活力ある筋であるであらうが、それが直接に他の對象、又は自身の身體に向ふのであることを示してゐる。自己色情的本能の場合ではその根源となる器官の役目ははつきり目立つてゐるもので、フエーデルン及びジエケル兩氏の適當なる提言の如く、(註)その器官の形態及び機能が、本能目的の受動又は能動を決定するのである。

(註) 精神分析學國際雜誌第一卷一九一三年參照

一つの本能が、實質的にそれと對立するものに轉換する例は唯一つと見られる。即ち戀愛より憎惡への變化である。此の二つのものは、特に屢〻同時に同一の對象に向つて向けられるから、此の同時存在が、感情の對立兩存性の意義深き例證となるものである。

戀愛と憎惡の例は、これが本能に關する上記の叙述のうちに整列せしめることが出來ない點に於て特別の興味を齎す。この二つの感情對立と、性慾生活との間に極めて近い關係があることは、誰も疑はぬ處である。然し、戀愛は、他のものと同樣に性慾の何か特別なる部分本能の一つでしかないと言はれると、何かしら反抗し度い處がある。人は寧ろ戀愛は、性慾の全的努力の現れであると見度いであらう。然しこれが正しいとは思はれぬ。何故ならば、此の努力に實質的に對立するものとして何を考ふ可きかが疑問であるからである。

戀愛には、唯單に一つに止まらず、三つの對立が可能である。戀愛と憎みとの對立の外に、他の對立卽ち愛する者と愛される者との對立もある。此の上に更に、愛と憎みと結合したものと無關心、卽ちどうでもよいことの對立がある。これ等の三對立のうちで、第二のもの、卽ち愛する者と愛せられる者との對立は、全く、能動から受動への轉換に當るし、且つ、瞠視本能の場合の如く、基本的關係へ歸し得るものである。自ら自身を愛すること、これは自己愛の特性である。此の次に、對象又は主體か、他物に移される。そして戀愛の能動的目的努力、又は受動的目的努力、卽ち愛されると言ふ事が生ずる。この後者は尙自己愛に近いものである。

精神生活そのものが、三つの極によつて支配せられてゐるものであると言ふことを考へ合す時、恐らくは戀愛に於けるこの多數の對立の理解に近づき得るであらう。三極性 drei Polaritäten とは卽ち次の如き對立を言ふのである。

主　　體（自我）――――對　　象（外界）

快　　感――――――――不　快　感

能　　動――――――――受　　動

自我對非自我（外界）――主體對對象――なる對立は、既に述べた如く、個々の人に、その幼年の時

より次の如き經驗によつて壓しつけられてゐる。卽ち外界よりの刺戟は、自分の筋活動によつて、沈默せしむることが出來るが、本能よりの刺戟に對しては、吾人は全く無力であるとの經驗によつて知られてゐる。此の對立は、何よりも先づ智的活動に對して專斷的であり、硏究に對しても如何なる努力も變改し得ざるところの基礎情況を形作つてゐる。快感と不快感の對立極は、感覺群によつて定まるもので我々の活動（意志）によつて除かんとするも達し難きことは旣によく知られ居る。能動及び受動の對立は、自我主體に對する外界對象の對立であつて、變化するものではない。自我は外界の世界に對しては、それより刺戟を受取る點に於て受動的である。然しそれに對して反應を起すと言ふ點に於ては能動的である。而も外界に對する全く特別なる能動型たる可くその本能によつて强制せられる。故に本質的のものを指し示すためには次の如く言ひ得る。自我――主體は外界よりの刺戟に對しては受動的であるが、自分自身の本能から考へれば能動である。能動及び受動の對立は、後には、男性と女性との對立と一緒になる。此の對立は對立として現れぬ前には、何等の心理學的の意味もない。男性たることと能動性との結合、女性たることと受動性の結合は、言はば生物學的の事實として對立してゐる。然しながら此の結合は必ずしも規則正しく常に適用せられるものでなく、又我々がよく屢〻假定する如く絕對的なものでもない。

此の三つの精神の極性は、互ひに最も重要なる結合をなしてゐる。その中の二つが全く合一してゐる心理的原情況もある。自我はその起原にあつては、卽ち精神生活の全くの初めにあつては、本能で充塡せられてゐて、一部分は、その本能を自分で滿足する事が出來る。斯かる時期を**自己愛**の時期と稱し、その滿足の可能なる事を**自己色情的**と稱する。（註）

（註）性慾本能の一部は、斯くの如き自己色情的滿足も出來るが、同時に快感原理の支配下に於ける、後に述べる如き發育を遂げる主體にも屬する。性慾本能は、初めから一つの對象を要求し、そして自己色情的には決して滿足することが出來ぬ。自我本能の要求は、斯くの如き時期を必然的に攪亂し、斯くして進歩を準備するのである。自己愛的原情況は、各〻の個人が、助けなき時代、卽ち保育を要する時代を經過して了つてからでなければ決して發育を受けることが出來ぬ。何故ならば此の時期に於ては、生じ來る要求は、總て外界からの助けによつて滿足して了ふのであるから、自己愛の發育は全く妨げられるのである。

外界は此の時期にあつては、一般に言うて、興味を以て充塡せられぬし、又滿足に對しても無關係である。此の時期に於ては、自我主體は、快樂に充實してゐるし、外界は無關係（或は時としては刺戟の源としては不快に充ちて）である。依つて第一に、戀愛を自我の、その快感根源に對する關係で

あると定義するならば、唯自己のみを愛し世界に對しては無關係である此の情況を說明し得るのである。これが卽ち「戀愛」なるものを最初に見出した對立關係である。

自我はそれが自己色情的である限りに於て外界を要しない。然し、自己保存の本能の經驗に從つて外界のうちに對象を求める。故に此の時は內部よりの本能の刺戟を、不快に充ちたものとして感知せざるを得ぬのである。快感原理の支配の下に、更に進んだ發育を遂げる。決感根源となりさへすれば何でも提供せられた對象をその自我のうちに取り入れる。フエレンチイスの表現に從へば、自らそれを攝取 introjizieren する。そして他面に於て彼にとつてその固有の內部に於ける不快感の根據となるものを外に投ずる。(尙このことについては後章の投射の機制を見よ)

斯く、最初の、內界及び外界を客觀的知識に從つて區別する現實自我 Real-Ich より、總ての他物に快感特質を與へる所の純粹なる快感自我 Lust-Ich に迄變化する。外界は彼にとつては自己に合體せしめた快感の一部分になつて了ふ。そして殘りは彼にとつては關係がない。自我からも亦その一成分を排泄する。その成分は外界に投げられ、而も敵として感ぜられる。斯かる順序變換の後に二つの極性の一致は再び與へられる。卽ち

自我主體――――快感を以つて

外界――――不快感（以前には無關心なりしもの）を以つて

最初の自己愛の段階に、對象の入り來るや否や、戀愛の第二の對立、即ち憎惡が形成せられる。既にのべた如く對象は外界より、先づ第一に自己保存の本能の手によつて自我に迄持ち來られる。憎惡の生じ始めるのも、自分とは異る、そして刺戟を生ずる、外界に對するこの關係からであることは、否定し難いところである。無關心と言ふのは、憎みに又は特別の場合には拒否に編入せられる。無關心は最初その先行者として憎みを持つことが多い。斯くて、外界、對象、憎まれるものはその一番初めにあつては、略同一のものである。後に至つて、對象は快感根源となり、從つて愛される。然しこれが自我に合體されると、純粹なる快感自我にとつては、その對象は又再び、他物、及び憎まれてゐるものに合一するのである。

斯くて我々は、戀愛對無關心の對立は、如何に自我對外界の極性を寫してゐるかを知る。又第二の對立、戀愛對憎惡は、最初に結合せられた、快感對不快感の極性を示してゐるのを知る。純粹の自己愛的段階が、對象的段階によつて解放せられた後は、快感及び不快感は、自我の對象に對する關係を意味する。若しもその對象が、快の感覺の根源であつたならば、その對象を自我にと近づけ、自我のうちに合體せんとする運動性の傾向が生ずる。斯くて我々は、快感を提供するものの示す、「魅力」

なるものを考へ、我々は對象を「愛する」と言ふのである。これと反對に若しも對象が不快感の根源であつたならば、その者と、自我との間の距離を益々大きくせんとの傾向が働く。これが刺戟を發する外界に對しての原始的の逃避の試み Fluchtversuch を繰返させんとする傾向である。我々は、對象の「冷淡」さを感じて、之を憎む。此の憎みは對象に對する攻撃に、又それを絶滅せんとする意圖に迄高まることがある。

さて、本能の要求を我々は本能が對象を「愛」し、それによつて滿足を得んと望むのであると言ひ現す。然し一つの本能が、一つの對象を「憎惡する」と言ふことは我々に不思議に響く。故に我々は、戀愛と憎惡との關係は、本能がその對象に對する關係に應用し難きを知るであらう。これは全自我が對象に對する關係に歸せねばならぬ。然し、人の用ふる意味深い言葉の用法を觀察すると戀愛と憎惡についての意味には、更に制限があることを知る。自己保存に役立つところの對象に就ては、それを愛すると人は言はないで、それを要すると言ひ、尚他の種類の關係をその表現に附加し、愛すると言ふ語の甚だ弱められた言葉を用ひてこれを意味せしめる。例へば、gern haben 持ち度いです、gern sehen 見度いです、angenehm finden 嬉しいです、等と言ふのである。愛する lieben と言ふ語は、だから常に純粋の自我對對象に對する快感關係を語る語として用ひられ、そして遂には狹義の

性慾對象に、或は昇華せられたる性的本能の要求を滿足せしむるが如き對象にのみ固定するに至る。我々の心理學で區別する、自我本能と性的本能との區別は、右の如き言語の精神とよく一致することがわかる。個々の性的本能が、その對象を愛するなどと言ふ言ひ現しには我々は慣れてゐない。然し自我がその性的對象に對する關係を意味する場合には「愛する」と言ふ言葉の最も適當した用ひ方である事を知る。この觀察から、言葉の此の如き應用は、性慾の總ての部分本能が、性器を元動としてのその下に綜合せられ、かくて初めて、繁殖機能に奉仕することを意味してゐることがよくわかるのである。

「憎む」と言ふ言葉の用法に就ては、性慾快感及び性慾機能への近い關係が、少しも目立つてゐないで不快關係のみが、唯一の決定的のものとして現れてゐると言ふことは注意す可きことである。自我が憎む、自我が嫌ひ、且つ彼にとつて不快感の根源として感ぜられる總ての對象を、絶滅する意圖を以つて追求すると言ふ事は、恰も、彼にとつて、それが性慾の滿足又は自己保存の要求の滿足を拒絶するものを意味する事と同樣である。然り、憎惡關係の、正當なる典型は、性慾生活からではなく、自我が自らを保存し、自らを主張せんとする自我の鬪爭より發してゐる事は斷言出來るのである。

戀愛と憎惡、既に十分實質的對立として表象せられるこの兩者は、然し互ひに單純なる關係にある

ものではない。この二つは起原的には同一のものより分裂して來たのではない、のみならず、雜多な起原を有し、快感、不快感の關係の影響に從つて對立として形成せられる前に、各〻それ自身の發育をとげて來たところの別々のものである。依つて、戀愛と憎みとの成因に關してわかつてゐることを總括して見る必要が生じて來る。

戀愛は自我の、本能衝動の一部分から、先づ自己色情的に發生し、やがて器官快感の獲得によつて始めて滿足する自我の能力である。だからそれは起原的には自己愛的で、ついで對象へと移行し、擴大せられたる自我に合體せられ、此等の對象を快感根源として追求する自我の運動性の努力を現し來つたものである。故に戀愛は後期の性的本能の活動と親しい關係を持ち、性的本能との合成が完成したあとでは、性慾力の全體を示すものとなるのである。戀愛の前階段は、性慾本能が、その複雜なる發育を通過する間に現す一時的の性慾目的をとる時期である。その前階段の最初のものとしては、合體すること、Einverleiben 貪食すること Fressen 等、卽ち要するに對象の異體としての存在を奪ふことと一致す可き、戀愛の一形式を擧げる可きで、此の者も亦對立兩存性である。前性器的の虐待嗜好的肛門愛的統帥の著しい時期に於ては、權力獲得慾の形に於て對象を追求する努力となつて現れるが、此の努力は、對象を侵害し、又は絕滅する努力と變りがない。斯くの如き戀愛の形式卽ち戀愛前

階段は、その對象に對する態度に於ては憎みと何等區別が出來ない。性的統帥の時期が來るに及んで始めて戀愛が憎惡の對立となるのである。

憎惡は對象との關係としては戀愛よりもはるかに早い。それは起原的には、自己愛的自我が、刺戟を發するものとしての外界へ拒絶をなすことと同じ意味から生じてゐる。だから、それは對象によつて生ぜしめられる不快反應の現れに外ならず、故に自己保存の本能に對して、親しい關係を永く有するのである。それ故自我本能と、性的本能とは、容易に對立として認めることが出來るもので、この對立は又、憎みと愛との對立として繰返されるのである。虐待嗜好的肛門愛統帥期の段階に於けるが如く、自我本能が、性欲機能をも支配する時には、自我本能はその本能目的として憎惡の特質を所有してゐる。

戀愛の發生的及び關係的歷史は、戀愛が屢〻對立兩存的であること、言ひ換へればその名指された對象に對する憎惡衝動の件ひ生ずることをよく理解せしめる。戀愛が一緒になつてゐる憎惡は、戀愛の未だ完全に打ち勝たれざる前階段から一部は出で來るものであり、一部は、自我の興味と、戀愛の興味との間に屢〻軋轢ある事が、現實的の而して切實な動機を生ぜしめ、自我本能の拒絕反應として生じ來るのである。何れの場合にしても、混在してゐる憎惡は結局自己保存の本能の根源に迄歸せし

められるのである。或る一定の對象に對する戀愛關係が破れた場合には、戀愛が憎惡に轉換したのであるとの印象を與へるやうに、その全く同じ場所から憎みが生じ來るものである。此等の說明から、現實的に動機づけられた憎みは、戀愛の**退行現象** Regression によつて虐待嗜好的前階段へと逆に强められ、從つてその憎みは、色情的性質を帶び來るのであり、依つてこれも亦戀愛關係の繼續として出て來たものであると云ふことが理解せられる。

戀愛の第三の對立、即ち愛することが愛されることへの轉換は、能動と受動との極性の作用に相當する。又瞠視本能と、虐待嗜好症との場合と同樣な判斷に從ふのである。これ等を總括して、本能の運命は、本來、本能衝動が、精神生活を支配する三大極の影響に從ふことによつて成立すると言ふ事を主張し得るであらう。此等の三大極については能動對受動を生物學的と呼び、自我對外界を現實的と呼び、又快感對不快感を經濟的と呼び習はしてよいであらう。

壓迫現象による本能運命については次章の研究に於て十分これを取り扱うてある。

壓迫現象

本能衝動の陷る運命の一つに、本能衝動を無効とせんとする抵抗に遭遇すると言ふ運命がある。次にその詳細なる研究を述べるが、この如き場合、本能衝動は壓迫 Verdängung の狀態に陷つたと稱する。外界よりの刺戟であるならば、明かに逃亡することが最もよい方法なのであるが、本能の場合には逃避を利用することは出來ない。何故ならば自我はそれ自身逃げも隱れも出來ないからである。後に述べる如く、一度は本能衝動に反抗する最もよい方法が見出されることがある。それは判決言渡(斷罪 Verurteilung)と言ふ方法である。此の判決言渡の前階段、卽ち逃亡と判決言渡の間の中間段階が、壓迫現象なのである。而もこの概念は・精神分析學以前には決して提出せられて居なかつたのである。

壓迫現象の可能性は理論的には容易には證明することが出來ない。何故本能衝動は斯くの如き運命に陷るのであるか。明かにそれは次の如き條件の充された時でなくてはならぬ。卽ち本能目的の到達が快感の代りに不快感を生ずるが如き場合である。然し斯くの如き場合は考へることが出來ない。斯くの如き本能は存在しない。本能の滿足足常に快感を有するものである。だから何か、その滿足の快

感が直ちに不快感に變化されるやうな過程が存する特別の事情を假定せねばならぬ。

壓迫現象を說明するのに都合のよいやうに、壓迫の生ぜぬ本能情況の場合を述べて見よう。例へば外界の刺戟が、一つの器官を刺戟し、破壞したことによつて、この外界の刺戟が、內部に入り込んでしまひ、卽ち內訌して却つて新しい、永續的の興奮及び緊張增加の根源となつたやうな場合があり得るであらう。斯かる場合これは、本能と極めて近い類似を生じ恰も本能の如くになるであらう。此の如き場合は苦痛 Schmerz として感ずるに違ひない。此の**假性本能** Pseudotrieb にあつては、その目的は、器官の變化を止めしめ、同時に、その器官の變化と結合してゐる不快感を止めしむることである。然しこの苦痛の終止によつて、他の直接なる快感が得られるわけではない。苦痛は絕對命令である。それは何かの毒物による中絕か、又は心理的轉向の影響によつて始めて終る外はない。

苦痛の例は、我々の意圖を說明するために少しく明瞭を缺く。然し、例へば饑餓の如き本能刺戟が滿足せられざる場合を例に取らう。饑餓は絕對命令である。これは滿足せしむることより外の何物によつても弱められることはなく、不斷の要求緊張を保つものである。故に壓迫現象の如きものは此の場合は全く觀察することは出來ぬものである。

本能衝動の不滿足によつて緊張が堪へ得ざる程大となるやうな場合には、壓迫現象は決して生じな

い。生物にとつて、斯かる情況に對する防禦方法として與へられてゐるものは、他の場合に屬するものである。

精神分析學的實驗で遭遇した、臨床的經驗を此處で述べた方がよいと思ふ。壓迫せられた本能も、その本來の滿足は可能であり、且つ常に快感に滿ちてはゐるが、然しそれが他の要求及び意志と一致しないことがある。此の場合は一面には快感があるが、他面には不快感が生ずるのである。斯かる場合、この不快感の動機か、滿足による快感よりもその度が強いやうな時に、壓迫現象の起るべき條件が初めて生じて來る。更に我々は、轉授神經症の精神分析的經驗から次の如く結論せねばならぬ。卽ち壓迫現象は、生れつきに存在してゐる防禦機制では決してないのである。又意識せられたる精神生活と無意識なる精神生活との判然とした區別が出來て來るよりも早期に生じてゐるものでは決してない。却つて本能が**意識からの拒絕**、又は**意識からの島流し**に逢ふことが壓迫である。壓迫現象に對する斯くの如き理解は、更に次の如き假定に依つて補足せられねばならぬ。卽ち此の如き精神編成の前の段階に於て、他の本能運命、卽ち反對者への交錯、自己自身への轉向、本能衝動に對する防禦、等のことは總て克服せられて居らねばならぬと言ふ假定である。

今や我々は壓迫現象と、無意識とは甚しく相關的なものであると考へる。故に我々は壓迫現象の本

態のうちに深くつき入ることは、我々が心理的審理序列 Instanzenzug の構成や、無意識と有意識との間の分化に就て更に經驗する迄延期せねばならぬはどの關係にある。依つて豫め、他の方面より述べた點を、そのまま繰返す危險は覺悟して、尙二三の壓迫現象の臨床的に知られたる特質を、純粹に記載的に提出することが出來るばかりである。

我々は、**原壓迫現象** Urverdrängung 即ち壓迫現象の初期なるものを假定する根據を有する。即ち原壓迫現象とは、本能の心理的（表象的）代表者が意識のうちに移行するのを拒否された狀態である。これを固定 Fixierung と稱する。即ちその本能代表者は、それ以來決して變化するところなく其處に殘つて居、本能がこれと結合してゐるのである。此のことは後に述べる無意識の過程の特質より來るものである。

壓迫現象の第二の段階、卽ち本來の壓迫現象は、壓迫せられたる代表者の心理的の誘導體である。又は他の何れかから生じ、聯想的にその者と結合してゐる思考列に相當する。斯かる關係であるから、その表象も、原壓迫を受けたものと同樣な運命を有する。故に本來の壓迫現象は此の場合には後生壓迫 Nachdrängen である。故に意識から來て、壓迫せられたものに作用する拒否のみを問題とするのは誤りである。原壓迫を受けたものは、それと結合する總てのものに働きかけると言ふ引力を

も觀察せねばならぬ。恐らくは壓迫傾向は、若しもその力が共に働かぬならば、又は意識から拒否せられたものを取り入れるために用意して待つてゐる、豫め壓迫されてゐるものが其處にないならば、その意圖を遂げることが出來ないであらう。

精神神經症 Psychoneurose の研究によつて、壓迫現象の有意義なる作用を提擧するを得た我々は、その心理的内容のみを、餘りに高く評價する癖がある。そして壓迫現象は本能代表者が、無意識の中に於て、更に組織せられ、誘導體をも形成し、更に結合を固くすることを決して妨げられてはゐないと言ふことを、餘り容易に忘却してしまふ傾向がある。壓迫現象は、實際に意識系統に對して、他の一つの心理的系統が關係することを妨げるだけのものである。

精神分析學は、尙更に、精神神經症に於ける壓迫の作用の理解のために何が最も有意義であるかを示す。例へば若しも本能代表者が、壓迫作用によつて意識に對する影響を全く除かれるならば本能代表者は、少しも亂れることなく、又豐かに發育する、と言ふことを示す。それは言はば闇のうちに生長する。そして若しもそれが、神經症者となり、そして永續するならば、極端なる（著しき）表現形式を見出す。卽ち彼にとつてその代表者は異物として現れるのみならず、法外の、そして危險なる本能强度となつてくる事によつて威嚇するに違ひない。斯かる誤つた本能强度は空想のうちで制止せ

られるところなく發展した結果であり、拒絶せられたる滿足の蓄積した結果である。此の蓄積の結果が、壓迫現象と密接に關係してゐるものであることを知ると、我々は壓迫現象の固有なる意義を何處に求めねばならぬかがよくわかる。

然し一見反對の見地に復歸するやうであるが、壓迫現象は原壓迫を受けたものの總ての誘導體なも意識から遠ざけるものであるとなすのは決して正しくないと主張せねばならぬ。若しも此等の誘導體が、もとの壓迫せられたる代表者からは十分遠くにあるとするならば、變造作用の假定によるか、又は數々の中間者を通つて移動することに依つて、自由に意識へ行くことが出來る。恰も、意識の抵抗が、却つて起原的の壓迫せられたものから此等の誘導體を遠隔せしむるが如き結果となる。精神分析學の手法を行つてゐる間に、我々は絕えずその患者に、壓迫現象の斯くの如き誘導體を產生することを強ひてゐるのである。その誘導體は、その遠隔作用によつて、又は變造作用によつて、遂には意識の檢閲を通過することが出來るのである。それは我々が凡そ意識せられたる目的表象及びその總ての批評を棄て去つた時、虛心平氣となつた時に浮んで來る思ひ付き（落想）である。故に落想を判斷して、我々は壓迫せられた代表者の意識への飜譯を再出することが出來る。我々はその時患者は、斯かる思ひ付きを次から次へと繰出す事が出來、その經過中に於て一つの思考形式に打つつかるのを觀察

することが出來る。この思考形成こそは曾つて壓迫せられたものに極く近接したもので、患者は此の時曾つて受けたと同じ壓迫經驗を再び現出するほどで、甚だ壓迫せられたものに關係してゐる思考形成なのである。神經症の症狀もこの條件で十分說明出來る。何故ならば症狀なるものは、壓迫せられたものの誘導體で、その壓迫せられたるものは、症狀の形成を方法として彼に拒絕せられた意識への行手を遂に開くのであるから。

此の壓迫せられたるものの變造作用及び遠隔作用が益〻遠くまでゆき、依つて意識の抵抗が無くなる迄にゆくのであるか否かは一般には示すことが出來ない。斯かる場合には微妙なる秤量が生じてゐるのであつて、その働きは全然我々には知られぬが、その作用の仕方は、推量することが出來る。要するにそれは、無意識の充塡を或る定まつた强さで停止せしめ、この强さを超える、滿足への充塡をなさしむることに在る。又壓迫現象なるものは全く個人的に働くもので、從つて各〻の個人について、壓迫せられたるものの誘導體も亦特別の運命を持つのは免かれぬ。この變造作用に差異がある時には、その結果が全く變つたものとなる。同樣な關係が、人類の著しく目立つ對象、卽ち人類の理想についてもある。卽ち理想は、多くは嫌忌せられたものと同樣な認識、同樣な經驗から生じ來つたものゝで、從つて起原については、理想と嫌忌との間には極く僅かな差異が存するのみである。正に我々

が節片嗜好的對象の Fetisch の成生の場合に見る如く、起原に於ては本能代表は略二つの部分に分たれるもので、その一つは壓迫に陷つて了ふものであり、その同じものの他の一部は、殆ど全く同じ結合方法を以つて理想化の運命を擔ひゆくものである。

多少とも變造作用の働いたものは、言はばその精神裝置の他端で、或る修正を蒙つて快不快生產の條件に達することが出來る。これは、心理的の力の演技の斯かる變化が働くことにより、卽ち然らざれば不快を生ずる如きものが一度快を齎し、尙屢〻同じ手法が働くにより、然らざれば拒絕せられる本能代表者に對する壓迫現象を取り除き得るであらうことを意圖としてゐる特別なる手法をなすものである。此の手法は、從來唯洒落 Witz の硏究に對してのみ精細に追求せられてゐたものである。然し一般に、この壓迫現象の停止は一時的のもので、直ちに再び生じて來る。

然し斯くの如き經驗は、我々をして壓迫現象の有する更に他の特性に注意を拂はしめる。卽ち壓迫現象は、唯單に個人的であるばかりでなく、隨分動き易い mobil と言ふことである。壓迫過程は、恰も或る生物を打ち殺し、その生物がそのまま死んでゐるが如きもので、一度しか出現せぬが、永い結果を有するものであると考へてはならぬ。壓迫現象は、却つて永續する力の消費を要するもので、その消費が中止する時は、結果も亦疑はしく、從つて新しく再び壓迫行爲を必要とするものである。

我々は、壓迫せられてゐるものは不斷の壓力を意識の方へと働かせて居るもので、從つて意識にとつては、これまた拒み難き反壓力を出して平衡を保たねばならぬものであると考へて差支へないであらう。故に一つの壓迫現象を保持することは、不斷の力の消費を豫想せしめるもので、その廢止は經濟的に一つの節約を意味するものである。壓迫現象の動搖し易い證據は、その外に睡眠狀態の心理的特性のうちに表現を見出すこと、卽ち夢の形成を生ぜしめることからよく判る。覺醒と共に、隱れたる壓迫充塡が再び呼びかへされるのである。

さて最後に忘れてはならぬことがある。卽ち我々は本能衝動についてはそれが壓迫せられ得るかどうかは初めから言及しなかつたことである。本能衝動は壓迫現象とは無關係に、甚だ雜多なる狀態に在ることが出來る。或る時は不活潑、卽ち心理的エネルギーを極く僅かしか充塡せられず、又或る時は交代的に充塡せられて活動力を有する。然し本能衝動は賦活されても、壓迫現象を直接に止めしめるやうな結果は決して生じない。但し廻り道をして意識に迄入り込み、依つて以つて終結を見出すが如き總ての過程を起すことは出來る。無意識よりの誘導體が、壓迫せられぬ場合には、此の賦活又は充塡の程度が、個々の表象の運命に關して決定的に作用する。斯くの如き誘導體は僅かなエネルギーしか持たない時は、その內容は、意識せられたる支配者との軋轢を生ずることになるが、壓迫せられ

ずに殘留するのは日常のことである。然し量的關係が此の軋礫に對しても決定的である。その根柢に於て衝擊されてゐる表象は、或る程度迄强められて來るとその軋礫は實際的となり、その賦活すらも、壓迫現象を伴ふこととなる。エネルギー充塡の增加は壓迫現象に關しては、無意識に近づくと同樣なる意味で、その減少は、無意識からの遠隔、又は變造作用と同樣な作用がある。卽ち我々は壓迫傾向なるものは、その好まざるものが弱まつてくると、代理を見出して、それを壓迫するものであると言ふことを知るのである。

上記の叙述に於ては、我々は本能代表者の壓迫現象を取り扱うた。そして、一つの表象又は表象群、卽ち本能から出て、心理的エネルギー（リビド或は興味）の一定の額を以つて充たされてゐる表象又は表象群を、本能代表として理解したのである。臨床的觀察は、上記に於て單位的に理解したものを更に分解することを要求してゐる。何故ならば、臨床的觀察は表象の外に、本能が代表してゐるもので何か別のものを見ること、及び此の或る物は表象のそれよりも全く別な壓迫運命を受けるものであることを我々に示してゐるからである。此の心理的代表者の他の要素とは情緒量 Affektbetrag なる名を與へられるものである。これはその表象からは別のもので、その量に依つては感覺の情緒として見得る諸過程のうちに表現せられるものであるから、本能に相當するものである。故に今より後

は壓迫現象の場合を論ずるに當り、壓迫に依つて表象よりは何が生ずるか、及びそれに附屬する本能エネルギーよりは何が生ずるかを別々に追求せねばならぬのである。

此の二つの運命については、とも角一般的のことが言ひ得るのは都合がよい。そのことは或る指南に從へば可能である。本能を代表する表象の一般的運命は、それが曾つて意識せられてゐた場合には、意識より消失するか、又はそれが概念のうちにあつた場合には意識とならんとして意識から拒絶せられるかにきまつてゐるのである。この區別は最早大して大きくはない。その區別は、恰も、余の愛せざる客人を、余が客間より退去せしめるか、或は家の玄關から立ち去らしむるか、或は余が彼を認めたにも拘らず、全く余の家の戸の閾にすら入らしめぬかの差異に等しい。（註）

（註）壓迫過程のために用ひられた此の譬喩は、既に述べられた壓迫の總ての特性に關して擴張せられて宜しい。余は唯、余が客人に對して禁じた扉は、絕え間なく番人をして見張らしめねばならぬ、然らざれば拒絕せられたものが躍り込む恐れがあると言ふことを附け加へるに止めよう。

本能代表者の量的因子の運命は略三つある。それは精神分析に於てなされた經驗を一瞥するによつて知ることが出來る。卽ち本能は、全く認めることの出來ぬ程全然的に抑壓されるか、又は本能は何處かに量的に色づけられた情緒となつて現れるか、或は又恐怖と變つて了ふかである。この後の二

つの可能性については本能の心理的エネルギーが情緒へと變移すると言ふ研究課題を與へるものである。特に不安恐怖への變移は新しい本能運命として觀察す可きである。

壓迫現象の動機と意圖とは不快感を避けることより外の何物でもないことは既に述べたところである。依つて、本能を代表するものの情緒量の運命は、表象の運命よりもずつと重要である。だから壓迫過程の評價も亦これで決することが出來ると言ふ事になる。若しも壓迫現象が、不快感覺又は恐怖の生成を防ぐことが出來なかつたならば、假令それは、表象部分に於てはその目的を達してゐても、實は不成功に終つたと言はねばならぬ。勿論この不成功であつた壓迫現象は、成功したために我々の研究範圍から既に逸した成功したものよりも、尙我々の興味を高める。

さて壓迫過程の機制に一瞥を投げよう。第一に、壓迫現象には唯單一の機制のみがあるのか、或は數多の機制があるのか、又精神神經症は各〻恐らく、その名に特有なる壓迫機制を呈するものであるのか、如何と言ふことを知らねばならぬ。此の研究を始めるに當つて、我々は多くの複雜なものに遭遇する。壓迫現象の機制は、その壓迫現象の結果から推論し來つて初めて達せられる。先づ、代表者の表象部分に於ける結果の觀察のみに限つて見よう。さすれば第一に壓迫現象は一般的に代理形成Ersatzbildungを生ずるものである。然らば斯かる代理形成の機制は何であるか、又は此處にも亦多

くの機制が存在するのであるか。第二に壓迫現象は症狀を殘すことをも我々は知つてゐる。依つて代理形成と症狀形成とが同時に或る患者に現れた場合、若しもこれが合一してゐるならば、症狀形成の機制は壓迫現象の機制と同一のものとしてよいであらうか。先づ暫くは次の如きことが、確實であるやうに見える。即ちこの兩者は全く異るもので代理形成及び症狀等を生起せしむるものは、壓迫現象自身ではなく、壓迫せられたるものの再現 Wiederkehr des Verdrängten の徵で、全く別の過程がその形成に與つてゐると言ふことである。だから、代理形成及び症狀形成の機制は、壓迫現象の機制に先立つて硏究せらる可きものであるとの推奬が宜しい樣に見える。

思索はこれより以上試みるも無駄である。それよりも個々の神經症の際に見られる壓迫現象の結果の、注意深い分析によつて解かれねばならぬ。然し、余は、此の硏究も亦、先づ意識の無意識に對する關係についての十分なる表象を自ら得る迄延ばすことを勸め度いと思ふ。但し、上記の敍述を全く無駄に終らせ度くないために、結論を先に記して置かう。

(一)壓迫現象の機制は、事實に於ては、代理形成の機制とは同一ではない。

(二)代理形成の機制には頗る多數ある。

(三)壓迫現象の諸機制には、少くとも共通なるものがあるが、それはエネルギー充塡の奪去(性慾

本能についてはリビド奪去）と云ふことである。

三つの知られたる精神神經症に限つて、その例を擧げて、壓迫現象の研究について此處迄に誘導せられた概念を應用して見よう。恐怖性ヒステリー症 Angsthysterie のうちから、動物恐怖症のよく分析せられた例を擧げよう。此の場合壓迫せられた本能興奮は、父親に對する性慾的慾望であつて、これが父親に對する恐怖と結合してゐた。壓迫せられて後は、この興奮は意識より全く消失してゐる。故に父親は最早リビドの對象としては入つてゐない。この代理として同じ位置を一つの動物、多少とも恐怖の對象として工合のよい動物が占たのである。表象部分の代理形成は、既に一定の仕方で決定せられた關係を辿つて、移動 Verschiebung の道から生じた。然るに量的の部分は消失しないでこれが恐怖に變化したのである。結果は父親に對する愛慾の代りに、狼に對する恐怖が現れたのである。勿論精神神經症の最も單純な例を説明するにも此處に擧げられた範疇ばかりでは不十分である。常に他の視點からも觀察せねばならぬ。

斯くの如き動物恐怖症の例に於ける如き、壓迫現象は、根本的に失敗に終つた壓迫であると言はざるを得ない。此の場合壓迫の働きは、唯表象の除去及び代理形成をなしたばかりである。不快感を除くことは少しも達せられて居らない。依つて神經症は靜まらず、第二歩に入つて、彼にとつて直ぐ次

の、より重要なる目的の達成に努めた。卽ち恐怖との離斷は出來ぬから恐怖症に固有な忌避行爲のうちで逃亡の試みを形成したのである。然らば如何なる機制によつて恐怖症がその目的を遂げたか。これは個々の例を研究すれば知ることが出來る。

壓迫現象の全く他の評價が、眞性轉換性ヒステリー症 echte Kenversionshysterie の病症像から得られる。此の病氣には著しく目立つことがある。卽ち情緒量が、全く消失し去ることが出來る點である。シャルコーがヒステリー性完全無關心 ”la belle indifference des hystériques“ と名付けた狀態が、その症狀として現れて來るのである。他の場合には斯くの如き抑壓は完全ではなく、苦痛の感覺の一部は、その症狀それ自身に結合してゐるか、或は恐怖形成の機制がその部分だけ働いて、恐怖よりの離斷は一部だけは殘るのである。本能代表者の表象內容は意識から根本的に除去せられる。卽ち代理形成としては――及び同時に症狀としては――過度の神經支配――上記の場合に於ては體質的の――が現れて來る。卽ち或る時は感覺性であり、或る時は運動性であり、興奮的にも、制止的にも、現れて來る。此の過度神經支配を受ける場所は更に詳細に研究することによつて、壓迫せられたる本能の代表者自身の一部分であることがわかる。而もその一部位が、濃縮 Verdichtung によるる場合の如くあらゆる充塡を我一人で占めてゐるかの如く見える。勿論此の如き記載が轉換性ヒステ

リー症の機制を、殘りなく盡してゐるわけではない。此の上に退行現象の要素も加はることがあるがこれは他の關係より批判せねばならぬものである。

ヒステリー症に於ける壓迫現象は、唯豐富なる代理形成が可能であるに過ぎず、殆ど全く不成功なるものと考へることが出來る。成程情緒量の解決は、壓迫作用のもとよりの役目であるが、これは一般に完全なる結果を示した。轉換性ヒステリー症の壓迫過程は症狀形成だけで終結する。そして恐怖性ヒステリー症の時の如く二期にまたがつて――或は本來無制限に――繼續するものではない。

壓迫現象は、例に引かうとする第三の病症卽ち强迫神經症 Zwangsneurose の際には更に全く別の狀態を示す。此の疾患では、第一に、壓迫現象に陷つた本能を代表するものは何であるか、リビド性の努力なのか又は敵意ある努力なのかが疑はしくなる。此の不確實さは、强迫神經症が、退行現象によるとの前提の上に立つてゐることに存する。この退行現象に依つて、情愛的のものの代りに虐待嗜好的の努力が入り來つてゐるからである。卽ち愛する人に對する敵意ある衝動が壓迫せられることになるのである。その結果、壓迫現象の起り始めの時期では、後期よりも全く別のものがある。先づ第一に此の完全なる結果は、表象內容の拒絕せられること、銷沈の情緒が生ずること等である。更に代理形成としては、自我の變化、良心の苛責の過度なる高まり等であつて、症狀とは言ひ兼ねるもので

ある。代理形成及び症狀形成は此の疾患では互ひに分れてゐる。此の場合にも、少しは壓迫の機制について知ることが出來る。壓迫現象は、常に然る如く此處でもリビドの除去である。然し此の目的のために、相反する者の增強によつて反動形成を生ぜしめる。代理形成は此の場合には壓迫現象と全く同樣な機制を有し、そしてその根據に於ても一致するであらうが、然しこれは時としては、症狀形成では分離してゐる。壓迫せられたる虐待嗜好症的衝動に入り込んでゐる對立兩存性が此等の全過程を生ぜしめてゐることは恐らくは確かである。

最初にはよく壓迫せられてゐるが、これは繼續せず、經過の進むに從つて、壓迫の不成功が益々現れて來る。反動形成によつて壓迫が生ぜしめた對立兩存性は、壓迫せられたものの再現する場所である。一旦消失した情緒は、社會的恐怖、良心恐怖、苛責する處なき非難等への變化となつて再び現れて來る。拒絕せられた表象は、**移動代理** Versshiebungsersatz となつて代理せられる。或は屢々微小物への移動、無關心への移動等となつて代理せられる。壓迫せられたる表象の完全なる再現をなすやうな傾向は多くの場合認め難い。量的及び情緒的因子の壓迫現象に於ける不成功は、忌避や禁止による逃避の機制が働いて來ること、恰もヒステリー性恐怖症の形成の場合に旣に知つたと同じであ る。然し意識がその表象を拒絕することは執拗に固定せられてゐる。何故ならばそれによつて、活動

の拒否、及び衝動の運動性束縛等が與へられるのだからである。かくして、强迫神經症の壓迫現象の働きは結果なき終りなき輪環をまはり步いてゐるのである。

此處に示された、僅かな比較例は、壓迫現象と、神經症性症狀形成との間を關係づけてゐる過程を完全に闡明するのを望む前に、尙廣汎なる硏究が必要であるとの確信を起さしめるに十分であらう。此處に觀察した總ての要素の、極端なる錯綜は表現の方法を更に自由に選ばしめる。我々は、忽ちにして此の、又忽ちにして別の立場をとつて、その應用が何か役立つと見える迄、その材料を追求せねばならぬ。此等の硏究の各個は、それ自身としては不完全であり、其處に不明瞭なところが尙多く、殊にまだ硏究の行き足りぬ處が多いであらう。然し、この終りに述べた總括によつて或る程度の理解が得られたであらうと云ふことは希望してよいであらうか。

無　意　識

壓迫現象の眞の作用は、本能を代表してゐる表象を終熄せしめることでもなければ、絶滅せしめる事でもない。唯その表象を意識の外に追ひ込んで置くだけの事であると云ふ事を、精神分析學は教へたのである。唯單にそれは、無意識の狀態に止まつてゐるのみでなく、無意識であり乍ら作用を現すことが出來、而も遂には意識にも上るやうな作用を現すことが出來ると言ふ事を主張し得る十分なる根據がある。凡そ壓迫せられたものは總て無意識である。然し豫め言はねばならぬ事は、逆に意識せられざるものは、總て壓迫せられたるものであるとは言へないことである。無意識界はより以上の廣さを有する。壓迫せられたるものは、無意識の唯一部分をなすに過ぎないのである。

如何にして意識せられざるものを知り得るか。言ふ迄もなく、それが意識せられるものに變化し、又は移行して來た時に始めて、意識せられたるものとして知り得るのである。精神分析學的業績は、常に、斯くの如き移行現象が可能である事を事實に於て示してゐる。唯それがためには被分析者が、抵抗に打ち勝つことを必要とするのである。抵抗とは、卽ち、その時迄意識からの拒絶によつて、壓迫せられたる狀態にせしめられてゐる、その抵抗なのである。

一　無意識の立證

意識せられざる精神を假定し、而も此の假定より出發して科學的研究を行ひ得るとの立證は多方面より得られる。先づ第一に、無意識の假定は必要であり而も合理的であること、及び無意識の存在に對する數多くの證據を、我々は有してゐる事を擧げる事が出來る。此の假定は、意識の事象が甚しく間隙が多い所から見ても必要である事がわかる。卽ち健常の人でも、病人でも同樣であるが、その說明に對しては何か他の心理的活動の先行を豫想せしめて居ながら、而もそれが意識に現れ來らぬ如き心理的活動が澤山にある。斯くの如き心理的活動とは、健常者の夢とか、又は失錯行爲等とかである。我精神病者にあつてはその、精神症狀、又は强迫現象と總稱せられてゐる總てのものがそれである。我の個人的な、日常茶飯の經驗でも、例へば單純なる思ひ付きの如きものが果して何處から來たのかその由來する所は知れないことがわかるし、更に精細に考究して見ると、此の生じ來つた道程は、我我から隱されてゐることがよくわかるのである。總ての意識せられたる心理的活動と雖も、若しも、我々の內に現れ來る總ての精神的活動が、意識によつて知られてゐる可きであることを固持するならば、全く連絡なく、且つ理解し難きものとなるであらう。これに反して、若しも此の間に、上來述べ

られた如き意識せられざる心理的活動を挿入するならば、それ等は完全に順序を示し得るところの連絡として現れるであらう。意味を生じ來ること及び連絡を得來ることについて、此の如く得るところがあると言ふことは、無意識を假定することが直接經驗に關して我々を指圖す可き、完全に是認せらる可き動機たるを示してゐる。況んや尙、此の假定が、意識せらるる心理的過程の經過を、合目的に取り扱ふことが出來るやうな、効果ある事業を始めて構成せしめ得ることを考へれば、此の効果ある事業が現に成り立ち得ると言ふことそれ自身のうちに、爭ふ可からざる此の假定の存在の證據があるのを知り得るに於てをやである。依つて我々は、精神界に生起する總てのものが、意識に知られ得ねばならぬと固執するのは、誠に根據の薄弱な、而も僭越なることである、との立場を知るであらう。

更に進んで、此の意識せられざる心理的狀態の支持として次の如き事も考へられる。卽ち各瞬間に於ける意識は、ほんの僅かの內容を有するのみで、意識された知見と普通呼ばれてゐるものの大部分は、元來長い間潛伏の狀態、言ひ換へれば心理的無意識の狀態に存したものであると言ふことである。更に、我々は、潛在して居る數多の記憶を有するものであることを顧る時、無意識に對する反對は、全く不合理なこととなる。斯く言ふと次の如き駁論が起こるであらう。斯くの如き潛在する記憶なるものは、最早心理的とは呼び難きものである。むしろこれは體質的過程の遺殘物と呼ぶ可きで、

此の者より再び心理的過程が生じ來るのであると。これに對しては、反對に、潛在してゐる記憶は、却つて疑ひもなく心理的過程の遺殘物ではないかと答へれば足るであらう。要するに最も重要なる點は、駁論として今まで明瞭にせらたことはなかつたが、而も固く定まつてゐるものと見做され來つた、意識界と精神界とは同一物であるとの點に關はつてゐるのである。此の同一視は、原理上の要求Petitio Principii 卽ち、總ての心理過程は、意識せらる可きものなりや、との疑問をすらも許さざるやうな原理上の要求であるか、さなくば唯單に習慣の問題、名の付け方の問題か何れかである。この後者であるならば勿論、總ての習慣と同樣に論駁し難い。唯、此の同一視は直ちに同意出來るほど合目的であるや否やとの疑問を提出するに止まる。人は直ちに答へるであらう。心理過程と意識とを同一視することの因習は全く合目的なものではないと。何故ならばそれは、心理的連續と言ふものを全く破壞し、我々をして精神物理併行論 psychophysicher Parallelismus の解き難い困難のうちに投げ入れ、更に、それは、認識論上の根據なしに、意識に對して餘りに高い價値を置くとの批難のうちに我々を投げ入れるからである。斯くの如きは遂に我々をして、逸早くも、心理學的硏究の領域を捨てしめることになり、而も他の領域からも、何等の賠償をも得ることが出來なくせしめるに至る。

斯く考へて來ると、精神生活の此の否定し難き潛在狀態なるものは、果して意識せられざる精神過

程として理解せらる可きか、又は物理的過程として理解せらる可きかのこの疑問は、畢竟言語の爭ひとなつて了ふことが明かとなつて來る。依つて此の疑問となつてゐる狀態の性質について、確實に吾人の知つてゐるものは何であるかを問題とする方が宜しいことになる。然るに、その物理的特性については我々は完全に何も知らぬことが直ちに判る。あらゆる生理學的表象も亦化學的表象も、そのものの本態に關して何物をも我々に敎へぬのである。然し他の方面より次のことが確められる。卽ち、此の潛在狀態にあるものは、意識せられたる精神過程と、頗る關係があると言ふ點である。例へば、或る一定の仕事の遂行となつて此の者は後者に變つて來る。又は後者によつて代理せられる。而して尙此の者は我々が意識せられる精神活動に適用し得る總ての範疇で記載せられ得る。例へば表象、努力、決斷、又はこれと類似の表現として出て來るのである。然り、此の潛在狀態の多くのものは、それが唯意識が缺けてゐると言ふ點だけで、意識せられる精神過程と區別せられるに過ぎないと言ふことが出來るのである。だから我々は此のものを心理學的硏究の對象として、且つ意識せられる精神活動と最も近い關係あるものとして取り扱ふに躊躇しないのである。

此の潛在する精神的活動が、心理的特性を有してゐると言ふことに對する頑固なる否定論は、寧ろ、上記觀察し來られたる諸現象が、今まで精神分析學の外にあつては、決して硏究の對象とせられ

なかつたと言ふ點から來てゐる。病的事實を知らぬ人は、健常人の失錯行爲の如きものをも偶然の出來事として片付け去るであらう。そして、「夢は無意義である」Träume seien Schäume とする古來の知識で滿足するであらう。斯くて、意識せられぬ精神活動の假定を避けるために、**意識心理學** Bewusstseinspsychologie には、幾多の謎が殘つてゐる結果となるのである。然るに、催眠術の實驗、特にその暗示の後作用、及び精神的無意識の存在竝に作用樣式等については、既に精神分析學以前からも、事實として認められて居たのである。

無意識の此の假定は、その設定のために、我々の習慣とする、而も正しく施行せらるる思考方法から外れることのない限りに於ては、全く合理的なる假定である。意識は唯我々各自に、その個人特有の精神狀態に關する知見を與へるのみである。他の人間も亦意識を有してゐると言ふのは、類推によつて、他人の認め得可き表現及び行爲を根據として、他人の此等の行動を我々が理解せんがために引き出された結論なのである（このことを心理學的に更に正確に言へば次の如くになる。即ち我々は、特別の判斷力なしに、我々自身以外の人々に、我々と同じ構造、及び同じ意識を附與して居る。而も此の同一を認めることが我々の理解力の前提であると）。此の結論——即ち同一を認めること——が、一度自我から發して他の人間、動物、植物、無生物及び世界の總てに擴げられるのであるが、その個

人の自我との類似が、大であればあるほど有用であるが、自我から遠ざかるほど益〻信頼せられなくなる。我々の現在の批判では、既に動物に意識ありや否やが不確實である。況んや植物に意識ありとは全く許されて居らぬ。無生物に意識ありと言ふに至つては、これは全く神話に屬する。然し此の起原的の同一を認むる考へが、批判的檢索に堪へてゐる間は、我々に隣りする他人に對して、意識を假定することが、結論として出て來るのである。但し此の假定も我々自身の意識の確實さには及ばぬのである。

精神分析學は、此の結論の仕方が、それに對して體質上の傾向は全く關係する處なく、自己自身に向つても應用せられるとなすに外ならぬ。斯くて次の如く言はねばならぬこととなる。余が余のうちに認めはするが、余のうちにあるそれ以外の心理的生活に結合し得ざることを知つてゐる總ての活動や表現は、恰もそれは他人に屬するものであるかの如く判斷せられる事となる。又その說明は他人に屬する精神生活によつてのみ見出し得るに相違ないと。經驗上より、人は自己自身のうちにその心理的認知を拒絕するが如き活動でも、他人の場合によくその解釋をなすことが出來ること、即ち精神的の關係に整序せしめ得ることを知つてゐる。この故に我々の研究は、自身からの特別なる妨害によつて、明かに轉向せられて了ひ、その正しい認識を妨げられるのである。

この內的反抗にもかかはらず、自己自身に對して應用せられた此の論結方法は、今や無意識の發見を導いたのみならず、他人の第二の意識、卽ちそれが自分自身のうちにも同一に存することから、第二の意識の假定をも、正しい方法で得たのである。但し此處にこの批判を是認する根據として二三付け加ふ可きものがある。第一は、その所有者が知らぬ意識で、而も他人の意識とも異る意識、言ひかへれば最も重要なる特性を缺いてゐるところの意識は、一體討論に値するや否やと言ふ疑問である。然し意識せられざる心理的過程を假定することに反抗する人は、その代りに意識せられざる意識と言ひ換へるだけでも滿足しないであらう。第二には分析が次の如きことを示す點である。卽ち我等の推論し來れる個々の潛在する精神過程は、互ひに無關係に居り、恰もそれ等は決して互ひに結合がないかの如く、又互ひに何も知らぬ如きものであると言ふ點である。我々は唯單に第二意識を我々の內に假定するのみならず、第三、第四、恐らくは更に盡きざる意識列を、卽ち全體として我々に知られず又互ひにも知らざるものを假定してよろしいのである。第三には最も困難なものである。卽ち、分析的研究によつて經驗するところによれば此の潛在する過程の一部は、我々に全く知られ居らぬ、而もそれ自身としても信じ難く見える、尙且つ意識に關して吾人に知られ居る諸特性に全く相反するやうな特徵及び性質を所有してゐる點である。斯くして我々は自身に向つて應用せられた此の結論は次の

如く變更せられねばならぬとする十分なる根據を有する。卽ち第二の意識があるのではなく、意識を伴はぬ心理的活動が存在するのであると。「閾下意識」Unterbewusstsein と言ふ言葉は正しくないのみならず、誤り易いから避けねばならぬ。double conscience（意識の分割）なる有名なる例は、我々の此の理解に對しては無關係である。これは精神的活動が二つの群に分裂してゐる場合で、卽ち或る意識が、交代的に他の意識又は他の方向に向けられる場合に適切に名付けられたものであるに過ぎぬ。

さて精神分析學には次の如き一事が殘されるのみとなる。卽ち精神過程、それ自身は意識せられざるものとして說明せねばならぬ。斯かる精神過程を意識によつて認識するのは、恰も五官器を以つて外界を認識することに比較さる可きである。我々は、斯くの如き譬喩を以つて我々の知識に對して得る處あらしめ度い。精神分析學に於ける意識せられざる精神活動の假定は、一方には、原始的の萬有精神論 Animismus 卽ち至る處に我々の意識と同一者ありと幻想する思想の繼續の如くに見え、一方に於ては、外界の認識に對して、カントが企てた是正の繼續の如くに見える。カントが戒めてゐる如く、我々の認識には主觀的條件を看過することは出來ぬ、且つ、我々の認識を、此の知らず知らずに認識して居るものと同一物と誤認してもならぬ。依つて精神分析學は、意識的認識を、對象としては

ならぬ。その對象は飽くまで意識せられざる心理的過程でなくてはならぬ。物理的過程と同樣に、心理的過程も亦、吾人の眼の前に現れ來るがままが實際のものであると直ちにはなし得ない。然し、我我は內的認識を是正してゆくのも、外的認識についてなさねばならぬものより以上には困難なものならず、內的對象は、外界世界より以上に認識し難きものにあらずとの經驗から、滿足して進んでゆくであらう。

二　無意識界の多義、及び、局所的見地

更に先に進む前に我々は、重要なる、然しながら亦甚だ困難なる事實を確立して置かなくてはならぬ。その事實とは、無意識なることは心理的なることとの一つの目標である、過ぎぬと云ふ事實である。その目標のみが心理過程の特質であると言ふわけにはゆかぬ。心理的活動には、甚だ雜多な、然し意識せられぬと言ふ特質については相一致してゐる種々なる階級がある。卽ち無意識は一方には、唯單に潛在し、一時的に意識せられてゐないだけでその他の點に於ては意識せられて居るものと何等異るところなき心理的活動を包括してゐると共に、他方には壓迫作用の如き過程、卽ちそれが意識せられる場合にも他の意識せられたるものとは、全く著しく區別せられねばならぬものをも含んでゐる。若

しも、これより後、此の雜多なる心理的活動を記載するに當つては、意識せられると無意識なるとはさて置いて、只管、その本能及び目的に對する關係、及びその構成要素、互ひに順序づけられて居る心理的系統に對する所屬に從つて分類し、關係付けしめる事にすれば、總ての誤解を避けることが出來るであらう。然しこの事は、多くの原因で行はれ難きことである。故に我々は兩義性、卽ち意識及び無意識なる言葉を、或る時は記載的 deskriptiv の意義に用ひ、或る時は系統的 systematisch の意義、(例へば、或る定まつた系に屬すること、及び一定の性質が與へられてゐることを意味する樣に用ふる)に用ふること、卽ち兩義性を避けることは出來ない。然し尙我々は、その問題とした、意識には無關係なる心理的系統を、一定の選んだ名稱を以つて現す事によつて、此の混亂を幾分でも避けようと試みることは出來るであらう。それがためには豫め、何に基いて系の類別をなすかを說明せねばならぬであらう。且つそのためには、意識が我々の研究の出發點であるから、徒らにこれを避けてもならないであらう。本書に於ては、意識を Bw 系なる附號で現し、無意識を同樣なる簡略語 Ubw 系で現し、共に系統的の意味に用ふることに定めたならば。恐らくは上記の注意に對して若干の助けとなり得るであらうと考へる。

精神分析學の結果として、我々は次の如きことを明かに言ふことが出來る。卽ち一般に心理的活動

は二つの狀態相を經來たるもので、而もこの二相の間には、一種の檢査（檢閲 Zensur）が存在するといふことである。第一の相に於ては、その心理的活動は意識せられず、故に Ubw 系に屬する。若しもこれが檢閲作用の檢査によつて拒絶せられると、第二相への移行は出來なくなる。卽ち「壓迫せられた」と稱せられる。そしてそのものは無意識のままに止まるのである。然し若し此の檢査に及第すると、それは第二相に步み入り、從つて第二の系、Bw 系なる略字で現さんと欲する第二の系に屬することとなる。然し意識に對する關係は、此の所屬の定まることによつて單純に定まるものではない。それはまだ意識せられぬ。唯意識化傾向を有する（ブロイエルの表現に從へば）ことになつたばかりである。卽ちそれは特別の抵抗なしに、今や一定の條件が定まれば意識の對象となり得るのである。斯かる意識化傾向を顧慮して、我々は Bw 系を前意識 Vorbewusst と呼んでもよい。然し前意識のものが、意識となるにはやはり、一定の檢閲によつて定められるのであるから、我々は Vbw 系と Bw 系とを亦嚴格に互ひに區別せしめねばならぬのである。斯くして先づ暫時次の如く確立するを以て滿足せねばならぬ。卽ち Vbw 系は Bw 系とその性質を共有するところあること、及び Ubw 系から Vbw 系（卽ち Bw 系）に移行するためには、その役所の嚴格なる檢閲を經ねばならぬことの二つの事柄である。

斯かる二つ又は三つの心理的系統を採用する事によつて、精神分析學は、從來の記載的意識心理學より一步を進んだ。そして新しい問題の提出と、一個の新しい内容とを齎した。精神分析學は、從來の心理學と、主として精神過程の力學的理解によつて區別せられる。加ふるに、それは心理的局所學Topikを顧慮し、且つその系内に於て、又はそれ等の系間に於て、特に好まるる精神的活動があることを示さうとするのである。此の努力のために、精神分析學は、**深部心理學** Tiefenpsychologie なる名稱をも享有してゐる。尙他の見地からの應用も亦豐富なる事は普く認められてゐる。

さて此の精神的活動の局所學は極めて重要な問題である。從つて我々は、此の問題より起こる疑問を考察せねばならぬ。一つの心理的活動(此處では表象の本性としての活動にのみ限つて言うて見よう)が、Ubw 系から Bw 系(又は Vbw 系)に變化したとするに、此の變化は、新しい固定であり、同時にその表象の第二の下書きが出來ることであり、而もこの固定は新しい心理的局在を所有することになる。そこでこの第二の下書きの外に、最初の意識せられなかつた下書きも依然として存在することを假定す可きであらうか。或は又此の變化は、一定の物質、一定の局所に於て行はれる狀態變化そのもののうちにのみ存すると考ふる可きであらうか。此の疑問は難解に見える。然し若しも我が、心理的局所學、卽ち心理的深部デイメンジョンについて、定まつた觀念を形成し得るならば、

それは忽ちにして打ち勝ち得るものである。このことは困難である。何故ならば、純粋に心理學的の立場より出て、精神裝置の解剖學に對する關係に迄及ばねばならぬからである。唯斯かる關係の存在してゐることは極く大まかな意味ではよく知つてゐる。例へば精神的活動は、大腦の機能と結合してゐて、決して他の器官には關係してゐないと言ふことは、動かすことの出來ぬ研究結果である。更に進んで——どの位進んでかは知られぬが——大腦の各部の同價ならざることも、即ち大腦各部が自體各部、又は各個の精神活動に一定の關係を有してゐることが發見せられた。然し斯かるものから始まつて、精神過程の局在を推定する總ての實驗や、表象を神經細胞內に貯蓄せられると考へることや、及び興奮は神經纖維によつて歩み出るとなす總ての研究等は、要するに根本的に失敗である。Bw 系即ち意識せられる精神活動の解剖學的局所は恐らくは大腦皮質 Hirnrinde にあり、意識せられざる過程は大腦皮質下 subkortikal にありとなす學說も亦同樣なる運命に陷らんとしてゐる。此處には、尙未だその方面で充たし得ざる、而もその解決は心理學に屬さざる一つの間隙がある。とに角我々の心理的局所と稱するは、斯かる解剖學には無關係である。それは精神裝置の部位即ち身體の內に存在する或る場所との意味はあるが、斯かる解剖學的の局在を意味してはゐないのである。

我々の業蹟は此の點には關係がなく、それ獨自の要求に從つて前進する。更に我々の假定は、最初

は唯解り易く概觀せんがために置かれたものであることを忘れてはならぬ。此處には二つの可能性があるが、そのうちで第一のものは、表象のBw相は、表象其物の存する處とは別の場所に存するその表象の下書きであると言ふ假定である。これは然し適切のものではあるが、疑ひもなく甚だ大雜把なものである。第二の假定は、卽ち唯單に機能的の狀態變化のみが卽ち系の變化であるとの假定であるが、寧ろこの假定の方が從來は確からしいとせられてゐたものである。第一のもの、卽ち局所的假定に從へば、Vbw系とBw系とには局所的の分離があると假定することで、一つの表象が、同時に心的裝置のうちの二つの場所に存在する可能性を意味してゐるものである。卽ち表象は、檢閱作用によつて制止せられぬ場合には規則的に一つの場所より他の場所に進み、時としては、最初の足跡卽ち下書きをも失はぬのである。此のことは甚だ珍しく見えるかも知れぬが、精神分析學的實際からの結果に基いてゐるのである。

例へば今一人の患者に、その時彼の所有してゐる壓迫せられた表象、卽ち分析者の推定し得たところの表象を話してやつたとするに、彼の心理的狀態に始めは何の變化も與へない。前には意識せられなかつた表象が、今や意識せられたのであるから、壓迫せられてゐると言ふ結果を破壞して了つて、

依つてその結果、壓迫現象を止めさせる事が出來るかと言ふに、決してさうではない。反對にこの表象はもう一度新しく拒絶されるのを見るのである。然し患者は、事實上同じ表象を二つの形で、彼の精神裝置の中に別々の場所に持つてゐることになる。卽ち第一に、今言ひ聞かせてやつた表象は、聽覺殘遺として、卽ち意識された記憶として所有し、第二にこれと同時に同じものを、從來の形、卽ち無意識の記憶として體驗のまゝに所有してゐるのであることが確かに知ることが出來る。實際の場合は、此のあとで意識せられた表象が、抵抗 Widerstand に打ち勝つてその意識せられざる記憶殘遺と結合するに至つて、始めて壓迫現象は消失するのである。後者を意識せしめてやると言ふことだけでこの結果を得る。故に表面的の考へ方からは、意識せられる表象と意識せられぬ表象とは異るもので、且つ局所的にも別であるが、而も同じ內容の下書きであるとせられるであらう。然し、後の判斷が示すやうに、言ひ聞かせてやつたものと、患者の壓迫せられた記憶との同一性は眞に見かけだけである。聽いたものと、體驗したものとは、假令同一內容を有するとも、心理學的本性より見れば、全く異る二つのものである。

故に我々は最初は、二つの上述の可能性の間に區別を與へることは不可能である。恐らくは、後に至つて、此の二つのもののうちの一つに決定せしめることが出來るかも知れぬ。或は又、我々の此處

に與へた疑問は十分ではないこと、及び意識せられざる表象と、意識せらるる表象との區別は、全く別に定む可きであることが發見出來るかも知れぬのである。

三　無意識の感情

前述の議論は表象についてのみに局限して置いた。然し今や新しい疑問を提出せねばならぬ。その解答は我々の理論的考察の闡明に對しても役立つであらう。既に意識せられざる表象と、意識せらる表象とが存することを述べた。然らば意識せられざる本能衝動、感情、感覺等も存在するであらうか。此等のものが意識せられずして互ひに結合することが有り得るであらうか。

意識界と無意識界との對立は、本能についてはは應用することが出來ぬと思はれる。一體本能なるものは、意識の對象ではない。唯單にそれを表現する表象があり得るばかりである。故にそれは無意識界に於ても亦表象によつて表現せらるるより外はないのである。若しも本能が一つの表象と結び付くことをなさず、又は感情狀態として現れて來ないならば我々はそれについて何も知らぬであらう。故に、無意識の本能衝動とか、又は壓迫せられた本能衝動とか我々が言ふ場合には、それは表現の粗漏である。本能衝動と言ふ言葉で、實は其の表象代表者が意識せられぬ場合を思つて居るに違ひないの

である。何故ならば表象でなくては何も觀察することは出來ないから。

意識せられぬ感覺、感情、感緒、等が有るかどうかとの問に對しても、同樣に容易に答を與へ得るであらう。唯感情の本性上、やはり意識に知覺せられて始めて知られると言ふ性質がある。故に感情や感覺や情緒等も、同樣に、本性上は無意識たる可能性は全く缺けてゐる。然し精神分析學的實際に於ては、常に意識せられざる戀愛、憎惡、憤怒等と言ふ。のみならず、全く目新しい結合、たとへば「意識せられざる罪惡感」とか、寧ろ逆說的な言ひ方「意識せられざる恐怖」等の言葉すら決して避けぬのである。此の如き言葉の用ひ方は、その意義に於ては、「意識せられざる本能」と言ふよりももつと甚しいであらうか。

實際の事情は、少しく別である。第一に生ずることは、感情衝動、情緒衝動等は認識せられるけれども違つたものとして認められるのである。感情衝動は先づその固有の代表者が壓迫せられる爲に、他の表象と結合して現れて來る必要がある。そして、意識に對しては此の後者の表現となつて現れて來るのである。故に正しい關係を言ひ現さんとするには、此の情緒衝動は起原的には「無意識である」と言はねばならぬ。假令その情緒衝動は決して無意識ではなかつたもので、唯壓迫せられたその表象だけが抹消せられた場合でも。卽ち「無意識の感情」又は「無意識の情緒」等と言ふ表現を用ふること

は、唯單に本能衝動の壓迫作用によつて殘された量的因子の運命を逆に示してゐるに過ぎないのである(壓迫現象の章參照)。我々は此の運命が凡そ三通りあることを知つてゐる。卽ち、情緒そのままのものとして――全部又は一部分――殘留するか、又は第二に他の性質の情緒量、その主なるものは恐怖であるが、それに變化するか、又は第三に抑壓されるか、卽ち全くその發育を妨げられるかの三通りである(此等の可能性は夢の研究によつて、神經症の研究によるよりも更によくわかる)。我々は更に此の情緒發育を抑壓する事が壓迫作用の本來の目的であること、故にその目的が遂げられねばその仕事は終る事が出來ないことをよく知つてゐる。何れにしても、壓迫によつて情緒發育の制止が遂げられた時に、我々は此の情緒を、卽ち壓迫作用の働きが取り消されれば再び生じ來るところの此の情緒を、意識せられざるものと稱するのである。言葉の用ひ方による影響は避け難い。然しこれを無意識の表象の場合と比較して見ると、著しい區別が見られる。卽ち無意識の表象は、壓迫作用を受けた後は、Ubw 系中に眞に形成せられるのであるが、無意識の情緒は唯同樣な場合に、發展することが出來なくなり、附加物としての可能性を持つてゐるばかりである。嚴格に言へば、言語の用ひ方は先づ非難せぬものとして、意識せられぬ表象と言ふが如き、意識せられぬ情緒なるものは存在せぬ。但し Ubw 系內に於ても情緒形成はあり得る。然しそれは他のものとして意識せられるのである。全く

區別す可き點は次の點である。表象は—記憶遺殘を根據として—充塡 Besetzung の過程であるけれども、情緒及び感情は排出 Abfuhr の過程、卽ちその最終表現は感覺として感ぜられる排出過程に相當する點である。我々の知識の現在の狀態に於ては、この區別を明瞭に表現することは不可能である。

本能衝動が情緒表現に變化せんとするのを制止することが壓迫作用によつて爲し遂げられるのを確めることは、特に我々にとつて興味がある。この事は、Bw 系が正常時、運動への進路をも、情緒性をも支配し、從つて壓迫作用の價値の高いことを示すのみならず、壓迫現象なるものは、ただ單に意識からの除外であるのみでなく、情緒發育からの除外、筋活動への動作化からの除外でもある事を示してゐる。逆に次の如きことも言ひ得る。卽ち Bw 系が情緒性をも運動性をも支配してゐる限りに於て、個人の心理的狀態が正常であると稱し得ると。然し支配する系の關係は、二つの互ひに類似する排出作用に對しては區別は認め難い。(註)

(註) 情緒性は本來、外界世界の意識なしに自己體內の內的壓迫からの、運動性(分泌性、血管調節性)排出として現れる。運動性は外界世界の壓迫に對しての活動として現れる。

Bw 系の意志的運動性に對する支配權は確實に基礎づけられてゐるもので、神經症になつてもまだそのままでゐるが、精神症になつて初めて破れるものであるに反し、Bw 系の情緒發育に對する支配

はそれほど確實に定まつてはゐない。正常生活の内に於ても Bw 系と Vbw 系との不變なる鬪爭はその情緒性をめぐつてよく認められ、互ひに一定の影響範圍を限界し居り、且つ作用力の混合をも生じてゐる。

Bw (Vbw) 系の、情緒離斷に對する、從つて行動への進路としての意義は、疾患形成の場合に代理表象の有する役目を、よく理解せしめる。情緒發育は直接 Ubw 系からも生じ得る可能性があるが、此の場合には常にそれは、恐怖 Angst の特性を有してゐる。この恐怖こそは、總ての壓迫せられた情緒が交易する所なのである。然しその衝動は、それが Bw 系内に代理表象を見出す迄待たねばならぬ。情緒發育は此の意識せられたる代理が生じてから初めて可能となり、且つ情緒の質的特性も、その表象の性質によつて定まつてくる。我々は、壓迫の際には、情緒とその表象とが分裂することが見られ、依つて各々それ等に特別な運命に面するものであることを主張することが出來る。然しこれは記載的には斷定的である。が、眞の過程は、情緒は、Bw 系に新しく生れかはるための破れ口が出來るまでは起り來らぬと言ふに在る。

四　壓迫現象の局所學及び力學

壓迫現象の本性は、Ubw 系と Vbw 系 (Bw 系) との境界で、表象に對して實行せられる過程なることは既に知り得た。今此の過程を更に突き入つて記載せんと試みなくてはならぬ。それは主として充塡の剝奪と言ふ事についてである。先づ此の剝奪は如何なる系で生ずるのであるか、又此の剝奪せられた充塡は何系に屬するかと言ふ問題である。

壓迫せられた表象は、活動能力を持つたまま、Ubw 系に殘留する。故に自分の充塡を保有してゐるわけである。然し、剝奪せられたならば何か少しく別のものとなつてゐなくてはならぬ。先づ本來の壓迫現象(後壓迫 Na hdrängen)の場合、卽ち前意識的のもの、又は既に意識的の表象となつてゐるものに關係してゐる場合を論じて見よう。此の場合には壓迫現象は Vbw 系に屬する(前)意識的充塡をその表象から剝奪する事である。然らば此の表象は全く充塡せられて居らぬ事になるか、或は却つて Ubw 系の充塡を有することになつたか、或は更に、既に前々から此の表象は Ubw 系の充塡を有してゐて、それを尙今も持ちつづけるかの何れかである。卽ち前意識的充塡の剝奪と無意識的充塡の保持であるか、或は前意識的充塡が無意識的充塡に依つて代られたかである。然し尙斯かる觀察は Ubw 系から、直ぐ隣りの系に現れるには、新しい下書きが生ずるのではなく、狀態變化、卽ち充塡の移轉によつて起ると言ふ假說を、知らず知らずの間にその根柢に橫はらしめてゐることに注意せ

ねばならぬ。即ち此處では、機能的假說が、局所的假說を容易に追ひ出すことが出來るわけである。
然しリビド剝奪（充塡剝奪）の過程を斯く考へる事は、壓迫現象の他の一つの特性をも理解せしめるためには十分ではない。即ちこの考へでは、Ubw 系から充塡せられてゐる表象は、何故にその充塡の力で Vbw 系内に入り込む試みをなすことが出來ぬのであるかがわからない。若しも出來るならば、リビド剝奪は自ら止め度なく繰返され、同じ遊戲が繼續して、結局その結果は壓迫現象とはならぬことになつて來るに違ひない。前意識的充塡の剝奪に關する右の如き機制は、それが原壓迫現象の發現に關する說明として、役に立たぬであらう。斯くの如き場合には Vbw 系からは何等の充塡も所有せぬ意識せられぬ表象が存在することになり、斯かるものからは剝奪するも亦出來ないことであらうではないか。
尙此處に他の過程、それは第一には壓迫現象を保持せしめ、第二にはその再發及び繼續を給してやる如き他の過程も無くてはならぬ。斯くの如きものは唯**反對充塡** Gegenbesetzung の假定に於てのみ見出すことが出來る。その假定によつて、Vbw 系は意識せられたる表象の壓迫し來る力から自分を支へ得るのである。Vbw 系内に行はれる斯くの如き反對充塡なるものが、如何にして現れ來るかは臨床的の例によつて見ることが出來る。それは原壓迫現象の繼續給費が現れる如き場合で、而もそ

の永續性が保證せらるる如き場合である。反對充塡は、原壓迫現象の唯一の機制で、而もその本來の壓迫現象の際には（卽ち後壓迫）Vbw 充塡の剝奪が伴うてゐるのである。その表象から剝奪せられた充塡が反對充塡に轉用せられることは正に可能な事である。

既に自然とその順序に來つてゐるが、我々は更に心理的現象の表現に於ける第三の見地を利用すべき時に來つた。卽ち力學的、及び局所學的見地の外に、經濟學的見地がある。これは興奮量の運命を追求し、少くともそのものの比較的の保護を得んと努めることを意味する。我々はそれを決して低く評價してはならぬ。精神分析學の完成のためにその觀察方法は、獨得の名稱で呼ばれねばならぬ 一つの心理的過程を、その力學的、局所學的及び經濟學的關係から記載するのを、余は超意識心理學的表現と名付けることを提言する。勿論、現在の考察程度ではそれは個々別々の例に於てしか見ることが出來ぬと言ふことは前もつて言はねばならぬ。

三つの有名なる轉授神經症 Uebertragungsneurose に於ける壓迫過程の超意識心理學的記載を與へようとする、甚だ小心翼々たる試みをなして見よう。我々は此の際「充塡」を「リビド」で書き換へねばならぬ。何故ならば既に知る如く、性的本能の運命を取り扱ふのであるから。

此の過程の第一の相は、恐怖性ヒステリー症に現れて來るが屢々見落される。恐らくは實際それは

早く經過して了ふがためであらう。然し注意深い觀察はよくそれを知る。何のためかわからずに不安が生じて來る。それは先づ戀愛衝動が Ubw 系に存在し、それが Vbw 系に移轉し行かんと欲した場合だと假定す可きである。そこで此の Vbw 系からは、その戀愛衝動から逃れんとする逃避の試みに對して充塡が始められて、此の衝動は退却して來る。そこでこの退却して來た表象の意識せられざるリビド充塡が不安として排出せられるのである。此の過程の永續的繰りかへしが行はれてゐる間に、その好ましからぬ不安發生の超克への第一步がとられる。逃避の充塡は代理形成の方へ向けられる。一方に於ては拒絕せられた表象と聯想的に關係し、而も他方に於てはそれより遠隔することによつて壓迫現象が剝奪され（卽ち移行代理）斯くて尙未だ制止し難い不安發生を合理化せんとするのである。この代理表象は今や Bw (Vbw) 系のために反對充塡の役目を果す。卽ち代理は壓迫せられた表象を Bw 系内に浮び上らしめる事をも確かとし、他方に於て制止し難い不安感情の脫離の出口ともなり又脫離そのものとして振舞ふ。臨床的の觀察は次の如きことを示す。例へば動物恐怖症に悩む子供は二つの條件の下に、不安を覺知する。第一は壓迫せられた戀愛衝動が增强せられた時、第二に恐怖動物が認められた時である。代理表象は或る例では Ubw 系から Bw 系への移行の場所として、又或る例では恐怖脫離の自然的原因として働いた。Bw 系支配の擴大は、この代理表象の第一の

場合の興奮が常に益々第二の場合へ歸して行くことを生ずるのに都合よきものである。恐らくは終りには、その子供が、恰もそれが何等父に對する恐怖でない如く、父からは全く無關係となり、而も眞にその動物に對する恐怖であるかの如く自ら振舞ふやうになる。唯此の動物恐怖は、意識せられざる本能根源から供給せられ、自ら禦し難くなり、Bw 系からの總ての影響に對して又餘りにも大となり、遂にそれが Ubw 系より由來したことを自ら裏切り示すやうになる。

Bw 系からの反對充塡は、恐怖性ヒステリー症の第二の相に於ても代理形成となる。前と同じ機制が一つの新しい應用を見出すのである。壓迫現象は、既に我々の知る如く、此の場合決して終止しないで却つて擴がりゆく不安發生を制止せんとする新しい目的を發見する。この事は、この代理表象の總聯想領域が、特別の强度を以つて充塡せられること、從つてそれは興奮に對して頗る大なる感受性を示すことでわかる。此の前部建築の何處からか生じた興奮は、代理表象との結合に依つて、僅かな恐怖發生でも起れば、これを更に恐怖發生が進みゆくことを、充塡からの新しい逃避によつて、制止するための警戒燈(信號)として利用する。感受性の高い、油斷なき反對充塡が此の恐れてゐる代理より、逃れてゐればゐるほど、その機制は益々精密に機能を現すこととなり、代理表象を隔離し、それによつて新しい興奮を防ぐことになる。斯くの如き配慮は、勿論、外界に代理表象を認めることに

よつて生じ來る興奮に對してのみ起り來るもので、決して壓迫せられた表象と結合して代理表象を形成してゐる本能の興奮に對しては起らない。本能の場合には、その代理が壓迫せられたものの入り來るのを受取つた場合に初めて、作用し始めるが、必ずしも常に作用するとは限らない。本能の興奮が生起する度毎に此の代理表象を圍む、保持壁は、僅かづつ移轉せしめられるに違ひない。これと同樣なる方式で、他の神經症の場合に現れる全構成は皆、恐怖症 Phobie の名で呼ばれてゐる。意識的の代理表象の充塡から逃避する現れは、逃避、絶滅、禁制等であるが、これ等は總て、恐怖性ヒステリー症でよく知られてゐる。過程全體を見渡す時、第三の相も第二の働きを、益〻繰返すのであると言ふことが出來る。Bw 系は、此の場合には、周圍の反對によつて、代理表象の賦活の出來ぬやうに自らを支持すること、恰も前には代理表象の充塡によつて、壓迫せられた表象の浮び出ぬやうに確かならしめた如くである。移行による代理形成は斯くの如き方法によつて繼續せられる。更に附け加ふ可きことがある。卽ち Bw 系は前には單に、壓迫せられた本能衝動の侵入門戶であつた、極く小さい場所を占有してゐたに過ぎぬが、然し、終りには、意識せられぬ影響地域の、全恐怖症建築物に相當する如き代理表象となつて了ふ事である。更に進んで、この働きつつある逃避機制によつて、外方に向つての本能危險の**投射** Projektion が生じ來ると言ふ興味ある見地を指摘することが出來る。卽

ち自我は、恰も恐怖發生の危險が、本能衝動からではなく、外界の危險を認識することから來るかの如くに振舞ふ。故に自我は斯かる外部からの危險に對して、恐怖症様の廻避による逃避の試みで反應せんとしてくる。故に斯かる場合にはこの壓迫現象の過程によつて、恐怖よりの脫離は、或る程度迄遂げられるが、然し、唯個人的自由を犧牲にすることによつてのみ達せられるのである。本能要求よりの逃避の試みは、一般としては無效である。そして恐怖症性の逃避の結果は、尙不滿足に止まるのである。

上記の如く、恐怖性ヒステリー症に於て見たところの諸關係は、他の二つの神經症の場合とも共通してゐる。故に唯その區別を叙べ、且つ反對充塡の役目に限つて述べよう。轉換性ヒステリー症の場合にあつては、壓迫せられた表象の本能充塡は、症狀の神經支配となつて現れてくる。然らば如何にして、且つ如何なる狀況の下に、意識せられぬ表象が、神經支配への排出によつて出るに至つたか、而もそれによつて Bw 系に對してのその迫力を止め得るのであるか。斯くの如き、類似の疑問は、ヒステリー症の各論的研究に讓る可きであらう。Bw 系 (Vbw) から出て來た、反對充塡の役目は、轉換性ヒステリー症の場合には明瞭であつて、それは症狀形成として現れて來る。反對充塡は、本能代表者のどの部分に、全充塡を集中す可きかの選擇にのみある。此の症狀にと選ばれ出でた部分は、

本能衝動の願望目的に對して Bw 系の防禦努力、又は懲罰努力と同じ表現を與へることとなる。斯くて恐怖性ヒステリー症の代理表象の如く、過充塡せられ、且つ兩側から保持せられるのである。斯かる關係から、言ふまでもなく、Bw 系の壓迫給費は、症狀の充塡エネルギーの如く大なるを要しないとの結論が出て來る。何故ならば壓迫現象の强度は給費せられた反對充塡によつて測定せられるのに、症狀は、唯單に反對充塡によつてのみならず、そのうちに濃縮せられ居る Ubw 系からの本能充塡によつても支持せられてゐるのであるから。

强迫神經症に對しては、前章に述べた注意を再び附加すればよい。卽ち Bw 系の反對充塡は、此處では、最も意義深く最前景に出てゐると言ふことである。それは反動形成として組成せられ、最初の壓迫作用を養ひ、又後に壓迫せられたる表象の發出をも結果する。故に次の如き臆測を與へる餘地は十分にある。卽ち恐怖性ヒステリー症及び、强迫神經症の際の壓迫現象の働きが、轉換性ヒステリー症の場合のものよりははるかに不成功に見えるのは一に反對充塡の優越なる事と、排出の缺乏とに依るのであると。

五　Ubw 系の特別なる諸性質

二つの心理的系統を區別することの意義は、その一つの系、例へば Ubw 系の過程は、これに隣るより高い系、卽ち Vbw 系には見出すことの出來ぬ性質を示すと言ふ事を注意するに於て、更に一の新しい意義を有し來るのである。

Ubw 系の核心は、その充塡を排出せんと努力する本能代表者と、願望衝動との二つから成り立つてゐる。此等の二つの本能衝動間は互ひによく協調し、互ひに影響し合ふことなく又は互ひに妨害し合ふことなく成立してゐる。若しも、その各〻の目的が一致し難く見ゆるやうな、二つの願望衝動が、同時に賦活せられる場合でも、此の二つの衝動は互ひに牽引し合ふこともなく、互ひに止め合ふこともない。彼等は、その中間の一つの目的の形成に、卽ち妥協 Kompromiss の形成に協力するのである。

此の同じ系の內では、否定も、疑ひも、亦確實さの程度等のこともないのである。此等のものは Ubw 系と Vbw の間の檢閱作用によつて初めて生じ來る。否定は、高い程度の壓迫作用の代理である。Ubw 系では唯、多く、或は少く充塡を受けた內容が存在するに過ぎない。

充塡の强度には甚しい動搖がある。**移行**のプロセスによつて、一つの表象は、その充塡の全額を、他の表象へと與へることが出來る。又**濃縮** Verdichtung のプロセスによつて他の諸種のものの全充

塡を自己に取り入れることも出來る。余は此の二つのプロセスを所謂心理的第一次過程の印であると見做すことを提言し度いと思ふ。Vbw 系に於ては、第二次過程(註)が支配してゐる。卽ち斯くの如き第一次過程が Vbw 系の各要素に於て出現する時には「滑稽」komisch となつて見え、且つ笑ひを起さしめる。

(註) 全集第三卷、夢判斷第七章の前書きを參照せよ。それは、ジエ・ブロイエルの「ヒステリー研究」から出てゐる思想を支持してゐる。

Ubw 系の過程には時間がない。言ひ換へれば、それは時間的に排列せられてゐない。故に經過する時間によつて變化を受けない。とに角、時間とは何等の關係をも有さない。これに反して Bw 系の働きは必ず時間を結合してゐる。

同様に Ubw 系の過程は實在性 Realität に何等の顧慮を持たない。Ubw 系は快の原理に從ふ。その運命は、それが如何なる强度を有するかに關係してゐる。又それが快不快の調節の要求を充たすや否やに關係してゐる。

これを要するに、互ひに排斥なきこと、第一次過程(充塡の動搖性)なる事、時間なき事、外的實在性の代りに心理的なるものとなつて存在する事、等が、Ubw 系に屬する過程に附屬すると考へら

れる特性である。(註)

(註) Ubw 系の他の有意義なる特性の叙述は、他の關係を述べる時迄、觸れない。

意識せられざる過程は、我々にとつては唯夢の條件、又は神經症の條件のうちに於て認められるばかりである。更に高い系 Vbw 系の過程は、退行現象によつて、前の階段にまで復歸することが出來る。Ubw 系は唯それ自身では、認められることも出來ぬし、且つ存在することも出來ない。何故ならば Ubw 系は、意識への進路、運動への進路が斷たれた Vbw 系から、早期に移されて來たものであるから。Ubw 系の排出は、情緒發育となつて身體神經支配へと行くが、然し此の放出道も Vbw 系によつて爭ひ奪はれるのである。唯それ自身としては Ubw 系は、正常な狀態の下では、何等の合目的の筋活動をも生じない。但し反射として既に組成せられてゐるものは除外である。

Ubw 系の上記の如き特性の眞の意義は、若しも我々が、それに Vbw 系の特性を對立せしめ、それによつて計量して見ると、はじめてよくわかるであらう。この事が少しく猶豫を置いてから後に、より高い系の批評に基いて再び此の二つの系の比較を、試みんとする所以である。唯最も緊要なるもののみを今叙述して置かう。

Vbw 系の過程は――既に意識せられ又は直ちに意識せられんとしてゐると言うても何れも同じこ

とである――充塡せられたる表象からの排出傾向を制止するやうに働く。今一つの表象から他の表象に移るとするに、第一のものは、その充塡の一部を倘固持し、ほんの一部のみが移動を受けるのである。第一次過程に於ける様な移行及び濃縮は全くなく、または甚しく限定せられてゐる。此の如き狀態は、ジエ・ブロイエルが初め言ひ出し、精神生活に、充塡エネルギーの二つの異つた狀態を假定せんとしたもので、一つは緊張束縛せられたもので、他は自由に可動するもので、共に排出をなさんとしてゐるのである。余は此の區別は、今日に至るも倘、神經症的エネルギーの本態への我々の深い洞察を現してゐるものであると信ずる。然し余は、必ずしもこの考へによらねばならぬとは思はぬ。此の部分で、倘討論を續けるのは、超意識心理學的表現の必要なる要求――恐らくは然し冒險的の試みではあらうが、――なのである。

Vbw 系には、先づ、表象內容の間に交通の可能性が存すると云ふことがある。故にそれ等は互ひに影響することが出來る。卽ち表象內容の時間的排列や、一つ又は數多の檢閱作用の導入や、實在性の檢査や、實在原理等の互ひの影響がある。又意識せられてゐる記憶も Vbw 系に屬するもののやうに見えるが、これは嚴格に Ubw 系のうちにある記憶遺殘と區別せられねばならぬ。この記憶遺殘なるものは、意識せられたる表象の、意識せられざる表象に對する關係に對して假定せんとして曾つ

て放棄し去つたけれども、既に述べたことのある特別の下書きに相當するものを意味する。斯く關係づけて初めて、より高き系を、或る時は Vbw と呼び、或る時は Bw と呼んだ名付け方の樣々なる動搖に終りをつけしむる手段を見出し得るであらう。

我々が此處に、二つの系へ、精神活動を分配することについて、闡明せしめんとしたものを、餘りに急いで一般化せんことは警告す可きである。我々は此の關係を恰も人間の大人に譬ふ可きものと考へる。成人にとつては Ubw 系は、唯より高い編成の前階段としてのみ機能を有してゐることが確かである。如何なる內容及び如何なる關係を、此の系が個人の發育期に於て有するか、及び動物にあつては如何なる意義が與へられる可きか等のことは、我々の記載からは尋ねることが出來ぬであらう。此等のことは別に研究をせられねばならぬ。我々は人間の場合に於て次の如く總括するのである。卽ち何か病的條件下で、此の二つの系が內容をも特性をも變化し、或は互ひに交換する條件を發見すれば、このことはわかるのであると。

六　兩系の交通

Vbw 系に於て、全心理的の働きがなされてゐる時、Ubw 系は靜止してゐると思ふのは正しくない

であらう。又、Ubw 系は、もはや癈用となつてゐるもの、即ち發生上の痕跡器官、言はば發生上に於ける殘骸物であると考へるのも正しくない。或は此の二系の交通は壓迫現象の活動にのみ限定せられてゐる、即ち Vbw 系は、彼に障碍として見える總てのものを Ubw 系の深淵のうちに投げ込んでしまふと假定するのも正しくはないであらう。Ubw 系は、却つて、生存し、發育してゐるのである。且つ Ubw 系と多くの關係、中でも互ひに協力の關係を有してゐる。依つて總括的に言へば、Ubw 系は所謂その誘導體となつて Vbw 系に連續して行くし、生命の影響は受けるし、又常に Vbw 系へと影響を與へるし、且つ自分の方について言へば、やはり Vbw 系の方からの影響をも受けるのであると言ふことが出來る。

Ubw 系の誘導體なるものの研究は、模型的に二つの心理的系統の劃然たる區別をつけることの期待に對しては、根本的の幻滅を與へるかも知れぬ。それは恐らく、我々の得てゐる結果では、不滿足を感じさせるに違ひないし、しかのみならず恐らくは、心理的過程を我々のなした如く分離することの價値を疑はしめるやうな事になるかも知れない。然し我々は觀察によつて得たる結果を、學說にまとめようとすることより外の問題を持つてゐるのではなく、且つ最初の努力は、わかり易く、而も單純であることによつて用ふるに足る學說に到達せんとするにあることを豫め考へねばならぬ。觀察が

それを必要とするならば複合說でも許さねばならぬ。それにしても事態の關係についての終局的の知見はそれ自身としては單純なのであらうが、唯實在の姿では複合說として見られねばならぬであらうとの期待を捨てぬが宜い。

Ubw 系の既に述べた如き特性を有する本能衝動の誘導體の中には、全く反對してゐる職分が、共に含まれてゐるが如きものがある。卽ち一方に於ては、頗る組織化せられて居り、異論なく Bw 系よりの總ての利得を利用し、我々の判斷に對しては Bw 系の形成と何等區別が出來ない。然るに他方では、それは意識せられず且つ又意識せられる可能性すらない。卽ちそれは性質的には Vbw 系に屬し、實際上には Ubw 系に屬してゐる。その出生地が、その運命に對して決定的となつてゐる。恰もそれは人種の間の混血兒に比較することが出來る。大部分は白人であるが、然し有色人の血統が一部に偶然に現れてゐるがために、社交界から排斥せられ、白人としての權利を頒たれる事が出來ないものに等しい。斯かるものは、例へば健常人及び神經症者の空想形成 Phantasiebildung の如きものである。卽ちそれは我々が、夢の形成、或は症狀形成の前階段であると心得てゐるものであるが、それはその高次の編成にも拘らず、壓迫せられ、從つてそれ自身としては無意識である。これは意識の極く近くには來る。然し、强い充塡を與へられぬ限り、それには觸れずに止んで了ふ。而も或る高さの

充塡を超えるや否や押しかへされて了ふ。代理形成なるものは斯くの如き Ubw 系の高度に編成せられた誘導體に屬するのである。然し此の代理形成は、例へば Ubw 系の反對充塡が丁度これにぶつかつたやうな都合のよい關係をもつて來ると、意識へと出ることが出來るものである。

意識の生成の條件を、他の方面から更に深く研究するならば、此處に示した困難の一部分は解決することが出來るであらう。それは、これ迄 Ubw 系の方から見てゐた觀察を、今度は意識の方から反對に立てて見ることがよいのである。意識に對しては、心理的過程の全總體が、前意識の領土として對立する。此等の前意識の、一大部分は、無意識から出てゐるもので、その誘導體としての特性を有してゐ、且つそれが意識せられる前に、必ず檢閲を經るのである。然し Vbw 系の他の一部は、檢閲を經ることなくして意識となり得るのである。此處で我々は、前に假定したところとは矛盾するものに遭遇した。壓迫現象の觀察に當つて、我々は意識となるためには Ubw 系と Vbw 系との間に決定的の檢閲ありとしたのであつた。然るに今は、Vbw 系と Bw 系との間にも、一つの檢閲を考へるのである。然しこの複雜のうちにも何等困難はない。唯、一つの系から、次のより高い系への移行の際には、卽ち心理的編成のより高い階段への各一進歩每に、新しい檢閲が存在すると假定すればよいのである、下書きが常に益々新しく書き換へられるとの假定は、これによつて全く除かれたのであ

る。

總ての困難の源は卽ち、我々に直接に與へられる心理的過程の唯一つの特性、卽ち意識には、系の區別をなす事が全く出來ないと言ふ事に存するのである。意識せらるるものは必ず常に意識せられてゐるのではなく、時々は潛在の狀態であることから離れて考へれば、此の觀察は卽ち Vbw 系の特性を有するもの總ては、意識せられるのではないこと、又意識の生成は、その注意の集中する一定の方向にのみ局限せられると言ふことを示してゐるであらう。意識は此等の系に對しても亦壓迫現象に對しても、極く單純な關係を有するのみである。眞理は、唯單に心理的の壓迫せられたものが意識に對して全く他人であるばかりではなく、我々の自我が支配してゐる衝動の一部も、又、強く機能を現してゐる壓迫せられたるものに對する反對者も、共にさうであると言ふ點にある。我々が超意識心理學的に、精神生活の觀察を進めてゆく限りに於ては、我々は「意識せらるること」の意義にのみ固執せず、これより解放さるることを學ばねばならぬのである。

此の事に固執してゐる間は、我々の一般化は、必ず除外例によつて破られねばならぬことになる。我々は Vbw 系の誘導體が代理形成として、或は症狀として意識せられることを見た。多くは、意識せられざる時に比しては大きい變造を受けて現れるけれども、時としては壓迫現象に迄强ひられた時

の特性を尚多く所有しながら現れる。我々は、すべての前意識的の形成は、その本性上必ず意識せられねばならぬと考へられるに拘らず、意識せられぬことがあるのを見出す。恐らくは此の如き場合は、Ubw 系の甚だ強い引力が働いてゐるのであらう。依つて、意識と前意識との間には、特に意義ある差異は有しないが、前意識と無意識との間には大いなる差異あることを示すことが出來る。Ubw 系は Vbw 系との境界に於て、檢閲作用に依つて拒絶せられる。然しその Ubw 系の誘導體は、此の檢閲を通ることが出來て、高次に編成せられ、Vbw 系内に於て、一定の強度の充塡を受ける迄に生長する。然し、此の時、更に此の系を超えて行つて、自ら意識に迫る場合には Ubw の誘導體たることを知られて、Vbw 系と Bw 系との間の新しい檢閲境界に於て、新しく壓迫せられる。卽ち第一の檢閲作用は系に對して作用し、第二の檢閲は Ubw 系の Vbw 系的誘導體に對して作用するのである。此の檢閲作用なるものは、個體の發育の間に於て、少しづつ前進せしめられることは考へ得るのである。

精神分析療法に於て、我々は、此の Vbw 系と Bw 系との間に存する第二の檢閲作用の存在に對する、否定することの出來ぬ證明を見ることが出來る。我々は患者をして、十分に Ubw 系の誘導體を形成せしめ、且つ此の前意識的形成の意識せられることに對する、檢閲作用の抗議に打ち勝つ

やうにせしむることが出來る。そして此の檢閲作用を克服することに依つて第一の檢閲の仕事であつたところの壓迫作用を終らして了ふやうな道を拓くことが十分出來るのである。尙 Vbw 系と Bw 系との間の檢閲の存在は、意識せらるることが、單なる認識活動ではなくつて、恐らくは過充塡 Ueberbesetzung 卽ち心理的編成の更に一步の前進であると考ふ可き點が存することを思はしめると附け加へて置かねばならぬ。

さて新しい事を確立するためではなく、最も著しいものを看過しないために Ubw 系の他系との交通について考へて見よう。本能活動の根基に於ては、諸系は互ひに最も豐富に交通を行つてゐる。此處で興奮した過程の一部は、Ubw 系を通して、恰も一の準備段階を通つてゆくが如く通過し、Bw 系內で最高次の心理的形成に達するのである。他の一部は然し Ubw 系として抑留せられる。然し、Ubw 系と雖も外界からの認識から生ずる經驗には十分遭遇する。言ひ換へれば認識から Ubw 系に入る總ての道は、正常時には自由に存在する。唯 Ubw 系から出て來る方の道は、壓迫現象によつて遮斷を蒙るのである。

一人の人の Ubw 系が、Bw 系を迂廻して他人の Ubw 系に反應することが出來ると言ふことは注目に値する處である。此の事實は更に立ち入つた研究、特に前意識的の活動がその場合除外せしめ

られるや否やの方向についての研究に價する。然し記載としては論爭の餘地なきものである。

Vbw（又は Bw系）の內容は、一部は本能生活から（Ubw 系の仲介によつて）來てゐる。他部は外界の認識から來てゐる。此の系の過程が、如何なる程度に Ubw 系に直接の影響を現し得るかと言ふことは疑はしい。病的事例の研究は、屢〻 Ubw 系の殆ど信ず可からざる自律性と無影響性とを示してゐる。この二系の努力の完全なる分離、此の二系の絕對的の分裂が、病態の一般的の特性である。唯精神分析療法が獨り、Bw 系から Ubw 系への影響を形作ることが出來る。そして斯くの如きは、骨は折れるが不可能ではないと言ふ事を示すことが出來る。此の二系の間を仲介する Ubw 系の誘導體は、旣に述べた如く、此の遂行のための道を拓くのである。然し、Bw 系の側から Ubw 系へと自然に生じ來る變化は、殆ど困難なる、而もゆつくりとした經過である事は假定せねばならぬ。

前意識と、無意識との間の協力は、自ら強く壓迫せられた衝動を生じ易い。特に意識せられざる衝動が、支配的の努力と同じ意味に作用するやうな情況が生ずる場合にはさうなる。壓迫現象は斯くの如き場合には全く廢止せられ、壓迫的の活動力は自我より生じ來つたものへの增强力として適用せられる。無意識は、此の者のために、一つの位置を自らとる。然らざればその壓迫作用には何か變化が

現れるであらうが、その事がないやうにする。此の協力の際に Ubw 系に現れる結果はわからない。そして增强せられた努力は、正常の努力とは別のものとして現れ來り、特別に完全なる働きをなすことが出來るやうになり、遂に反抗に反對して、恰も强迫性症狀の場合の如き、同じやうな抵抗をこれに反するものに對して示すに至るのである。

Ubw 系の內容は、心理的の原人にも比較す可きものである。人類には、動物の自然本能と同樣なる何か心理的形像が遺傳的に傳へられてゐるに違ひない。Ubw 系の核となるものはその樣なものである。後にそれに加へて、幼年期の發育の間に用ひられずにあつた除外物とせられたゐたものが附加せられる。それはその本性上、遺傳せられ來つたものと何等區別するを要せぬ如きものである。此の二つの系の、判然たる、而も終局的の內容の區別は一般的には、思春期の時期を劃して形成せられるのである。

七　無意識の承認

既に述べた所を總括するならば、Ubw 系についても少しく說明することが出來ることとなる。主として夢の生活、及び轉授神經症についての知見から得て來たもので、それは確かに多くはない。而

も所々今尚闡明せられぬところ、混亂してゐる所があるとの印象を與へるし、Ubw 系を旣に知られてゐる關係に順序づけ、又はその關係のうちに挿入し得るとの可能性をも見失はしめるやうなものである。然し、我々が自己愛性精神神經症と呼んでゐる病氣の一つを分析するに於て初めて、此の謎に滿ちたる Ubw 系に我々を近づかしめ、且つ同時に理解し易からしむる知見を得るであらう。

アブラハム（一九〇八年）の業蹟、卽ちこの誠實なる著者が、余の激勵に依ると自ら言うてゐるあの業蹟以來、我々はクレペリンの所謂早發性痴呆症 Dementia praecox （ブロイレルの所謂精神分離症 Schizophrenie）なる疾患は、自我と對象との乖離が、その病相の特徵であると解釋して居る。轉授神經症（恐怖性ヒステリー症及び轉換性ヒステリー症並に强迫神經症）では、斯くの如き乖離は現れて居らぬ。尙我々は、神經症の初めには對象の拒絕が入り來ること、及び神經症は現實對象の放棄を含み居ること、及び現實對象から引き出されたリビドを、想像に依つて作られた對象に歸し、これより壓迫せられたるものに歸すること（卽ち**內轉** Introversion）を知つてゐる。然し一般に對象充塡は、それ等の場合に於て大なるエネルギーを所有してゐる。そして、壓迫過程を更に進んで硏究することに依つて、Ubw 系に於ける對象充塡は、その壓迫作用にも拘らず——恐らくはその壓迫作用のために——存續すると言ふ事を假定するの必要を認めねばならぬ。轉授せられる可能性、卽ち我々

が此の病氣に當つて治療的に利用する方法は、亂されざる對象充塡を前提とするのである。

精神分離症にあつては、これに反して次の如き假定を餘義なくせしめる。卽ち壓迫のプロセスの後に、此の引き出されたるリビドは、何等新しい對象を求めない。却つて自我のうちに復歸し、此處で對象充塡は全くなくなり、極く原始的なる對象なき自己愛の狀態に再び持ち來たされてすまふのである。此等の患者が轉授をなすことの出來ないことは——病氣の經過が其處に到達するや否や——これに由來する治療的方法の皆無となること、この病氣に固有なる外界の拒絕、自身の自我の過充塡の徵候の現れること、完全なる感覺脫失への經過、總て此等の臨床的特性が、對象充塡の廢止と言ふ一つの假定によつて解かるるやうに見えるのである。二つの心理的系統の關係の側から見ると、總ての觀察者に、精神分離症の場合に意識してゐると表明せられてゐる多くのものは、轉授性神經症の場合に精神分析によつて Ubw 系內にある事を示し得るものと同じものであることが知られるであらう。然し、自我對對象の關係と意識關係との間に理解し得る結合を打ち立てることはまだ出來てゐないのである。

求むるものは却つて次の如き思ひもかけぬ方法から得られるやうに見えた。精神分離症者に於ては病氣の初期が甚だ敎訓的で、言語の變化が幾つか現れて來る。それについては或る見地から觀察する

と、その表現方法が、特に注意の對象となる。それは「上品振つた言ひ方」gewählt 又は「態とらしき言ひ方」geziert をする。又、語られた文章は、その構成に特別なる編成違ひがあるので、我々に理解し難い。故に我々は、患者の言葉は、意味のないものであると取り易い。然し此の言ひ現しの內容は屢々身體器官又は身體神經支配に對する關係が表現せられてゐることがある。此の事に對して注意を要する。卽ち精神分離症者の斯くの如き症狀は、ヒステリー症及び强迫性神經症の場合の代理形成に譬ふ可きものであるが、代理物と、壓迫せられたるものとの間の關係は、これ等二つの神經症にはない様な特質を持つてゐるのである。

ウイーンのタウスク博士が、精神分離症の初期の觀察を余に示した。それは、その患者自身が、自分の述べた言葉に註釋を與へることが出來ると言ふ特徴のある例であつた。余は此處に、その例のうちから二つを述べて、余が如何なる解釋を與へんと欲するかを示して見よう。余のみならず、恐らく誰でも觀察者には容易に、斯くの如き材料を澤山持つてゐるであらうと言ふ事には疑ひがない位である。

タウスクの患者の一人は少女であつて、その愛人との間に不和があつた後診療を乞うて來たのである。訴へるところは自分の眼が正視でなくなつて了つたこと、卽ち斜視となつた事である。これに就

ては彼女自身、順序立つた言葉で、自分の愛人に對して非難の數々を述べた。「私は彼を少しも理解することが出來ません。彼は時々別人に見えるのです。恐らく僞善者であります。Augenverdreher（譯者註　これも僞善者の意味）です。彼はその眼を捩ぢ向けて自分の惡意を隱します。それで今は私も捩ぢれた眼となつて了ひました。これはもう私の眼ではありません。私は他人の眼で世界を見てゐるのです」と。

此の患者は別に、理解し難い話をするが、それも分析の値がある。何故ならば彼女は、一般に理解せられる表現を以つて、その理解し難い話の同義語を語つてゐるのであるから。同時に彼女は精神分離症者の言語形成の起原や意義に關する啓示を提出してゐるのである。タウスクと同意見であるが、余は此の例から、器官（卽ち眼）に對する關係がその言語の全內容を提擧せしめてゐることを特に注意し度いのである。精神分離症者の話す話は、此處では心氣的（ヒポコンデリー的）の特徵を持つてゐる。卽ち器官言語 Organsprache である。

同じ患者の第二の物語は次の如きものであつた。「彼女は敎會の內部に立つてゐたところが忽ち痙攣が起つて來た。だから彼女は何か他人の振りをしなくてはならぬ。彼女が誰か或る人の振りをしたとすれば、それはさせられたのである」と。

分析によつて、これはその愛人に對する、更に新しい非難である事がわかる。卽ち「普通の人間である彼は、元來美しかつた彼女をも普通の人にしてしまつた。彼は彼女よりも優れてゐると、彼女に信用せしめて、彼女を自分と同じものにしてしまつたのである。彼女は彼と同じものになれば、より良くなると信じたために、今や彼と同じになつてしまつた。彼は自分で變裝した。故に今や彼女も彼と同じであるから（同一視 Identifizierung）卽ち彼は彼女をも變裝せしめたのである」と。「他の人の振りをせねばならぬ」と言ふ運動行爲は「變裝する」と言ふ言葉の代理表現である、と同時に、愛人との同一視の表現である、とタウスクは注意して居る。余は更に、此の全思考過程のうちで、身體的の神經支配（恐らくはその感覺を）內容として有する要素が澤山あることを指し示し度いと思ふ。何れもヒステリー症狀を有する、卽ち第一の例にあつては、痙攣的にその眼を捻ぢ向けるのであつたし、第二の例では實際に痙攣が現れたのである。さうなさうとの衝動のみではなく、又さうなつたとの感覺を感知するのみではなく、實際に斯くなるのである。この何れの例に於ても、その際何等の意識的の思考を有さぬ、のみならず、後に至つて、同じものを表現しようとしても、それは決して出來ないのである。

此等二つの觀察は、我々がヒポコンデリー的と呼ぶもの又は器官語と名付けるところのものに對す

る證明である。更にこれ等の例は、我々に一層重要と考へられるものを、他の事物關係に於て示すのである。即ち任意に證明せられるやうな關係、例へばブロイエルの論文の中に集められた例に於ても證明せられ、從つて一定の公式に纒めることが出來るやうな關係である。精神分離症者にあつては、言葉は恰も潛在する夢の思考から、夢の形象が形作られるのと同樣なプロセスによつて發せられる。即ちそれは我々が心理的第一次過程と呼んでゐるものである。それは濃縮せられ、止みなき移動によつて互ひにその充塡を轉授し合ふのである。そのプロセスは、多くの關係を通してそれに適應するやうな唯一つの言葉が、全思考連鎖の提出を擔任する程に迄至ることが出來るのである。ブロイエル、ユング、及びその學派の業蹟は、此の斷定に對して豐富なる材料を提供してゐるのである。（註）

（註）夢の働きのうちでは、恰も言語を事物の如くに取り扱つてゐる場合がある。故に夢の中で甚だ精神分離症に相似たる話又は言語の新製をなすことがある。

斯くの如き印象より、直ちに結論を導かんとするよりも、更に、精神分離症の代理形成と、ヒステリー症や强迫神經症の代理形成との間の、精細なる、叉珍しく作用してゐる區別を見て見よう。現在余が觀察してゐる或る患者は、彼の顏の皮膚が惡い狀態であることによつて、人生の總ての興味を奪ひ去られたとなしてゐる。彼は面皰を有してゐ、且つ誰でもそれを見て笑ふ程な深い孔が顏に在ると

主張してゐる。分析の結果、彼は去勢複合を自分の皮膚に移したことがわかつた。彼は初めに、自分の面皰を飽かず弄した。何故ならば面皰から何か射出する時に、その表現が、彼には甚だ滿足を與へたのであると彼は言ふのである。其の後彼は、至る處、彼がその病皮をとつた後には深い窪みが出來たと信じ始めた。そして彼は、彼の「絶えず手で弄すること」が、彼の皮膚を常に惡くすると云うて、自ら激しい非難を浴せるに至つた。此の場合面皰の內容物をつぶし出すことは、自慰に對する代理物であることは明かである。彼の罪によつて生じた窪みは、女性の性器であつて、自慰に依つて激發せられたる去勢脅威の(卽ち去勢を代表する想像の)充足を意味するのである。斯くの如き代理形成は、その特性がヒポコンデリ的であるに拘らず、ヒステリー的の轉換と甚しい類似を有する。然し、此處に何か、ヒステリー的の代理形成にのみ歸せられぬものが先行してゐるのではないかと言ふ感じは在る。卽ち此の複雜性は、何處から來てゐるのであるかと言ふことを考へないでも、その感じがある。毛孔の如き極く小さい窪みは、ヒステリー症者では陰門の象徵としては取らない。その他のものならば、とも角も孔の格好をしたものでさへあれば總ての可能なる對象を比較に用ひるのであるが。此の窪みの數多く有することが、女性性器に對する代理物として用ふることが出來ない點であらう。同樣なことが、曾つてタウスクがウイーンの精神分析學會に報告した或る若い患者にもあつた。彼は

その他の點では恰度强迫神經症者と同樣であるが、唯身づまひや、及びこれに類似の行爲に數時間を費すと言ふのであつた。而も何等抵抗もなく彼に生じたこの制止現象の意義を話すことが出來る點に著しい所があつた。靴下を履く時に次の如き觀念が彼を擾す。例へば彼はこの靴下の編目即ち小孔を引き緊めねばならぬこと及びその各〻の孔は彼にとつては女性性器の開口の象徵であるとの觀念である。此の如きは、强迫神經症には歸し得ざるところである。同樣な例が、ライトレルの觀察にもあつた。卽ち靴下を履く時に、同樣なる遲滯を惱むのであるが、此の抵抗の克服に依つて次の如き說明を得た例である。卽ち足は陰莖の象徵であり、足に靴下を履くことは自慰行爲である。故に彼は靴下を履いたり脫いだりして、一部には自慰の形象を滿足せしめ、一部には自慰を行はずして濟ますと言ふのである。

さて終りに、然らば精神分離症性の代理形成及びその珍しい特性に對する症狀としては何を擧げる可きであらうかとの問に對しては次の如く總括す可きである。卽ちそれは事物關係よりも言語關係が優勢であると言ふ事である。面皰と陰莖よりの射精との間には、正しい事物類似は僅かしかない。況んや無數の淺い皮膚の孔と陰門との間には更に類似は少いのである。然し第一の例では、兩方共に何かが射出せられるのであるが、第二の例では唯言葉の上に於て皮肉なる關係、卽ち孔は孔であると云

ふことが存するばかりである。これは擧げられたる事物の類似ではなくて、言葉で語る表現の相似であるが、これが代理を形成してゐる。此の二つ即ち言語と事物とが互ひに意義を同じうしない場合は斯くの如く精神分離症者の代理形成は、轉授性神經症者の場合とはかけ距てて來るのである。

斯かる洞察は、次の如き假定から來てゐる。即ち精神分離症の場合には、對象充塡は全く存在せぬのである。これを言ひ換へれば對象の言語表象に對する充塡だけは、却つて、確かに存してゐると言ふことになる。さて、斯くして我々は、意識せられたる對象表象と呼んでゐる所のものは、今や言語表象 Wortvorstellung と事物表象 Sachvorstellung との二つに分離せられるものであることがわかつた。この後者は直接の事物記憶像ではないけれども、その充塡からは、遠ざかつてゐる。且つその事物記憶像から來てゐる記憶痕跡として成立してゐるものである。曾つて我々は、意識せられたる表象と、意識せられざる表象とは何によつて區別せられるかを知つてゐると信じてゐた。然しこの兩者は、我々の思ひ居たる如く、異る心理的局所の異る内容の下書きではないのである。或は同一局所の異る機能的充塡狀態でもない。即ち意識せられたる表象は、事物表象に加ふるに、それに屬する言語表象を抱括してゐるのであるが、意識せられざる表象は、唯事物表象のみである。Ubw 系は對象の事物表象、即ち第一の而して固有の對象充塡を保有するのであるが、Vbw 系は、斯くの如き事物

表象がそれに相應する言語表象によつて過充塡せられてゐるのである。斯くの如き過充塡は、より高い心理的編成を齎すものであり、Vbw 系內に於て支配してゐる第二次過程によつて第一次過程の消失を來さしむるものであると假定することが出來るのである。今や我々は、轉授神經症の場合に復歸した表象に對して壓迫現象が拒絕したものを、精細に表現することが出來る。卽ち對象と結合して殘留せざる可からざる言語への飜譯である。依つて言語に捉へることの出來ない表象、又は決して過充塡せられぬ心理的活動は、斯かる時に尙 Ubw 系の內に壓迫せられたるものとして殘留するのである。

さて余は精神分離症の著しい特性の一つを理解せしむる此の洞察を、如何に早期に既に得てゐたかを明かにせねばならぬ。一九〇〇年に出版せられた「夢判斷」の最後の頁に次のことが書かれてある。思考過程卽ち認識より遠ざかつてゐる充塡はそれ自身では性質もなく意識せられる事もない。それが意識として現るると言ふその可能性は、唯單に言語認識の殘物と結合することに依つて達せられるのであると書いてある。言語表象と雖も事物表象と同樣に、それ自身では感性認識から出て來てゐる。故に何故に對象表象は、その自己の有する認識殘物によつて意識せられることが出來ぬであらうかと云ふ疑問を投げることが出來る。然し恐らくは、起原的の認識殘物は、その性質は、もはや全く失は

れて了つて、意識せられるためには、新しい性質によつて増强せられることが必要とするほど遠ざかつてゐるのであらうが、斯かる系統內に於ても、思考は生ずるのであらう。しかのみならず斯くの如き性質卽ちそれは唯對象表象と對象表象との間の關係としてあるに過ぎないために、認識自身からも何等の性質をも持ち來し得ないやうな充塡も、言語を結合してくると或る性質によつて充塡せられることとなる。斯かる、先づ言語によつて理解せられるやうになつた關係が、我々の思考過程の重要成分であることは正しいが、言語表象と結合することは卽ち意識となることではない。唯、外の系ではなく正に Vbw 系の可能性が與へられた事を意味してゐるのみである。さて我々は斯くの如き記述を止めて、本來の主題たる前意識及び意識の問題のうちに歸らねばならぬ。そして合目的の方法で、特別の取扱ひをなさねばならぬ。

此處で、Ubw 系の一般的知見には缺くことが出來ないために長く觸れ來つた精神分離症の場合に壓迫作用と名付けられた過程は、轉授神經症者の場合の壓迫現象と、一般的に同一のものであらうかどうかと言ふ疑問が浮んで來る。壓迫現象なるものは、Ubw 系と Vbw 系(又は Bw 系)との間の一過程で、意識からの遠隔作用を結果とするものであると言ふ公式は、各〻の場合によつて變化がなくてはならぬ。例へば早發性痴呆症や其他の自己愛的疾患に應用せしむることが出來るためには一

定の變化を要するのである。然し、自我の逃避の試み、卽ち意識せられてゐる充塡を奪取せんとする試みである事は何れの壓迫充現象にも、共通なるものとして存立してゐる。如何に多くの根本的な、且つ深い、此の如き逃避の試みがあるか、又如何に自己愛的神經症者に於ても自我の逃避が働いてゐるかと言ふ事は、最も表面的の判斷でもよくわかるところである。

精神分離症の場合の、斯くの如き逃避は意識せられぬ對象表象を代表してゐる本能充塡を、その場所から奪ひ取ることに在るとするならば、その同じ對象の Vbw 系に屬してゐる部分——卽ちそれに相當する言語表象——は恐らく、却つてより強い充塡を受けるであらうと言ふ事は、不思議に思はれるかも知れぬ。それよりも寧ろ、言語表象は前意識的の部分としては、壓迫作用の第一衝擊を堪へることが出來ること、及び壓迫現象が、無意識の事物表象に迄進んで行つた後でもなほ、少しも充塡を受けないことの方が、先づ豫期せられることである。此の事が、全く理解の困難となる。言語表象の充塡は、壓迫作用を受けないもので、却つて臨床的の精神分離症像を、著しく支配してゐる、恢復の試み或は治療の試みの第一歩を示すものであるとの報告がある。此の努力は、失はれたる對象を再び得んと欲し、尙此の如き意圖に於て對象への道を却つてその對象の言語部分の方へ向けかへて、依つて以つて事物の代りに言葉で滿足せんとするらしいのである。我々の精神的の活動は二つの全く對立

する經過の方向に動く。即ち本能より出でて Ubw 系を通つて意識せられる思考活動にゆくか、又は外界よりの刺戟によつて起つて Bw 系及び Vbw 系を通つて Ubw 系の自我及び對象充塡にゆくかするのである。此の第二の道は壓迫作用があるに拘らず通過するやうになつてゐるに違ひない。その對象を再び得んとする神經症の場合の努力は、少しく更にこれを開かしめるに違ひないのである。抽象的にのみ考へを進める事には、人は意識せられざる事物表象に對する言語の關係、即ち言語と事物との關係を等閑視する危險に陷るであらう。斯く考ふると我々が哲學を考へること Phylosophieren は精神分離症者の働く方法と、その表現に於てもその內容に於ても知らず知らずに類似があることは否定せられ可くもない。更に他面より、精神分離症者の思考方法について、その特性を求めて見ると、その特性は、具體的事物を、恰も抽象物の如く取扱ふのであると言ふことになる。

眞に我々が Ubw 系を承認し、且つ無意識的表象と、前意識的表象との區別を正しく定めたならば我々の研究は他の種々なる方面からも此の判斷に歸せしめ得るところ大であらう。

夢學に對する超意識心理學的補足

病的興奮狀態の典型とせられてゐる種々なる狀態又は現象を比較にとる方法が、如何に優れた方法を我々の研究に對して提供するかは、種々なる機緣に當つて經驗するところである。この病的情緒には悲哀 Trauer とか、戀情 Verliebtheit とかの如きものも屬するし、睡眠や夢の現象等もこれに屬するのである。

人間は每夜、その皮膚の上に着ける著物をはね除けて了ふ。しかのみならず、彼の身體器官の不足を補うてゐるもの、例へば眼鏡、つけひげ、義齒等の如きものをも總てかなぐり捨てて了ふものである。このことに考へを向ける人は今まで極く少かつたのであるが、更に次の如き事をも行ふ。即ち人間は愈々寢につく時には、脫衣をすると全く同樣に、その心理的の脫衣をも必ず行ひ、その心理的獲得物の殆ど大部分を捨て去り、身體的にも心理的にも、恰も彼の生命發育の出發、即ち誕生の時に極度に近づいた情況を作るものである。睡眠は、靜寂、溫暖、刺戟の除外、等の條件を充たすことで、體質的には母胎滯在への復歸反應と見做す可きである。多くの人は睡眠中、胎兒の時の體位を再びと

る。斯くの如くであるから、睡眠者の心理的狀態は、殆ど總ての周圍の世界からの引退、その周圍世界に對する總ての興味の沒却を特質としてゐるのである。（註）

（註）此の章と次章とは、前章につづいてゐるもので、初めは「超意識心理學への準備」と題して發表せんとした論集のうちに屬するものである。此等の章の意圖は精神分析學の體系の底に横はる、理論的假定の說明である、と共にそれを深めるものである。（譯者註、全集には「超意識心理學」全體の首に次の如き註が附してあり、此處にもそれを參照せよと附記せられてある。都合上此處に、つづいて譯出して置いた）。

（註）この「超意識心理學」と言ふ總括題名の下に、「超意識心理學への準備」と題して單行本として、發表せんと定めてあつた論集を編んだのである。（前註參照）。此等の論文は一九一三年—一九一七年に亙つて一つ一つ「國際精神分析學雜誌」に掲載したもので、卽ち、「精神分析學に於ける無意識の概念」はその雜誌の第一卷一九一三年に（この論文は最初英語で「心理研究會記要」第二十六卷六十六號に發表せられたものである）「本能及び本能の運命」「壓迫現象」「無意識」はその第三卷一九一五年に、「夢學に對する超意識心理學的補足」及び「悲哀と憂鬱」は第四卷、自一九一六年至一九一七年に掲載したものである。尙その外に此等の論文は一括して、一度、「神經症小論集」の第四卷として發刊してある。

精神神經症的狀態を研究するときは、その病症の各例に於て、所謂一時的退行現象 zeitliche Regression が現れてゐるのを知るであらう。即ち發育についての、その人に特有なる後退の狀を知るであらう。斯くの如き退行現象には二つの區別がある。即ち自我發育の退行と、リビド發育の退行とである。後者は睡眠狀態によつてその最も原始的の狀態、即ち自己愛の再建に到るものであるし、前者は、幻覺的願望滿足の狀態に迄到るものである。

睡眠狀態の心理的特性として我々の知つてゐるものは、夢の研究によつて明かにせられる。夢は、その人が睡眠に陷つてゐないことを示すものであるが、却つてそれに依つて睡眠の特性を知らず知らず示してゐるのである。我々は先づ、夢の二三の特質の觀察から始めよう。それは初めは理解しにくいかも知れぬが、恐らく少しく骨折る事によつて達し得るであらう。第一に夢は絕對的に利己的であることである。故にその夢のなかで主役を演ずる人物は、常に自己として認知せられる可きである。このことから容易に、睡眠狀態が自己愛から導き出されてゐることが理解出來るのである。自己愛 Narzißmus と利己主義 Egoismus とは全く同一である。「自己愛」と言ふ語は、利己主義が、リビド的現象となつてゐる場合を言ふのである。或は言ひ換へれば、自己愛と云ふは、利己主義のリビド的補足であるとも言ひ得るであらう。斯く考へて初めて、一般に認められて居る、且つ謎の如くに

も考へられてゐる夢の診斷的價値が理解出來るであらう。即ち夢のうちでは、身體的病變の極く初期が、逸早く、或は覺醒時よりも明瞭に跡づけられ得るし、且つ總ての身體的感覺が、巨大化して現れて來るのである。此の巨大化はヒポコンデリー的の性質を有する。然しこのことは、總ての外界からの心理的充塡は自身の自我に歸着せしめ得ることをその前提としてゐるのである。斯くて此の巨大化の性質が、覺醒生活にあつては尙暫くの間覺知し得られざる程度のものであつても、早期に身體的變化の覺知を可能となさしむることが出來るのである。

夢は、睡眠を亂さんとする何かが存在すること、此等の障碍を如何にして避け得られてゐるかと言ふことに對する洞察等を示してゐる。結局睡眠者は夢を見るが、尙睡眠を繼續し得る。即ち夢は彼を煩はしつつある內的要求の代りに、外的の經驗が、その要求を輕減せしむるために入り來るものである。故に夢は一種の投射 Projection である。即ち內部に於て經過しつつあるものを外部に現し出すことである。我々はこの投射なるものは、旣に他の箇所に於て、それが防禦作用の一種であることを知つた。ヒステリー性恐怖症の機制は、個體が、外的危險に對して、即ち今や內的要求として現れて來てゐる外的危險に對して、逃避の試みによつて自己を保持せんとすることに、その最高値を有するのである。投射現象の根本的記述は、此の自己愛的病的興奮の分解によつて、此の機制が、最も著し

い役目を演じてゐることを理解する迄待つこととしよう。

然し如何なる方法で、睡眠に入らんとする意圖が障碍を受けることになつたか。障碍は、外界よりの刺戟から來るのみならず内的興奮からも來得る。我々は先づ、少しく不明ではあるが、甚だ興味ある、この內部よりの障碍を第一に觀察して見よう。夢を生ぜしむるものは、晝間の殘物、及び思考充塡、卽ち一般的奪取に從はず、却つてそれに反して、或る程度迄、リビド的の、又は他の意味の興味を保持する思考充塡であると云ふことを經驗が示す。睡眠の自己愛性は、既に述べ來つた如く、常に伴ひ居るもので、これによつて夢の形成が起るのである。此處に晝間の殘物と云ふのは分析上、潛在してゐる夢の思考として知らるるものである。そしてそれはその本性上前意識的の表象としての、卽ちVbw系に屬するものとしての總て屬性を所有してゐるものである。

夢の形成の一層進んだ說明は、或る困難に打ち勝たざれば達し難い。睡眠狀態の自己愛性は、總ての對象表象、卽ち無意識的であらうとも、前意識的であらうとも、何れも關與してゐる總ての對象表象からの充塡の奪取を意味してゐる。一定の「晝間の殘物」が充塡せられて殘つてゐるとしても、此等のものは夜中に、意識の顧慮を催し得るほどなる十分のエネルギーを贏ち得て來ると言ふことを直ぐ假定するには尙躊躇がある。それよりも、この殘つてゐる充塡は、晝間の間中所有してゐたものよ

りも甚しく弱いのであるとの假定をする方が望ましいであらう。分析の結果からは、此處に於てもこれ以上の思索を必要とせず、直ちに此の晝間の殘物は、それが夢の形成者として現れ來る時には、意識せられざる本能衝動の源から一つの増强を得來るに違ひないと言ふことを示すのである。此の假定は、第一に何等の困難も有しない。何故ならば Vbw 系と Ubw 系との間の檢閱作用は、睡眠中は甚しく低下してゐるであらうし、此の二つの系の交通は、從つて更に容易となつてゐるであらうから。然しも一つの躊躇が尙此處に存在する。自己愛的の睡眠狀態は、Ubw 系及び Vbw 系の總ての充塡の廢止を生ぜしめるとするならば、自ら自我への充塡をも止めて了ふ意識せられざる本能衝動が前意識的の晝間の殘物を、增强せしめると言ふ可能性が無くなるのではないか。夢の形成の學說は、此處に一つの反對がある。或は睡眠自己愛の假定に何か變革を加へねばこの學說は救はれぬのであらうか。

此の如き局限せられたる假定は、後に再び述べる如く、早發性痴呆症の學說に於ても見逃すことが出來ぬ。卽ち壓迫せられたる Ubw 系の一部は、自我より出て來てゐる睡眠願望に從順ではなく、且つその充塡を全部、又は一部保存し、そして壓迫作用に依つて、自我からの獨立を一定度迄生ぜしめてゐると言ふことは見逃すことが出來ぬ。更に注意す可きは壓迫現象の給費（反對充塡 Gegenbese-

tzung）の一定の量が、情緒離斷への、又は運動への總ての道が到達し難くなつてゐるために必要な反對充塡の高さを著しく低下せしめてゐるにはゐるが、本能危險 Triebgefahr に遭遇するやうに、特に夜まで保持されてゐることである。斯くして我々は、夢の形成に對して用意せられた情況を次の如く描くことが出來る。卽ち睡眠願望は自我から送り出された總ての充塡を廢止し、一つの完全なる自己愛を齎さんと試みるのである。然しこれは一部分しか達せられぬ。何故ならば Ubw 系の壓迫せられたるものは、睡眠願望には服從しないのであるから。同時に反對充塡の一部分も保持せられるに違ひない。そして Ubw 系と Vbw 系との間の檢閱作用は、完全なる强度ではないが殘つてゐるであらう。自我の支配が達せられてゐる限りに於て、總ての系は充塡からは離れてゐる。Ubw 系の本能充塡が强ければ强い程、睡眠は動搖し易い。我々は此の極端なる場合を知つてゐる。卽ち自我が睡眠願望を放棄する場合で、これは睡眠の間に解き離される壓迫せられたる衝動を制止することが出來ないことを感ずるやうな場合である。これを言ひ換へれば、その夢を恐れるがために却つて睡眠を恐れる場合なのである。

我々は後に到つて、この壓迫せられたる衝動の反抗についての假定を、最も重大なる結果を來すものとして高く評價せねばならぬのであらう。然し今は夢の形成に關する情況を更に追求して見よう。

自己愛への第二の闖入としては、前意識的の晝間の思考の或る者は、自ら抵抗として現れ、且つその充塡の一部分を固執してゐると言ふ、既に述べた可能性にも價値を置かねばならぬ。この二つの場合は、その根柢に於ては全く同一のもので、晝間殘物の抵抗なるものは、既に覺醒生活に於ても成立してゐる、意識せられざる衝動との結合に歸せられる可きものである。或は更に少しく複雜であるかも知れぬ。そして此の全く排除せられぬ晝間殘物は、睡眠狀態に於て、その Vbw 系と Ubw 系との間の交通の容易なるに乘じて、壓迫せられたるものと尙關係づけて了ふのである。此の兩つの場合に於て、夢形成の同じ著しい進捗が生じ來る。卽ち意識せられざる衝動が、前意識の晝間殘物の材料のうちに現れ來ると言ふ事が、前意識的の夢願望を形成せしめるのである。斯くの如き夢願望は、晝間の殘物と嚴格に區別しなくてはならぬ。それは覺醒生活では成立しない。それは意識に飜譯して見ると、既に總ての意識せられざるものが有してゐる不合理なる特性を示してゐる。夢願望は、前意識的（潛在する）の夢の思考のうちに見出される、可能ではあるが必要ではない願望衝動とは決して交錯せられてはならぬ。然し斯かる前意識的の願望が與へられるや否や、夢願望は作用的の增强として、それ等に附け加はるのである。

さて今や、此の本性上意識せられざる本能要求を含んでゐる Vbw 系に於て、夢の願望（願望に充

たされたる想像）を形成したこの願望衝動の、更に進んだ運命が問題である。此等の願望衝動が、その運命を完成するために凡そ三つの異る道を見出すことが出來ることを、判斷上知り得る。即ち覺醒生活に於て、正常とせられてゐる道を通つて Vbw 系から出て、意識に迫るのであるか、或は Bw 系を迂廻して直接の運動として排出を形作るか、或はまた觀察によつて實際に追求して見なくてはわからぬ思ひもかけぬ道によるかの三つである。第一の場合には願望充足の內容を有する妄想觀念 Wahnidee となるであらう。然しこれは睡眠狀態には決して現れては來ぬものである。（精神過程の超意識心理學的條件を以つてしては、此の如き事實から、恐らく、衝動に對して、全く反應がないやうになるには、一つの系の完全なる空虛があるとの暗示を除くことが出來ない）。第二の場合、即ち直接の運動性の排出は、上記と同じ原理によつて全く睡眠には現れて來ぬ。何故ならば、運動への到達に對しては、さらにもう一つ意識檢閱の道があるからである。然し除外例はある。即ち、夢遊症 Somnambulismus として觀察せられるものである。我々は如何なる條件でこれが到達せられるか、又は何故にそれは稀にしか現れぬかを知らぬ。夢形成の場合に實際現れてゐるものは、甚だ注目に價する、然し全く豫見し難き道である。Vbw 系內に於て惹起せられ Ubw 系に依つて增强せられた過程は、逆の道を通つて Ubw 系を通つて、意識へと迫り來つて認識せられる。此の如き退行現象は夢

形成の第三の相である。我々は此處に、表としてこれを書いて見よう。Ubw 系による Vbw 系晝間殘物の增强＝夢願望の發現。

我々は此の如き退行を、既に述べた一時的 Zeitliche 退行卽ち發生學上のものと區別するために局所的 topische 退行と呼ぶのである。此の兩者は決して合一す可きではない。併し此處に述べるが如き例ではそれがある。興奮が Vbw 系から Ubw 系を通つて認識に迄經過し來る逆行は、同時に幻想的願望充足の前階段への復歸である。

夢判斷から、夢形成の際には、前意識的なる晝間殘物の退行が、如何なる樣式で現れ來るやを知ることが出來る。此の際思考は——殊に視覺的な——形像に變化される。言語表象も亦それに相當する事物表象に復歸せしめられる。卽ち一般的にこれを言へば描出可能性 Darstellbarkeit への顧慮が、この全過程を支配してゐるかの如き觀を呈する。完成せられたる退行の後に尙 Ubw 系に於ける充塡や事物追想の充塡やの一聯が殘つてゐる。此等の充塡に心理的第一次過程が作用し、此等のものの間の充塡の濃縮や移行やによつて夢の主内容を形成するに至るのである。唯言語表象が、晝間殘物のうちで、最も新鮮な、實際的な認識殘物であつて、思考表現がさうではないやうな場合には、それは事物表象と同樣に取り扱はれ、同じやうに濃縮や移行の影響を受ける。依つて、夢判斷に於て得た、而

もそれ以來、明かなる證明を得來つた法則、卽ち言語と物語は夢內容のうちでは新生せられることはなく、夢の日の（又は然らざれば最も新しい印象又は讀んだものの）物語が再び作られるに過ぎぬと言ふ法則が來るのである。如何に夢の働きが言語表象には無關係であるかと言ふ事は注目に値する點である。それは各ゝの場合に、言語は互ひに交錯し、遂に造形的描出に對して最も都合よい手段をもつ、恰好なる表現を見出すに至るのである。（註）

（註）ジルベレルによつて力說せられた、恐らくは彼によつて高く評價せられ過ぎた事實、卽ち多くの夢は常に二個が同時に現れるもので、從つてその本性を異にする二つの解釋があること、その一つをジルベレルは分析的のもの analytische と名付け、他の一つは神祕的のもの anagogisch と名付けたものであるが、この事實をも余は描出への顧慮と稱するのである。それは夢に於ける描出が甚だ困難なる、抽象的性質の思考にも關係してゐる。これに對する譬喩としては政治新聞の論說欄を、挿畫で置き換へると言ふ樣な事を提出すればよい。斯かる場合には夢の働きは、抽象的思考草稿を一つの具體的なもので代理せしめねばならぬ。而もその代理は、何か、譬喩だの、象徵だの、寓意譚だのの活躍を通して、最もよく、且つ起原的にその草稿と結合してゐるものである可きで、それが、今は、夢の働きの材料となつて來て居るのである。抽象的思考は、所謂神祕的解釋を與へるものであるが、それは夢の意味づけの場合

には、本來の分析的のものよりも却つて容易にわかるものである。ランクに從へば、分析を受けてゐる患者の治療の夢は、多くの意味を有し、而も此等の夢の理解に當つては正に典型的のものであると言ふ。これは正しい。

此の點については、夢の働きと、精神分離症との間の著しい區別が示される。後者にあつては、そのうちに前意識的の思考が表現されてゐる言語それ自身が、第一次過程による加工の對象である。然るに夢に於ては言語ではなく、その言語に歸せられる事物表象である。夢は、一つの局所的退行現象であるが、精神分離症はさうではない。夢にあつては（Vbw 系の）言語充塡と、（Ubw 系の）事物充塡との間の交通は自由である。然し精神分離症に當つてはそれが遮斷してあると言ふ事が特質である。此の差異の印象は、我々が精神分析的實驗例に於て用ふる夢判斷に依つては甚だ不明である。何故ならば、夢判斷は、夢の働きの經過をよく探知し、潛在思考より、夢の要素に導かれた道をよく追求し、言語の二重の意義の探集を發き、そして多くの材料の間に言語の掛橋を示し、それが或る時は洒落の、或る時は精神分離症の印象を作り、我々をして夢の中での言語の總ての行動は、唯事物退行の準備に過ぎぬと云ふ事を忘れしめるからである。

夢の過程は、この退行的に變化して、願望想像に變形せられた思考內容が、感覺的認識として意識

せられることで完成する。この際その内容は、總ての認識內容が然るが如く、二次的の作用を蒙るのである。我々は、夢の願望は幻覺せられると云ふ。そして幻覺としてはじめてその願望充足の現實性に對する信賴を見出すのである。夢の形成の甚しき不安定さは、此の如き除外せられた部分に原因してゐるのであつて、故に不安定さを說明せんがためには、我々は夢をそれに近い病理的狀態と比較するのである。

願望想像の形成、及び幻覺へのその退行は、夢の働きの本質的部分である。然し、それは必ずしも夢にのみ所屬するものではない。それは次の如き二つの病的狀態の際にも同じやうに現れる。卽ち急性幻覺性錯亂症卽ちアメンチア（マイネルト氏）の場合、及び精神分離症の幻覺性時期との二つである。錯亂症の幻覺性譫妄は、明かに知るを得る願望想像である。これは屢〻完全に、美しい白晝夢となつてくるものである。幻覺を有する願望精神症については一般的に同じことが言ひ得る。又、急性錯亂症の場合と同樣に、夢に於てもそれを見ることが出來るのである。他の何物からでもなく、正に甚だ豐富に存し、且つ取り去ることとの出來ぬ願望想像としてのみ成立する夢が存する。精神分離症の幻覺期は尙研究が足りない。一般にはそれは複合した性質を有するやうに見える。然し、本質的には一つの新しい恢復の試みに相當すると考へねばならぬ。卽ちそのリビド的充塡を對象表象に復歸せし

めんとの試みである。（註）

（註） 前章「無意識」に於て、此の如き最初の試みとして、言語表象の過充塡の例を擧げてある。

他の多くの病的情緒興奮に當つての、幻覺的狀態は、この如き比較に用ふる事が出來ない。何故ならば余は此處に、自身の經驗にもそれがないし、他人の經驗をも利用する事が出來ないからである。

さて幻覺性願望精神症は、――夢に於ても或は夢以外に於ても――二つの全く互ひに合一することなき働きを完了するものであることを明かにせねばならぬ。彼は、唯に隱されたる、或は壓迫せられたる願望を意識に迄齎すのみならず、それ等を全き信賴の下に、充たされたものとして意識するのである。此の合致は理解に價する。意識せられぬ願望は、それが一度意識せられた後では、實在と思はれねばならぬとは決して主張することは出來ない。何故ならば、我々の判斷力は、誰も知る如く、全く、甚だ強い表象の眞實性と願望との區別は十分出來るのであるから。これに反して、實在の信念は、感覺を通しての認識に結合してゐると言ふ事を假定するのは全く正しい。若しも一つの思考が、意識せられざる對象の記憶痕跡に迄退行によつてすすみ、これより認識に迄持ちこられたとするならば、我々はこの認識を實在のものとして認めるであらう。幻覺は同樣に實在信念を齎すものである。然らば幻覺の成生に對する條件は何であるかと問はねばならぬ。これに對する第一の答は次の如くで

ある。即ち、それは退行現象である。依つて幻覺の生成に對する質問は退行現象の機制とは何ぞやとの問に代へられねばならぬ。これに對する答について、夢に對して餘り長く責任を嫁する必要はないのである。Vbw系にある夢の思考が事物の記憶形像へと退行するのは、明かにUbw系の本能代表者——例へば壓迫せられたる經驗の追想が、言語で捉へられてゐる思考へと作用する引力の結果である。但し、我々は直ちに誤つた足跡を見てゐたことを氣付く。幻覺の祕密は、即ち退行現象の祕密に過ぎぬとするならば、各〻の十分強力なる退行は、必ず實在信念を伴ふ幻覺を生ぜしめねばならぬであらう。然し我々は退行したる思考は、甚だ明瞭なる視覺的の追想像を意識へと齎すが、決して實在の認識として見るを得ぬ例を知つてゐるのである。我々は唯夢の働きは、斯かる追想像に迄持ち來すこと、而して我々にとつてそれ迄は意識するを得ざりしものを意識せしめ、我々が憧憬しては居るが、然しその願望の現實の充足としては認められぬやうな一つの願望想像を實現させ來ることにあると考へて差支へないのである。斯くて、幻覺なるものは、Ubw系内の追想像の、退行による再生よりも以上のものと考へるを最もよしとするのである。

更に我々は、大なる實際的の意義があるものであるが故に、甚だ強く追想せられたる表象と認識とを區別して置かねばならぬ。我々の外界世界の現實に對する全關係は、此の能力にかかつて存する。

我々は此の能力を常に所有するに非ず、我々の精神生活の初めに當つては、その要求を見出し得るやうな滿足となる對象を、實際に幻覺で得ることが出來たのだ等と言ふならば、恰も架空の物語を打ち建てるに等しいであらう。實際に於ては、斯かる場合に於ては滿足は中絕せられ、そしてその誤つた結果は直ちに知られ、その助けに依つて斯くの如き願望認識を、實在の充足と區別せしめ、更に進んでこれを避けしめるが如き方向を提供する事が出來るのである。言ひ換へれば我々は、既に逸早く、此の幻覺的願望滿足を棄ててゐる。そして**實在檢査** Realitätsprüfung なる方法を打ち建ててゐるのである。然らばこの實在檢査とは何處に存するか、亦如何にして、夢や、或は急性錯亂症等の幻覺性願望精神症では實在檢査を廢止せしめ得るのであるか、如何にして又從つて古い滿足の方法を通達せしむる事が出來るのであるかとの疑問が生ずる。

この答は、心理的系統の第三のもの、即ち曾つて Vbw 系と判然たる區別を與へざりし Bw 系を更に精査することによつて自づと與へられる。既に我々は夢判斷に於て、此の意識せられる認識は、特別なる系、即ちこの系に對して一定の著しい特性を歸せしめ得、且つ更に十分なる根據を以つて多くの特質をも與へ得る系の作用となす可きものであると決意して置いた。その場合には單に W 系と名付けて置いたこの系は、本書で言ふ Bw 系と同じものであつて、この系の働きは一般的に意識と

なさしめると言ふ事に存する。然し、意識形成となるとの事實は、完全なる系所屬を示しては居らぬ。何故ならば、我々は感覺的の追想像は、我々がBw系又はW系に、心理的局所を歸せしむることは出來ないが、然し現れ來ることは出來るのであると言ふ經驗を有してゐるから。

此の困難なる問題の處理は、Bw系自身を我々の興味の中心點として取り扱ふことが出來る迄延期せねばならぬ。現在に於ける我々の關係では、幻覺はBw系（W系）の充塡から成立してゐる事、尙この充塡は正常の場合の如く外からではなく、內部から生じたものであることを假定することが出來るばかりである。又幻覺は、此の系自身にも達し、且つその際實在檢査を超えて了ふに至る迄、退行現象が進むことが出來ると言ふ事を假定し得るのみである。（註）

（註）余は此處に、幻覺の說明を試みるためには、積極的の幻覺を探求するよりも、却つて消極的の幻覺を探求せねばならぬ事を附加して置く。

既に前章に於て（「本能、及び本能の運命」）、一層助けなき生物では、その外界と內界とを唯筋活動の關係によつてのみ區別してゐるやうな認識方法によつて、最初の指南を得るのみであることを述べた。筋の活動によつて消失し去るが如き認識は、外界よりのものとして、且つ實在のものとして知ることが出來るのであり、斯かる活動で變化せしむるを得ざるものは、自己の身體內部から來る認識

であつて、而も實在として存せざるものであると區別するのである。斯くの如き實在に對する知見が有り、同時に、その實在に對する手段も存在する事になると、寛容ならざる本能要求に對しても、同じ力を以つて對抗することが出來るとすれば、それは、個體に對して甚だ價値多きことである。依つて、彼にとつては、內部より惱みとなるものを外部に向つて投げやること、卽ち投射せんことを努力するやうになるのである。

內界と外界との區別に依つて、斯くの如く世界の指南を得ることは、精神裝置の精細なる分析の後に、Bw 系にのみ歸せしめ得たのである。Bw 系は運動性神經支配をも伴ひ居るがために、これに依つて認識を消失し去らしめること、又は自ら抵抗として振舞ふことも出來るのである。實在檢査は、斯かる設備より外の何物も必要でないであらう。（註）

（註） 現實檢査 Akutualitätsprüfung と實在檢査 Realitätsprüfung との間の區別は、後說を參照せよ。

Bw 系の本性や、働きの樣式は、尙極めて僅かしか知られてゐないので、これ以上何物も言明することは出來ない。實在檢査は、旣に知られてゐる、心理的系統間の檢閱現象 Zensur と共に自我の大いなる制度 Institution として、認める可きものである。そして自己愛的の病症の分析は最もよく此の制度を發見せしむるに役立つことを期待し得るであらう。

これに對しては、今や病理學から、如何なる樣式に依つて此の實在檢査は放棄せられ、又は活動の外に追ひやられるのであるかを知る事が出來る。而もこのことは願望精神症や急性錯亂症に於て、夢に於けるよりも更に明かに知り得るのである。急性錯亂症は、實在の方からは主張してゐるが、自我に依つては堪へ難いものとして否定せられてゐる或る損失に對する反應である。その損失に對して、自我が實在に對する關係を破り、Bw の認識系から、充塡を、恐らくその特別なる性質は尙研究の對象たり得るであらう如き充塡を奪取したのである。斯くの如き實在よりの脫離によつて、實在檢査は除去せられ——壓迫せられざる全く意識的なる——願望想像が此の系のうちに侵入し來り、より良い實在として認められるのである。斯くの如く奪取は壓迫現象の過程と竝び稱せられて宜しい過程である。急性錯亂症は、自我と、その器官の一つ、而も自我にとつて恐らくは最も信賴するものとして奉仕し、且つ最も近いものとして結合しをりたる器官との不和の、最も興味ある演劇を提供してゐるのである。（註）

（註）此の事から出發して、一般に中毒性幻覺、例へばアルコール性譫妄の如きも同一樣式で理解し得るとの臆測を敢てする事も出來る。堪へ難き損失、而も實在に依つて命令せられたる損失は、アルコールの缺損の場合と同樣に、それを充たしてやれば幻覺も亦止んで了ふかも知れぬ。

急性錯亂症に於て、「壓迫作用」がなしてゐるものは、夢に於ては自由意思の消失がこれをなすのである。睡眠狀態は外界については何事をも知らぬ。亦實在について何の興味も有さぬ。睡眠の過ぎ去ることも、覺醒することも決して自ら觀察するのではない。同樣に睡眠狀態は Bw 系からの充塡とも絕緣してゐる。亦他の系統卽ち Vbw 系とも Ubw 系とも、その各系の內に存在する狀態が、睡眠願望に服從してゐる限りに於ては無關係なのである。Bw 系からの斯かる無充塡に依つて、實在檢査の可能性は放棄せられるのである。そして睡眠狀態とは無關係に、退行の道を取つた興奮は、それが異論なき實在として値し得る Bw 系に迄、自由にゆき得るのであらう。（註）

（註）充塡のない系の不興奮性の原理は、此處では Bw 系（W 系）に對してはあてはまらぬ。然しそれが一部的の充塡放棄であるならば、認識系に對して、一定數の興奮條件を假定せねばならぬ。その興奮條件は他の系のそれとは大分距りがあるにはあるが。斯かる超意識心理學的敍述の不確實なる點は、勿論決して蔽ひ隱されてもならぬし又は非を飾られてもならぬ。尙更に深く研究することによつて始めて、一定度の確實さを得來り得るのみである。

早發性痴呆症の如き幻覺性精神症にとつては、我々の考究からは、幻覺はこの病症の初發症狀に屬してはゐないと言ふことを導き出すことが出來る。その幻覺性精神症は患者の自我が、實在檢査かも

はや幻覺を防ぐことを得なくなる程分離し了つてから初めて生ずるものである。

夢の過程の心理學に對しては、我々は、夢の總ての本質的特性は、睡眠狀態の條件に依つて決定せられるものであるとの結果を得てゐる。古代アリストテレスは、夢は睡眠してゐる者の精神的活動で、總ての部分において正しいと言うたと言はれてゐるが、これは彼自身の言か否かは疑はしい。我我は次の如く言ふことが出來る。卽ち夢は、自己愛的睡眠狀態が、全部は成就しないことに依つて可能となる精神活動の一殘物であると。これは心理學者や哲學者が昔から言うて居るものと餘り異るものではない。然し、精神裝置の構造や作用に關する全く異る見解に基いてゐるものである。これは古說よりも、それが夢の個々の部分が總て、我々の理解に近く持ち來られ得ると言ふ點で勝れてゐるのである。

さて終りに壓迫現象の局所學が、精神障碍の機制への我々の洞察に對して與へた意義に關して一瞥を拂つて見よう。夢に在つては充塡（リビド或は興味）の奪取は總ての系統に於て同樣であり、轉授神經症の際には、Vbw 系の充塡の奪取に、精神分離症の際には Ubw 系の充塡の奪取に、急性錯亂症の際には Bw 系‐充塡の奪取に歸せしむることが出來るのである。

悲哀と憂鬱

夢は、自己愛的精神障碍の典型と見做すことが出來るのを知つた。其處で憂鬱症 Melancholie の本性は、正常情緒なる悲哀と比較することによつて、これを明かにし得るであらうと考へ、この試みをなさうと思ふ。然し、今度は、結果を餘り高く評價しないやうに豫め警戒し、豫め承知してかからなくてはならぬであらう。憂鬱症の概念は、現今の記載的精神病學に於ても不定であるし、臨床的の型としては甚だ多種多樣である。故にその單位的の理解は甚だ不確實で、そのうちの或る者は、精神的病症としてよりは、寧ろ體質的のものと考へられるのである。我々の材料は、各觀察者に得られてゐる印象は別として、甚だ少數の例に局限せられてゐるが、これ等の例は、その精神的性質を有してゐた點については疑ふ可からざるものである。故にこれから述べる我々の結果は一般的適用性を要求し得るものである。のみならず、我々の現在に於ける研究方法を以つてしては、此の病症の全領域について典型的な何かを見出し得ぬとするも、少くともその一小群に對しては典型的なものを見出し得てゐることは慰めとなすに足るであらう。

憂鬱と悲哀とを同格とする事は、この二つの狀態の全形像を見れば正しいものと思はれる。(註)

(註) 我々が此の問題に對する少し許りの分析的研究に關して最も有意義なるものを負うてゐるアブラハムも亦、此の比較から出發してゐる。(精神分析中央雜誌第二卷六號一九一二年)

此の兩者の生ずるに至る素地は、一般的によく理解し得る如く何れも生命侵害から來てゐる。悲哀は、規則正しく、愛する人物の喪失に對する反應、又はその愛人の位置を得てゐる抽象物、例へば祖國であるとか、自由であるとか、卽ち一般に理想の喪失から來るのである。處が同樣なる侵害に依つて、或る人々には、卽ち我々がそのために病症的素質ありとなす人々に對しては、悲哀の代りに憂鬱症が來るのである。注意に價することには、一つの病症的狀態にとつて悲哀を見ることは殆どないと言ふこと、及びそれが、正常の生活樣態から大分外れてゐるやうであつても、悲哀を醫師に治療して貰ふことは殆どないことである。我々は悲哀は一定の時間の後必ず打ち勝ちたる可きものであると信じてゐる。そしてそれを障碍となすことは合目的ならず、且つ耻づ可き事であると考へるのである。

憂鬱症は、精神的には、深い苦痛ある意氣銷沈として現される。外界に對する興味の消失、愛することの能力の喪失、總ての活動の制止、自責又は自己嫌惡として現れ、遂には責罰に對する妄想的期待にまで昂められる自我感情の低下等に依つて現されるのである。此の形像は次の如く考ふれば、よ

ほど理解し易くなる。卽ち悲哀は、此等の總ての特徵を示すが、遂には唯一の點に於て、卽ち自我感情の障碍だけは、悲哀の場合には存在しない。然し、それ以外のものは全く同一である。深い悲哀は、例へば愛人の喪失に對する反應の如きは、同樣なる苦痛の感情を伴ひ、同樣の外界世界に對する興味の消失――死んだ人に對して關係せざる限りは、――何か新しい戀愛對象を選擇する能力の消失――悲しまれてゐる人を代理するもの――それが死んだ人の追憶に關係せざる限り、總ての活動の沒却等を有してゐる。我々はそれを容易に總括することが出來る。卽ち此の如き自我の制止及び局限は、悲哀への絕對的歸依、他の意圖又は興味に對しては何物も殘存しないことの表現である。然し斯くの如き態度は、そのままでは決して病的ではない。何故ならば我々はそれ等に總て說明を與へることが出來るから。

我々は、悲哀の情調 Stimmung は「苦痛」であると見做すことが出來るであらう。若しも我々が苦痛を經濟的に特性づけることが出來るならば、此の考への正しいことは恐らくは直ちに明かとなるであらう。

然らば悲哀がなす働きは何であるか。余は思ふに、悲哀にはなにも强制されたものは含まれてゐない。悲哀は次の如く描出されるであらう。卽ち悲哀は實在檢査の結果、愛してゐる對象がもはや成立

せず、且つ今や總てのリビドがこの對象からその結合を脱却す可く餘儀なくされた場合である。之に反して明白なる反抗が生じた場合——卽ち一般に人がリビドの處在を放棄することを好まず、且つ彼に對して代理が既に生じ來つた時でも尙これに委すを好まぬやうな場合である。此の反抗は、實在からの轉向を生ぜしめ、又はその對象を錯覺的の願望精神症（前章を參照）によつて固執せんとするほど強くなることが出來るのである。健常とは、實在に對する敬意が勝を得ることである。然しその實在の命令も直ちに充たされることは出來ない。それは、時間と、充塡エネルギーの大なる給費の下で一つ一つとして行はれるが、而も失はれた對象の存在は心理的に繼續されるのである。リビドが對象に結合して出來てゐる追想と期待とは、維持せられ、そして過充塡せられ、且つリビドの解放も個々として起るのである。實在の命令は、各個に行はれるてゐるが、これが妥協するために、何故に特に苦痛があるのであるかは、經濟的基礎付けに於ては容易くは擧げることが出來ない。唯、此の如き苦痛不快が、我々にとつて自明の事であると思はれるのは注目す可き事である。然し事實は、自我は悲哀の働きを完成してしまつた後は、再び自由となり、且つ制止せられなくなる。

さて然らば、悲哀から經驗し來つたものを憂鬱症について考へて見よう。或る例に於ては、これも亦、愛したる對象の喪失に對する反應である事は明かである。但し他の原因としてはその喪失が、少し

く觀念的の性質を有してゐるのであることは直ぐ知られる。卽ち對象は、眞に死滅したのではなく、唯愛の對象として失はれて了つたのみ（例へば離緣されたる花嫁）の如き場合である。尙他の例に於ては、斯くの如き喪失の假定については確實であるが、然し、何を失つたのであるかは、明瞭に知ることは出來ない。のみならず患者も亦何を失つたのであるかは意識して知るを得ないであらうことを假定し得るやうな場合である。此の如き場合には、尙次のごときことも有る。卽ち憂鬱症の原因となつた喪失があると言ふことは、患者にもわかつてゐるが、何時と言ふことは言へるけれども、何を彼が失つたかと言ふ事は知らないやうな場合である。其處で、憂鬱症は、何か意識を缺いてゐる對象の喪失に關係してゐると言ひ得るであらう。悲哀との區別は、悲哀の方ではその喪失に對して意識せられざるものはないと言ふ事に在る。

悲哀の際に生ずる制止や、興味の消失は、それによつて悲哀の働きが自我を吸收し盡すのであると常に說明する事が出來る。憂鬱症の際の知られざる喪失も、その結果としてはこれと同樣なる內部的の働きを有する。そして憂鬱症の時の制止も亦これに基いてゐる。憂鬱症的制止は、謎の如き印象を與へるが、これは、何が患者をそれほど完全に吸收し盡してゐるかを見る事が出來ぬからである。憂鬱症患者は、悲哀の時には存在せぬもう一つのもの、卽ち特別なる彼自身の自我の低下、大なる自我

貧困を示す。悲哀の場合には、外界世界が空虛となり、貧困となる。が然し憂鬱症の場合には自我自身が空虛となり貧困となるのである。患者は、彼の自我が何等價がないことを人に語る。無能力であり、道德的に劣敗であると言明し、自責し、自嘲し、排斥と刑罰を期待するのである。彼は誰の前にでも卑下し、誰に對しても自分の、何等價値なき人格をもつてゐることを氣の毒がる。彼は彼に生じた變化の判斷を有しない。故に彼の自己批評を過去に及ぼし、彼は曾つて良きことはなかつたと主張するのである。斯くの如き――主として道德的の――微小妄想の病像は、不眠症、榮養拒否症等となつて現れる。又、心理學的に特に注意す可きは、本能征服、卽ち總ての生物をしてその生命を固執す可く强制してゐる本能を却つて征服せんとする意圖となつて現れて來る。

斯くの如き告訴を自分の自我に對して發してゐる患者に反對することは、科學的にも、又治療的にも適しないことである。彼と雖も何か正しい所を有するに違ひない。又何かが彼の言ふ通りに、彼には見えるのであるに違ひない。彼の言ふところの若干のものは、何等違ふところなしに直ちに確め得るであらう。彼は確かに、彼の自ら言ふ如く、興味を失うて居り、愛する事が出來なくなつて居り、又仕事能力をも失つて居る。然し注意す可きは、此等のことは第二義的のものである。それは我々には知られざる、內部の悲哀と同じやうに働き、そして彼の自我を喰ひ盡すものから來る結果である。

他の二三の自己告訴に於ても、彼は同樣に正しいやうに見える。而も憂鬱症に陷つて居らぬ他の人よりもより敏感に眞理を知り得るやうに見える。若しも彼が、徽小なる、利己的なる、公明正大ならざる、獨立的ならざる、而もその本能の薄弱さを隱さうと試みてゐる人として、高められたる自己批判から自らを語るならば、我々の自己認識の知識に甚だ近いのがわかるであらう。そして我々は、斯くの如き眞理に到達するためには、何故に先づ斯く病氣にならねばならぬのであらうかと質問せねばならぬ。何故ならば、此の如き自己批評を見出し、且つそれを他の人の前で言ふ人は――例へばハムレット王子が、自らに對しても又他の人々に對しても常に言うたやうな批評(註)――假令果して眞理を言うたとしても、或は又、多小眞ならざる事を言うたとしても病人であることは何等疑ひもない所であるから。此の自己卑下と、彼等の眞の是認との間には、我々の判斷によれば何等の相應ずるところは存在せぬと云ふ事を知るのは、さしたる困難ではない。

(註) Use every men after his desert, and who should scape whipping. Hamlet II. 2.
「おのおのの價によつて强ひて相當に裁かうなら、咎を免かるるものが世にはあるまい」ハムレット第二幕第二場。

以前は健氣な、役に立つ、且つ忠實だつた婦人が、憂鬱症にかかつてからは、實際何の役にも立た

ぬものよりも、僻惡しざまに自己について語る事がある。然り恐らくは、此の如き人の方が、我々の褒め難いやうな人々よりも、憂鬱症に罹る傾向がはるかに多いのである。然し注意す可きは、憂鬱症の患者は、正常人のうちの、悔恨や自責から打ちひしがれた人とは同じではないと言ふ點である。後者の如き狀態の特性たる、他人に對する耻と言ふやうなものは、憂鬱症にあつては缺けてゐるか、或は著しくは現れてゐないのである。憂鬱症では、自分を全部打ち明けて了へば、却つて滿足を見出すことが出來ると言つたやうな、差し迫つた打ち明け話とは寧ろ反對の特徵が、著しく目立つてゐるのである。

憂鬱症者の苦惱に充ちた自己卑下が確かに正當であつて、他人の判斷にその批評が全く一致したとしても、それは本質的のものでは決してない。それは唯彼が、自分の心理學的情況を正しく傳へたと言ふまでである。彼は自分の自己觀察は旣に失つて居る。而もこの事には立派な根據がある。故に我我は、全く解き難い謎である一つの矛盾の前に立つてゐることになる。悲哀との類推によつて、我々は次の如く結論せねばならぬ。卽ち憂鬱症者は對象の喪失に惱んでゐる。而も、彼の言ふことから見れば其の喪失は彼の自我に於て生じてゐるのである、と。

此の矛盾について論ずる前に、暫く、憂鬱症者の病症は、人類の自我の構造のうちに存することに

ついて一瞥を拂はうと思ふ。憂鬱症者では、その自我の一部分が、如何に他の部分に對して反對對立してゐるか、又その一部が他部を如何に批評的にはかつてゐるか、又如何にその一部が他部を對象として見てゐるかを見る事が出來る。此處に於てか我々の疑ひ、即ち、自我から分離して出來てゐる、批評的の審判 kritische Instanz は、他の關係の下でもその獨立性を示すことが出來るであらうと言ふ疑問は、さらに多くの觀察をなすことによつて確められるであらう。我々は此の審判は、その他の自我とは異るものであるとなす十分なる根據を有してゐる。即ち此處に言うてゐるものは、通常良心 Gewissen と名付けられてゐる審判のことである。我々は此の者を、意識の検閲作用と、實在檢査と共に、偉大なる自我の制度のうちに數へる。そして何處かに、その審判が自分だけ病氣することがある證據を見出し得るであらう。憂鬱症の病像は、自身の自我に於ける道德的不滿を、他人の眼の前に持ち出すことに在る。身體的缺陷、癈疾、薄弱、或は社會的無價値等は、自己批評に對してははるかに稀にしかその對象とはならぬものである。唯貧困 Verarmung だけが、患者の恐怖や主張のうちでは、著しく勝れたる位置を取るのである。

さて既に述べた矛盾に對する說明としては、次の如き、曾つて重要と考へられなかつた觀察を取つて見よう。即ち憂鬱症者の種々雜多なる自己告訴を、忍耐して聞く時には、終にはそれ等の訴へのう

ちの最も強いものは、自己自身に向つて言はれるものではなく、少しく歪めれば他の或る人に當つてゐること、而もそれはこの患者の愛する人であるか、或は曾つて愛せられた人であるか、又は愛さねばならぬ人である、との印象を否むことが出來ないであらう。事情を研究すればするほど、この臆測は確かとなる。斯くて病型像の鍵を手に取ることが出來た。卽ち自責を、愛の對象に對する叱責と解す可きで、逆に返へつて叱責が自分の自我に轉嫁せられたものである。

その夫に、自分のやうに甚だ働きのないと女と結婚したのは氣の毒であると、女がよく訴へる時、本來は夫の働きのないのを訴へてゐることに當るのである。此の意味にその言葉は解されねばならぬ。眞の自責もあるが、それすらも却つて逆用になつてゐる事を知るとも驚く必要はない。それは他のものを蔽ひ隱すために、又事物關係の知識を不可能とせしむるために助力をなすのであるから、止むを得ずさうなるのである。然り、その自責は、戀愛の爭ひから生じ來るもので、結局は戀愛喪失から來たと考へらる可きものなのである。斯く考へれば患者の態度は、理解し易くなる。古い言葉を用ひて見れば、彼等の訴へ Klagen は卽ち告發 Anklagen なのである。總て自身で言明する銷沈は、その根柢に於ては他の誰かについて言うてゐるのであるから、彼等はそれを恥ともしないし、且つ隱すこともしない。だから彼等はその周圍に對して、自卑や卑屈となることからは甚だ緣遠いのである。そ

れは眞の無價値を感ずる人の初めてよくなす可きことであるが、憂鬱症者はこれと異り、却つて、甚だしく苦しみ且つ惱み、恰も一つの大なる不正が、常に彼等に對して蔽ひかかつてゐる如く感じてゐるのである。此の如きことは唯彼等の態度の反應が、叛逆の精神的位相から出てゐる場合にのみ可能である。その叛逆は一定の過程を通つて遂に憂鬱性の悔恨に移行せしめられるのである。

さて、此の如き過程を此處に總括して見ることは困難ではない。一の對象選擇、即ちリビドの結合が特定の人に對して生じたとする。而して、愛する人の方から眞の侮辱又は幻滅が生じ來つて、此の對象關係の震駭が生じたとする。依つてその結果は此の對象よりリビドの脫却が正常の通りでなく、新しい而も別の、その發生のために都合よき諸條件を要求し得ると思はれるやうな對象へと移動が生じ來るのである。對象充塡は殆ど抵抗を示さず、廢止せられるのであるが、然し此の自由となつたリビドは、他の對象に轉移せしめることが出來ないで、自我のうちへ逆に來るのである。然し其處で對象充塡は都合のよい移轉を見出すことが出來ないから、却つて捨てられた對象と自我との同一視 Identifizierung が生ずるのである。即ち對象の影が自我の上に落ちる。依つて自我が、一つの對象の如く、特に捨てられたる對象の如くに、一つの特別なる審判に依つて裁かれるのである。斯くの如き道によつて、對象喪失が、自我喪失へと變化する。自我と、愛した人物との間の軋轢は、自我批判

と、同一視に依つてその愛人に變化せしめられたる自我との間の葛藤へと變轉するのである。

斯くの如き過程の、前提及び結果から、直接に更に二三のことがわかつて來る。卽ち一方には戀愛對象への強い固定があり、他方にはそれに矛盾する對象充塡の抵抗減少がある。此の矛盾は、ランクの適切なる注意に依れば、次の如きこととなる。卽ち對象選擇は、自己愛的根柢から生じ來つてゐるので、依つて對象充塡が、困難に遭遇する時は對象充塡は自己愛へと復歸するのである。對象との自己愛的同一視は、斯くして戀愛充塡の代理となり、結局、その愛人との戀愛關係は、その軋轢にも拘らず、決して捨て去られないことになるのである。對象愛が同一視によつて斯く代理せられるのは、自己愛的病症に對する意義深い機制である。ランダウエルは、此の事を近頃精神分離症の治癒過程に於て發見することが出來たのである。(註)

(註) 醫家精神分析國際雜誌第二卷一九一四年參照。

それは勿論、對象選擇の一形式から、原始的自己愛への退行現象に相當する。我々は他の場所で、同一視は對象選擇の前階段である事、及び、對立兩存在として現れる第一の種類は、對象を自我として描き出すことであることを論じた事がある。自我は此の對象を同化することが出來るが、これこそはリビド發育の、口愛的、卽ち食人的時期であつて、貪食の時代に相當するものである。アブラハム

が、憂鬱症狀態の重症像である食物攝取の拒絶を、此の關係に歸したのは正に正當であつた。

理論上より推論せられた此の結論、卽ち憂鬱症罹患の素質、又はその素質の一部は、對象選擇の自己愛型の優勢に在るとなす此の結論は、尙未だ研究による確立を缺いてゐる。余はこの論文の冒頭に、この研究の依つて立つ具體的材料は我々の要求に對しては十分ではないことを言うて置いた筈である。假りに我々の推論が、觀察に一致するものとするならば、對象充塡が、尙自己愛に屬す可き口愛性リビド期へと退行しゆくことを、憂鬱症の特質となすに躊躇しないであらう。對象との同一視は、轉授性神經症に於ても決して稀ではない。しかのみならずこれはヒステリー症の際の、症狀形成の機制をなすものなることは更によく知られてゐる。然しヒステリー症と、自己愛的同一視との間の區別は、後者にあつては對象充塡は放棄せられて居るが、前者にあつてはそれは成立して居り、常には、一定の個々の活動及び神經支配に限局せられて居るやうな作用を現してゐると言ふ點に存する。常に、轉授性神經症にあつては、此の同一視は、それが戀愛を意味するものと共通なるものの表現である。自己愛的同一視の研究は、かくて原始的のものであり、又尙未だ研究の足りないヒステリー的同一視への理解に對しても、導きをなすものである。

憂鬱症はその特性の一部を悲哀から借り來つてゐる。その特性の別の一部は、自己愛的對象選擇か

ら、自己愛へと退行しゆく事から借り來つてゐる。それは一面には悲哀と同様に、戀愛對象の眞の喪失に對する反應であるが、然しその上に尙、通常の悲哀には全く缺けてゐる條件をも固持してゐる。又は悲哀の入り込む處の條件が病的のものに變化してゐる。戀愛對象の喪失と言ふ事は、戀愛關係の對立兩存性を、通用せしめ又は發現せしめて來る著しい原因である。强迫性神經症への素質が存在する時には、悲哀の對立兩存的軋轢は、病的形態を採り、そしてその病的形態を、自責の形、即ち戀愛對象の喪失に對して自ら責を感ずる自責の形で現し來るやうに强制せられる。斯くの如き强迫性神經症的銷沈は、愛人の死後、リビドの退行的癈止が存在せぬ場合でも對立兩存的軋轢のみでも生じて來るであらう。憂鬱症の原因は、多くの場合、明瞭なる死による喪失から出て、苦惱や輕蔑や幻滅等即ちこれに依つて戀愛及び憎惡の對立が入り來るか、又は既に存在する對立兩存性が增强せられる總ての情況を含んで居るのである。此の對立兩存的軋轢は或は實在よりの、或は、體質的の起因を有するが、憂鬱症の前提としては見逃す可からざるものである。對象に對する愛が、愛そのものは決して捨てられぬが、對象そのものが捨てられた場合に、自己愛的同一視に逃避したならば、此の代理對象に、憎惡が働き、依つて自嘲し、銷沈し、惱み、依つて此の惱みに對しては、虐待嗜好的滿足が得られるに至る。憂鬱症の、疑ひもなく身にしみる自己苦惱は、强迫性神經症に於ける同じ現象の如く、

虐待嗜好的傾向、及び憎惡傾向の滿足を意味する。この憎惡は一つの對象に向つてゐるのであるが、此のやうな道を通つて自己自身へと轉じ來るのである。（註）

（註）此の區別に關しては、「本能及び本能の運命」の章を參照せよ。

此の兩病症に於ては、患者は自己刑罰の回り路によつて、最初の對象に復讐し、その敵意を直接には示さぬやうにするために、自身が病氣となつて了つてゐるわけであるから、その愛人を病氣への仲介をなしたことに依つて苦しめることが出來るのである。患者の感情障碍を惹起せしめ、從つて、それによつて病氣の原因がわかるやうな人物は、大抵は患者の最も近い周圍に見出すことが出來る。斯くて憂鬱症者のその對象に對する戀愛充塡は二つの運命を辿るのである。卽ち一部は、同一視に復歸し、他の一部は對立兩存的軋轢の影響によつて、それに最も近い虐待嗜好症の階段に歸せしめられるのである。

此の虐待嗜好症に依つて始めて自殺傾向の謎が解ける。これあるがために憂鬱症が甚だ興味あるものとなり、又危險なるものとなるのである。我々は旣に本能生活が依つて出て來る、原始狀態としては、自我は甚だ大なる**自我愛** Selbstliebe を有してゐるのを知つてゐるし、又生命の危險がある場合に生ずる恐怖には、自己愛的リビドの甚だ大量が出て來るのを見るので、此の自我が如何にしても自

己絕滅に一致する事があるのは理解出來ぬのである。既に永い前より、神經症者が自殺意圖を感ずるのは他人に對する殺人衝動が、自己に復歸したものに違ひないと言ふ事は考へられてゐたのである。然し如何なる力の働きに依つてこの意圖が實行に移されるかは尙理解し難いものとせられてゐたのである。さて今や我々は憂鬱症の分析に依つて自我は對象充塡の復歸によつて、自己自身を對象の如くに取り扱ふ事が出來る時に、卽ち對象に値してゐる敵意を、自己自身に向けた時に、そして外界世界の對象に對する、自我の原始的反應が、それに代つた時に、始めて自殺する事が出來るのであると云ふ事を知るに到つた。(「本能及び本能の運命」の章參照)故に自己愛的對象選擇の退行の場合には、對象は既に捨てられてゐるのであるが、然し尙自我自身よりもはるかに强力なのである。極端な戀情と、自殺との此の二つの全く對立する情況に於て、自我は、全く別の道からではあるが、とに角その對象によつて壓倒せられるのである。

尙憂鬱症の著しい特性の一つとして、貧困恐怖の現れ來ることは、その結合から解かれて退行的に變化した、肛門愛に由來するものであることが明かである。

憂鬱症の更に他の一部分は我々には尙未だ解答が出來ない疑問を提出する。卽ち憂鬱症は一定の時日の後には何等檢出し得可き、大なる變化を殘さず癒つて了ふことがあり、これは悲哀と甚しくその

特性を同じうすると云ふ點である。此の場合我々は、その時間なるものは實在檢査の命令の詳細遂行のために必要なのであることはわかる。この實在檢査の命令の働きに依つて、自我はそのリビドを、失はれたる對象から自由にすることが出來るのである。之と類似の樣式で、自我は憂鬱症の場合にも働くものであると考へられる。此の經過の經濟的理解が此處にも亦、其處にある如く殘つてゐる。憂鬱症の不眠症は、睡眠に對して必要なる充塡の一般的棄却を完全にすることの不可能、即ち狀態に硬性のあることを示すものである。憂鬱症的複合は、開いてゐる傷口の如く、總ての方向より、充塡エネルギーを自分に攝取し、(恰も轉授性神經症者の場合に「反對充塡」と稱したるもの)從つて自我は極端に迄放下し盡し、完全なる貧困に迄立ち到るのである。だから憂鬱症的複合は自我の睡眠願望に對して容易に抵抗となるのである。——常には此の狀態の、規則正しい緩和が、丁度夕刻になると現れて來ることには、恐らくは體質的な、即ち心理的には說明の出來ないやうな動機があるのであらう。此の說明につづいて、憂鬱症の形像を生ずるためには、對象を顧慮してゐない自我の喪失はない(純粹自己愛的自我苦腦)かどうかとの疑問が來る。又自我リビドに於ける直接な中毒的な貧困が病症の一定の形式を生ずるのではないかどうかとの疑問も來るのである。

憂鬱症の最も著明なる、そして說明を必要とする特徵は、症狀的には全く對立する躁揚症の狀態に

激變する傾向の存することである。總ての憂鬱症が此の運命を有するとは知られてゐない。多數の例で、週期的の再發の形で、經過し、その間歇時には、全く躁揚症の傾向がないか、又は輕く僅かにしか存在せぬ。然し或る例では、規則正しい憂鬱症の時期と、躁揚症の時期との循環精神病の形式で現れて來る交代出現を示す。卽ちこの例は精神分析的學蹟が、正に此の如き罹患の多數に對して、寬解及び治療的影響を生ぜしむるを得なかつたとしたならば、心理的理解から、この例を除外しようと試みてゐたかも知れぬ。ところが憂鬱症の分析的說明は、躁揚症にも擴大せられることが、出來得るばかりではなく、正に必要なのである。

此の試みが、完全に滿足なる結果を得ると言ふ事を余は約束することは出來ない。最初の指南の可能性より以上に出ることは出來ぬであらう。此處にその要求に對する二つの手がかりがある。第一のものは精神分析的印象であるが、第二のものは、言はば一般的經濟的の經驗なのである。既に多くの精神分析學的研究者が、言及してゐるところの印象は、躁揚症も憂鬱症も、同樣な內容しか持たぬ事、及び此の兩病症は同じ複合と鬪つてゐるもので、憂鬱症にあつては、自我がその複合に屈服してゐるに反し、躁揚症にあつては、自我が却つてその複合を征服するか、又は排除するかして了ふのであると言ふに一致してゐる。更に經驗上他の根據が與へられてゐる。卽ち總ての喜悅、歡樂、勝利

等、躁揚症の典型をなす總ての狀態は、同樣な經濟上の條件として考へらる可きものであると言ふ事である。此等の場合には、永く堪へて來た、或は習慣的に生じ來つてゐた、大なる心理的給費が、遂に過剩となつて來たために侵害となるのである。故にその給費は種々雜多の用途、又は排出可能性に對して用ひられる。例へば一人の貧乏人が突然大儲けをして、日々の糧に對する永續的の心理から急に免れた樣な場合、又は永い、そして骨折つた戰爭が終つて、而も勝利を得た場合、或は又壓迫してゐた强迫、又は永くつづいてゐた妨害が、一擧にして終つてしまつた時等の如き場合である。總て斯くの如き情況は、軒昻たる意氣となつて、喜悅情緒の排出となつて、總ての活動に對する非常なる熱心となつて現れて來るものであるが、躁揚症は正にこの如きもので、憂鬱症の制止や銷沈の正反對なものである。躁揚症は此の如き勝利であるけれども、その打ち勝つたもの、及び勝利を得た場所は、再び自我に依つて蔽はれてゐるのであると言うて宜しいであらう。

同じ樣な狀態に屬す可きアルコール酩酊は――笑ひ上戶の場合には――同じやうに解釋することが出來る。卽ち此の複合には恐らく、壓迫給費の癈絕が中酒に依つて目的を達した、ことにあるのであらう。衆人の考へでは、斯くの如き躁揚症的氣分は「好氣嫌となつてゐる」ために、運動を好み、何事かを企圖するを好むのであると假定し易い。然し此の如き當らざる考へは、勿論棄てねばならぬ。

これは逆に、既に述べた精神生活に於ける經濟的の條件が充たされてゐるがために、一方には好氣嫌があり、他方には、その行爲の制止なき狀態があるのである。

我々は此の二つの解釋を同一にして見よう。然らば次の如くになる。卽ち躁揚症に於ては、自我は對象の喪失(卽ちその喪失に關する悲哀又は恐らくは對象そのもの)を克服したのであり、依つて今や憂鬱症の苦痛ある惱みが自我から引き出して自分に結合してゐたところの反對充塡の全額は、勝手に處理す可きものとなつたのである。躁揚症は、彼が惱んでゐた對象から解放せられたことを明白に示してゐると同時に、如何に新しい對象充塡に對して渴望を生じてゐるかを示してゐる。

此の說明は如何にも恰適してゐる如く思はれるが、然し第一に尙不確定のものであり、第二に更に答へることの出來ぬ新しい問題が浮び出るのである。我々はその討論を省かないであらう。假令その問題について明瞭なる道を見出すことが期待出來ないとしても。

先づ第一に、正常の悲哀にあつては、對象の喪失に打ち勝つと同時に、自我の總てのエネルギーは、悲哀の持續の間に吸收せられる。何故に悲哀にあつては、勝利の一時期に對する經濟的條件が、その勝利の經過の後にも現れて來ないのであらうか。余は此の如き駁論に、短く答へることは出來ないと思ふ。この駁論は、更に我々をして次の事に注意せしめる。卽ち我々は曾つて、如何なる經濟的

方法によつて、悲哀がその宿題を解いたかを明かにする事は出來なかつた。然し此處に恐らくは一つの臆測が、その困却を救ふであらう。リビドがまだその失はれたる對象に結合してゐる事を示してゐる追想や期待情況が起る度毎に、實在はその對象がもはや存在せぬとの判決を與へる。故に、これと運命を共にす可きか否かと言ふ疑問の前に置かれた自我は、生命を得んとする自己愛的滿足の總量如何に依つて、絶滅せられたる對象との結合を解くことを決定せしめるのである。此の解放は、それに對して要求せられた給費が、その働きの終る頃に、ともに散つて了ふやうに、緩漫に、歩一歩と現れてゐると考へてよい。(註)

(註) 經濟的見地はこれまでは、精神分析學的業蹟に僅かしか顧られてはゐなかつた。唯タウスクの論文、即ち代償による壓迫現象の動機の價値低下(國際精神分析治療雜誌第一卷一九一三年參照)の中に假定として與へられてゐるに過ぎぬ。

悲哀の働きに關する右の如き推量から憂鬱症の働きをも描出せんことを追求するのは、甚しく誘惑的である。然し此の道には第一に不確實さがある。我々は今迄憂鬱症に於ては、局所的見地を少しも顧慮しなかつた。又憂鬱症の働きはどの心理的系統の間、又はどの心理的系統のなかで起るのであるかとの疑問をも起さなかつた。然し病症の心理的過程については、果して何が、放棄せられたる意識

せられざる對象充塡に於て生じ、又何が自我に於ける同一視的代理に於て生じをるのであるか。直ちに言ひ又は容易に書かれることは、「對象の無意識なる（物體）表象が、リビドから見捨てられる」ことである。然し實際には、此の表象は、無數の個々の印象（又はその印象の意識せられざる痕跡）によつて入り來つてゐるものである。そして此のリビド剝奪の來ることは瞬間的の過程ではなく、確かに、悲哀の場合と同樣に、永くかかつて漸次に進んで來るプロセスである。此のプロセスが種々なる場所に於て、一時に始まるか、又は或る定まつた經過を有するかは、容易に區別する事は出來ない。分析例に於ては、或る時は此の、或る時は彼の、追想が賦活せられること、及び同じやうな、又單なる訴へのみが、他の意識せられざる根柢から、常に生じ來ること等は何れも確定されてゐる。若しもその對象が、大なる、種々雜多の結合に依つて增强せられた意義を、自我に對して何等有しないならば、此の對象の喪失は、悲哀をも亦憂鬱をも生ずることは出來ない。リビド解放を一つ一つ遂行せねばならぬと言ふ特性は、憂鬱にあつても悲哀にあつても同樣にあると言ふ事は、恐らくは同じ經濟的關係から出てゐるもので、亦同じ傾向を生ずるものであることを示すものである。

憂鬱は然し、旣に述べた如く正常時の悲哀よりも、多くの內容を有してゐる。對象に對する關係は憂鬱の場合にあつては、決して單純ではなく、對立兩存的の軋轢に依つて複雜となつてゐる。對立兩

存性は、體質的卽ち此の自我の戀愛關係に關係してゐるか、或は、對象喪失の恐れを齎す經驗から直接に來てゐるかである。故に憂鬱症は、その動機に於て、はるかに悲哀を、卽ち一般に唯實在喪失、例へば對象の死によつて解放せられるごとき悲哀を超えてゐる。憂鬱症の場合には、その對症に對する無數の個々の戰ひが生じて來る。そのうちにも、憎惡と戀愛とが互ひに戰ひ合ひ、前者はリビドをその對象より解き放たんとし、後者は此のリビドの位置を、その襲撃に對して主張せんとするのである。此の個々の戰ひは、正に Ubw 系卽ち事物追想痕跡（言語充塡とは反對に）の存在する王國に在る。悲哀の場合の解放の試みも此の同じ Ubw 系のうちで行はれる。然し後者に於ては、此の如き過程が、通常の道によつて、Vbw 系を通つて意識に進み來ることに對しては、何等の防害もないのである。此の道は憂鬱症性の働きに對しては恐らくは多數の原因の結果として、又はその多數の原因の共同の働きによつて遮斷せられてゐる。構成的の對立兩存性も壓迫せられたものに附屬してゐる。又外傷性經驗は、その對象を以つて、他の壓迫せられたるものを賦活することが出來る。故に此の對立兩存性の戰ひに於ては、憂鬱症に對して特質たる出道が生ぜぬ迄は、總てのものが意識から遠さけられてゐる。此の出道は、旣に知る如く、迫り來るリビド充塡は、遂にはその對象を捨て去るが、然し自我のその場所、卽ち其後から充塡の出て來る場所に復歸すると言ふことに依つて成立してゐる。戀

愛は斯くの如く、自我のうちに逃避することに依つて、その癈棄を避ける。斯くの如きリビドの退行の後にその過程は意識せられるのである。そして意識には、自我の一部とそして批判的審判との間の軋轢となつて現れるのである。

意識が憂鬱症的の働きについて經驗するところは、その本來的の部分ではない。又我々が、その惱みの解放に影響ありと考へ得る如き部分でもない。我々は、自我は自ら品位を下げ、又自らに對して激怒する事があるのを知つてゐる。然し患者と同樣に、何處からそれが生ずるのか、又は如何にしてそれが變化し得るかについては殆ど知るところがない。憂鬱症の働きの意識せられざる部分に對しては、先づ第一に我々は斯くの如き作用を歸してゐた。何故ならば、憂鬱症の斯くの如き働きと、悲哀に於けるそれとの間には、本質的の類推を見出すことが難しくはないからである。悲哀は如何に自我をして、その對象を放棄するやうに動かすか、而もその對象を、死したるものとして說明し、且つ自我に、生き殘れるものの奬勵を提供し、依つて各々の個々の對立兩存性の戰が、對象を低く評價し、抑制し・同時にそれを虐殺することに依つて、リビドが對象に固定することを緩和するのである。Ubw 系に於けるプロセスに終りを告げしめる可能性は、或は憤怒を自ら凪ぎ靜まるやうにするか、或は、對象を價値なきものとして棄て去るやうにするか、何れかに依つて與へられる。此の二つの可

能性の何れかが規則正しく、或は一方が勝れて、憂鬱症を終らしめるや、又如何にして此の終りが、その場合の後の經過に影響を及ぼすやは、我々の洞見し難きところである。何れにしても自我は、その際自ら、より勝れたものとして、又は對象を打ち勝つものとして自認することの滿足を味ふのである。

更に我々は、憂鬱症の働きの此の如き理解を假定することが出來たとしても、その闡明から我々が出發せねばならぬところのものが、出來たとは言へない。憂鬱症の經過せる後、躁揚症の生じ來ることに對しての、經濟的條件は、此等の病症を支配としてゐる對立兩存性から引き出す事が出來るとの我々の期待は、多くの他の領域からの類推によつて支持せられてゐる。然し其處には、此の期待が屈服せねばならぬやうな事實がある。憂鬱症に對する三つの前提、即ち對象の喪失、對立兩存性、及びリビドの自我へと退行することの三つのうち、初めの二つのものは、對象死亡後の强迫性自責にも發見することが出來る。其處で、疑ひもなく軋轢の發條たるものは對立兩存性である。そして觀察の結果によれば、此の軋轢の經過の後には、躁揚症的の勝利感の來る例はない。故に我々は、第三の動機に、唯一つの有効さをかづけることになる。最初結ばれたる充塡の集積、即ち憂鬱症的の働きの終つた後には自由となり、そして躁揚症を可能となさしむる如きその集積は、リビドの自己愛への退

行に關係してゐる。自我に於ける軋轢は、即ち憂鬱症では、その對象に就ての戰ひと誤る軋轢は、痛みある傷と同樣に、即ち特別なる高度の反對充塡を要求するやうに作用するに違ひない。然し此處では、却つてこれにとどめ、躁揚症の進んだ說明は、最初に身體的の、ついでそれに類似の精神的の苦痛の、經濟的性質の中に洞察を得る迄延期するの寧ろ合目的なるを思ふ。我々は既に、紛糾してゐる精神的の諸問題の諸關係は、此等の研究を未完のままにして置いて、他の領域の結果がそれに助けを與へる迄中絕せしめねばならぬのである。(註)

(註) 躁揚症の問題の續きは「集團心理學と自我の分析」(本全集第六卷)を參照せられよ。

制止、症狀、及び、恐怖

第一

病的現象の記載に當つては、症状 Symptome と制止 Hemmung とは區別して用ひてはゐるが、此の區別には大して價値がないと考へるのが常である。唯制止だけがあつて、何等症状を呈して居ない樣な疾患例が一つも現れて來ないとしたならば、或は又、何が條件となつて此の兩者が生ずるのであるかを知らうとも欲しないとしたならば、制止の概念と、症状の概念とに限界を與へようとすることは何等興味のない事であらう。

此の兩者は同じ基地より生ひ立つものではない。制止は機能 Funktion と特別なる關係がある現象のことで、必ずしも病的な事實をのみ意味するものではない。或る正常機能に一種の制限が與へられた場合に制止と呼んでよいのである。症状と言ふのは、これに反して、主として一つの病的過程の現れたものを呼ぶのである。故に制止も症状の一種ではある。斯くて言葉の用ひ方は次の如くになる。即ち單純なる機能の低下が存在する場合は制止と呼び、機能の通常ならざる變化、或は新しい働きがあるやうな場合は症状と呼ぶのである。多くの場合、病的過程の積極的の側か、又は消極的の側か、

何れを特に強く言ふかに依つて、症狀と言ふか又は制止と言ふかは、隨意であるやうに見える。總て此等の事は實際には興味のないことで、從つて我々が今冒頭に提出した疑問もそれ自身では餘り得るところがないのである。

制止とは概念的には機能に極めて近いものを言ふのであるから、多くの自我機能をも、これに基いて研究し、個々の神經症的病症の場合には如何なる形式で機能の障碍が現れ來るかを研究しようとする考へは仲々結構である。我々は此の如き比較研究のために、性的機能、食事、歩行、及び職業勞働等を選んで見よう。

（a） 性的機能は、樣々な障碍を蒙るが、その多くは單純なる制止の特性を示す。此等は、心理的不能症 psychische Impotenz として一括されてゐる。一體正常の性的活動の生成は、甚だ複雜なる經過を前提とするものであるから、障碍は、その經過のどの場所にも起り得るのである。その制止の主なる場所は、男性にあつては次の如きものである。即ち過程の初めにリビドの他に轉向する事（心理的不快）、物的準備の缺乏（勃起不能）動作完了の短縮（早漏）、及び同時に積極的症狀と同樣に記載せらる可きもの、即ち自然的排出に先立つ停止（射精不能）、心理的結果の不成立（快感減少）等である。他の諸障碍は、機能が特別の條件即ち倒錯的、又は、節片嗜好症的性質に結合して生じ來るも

のである。

制止と恐怖 Angst との關係も省みずに置くことは出來ない。總ての制止は明かに機能の斷念である。そしてその斷念の實行として恐怖は生じ來るのである。性的機能に對する直接の恐怖は、女性にあつては屢々あつて、ヒステリー症に編入す可きものである。同樣に、防禦症狀である嫌惡感 Ekel 卽ち最初は、受動的に經驗したる性的動作に對する後續反應として生じ、後に、その表象を思ひ浮べただけでも生じ來るもので、これもヒステリー症狀である。强迫行爲の大部分は性的經驗に對する用心及び警戒として生ずるもので、恐怖症的性質のものである。

卽ち機能障碍がどうして生ずるかはよくわかつてはゐないが、甚だ多種の方式で生じて來るのは確かである。(1)單なるリビドの轉向、これは第一に純粹制止と呼ぶ可きものを生ぜしめるものと思はれる。(2)機能の起始に於ける失敗、(3)特別なる條件による機能の困難、及び他の目的へ外れることに依る機能の變改、(4)警戒處置による機能の豫防、(5)恐怖發生による機能の中止、竝に恐怖の副作用を防止することが出來なくなること、及び最後に(6)後續の反應、卽ちそれに對して抗議し、それでも尙機能が始まるやうな時には、生じたものを逆行せしめる處のもの等である。

(b) 榮養機能の最も屢々生ずる障碍は、リビドの脫失による攝食不快である。同樣に食物攝取の

高まることも稀ではない。强迫攝食は、饑餓に對する恐怖に由來してゐるが、それは尙硏究が不足である。食事にたいするヒステリー症性の防禦は、嘔吐症狀として現れてくる。恐怖に基く、榮養拒絕は、精神症的の狀態（中毒妄想）に屬する。

（c）步行は、諸種の神經症的狀態の際に、步行不快、及び步行困難に依つて制止せられる。ヒステリー症の障碍は、運動器の運動麻痺によつて生ずるか、又は運動器の或る機能を特別に廢止せしめる。（步行不能症 Abasie）。特に特徵のあるのは、一定の條件の遮斷、多くはその條件の充たされざることが恐怖となる場合による步行困難である。（恐怖症）

（d） 勞働制止、卽ち屢〻孤立した症狀として治療の對象となるものであるが、これは勞働の繼續が强ひられる時に、快の減少又は仕事の手につかぬこと、又は倦怠（眩暈、嘔吐）の如き反動現象として現れるものである。ヒステリー症は器官麻痺又は、機能麻痺の生起に依つて勞働の中止を强ひる。此等のものが生起してくると仕事を始めることが出來なくなる。强迫性神經症では、連續する轉向に依つて、又は終始起る遲滯、及び反復による時間の損失によつて仕事が妨げられるのである。

此の如き概觀は他の機能に對しても應用することが出來るのであるが、他の機能では更に得るところが多いとは期待し得ない。又現象の表面を超える事も出來まい。故に我々は、制止なる概念に、餘

り多くの謎の如きものを許さぬやう、卽ちはつきり定義をしなくてはならぬ。制止とは、自我の機能制限である。自我の機能制限は種々雜多の原因を有し得ることは勿論で、一般に、機能放棄と言ふことになるとその多くの機制と、傾向とは、我々のよく知るところである。

特殊化した制止については、その傾向は容易に知ることが出來る。卽ち若しもピアノ彈奏、書字、又は步行等が神經症的制止を受けた場合には、斯かる機能に與かる器官、例へば指や、足等が、過剩なる性慾連滯 Erotisierung を得たことにその根據を求め得ることが分析の結果わかつた。我々は一般に、或る器官の機能が障碍せられるのは、その器官の性慾性 Erogeneität 卽ち性的意義が增した場合であるとの判定を得ることが出來る。少しく滑稽な例を取るならば、恰も女中が、その家の主人と戀愛關係に陷ると、もはや臺所で働かなくなるのと同じである。若しも書字、卽ち、一つの管から白い紙の上に液體を注ぐことによつて起る字を書くことが、性交の象徵的意義を帶び來る時、又は、步行が母なる大地に臼くことの象徵的代理を得來る時には、書字も步行も制壓せられるのである。何故ならば、これは恰も禁じられたる性的行動を取るに等しいからである。自我は、此等の自分に屬してゐる機能と、エス Es との軋轢を避けるために、新しい壓迫現象を生じないで濟むやうに此の機能を斷念するのである。

他の制止は、明かに自己刑罰の働きによつて生じて來る。卽ち職業的活動の制止の如きはこれに屬することも稀でない。自我は、此の場合には關係しない。何故ならば嚴格なる**超自我** Uber-Ich が禁ずる處のものを自我が利用し、その結果を自分に收めることに當るから。故に、自我は、却つて此の作用をも、超自我との軋轢を示さないために斷念するのである。

自我の更に一般的な制止は、別の單純なる機制から生ずる。自我が、特別に困難なる心理的問題によつて要求を受けた時、例へば大なる感情抑制、卽ち悲哀の如きものに依つて、又は高まつた性的空想を抑制する必要等に迫られたやうな時には、自我は、自分が處理し得可きエネルギーを、多くの場所に費すことを制限せねばならぬ。恰も投機者が、彼の企業に當つてその資本を固定してしまつた場合の如くであつて、遂にはそのエネルギーに不足して來るのである。斯かる強い、然し短期の一般的制止の好例は、或る強迫症患者に見ることが出來た。卽ち或る者は、發作的に一日乃至數日の痲痺的疲勞に陷るのであるが、それは明かに制止の鬱積から來たものである。此處から一般制止、卽ちその制止に依つて、抑鬱狀態 Depressionszustand 及びその特に重い場合として憂鬱症 Melanchorie が現れ來ること等、制止の理解へ一つの道が見出されねばならぬであらう。

斯くて結局、制止に關しては次の如く言ふ可きであらう。卽ち制止は自我機能の制限である。それ

が或は要心よりか、或はエネルギー貧困の結果として起るか、何れも起り得るのである。此處に制止と症狀とが何で區別せらるるかがわかつて來た。卽ち症狀は自我のうちでの、又は自我に關する過程ではない事が明かとなつて來た。

第　二

症狀形成 Symptombildung の根本要領は、既に久しい前から研究せられてゐる。そして多分爭ふ可からざる程度に提言せられてゐる。症狀は、滿足し難き本能のある證據であり、又は、代理であつて、卽ち壓迫現象の結果である。壓迫現象は結局は超自我の命令に依つて、エスのうちに生じた本能充塡を、自我が共有しようと欲せぬ時に、自我から出で來るものである。自我は壓迫に依つて、その所有者が好まぬ如き衝動の表象を、意識から除外することを得る。精神分析は、此の表象が意識せられざる形式で長く保たれてゐることを證することが出來る。然し今までに闡明せられてゐる程度だけでは、時として未決の困難が生じ來るのである。

壓迫現象の際に於ける過程について、從來我々のなし來つた叙述では、意識より除外せられると言ふ結果を特に力強く主張してゐたのであるが、疑問は他の點から生じて來る。卽ち問題はエスのうちで賦活せられた、滿足を要求してゐる本能衝動の運命は如何になりゆくかと言ふ點に存する。此の答は間接のものであつた。卽ち壓迫現象の過程に依つて、期待せられてゐた滿足の快感は、却つて不快

に變化せられるのであると言ふことであつた。其處で更に、然らば本能滿足の結果が何故に不快であり得るかとの問題が生じ來るのである。我々は、次の如く言ひ現して、この關係を闡明せしめんことを望む。卽ちエスのうちで企圖せられた興奮經過は、壓迫現象だけでは終らぬもので、却つてそれは自我が、その興奮經過を制止するか又は轉向せしめんとするかせねばならぬのである。卽ち斯くして、壓迫現象の場合の「情緖變轉 Affektverwandlung」の謎が解けるのである。然し、我々はこれで自我は、エスのうちの諸過程に對して廣く行き亙る影響を現すことが出來るものであることを承認したことになる。而も尙、如何なる道に依つて、自我に對して此の如き速かなる力が發現し得るかと言ふ事を學ばねばならぬことになる。

余は、此の如き影響を自我が有するのは、自我が、認識系統と親しい關係を有するに依ると思ふ。此の親しい關係は自我の本性上出で來りたるもので、又自我がエスより分化して來たことによつて生じたものである。此の系統卽ち W-Bw 系と名付けた系の機能は、意識現象と結合してゐるものである。この系は外部からのみならず內部からも興奮を受けとり、そしてその興奮によつて生ずる快、不快感覺に依つて、總ての精神的現象の經過を、快感原理 Lustprinzip に依つて指導せんと試みる系である。我々は自我はエスに對しては殆ど、無力であると考へてゐる。然し、自我が、エスのうちに

於ける本能過程に對して反抗する時には、自我はその意圖を、殆ど萬能とも稱す可き快感原理の審判官 Instanz の助力を得て達しようとするため、**唯不快信號** Uulustsignal を與へればよいのである。此の如き情況をこれだけで一眸のうちに觀察せんとするならば、これを他の領域からの例で述べて見ればわかる。或る國に於て、或る徒黨が群衆の傾向から來てゐる當然の結果を阻止せんと欲したとするに、此の少數でそれをなすには、新聞によつて力を得、新聞を通して、所謂「輿論」なる獨裁力を作り、依つて計畫せられたる結果を止めしむるやうになすことになるのである。

一つの答が與へられると直ちに更に進んだ疑問が提起せられる。卽ち然らば不快信號を生起せしむるために用ひられるエネルギーは何處より來るのであるか。これに對しては直ちに次の如き思想が浮び來るであらう。卽ち內部に於ける好ましからぬ過程を防禦するには、外界よりの刺戟に對する防禦と同樣な方法が生ずるに違ひないこと、從つて、自我は內部の危險に對しても外部の危險に對すると同樣な防禦方法を行ふに違ひないことである。外界の危險の場合には、生物は逃げる試みをなす。卽ち先づ第一に、危險なるものの認識からその充塡を剝奪する。後に、斯くの如き筋活動をなしたことは、最も効果ある方法であつたことがわかる。何故ならば、危險の認識に打ち勝つことが出來ない時には、危險の到達區域を逃げることが最もよい方法であるからである。此の如き逃亡の試みは、壓迫

現象と同じものである。卽ち自我は壓迫せられた本能代表から、その（前意識的）の充塡を先づ剝奪する。そしてそれを不快（恐怖）の脫離のために應用する。壓迫現象の場合に如何にして恐怖が生ずるかと言ふ問題は單純ではない。常に、自我こそは本來の恐怖の在り場所であるとの思想を固執してよい。依つて、壓迫せられたる衝動の充塡エネルギーは、自動的に恐怖に變轉しゆくとの、既に述べた理解を繰りかへして示してもよい。既に余は曾つて斯く言ひ現して置いたが、これは唯現象學的記載であつて、超意識心理學的の表現ではない。

上述のことから更に新しい疑問が生ずる。卽ち前意識的自我充塡の退却の如き單なる剝奪又は排出過程によつて、我々の前提に從へば高められたる充塡の結果であるとせらるる不快や、恐怖が出て來ることが如何にして經濟的に可能であるかとの疑問である。余はこれに答へる。此の原因は經濟的には說明せられない。壓迫現象の際に、恐怖は新たに生じ來るのではない。其處に存在する追想像が情緒狀態となつて出て來たものであると。此の恐怖の――情緒としての――起因は如何、との更に新しく生ずる疑問に對しては爭ひ難き心理學的の根柢を離れて、寧ろ、生理學との限界領域に步み入ることとなる。情緒狀態は、精神生活に對しては、既に古代からの外傷性の經驗の沈澱物として同化してゐるもので、追想象徵として、同じやうな情況を生ずれば、眼醒め來るものである。この情緒狀態

は、後天的に個人的に獲得したるヒステリー症的の發作と同じものであるとなし、而もその典型であるとなしても、余は誤りを犯したとは信ぜぬのである。人類又は人類に近い生物にあつては、出産Geburtが、最初の個人的の恐怖經驗として、恐怖情緒の表現に、特性ある標徴を與へるものと見得るであらう。然し我々は、此の如き關係を餘り高く評價してはならぬ。又その關係を認める時に、危險の情況に對する感情表徴は、生物學的の必要であつて、必ずしも出産のみでなく、種々の場合に生ずるものであると云ふ事を見逃がしてはならぬ。余は恐怖發生の際には常に、出産情況の再生に似た或る者が、その精神生活のうちで生ずるのであると言ふことを假定することは餘りに不當であると思ふ。起原的にはこの如き外傷性の再生であるヒステリー症の發作でも、此の特性を長く維持するや否やと言ふことは、曾つて確實ではなかつた。

余は他の場所に於て、我々の治療的勞作に關係する多くの壓迫現象は、多くは後壓迫を受けたものであることを述べたことがある。これはこれより先に原壓迫現象なるものがあつたことを前提せねばならぬもので、それが新しい情況へ、その引力的影響を發揮し來つたのである。然し此の如き壓迫現象の前段階及び背景をなすものについては尙知らるるところ極めて少い。壓迫現象に於ける超自我の役目を高く評價し過ぎる事も危險がある。斯かる場合、超自我の出現が、原壓迫現象と、後壓迫との

間の限界を形成するのかどうか、判斷することが出來ないからである。前者は――甚だ强力で――超自我が分化してくる以前にも、常に恐怖發生を結果する。但し、興奮の過剰强度及び刺戟防禦の破綻の過剰の如き量的動機が原壓迫現象の直接なる素地であることは全く承認す可きことである。

刺戟防禦への言及は、我々をして次のことを思ひ出さしめる一標語である。即ち壓迫現象は、二つの區別せらる可き情況より生じ來る。その一は好まざる本能衝動が、外界の認識によつて眼醒されて來た場合であり、他の一つは斯くの如き覺醒がなくとも、內部より浮び上り來る場合である。後に再びこの差異については言及するであらう。但し、この刺戟防禦なるものは本來、外界よりの刺戟に對してのみあるもので、內的の本能要求に對してあるものではない。

自我の逃避の試みを硏究してゐる間は、我々は尙症狀形成には距たつてゐる。症狀は壓迫現象に依つて侵害せられた本能衝動から生じてゐる。若しも自我が、不快信號の要求に依つて、その企圖を達したならば、本能衝動は完全に抑壓せられて了ふので、我々は如何にして目的が達せられたかについては少しも知らぬであらう。其處で我々は、多少とも失敗してゐる壓迫現象の場合を硏究して見なくてはならぬ。

一般的には本能衝動は、壓迫せられるにも拘らず、一つの代理を見出すものであるが、この代理も

亦強く萎縮した、移動した、そして制止せられたものである。この代理を見出すことが滿足を得る事ではない。この代理が完全に行はれても、何等快感を生じない。却つて、强迫的の特性を持つて來る。然し、滿足の經過が症狀に迄低下する際に、壓迫現象は、尙他の點にその力を發揮する。卽ち代理過程は、出來る限り、運動となつて排出することを妨げられてゐるもので、これが出來ないので、自身の身體の壓迫現象のうちで消耗し盡さねばならず、且つ外界世界に干渉することが許されぬ。斯くの如き行動となることを禁ぜられてゐるのである。斯くて我々は、壓迫現象に當つて、自我は、外界の實在の影響の下に働き、依つて代理過程の結果をも、此の實在から遮斷するのであると考へるのである。

自我は外界に對して行動を行ふ道をも有するし、意識に到達する道をも支配してゐる。壓迫現象に於ては、自我はその力をこの二つの方向に現すのである。本能代表者が、その一つを、本能衝動それ自身がその一つを、感知するのである。自我の力を斯く認めることは、曾つて「自我とエス」なる研究論文のうちに、その自我の場所について提言して置いた記載と、果して一致するかと問はねばならぬことになる。我々はその論文に於て、自我のエスに對する、及び自我の超自我に對する關係を述べて置いた。自我がこの兩者に對して、無力であること、及び恐怖に傾いてゐることを述べて、自我が一

所懸命に主張する自負の假面を剝いで置いた。此の判斷は、爾來精神分析學上の文獻に、强い反響を見出したのである。自我のエスに對する弱さ、卽ち我々のうちなる惡魔的のものに對する合理性の弱さが、更に深く數多くの贊成によつて主張せられた。遂に、此の如き原則を、精神分析學的「宇宙觀」の基礎柱石となさんとするに至つた。壓迫現象の作用樣式へのこの洞察こそ、分析學者を、斯くも極端に同時代者から引きはなしたのではないであらうか。

余は決して、世界觀思潮の製作者ではない。それは哲學者に委す可きである。然し哲學者と雖も公然と案內書を持つてゐる。それがなくては彼等と雖も人生の旅を遂行することは出來ないのである。哲學者が、彼等の高い要求の立場から、我々を見下してゐる、その輕蔑を、我々は謙遜して受け入れよう。然し我々と雖も、我が自己愛的不遜を全く否定することは出來ないから、せめて次の如きことを述べるに依つて自ら慰めとしよう。卽ち總ての「人生の指導者」なるものは忽ちにして古くなつた。そして、忽ちにして案內書の改版を必要とせしめたものは、正に我々の、短見且つ小なる業蹟ではなかつたか。而も此の我々の業蹟は最も新しい新興の案內書として、古い、そして氣安い、且つ完成せられ居る教理問答書に取つて代らうとしてゐるのではないかと。我々は科學が從來、此の世界の謎については、如何に僅かの光しか投げ得なかつたかを明かに知つてゐる。又哲學者の總ての騷ぎも、何

物をも齎しはしなかつたことを知つてゐる。唯忍耐强い業蹟の追求、總てのものに確實さを要求しつつ運びゆく研究だけが、のろさはあるが變革を行ふことが出來るのである。暗黑を彷徨ふ者、歌を歌つて、その不安焦燥を否定せんとす。されどそのために、道は少しも明らみはせず。

第三

自我の問題に再び歸らう。矛盾が現れてくるのは我々が抽象概念を餘り固執すること、及び複雑なる事物關係を、或る時は此の、或る時は彼の側をのみ選び論ずることから來るのである。自我をエスより區別する事は正當であると思はれる。卽ち此の區別は、一定の關係から是非さうせねばならぬのである。然し他面より見れば、自我はエスと同一物で、唯その特に分化し來つた一部である。此の一部を全體に對立して考へて見るか、又は此の二つのものの間に生ずる實際の葛籐を見るならば、此の自我の弱さが明かとなる。然し自我がエスと結合して、見分け難くなつてゐると、甚だ強いことがわかる。同樣のことが、自我と超自我との間にも存する。多くの情況に於ては、この兩者は一致するもので、我々は此の兩者の間に一定の緊張があるか、又は軋轢がある場合にのみこの兩者を區別する事が出來るのである。壓迫現象の場合に對しては、自我は一つの統帥をもつてゐるが、エスはさうではない。だから自我はエスの一部が統帥編成せられたものであると言ふことが出來る。このことは確かな事實である。自我とエスとが二つの異つた陣營であると考へるのは間違つてゐる。壓迫現象に依

つて自我はエスの一部を抑壓しようと試み、その他のエスの部分は、この攻擊せられた部分を助けようとするし、且つ自我の强さに對して自己の强さで對抗しようとする。このことは、屢〻生じ來るが、然しこれは壓迫現象の初發情況ではない。原則としては壓迫せられた本能衝動は孤立して存するのである。壓迫現象の活動は、自我の强さを示すが、同時に、自我の無力に對する、及びエスの各個の本能衝動の無影響性に對する一つの證據ともなる。何故ならば、壓迫現象に依つて症狀となる過程は、自我編成には無關係に、且つ壓迫現象とも無關係に、その存在を主張するからである。尙その症狀過程のみならず總てのその誘導體が同じ特權を共有するのであるから、次の如く言はねばならぬ。卽ち此は治外法權である。その誘導體等が自我編成の一部と聯合的に一致する所である。然しその場合此の者を自分の方へ引きつけ又は此の者を獲得して、自我の消費を籍りて自ら擴がるや否やは不明である。旣に永き前より信じられてゐた一つの譬喩は、症狀を、一つの異物と見ることであつた。この異物は止みなく、刺戟及び反應現象を、これが埋め込まれてゐる組織の中で行ひつつあるものとして見ることであつた。好ましからぬ本能衝動に對する防禦爭鬪が、症狀形成によつて止んで了ふ。我我の見る限りに於ては、此のことは、旣にヒステリー症性轉換 Konversion の際に於て可能である。然し原則として、其の經過は別もので、壓迫現象の最初の活動についで、永續する又は決して止むこ

くるのである。

とのない後作用、即ち本能衝動に對する戰ひが續けられて症狀に對する戰ひはその續きとして生じて
このやうな第二次的の防禦爭鬪は、二つの外觀――而も互ひに反對の表現を有する――として生じて來る。即ち先づ一面には自我は、その本性上より、我々が改革作用又は調和作用と判斷す可き何かを企てんと强ひられてゐることである。自我は一つの統帥編成であるから、總てのその成分の間では、互ひに影響し合ふこと、又は互ひに、交通し合ふことが可能である。自我の脫性慾せられたエネルギー desxualisierte Energie は、結合及び同化への努力となつて現れて來る。そして此の合成への强迫は、自我が力强く發育すればするほど常に增すのである。故に自我は症狀の異端又は孤立を止めしむるやうに試み、如何にしてか自分に結合し、又は彼の編成へ結びつけることによつて同化せんとするあらゆる可能性を利用すると言ふ事は理解出來るであらう。我々は、此の努力は旣に症狀形成の活動にも影響することを知つてゐる。これについての一つの古典的の例はヒステリー症の症狀で、それは滿足要求と、懲罰要求との間の和解として現れて來る。斯くの如く症狀は超自我の要求の充足として、先天的に自我に關與してゐるが、他面に於ては症狀は自我の壓迫せられたるものの位置及び壓迫せられたものが、やがて自我編成へと侵入しゆく門戶を意味してゐる。症狀は故に、種々雜多の

充塡の言はば限界位置である。總てのヒステリー症的第一次的症狀は、斯くの如くして生じ來るものであるかどうかは、尙注意深き經驗を必要とする。更に此の疾患の進む經過に於て自我は恰も次の如く說明せられるやうな觀を呈する。卽ち症狀は曾つて其處にあり、決して排除せられず、のみならず、斯くの如き情況を却つて喜び、且つ大いにこの如き情況より利益を引き出すのである。內部世界に於ける自我とは別の部分、卽ち症狀に依つて代表せられるものに對して順應が生じて來ること、恰も、自我が實在の外界世界に對して現し來るが如き順應が生ずる。此のことは十分行はれる素地がある。症狀の存在は、その作用に一定の妨害を與へ、この妨害が、超自我の要求を困難ならしめ又は外界世界の要求を押しかへすことが出來るかも知れぬ。故に症狀は漸次に、より重要なる興味の入り込み來ることを引き受ける。症狀は、自我に對して益〻缺く可からざるものになり、自我と益〻親しく結合して、自己主張に對して價値を有するやうになる。但し眞の異物が治癒してゆく過程で、これと同じやうな經過をとるのは極めて稀である。症狀に對する斯くの如き第二次的の順應の意義は、言ひ換へれば自我は症狀を唯その利益を取るためにばかりに作るのであると誇張することも出來るのである。これは恰も、戰爭で傷ついたものが、唯その傷病年金によつて働かずに生き度いためにのみ、自分の足を切り落して貰ふのと同樣に、正しくもあり亦不正でもある。

他の症狀形態、例へば强迫神經症者、又は偏執病 Paranoia 等の症狀は、自我に對して更に價値がある。それが自我に對して利益を齎すがためではなく、却つてそれが自我に對して缺く可からざる自己愛的滿足を齎すがためである。强迫神經症者の、系統體形成 Systembildung は、自分は特に純な、或は良心の鋭い人物であつて、他人より善良であると思ひ做すことの欺瞞によつて、自分の固有の愛に自ら阿ねることである。偏執狂に於ける妄想形成 Wahnbildung は、その患者の明敏に對して、又その患者の空想に對して、活動の餘地を提供し、容易に代るものがないと思ひ込ませるにある。總て上述の關係から、我々が神經症の（第二次的の）病症利得 Krankheitsgewinn と呼んでゐるものが出て來るのである。この利得は、症狀と同化せんとする自我の努力に對して助けを與へ、且つ症狀の固定を强める。自我の症狀に對する此の戰ひに對して我々が分析的方法で自我に助けを與へようと試みる時、我々は自我と症狀との間のこの宥和的結合を抵抗として感ずるであらう。その理由を解くことは容易ではない。自我が症狀に對して應用する此の兩態度は、實際は互ひに矛盾してゐるものである。

防禦爭闘のもう一つの一面は、尙親しくない特性を有してゐる。卽ち壓迫現象の方向を更に繼續せしむる事である。然し、自我を、その自家撞着のために非難してはならぬ。自我は平和を愛する。故

に症状を同化し、それを自我全體のうちに取り入れて了ひ度いと望む。障碍は症状の方から來る。卽ち症状は、正しい代理として、又壓迫せられた衝動の誘導體として、その役目を繰りかへし、その滿足を常に新たにせんとし、斯くて自我は、再び不快信號を與へ、そして防禦をなさねばならなくなるのである。症狀に對する第二次的の防禦爭鬪は樣々である。種々雜多の舞臺で行ひ、且つ雜多の方法を用ひる。我々はこの者については、症狀形成の個々の場合をその研究對象として取らざる以上、多く言ふことは出來ぬのである。其處で、恐怖の問題に入り込む機緣が與へられたわけである。恐怖の問題は旣に永い前より後ろの方にあつて機會を狙つてゐた問題である。それはヒステリー性神經症の形作る症狀から發論するのが最も良い。强迫神經症、偏執病、又は他の神經症の場合の症狀形成に關する前提についてはは尙研究が不十分であるから。

第四

我々の觀察した第一の例は、小兒性ヒステリー症の動物恐怖症 Tierphobie である。總ての點に於て定型的の例は、「ハンス少年」の馬恐怖症である。（註）

（註）「或る五歳の子供に於ける恐怖症の分析」、全集第八卷參照

研究は我々の抽象能力を以て之を行ふのであるから神經症性病症の實際の例では、我々の期待する所よりも複雜であることは當り前のことである。壓迫せられたる衝動に於て、何がその症狀代理であるか、又はその壓迫現象の動機は何處に在るか等を先づ指南するだけで、すでに餘程の勞作が必要とせられるであらう。

ハンス少年は、町を歩くことを厭うた。何故ならば馬に對して恐怖があつたからである。このことは素材である。このうちで何が症狀であるか。何が恐怖の發生であるか。恐怖對象の選擇であるか、或は自由歩行の遮斷であるか。或は此等のものが同時に皆症狀なのであるか。彼が自ら拒絕する滿足は何處にあるか。何故にそれを拒絕せねばならぬのであるか。

此の例には、難しいものは餘り多くはないと言へるであらう。馬に對する理解し難き恐怖がその症狀である。町を歩くことが出來ないと言ふのは一の制止現象である。自我が、恐怖症を起さしめまいとして命ずる制限なのである。この最後の點についての説明は、言ふ迄もなく正しいことがわかるであらうから、此の制止については以下の討論に於ては觀察外としよう。此の例に於て、第一に眼につく知見は、現れてゐるものは眞の症狀ではなく、眞の症狀は現れてゐない點である。卽ちよく精査して見ればわかる如く、これは、馬に對する不定の恐怖ではなくて、寧ろ不定の恐怖的期待、卽ち馬が自分を咬むであらうと言ふ期待に關係してゐるのである。此の內容は意識から遠ざからうと努力してゐる。そして恐怖と、その對象とがわかつてゐる許りの、不定の恐怖症によつて置き換へられようと努めてゐる。此の內容が果してその症狀の核となり得るであらうか。

分析的研究によつて我々の前に明かにせられた、此の少年の全心理的情況を觀察するに非ざれば、この上は一歩も進むことは出來ない。此の少年はその父親に對して、嫉妬的の、敵意的の、エディプス形成を持つてゐることがわかつた。その父親は、この少年が、爭ひの原因である母親を考へに入れない場合には、心から愛してゐる人である。卽ち、對立兩存的軋轢 Ambivalenzkonflikt 言ひ換へれば、根據ある愛と、これ又少からず正しい憎みとが、同じ人に向つて向けられてゐるのである。故

に此の少年の恐怖症は、此の軋轢を解放せんとの試みである。斯かる對立兩存的軋轢は甚だ屢〻見るところで、此のものの他の定型的の發生例をも我々は知つてゐる。此の如き場合には、この二つの互ひに鎬を削る衝動の一つの方が、原則としては情愛的 Zärtlichkeit の衝動の方が、甚しく强度を增し、依つて他の一つが消失するものである。この情愛的の方が、過剩であること、及び强迫的であることは、我々に此の如き形成は單一に存在するものではないこと、及びそれは常にその對立者を抑へつけて置かうと警戒してゐることを示してゐる。又、此の事が卽ち我々が反動形成（自我に於ける）による壓迫現象として、記載してゐる經過を構成せしめるのである。ハンス少年の如き場合は、斯かる反動形成 Reaktionsbildung は何もない。然し、對立兩存的軋轢から生じ來る道は、明かに澤山にある筈である。

此の場合に確實に我々が知つてゐるものは少しく別のものである。壓迫を受けた本能衝動は、實は父親に對する敵意ある興奮なのである。精神分析はこの證據を與へる。卽ち馬が咬むと言ふ觀念の由來は分析でわかる。ハンスは曾つて馬が倒れて、自分の遊び友達が、それから落ちて怪我をしたのを見たことがある。その友達は彼と、「馬ごつこ」をして遊ぶ友達であつた。此のハンスの場合には父親が落ちて、その友達や馬のやうに怪我をすればよいと言ふ願望衝動が構成されるのであると判定す

るのが正しい。一つの觀察せられたる手がかりから、更に臆測を逞しうして見れば、此の願望は、父を除去せんとする、恐らくは餘り臆病ならざる表現なのであらうと言ふことが出來る。斯くの如き願望は、自分が進んで彼を除外せんとする希望、エデプス複合の殺人的衝動、と同價なものである。

此の壓迫せられた本能衝動からは、それに對する代理、即ち我々が馬恐怖性で臆測するが如き代理が出て來る道がわからぬ。ハンス少年の心理的情況を簡單にするために、我々は、この幼年時の動機と、この對立兩存性とを除外して見よう。或る家に若い下僕があつて、其の家の女主人を愛してゐるとする。そして彼は彼女の方からも寵愛を受けてゐたとする。從つて、彼は彼よりも強いこの家の主人を憎惡し、彼を除外せんことを望んでゐたとする。此の如き情況にあつては、その結果として、此の主人の復讐を恐れることになり、主人に對して恐怖の狀態が生じてゐたとする。これはハンス少年の馬に對する恐怖症と同じである。然し、此の樣な恐怖症では、恐怖を症狀として記載することは出來ない。ハンス少年の場合には、その母親を愛してゐるのであるから、父親に對する恐怖が示されるのであつたが、我々はそれを神經症又は恐怖症と呼ぶことは出來ない。唯これは全く著明なる情緒的反應と言ふのみである。これを神經症となさしめてゐるものは、唯一つ他のもの、即ち父親の代理と

して馬を恐れることにあるでのある。此の如き移行 Verschiebung こそは症狀と言ふ名稱を要求し得るものである。此處に示したものは對立兩存的軋轢を、反動形成の助けなしで落着せしむる如き機制の一つである。此の移行は、トテム的の思考樣式の遺傳的痕跡が、此のやうな幼年期にあつても尙容易に蘇生すると言ふ事情に依つて、可能であり、且つ容易に生じ來るものである。人間と動物との差異は、尙認められずにあり、後年の如く特に高調せられてはゐない。大人で、驚嘆せられる、且つ恐れられてゐる人物が、人の羨しがる大きな動物と、而も、この動物に對しては、屢々危險を警告せられることのある動物と、同じに見られてゐる。對立兩存的軋轢は、斯くして、同じ人物に對して輕減せられることはない。却つて、他の人をその代理對象として、自分の衝動の一つに差しかへることに依つて變轉してゆくのである。

然し、我々の觀察した範圍內に於ては、ハンス少年の恐怖症の分析は、他の點については全く面目を異にしてゐる。症狀形成のために行はれる變形は、壓迫せられる可き本能衝動の、代表者（卽ち表象內容）に於ては全く現れないで、却つてそれよりは全く異る卽ち本來の好まざるものに對して生ずる反應に相當して現れて來る筈である。卽ちハンス少年は、馬に對する彼の恐怖の代りに、馬を虐待し、馬を打たうとしたり、そして馬が倒れ傷つけられ、遂に痙攣して死ぬ（足でもがく）のを見よう

と言ふ、願望を明かに示してゐたならば、我々の期待は旣に滿足なことになる。

何か此の種のものが、彼の分析中に實際に現れて來た。然しそれは神經症にはなかつたものである。そして――特に――彼が實際には、此の如き敵意を、唯父親に對する代りに馬に對して向けてゐて、而も主症狀に達してゐるとしたならば、我々は、彼が神經症であるかどうかを判斷することが出來なかつたであらう。其處には何か、我々の言ふ壓迫現象とも、又は我々の言ふ症狀の定義とも、協調しないものがある。その一つは、勿論直ちにわかる。卽ちハンス少年が實際に、馬に對して此の如き態度を持つたとしたならば、衝動的な、攻擊的な本能衝動の特性は壓迫現象によつて全く變化せられず、唯その對象を變化したのみであることになる。

壓迫現象として現れて居らぬやうな壓迫現象も屢々存する。ハンス少年の恐怖症の場合には、尙それが多い。尙どの位あるかは、我々は更に分析することによつて知るのである。

ハンス少年はその恐怖症の內容として、馬に咬まれると言ふ表象をもつてゐたことは旣に述べた。我々は今、動物恐怖症の他の例、この例では狼が恐怖動物であつたが、同時に父親代理の意義をも有してゐた例をとつて、その原因に一瞥を拂はねばならぬ。(註)

(註)「小兒神經症の病歷から」(全集第八卷)參照

一つの夢を分析してわかつた事だが、此の子供には恰もお伽噺の七つの小山羊の話のやうに、狼に喰はれると言ふ恐怖が生じて來た。ハンス少年の父親も、その子供と馬ごつこをして遊んだ事があつたので、確かに恐怖動物の選擇に對して決定的となつた事が判つたのであるが、同様に、余の第三の十年間に分析をなしたこの露西亜人の例に於ても、父親がその子供との遊戯の時に、狼を眞似して、戯談に喰つて了ふと言うて、おどかしたことは、確かにあつたらしいのである。更にその後、余は第三の例として若い亜米利加人に、何等の動物恐怖症も生じはしなかつたが、然し、偶然それがないことによつて却つて他の例を理解せしむるに役立つものを見出した。この例では空想的な童話を聞いたことから性的興奮が既に萠した。それは、誰かが、彼にアラビアの酋長が、何か食べられる物質で出來てゐる人間（薑入菓子人形）を、喰ひ盡さうと追ひまはすと言ふ童話をしたことから生じたのである。この食べられる人間と自分とを同一視した。酋長は父親代理として容易に知られるところであるが、此の空想が、彼の自慰操作の最初の素地となつた。父親に喰はれると言ふ表象は、然し最も原始的なお伽噺である。卽ち神話（クロノス）からの類推であり、動物生活からの類推であることは一般に直ぐわかるところである。

斯く解き明かしたにも拘らず、この如き表象内容は我々には甚だ珍しいところであつて、それが子

供にあつたとしては信じ難きところがあるやうである。勿論、我々も亦その內容が示してゐると思はれるものをたしかに意味してゐるかどうかは、わからない。又如何にして斯かる內容が恐怖症の對象物となつたかはわからない。唯分析的研究の經驗が、全く爾か考へねばならぬとの敎示を與へるのである。分析的研究は、父親に喰はれると云ふ表象は、受動的情愛的衝動の退行し、且つ、低下したる表現であること、性器的色情的に對象としての父親より愛されることを望むことであると敎へる。此の例の病歷を追求して見ると、此の意味づけの正當なることには何等の疑ひをも挾むことが出來ない。性器的衝動は、口愛的リビド編成より虐待嗜好的編成への移行期に打ち勝つて表現せられる場合には、もはやその情愛的意圖は少しも現れぬやうになる。その時退行的表現となつて現れた、代表者の代理に關係してゐるのであるか、又はエスのうちにある、性器に向けられたる衝動の、實際的の退行的低下に關係してゐるのであるか、これは容易に決定することは出來ぬ。露西亞人の「狼の人」の現れた例の病歷は、後者の可能性に對して全くよく一致する。何故ならば彼は決定的の夢を見てから、「不快なる」喧しい、虐待的の人となり、そして遂に眞の强迫神經症になつてしまつたのであるから。この各〻の例に於て、我々は、壓迫現象が、自我にとつて、好まぬ本能衝動から逃れるために自由になる唯一の方法ではないと言ふ洞察を得るのである。若しも自我に、本能を退行現象に齎すことと

が出來るならば、壓迫現象が出來るよりも、より勢力的に、より根本的に、妨害することが出來るであらう。依つて確かに、先づ第一に退行現象を强制して見て、然る後に壓迫現象を試みてみるであらう。

「狼の人」の場合にあつても、又は少しく單純なるハンス少年の場合にあつても、事物關係は、更に多くの他の判斷を生ぜしめる。然し、既に二つの豫期せざりし洞察を我々は得てゐる。此の二つの恐怖症にあつては、壓迫せられたる本能衝動は、父親に對する敵意であることは疑ひを入れぬところである。この本能衝動は對立物への變換 Verwandlung のプロセスによつて壓迫せられる。即ち父親に對する攻擊の代りに、その本人に對する父親からの攻擊（即ち復讐）が來るのである。斯くの如き攻擊性は、明かに虐待嗜好的リビド時期に根ざしてゐるのであるから、それは、ロ愛時期への一定の退行を要する。即ちハンスの場合には、咬まれることを意味し、露西亞人の例の場合には、喰はれることとなつて明かに導入せられてゐる。然しこの外には分析學は下の如き疑ひをも確定せしめた。即ち同時に他の本能衝動も壓迫を蒙ること、父親に對する情愛的の受動的衝動とは反對の意味のもの、即ち既に性器的（男根的）リビド編成に達してゐるものも壓迫を蒙ることである。後者は、壓迫過程の最終結果として意味深いものであるやうに見える。これは更に進んだ退行現象を蒙り、そして恐怖症

の內容に對しても一定の影響を與へる。我々が單に本能壓迫のみと考へてゐた處に、倘實は斯くの如き二つの過程があつたのだと言ふことを認めねばならぬ。而もこの二つの相會した本能衝動、卽ち――父親に對する虐待嗜好的攻擊、及び父親に對する情愛的受動的欲望――は對立する一對をなしてゐる。しかのみならず、ハンス少年の病歷を正しく調べるならば、我々は彼の恐怖症の形成によつて、母親に對する情愛的對象充塡が高められてゐると言ふことを認めるであらう。これについては、恐怖症の內容は何物も語つてはゐないけれども。ハンスの場合には――露西亞人の場合にはそれほど明瞭ではないが――殆ど總てのエディプス複合の組成、卽ち父親に對する敵意的と同時に情愛的受動、及び母親に對す情愛的衝動に關する壓迫現象がある。

壓迫現象の結果としての症狀形成の成る可く單純な例を硏究せんとし、そのために特に、小兒の早期に於ける、且つ透見し得ると思はれた神經症に目をつけた我々にとつて、これは望まざる合併症Komplika ion と言はざるを得ない。個々の壓迫現象の代りに、我々はその集合に打つかり、加之、退行現象に關係せねばならなくなつた。恐らくは、選ばれたる二つの動物恐怖症の分析を、全然同じ作用として攻究したことに依つて、餘計にこの混亂は增したのであらうと思はれる。今や、この二つの例の一定の區別が注意を惹いて來た。ハンス少年の場合については、確かに、エディプス複合の二

つの主群、即ち父親に對する攻擊的なるもの、及び母親に對する餘りに情愛的なるものの二群があることを言明する事が出來る。父親に對する情愛的なものも確かに存在し、而もそれは、その對立者の壓迫せられたる場合にその役目を演ずるのである。然し、それは、壓迫現象を誘發するために十分强くあつたことも、亦其の後それは廢棄せられたことも同じく證明することが出來る。ハンスは恰度、所謂「積極的」のエディプス複合をもつた正常の少年であつたやうに見える。我々が求めてゐるその動機が、彼の場合にも協力してゐることは可能である。けれどもそれを示すことは出來ない。これは材料そのものが、突き入つた分析のためには、不足勝ちであり、我々の記錄が不完全であるがためであらう。露西亞子供の例では、他の部分が不完全である。即ち女性的對象に對する彼の關係が早期からの誘惑によつて亂されて了つてゐるために、彼の場合には受動的、女性的方面が特に强く形成せられてゐること、及び彼の狼の夢の分析は、父親に對する企圖せられた攻擊のないことを示してゐる。依つて壓迫現象は父親に對する受動的なる、且つ情愛的なる慾望に關してゐることの、爭ふ可からざる證據を提供してゐる。此の場合には尙他の因子が與かつてゐることも可能である。然しそれは表面には現れて居らぬ。此の二つの例が殆ど相ひ反するとも思はる可き斯くの如き區別にも拘らず、恐怖症の終末結果は、殆ど同じであるとしたなら、他の方面からの說明が必要である。その說明は卽ち我

我のこの短い比較研究の第二の結果から來る。我々は壓迫現象の動力となつたものを何れの例に於ても知ることが出來る。又、その役目は、この二つの子供の發育が示してゐる經過から確めることが出來る。それは二つの例に於て同一である。恐怖は正におびやかされたる去勢から來てゐる。去勢恐怖から、ハンス少年は父親に對する攻撃を生ぜしめた。彼の恐怖、即ち馬が彼を咬むと言ふのは少しも故意でなく、馬は即ち彼の性器を喰ひ切り、彼を去勢するのであると補足することが出來る。然し露西亞人の子供の場合では、去勢恐怖の故に、その父親に性的對象として愛されようとする願望が廢棄せられて了つてゐる。何故ならば、彼は、彼を女性より區別してゐるところの彼の性器を犧牲に供せねば、それは行はれぬと言ふことの前提を旣に理解してゐたからである。二つのエディプス複合の形態は、一は能動的であり他は倒錯してゐるが、何れも去勢複合に依つて滅亡して了つたのである。露西亞の子供の場合の恐怖思想、即ち狼によつて食べられて了ふと言ふのは、何等去勢の意味を持つてはゐない。この恐怖觀念は口愛的退行現象に依つて餘りに遠くまで男根統帥期を距つて了つてゐる。然し彼の夢の分析は明かに去勢の意味を證明してゐる。然るに恐怖症のうちには去勢に關してはもはや何物をも現してゐないほどになつてゐるのは、寧ろ壓迫現象が完全なる勝利を得た證據である。

さて此處に、豫期せざる結果に到達した。即ち兩例共に壓迫現象の動力は、去勢恐怖である。馬に

咬まれる。又は狼に喰はれて了ふと言ふ恐怖内容は、父親に依つて去勢せられると言ふ内容の變形せられた代理である。此の內容が、本來壓迫を蒙つてゐるものである。露西亞の子供の場合には、この內容は彼のうちなる男性が反抗するために成立することが出來なかつた一つの願望の表現であつた。ハンスの場合にあつては、一つの反動で、その反動によつて攻擊が反對のものへと變化して了つたのである。然し、恐怖症の本態をなす處の恐怖情緒は、壓迫現象の過程からも、壓迫せられた衝動のリビド的充塡からも生ずるものではなくて、壓迫せられたるもの自身から生じ來るものである。動物恐怖症の恐怖は變形せられざる去勢の恐怖である。而も同時に實在恐怖、即ち實際に差し迫つてゐる、或は、實在であると判斷せられる危險としての恐怖である。此處では恐怖が壓迫を作るのであつて、我々が以前に考へた如く、壓迫が恐怖を作るのではない。

余は屢々壓迫現象に依つて、本能代表者は變形せられ、或は移動せられる等のことがあるけれども本能衝動のリビドは恐怖に變化してゆくのであると言ふ原則を與へてもいいであらうと考へた。これは考へるのは餘り工合のよいことではないが、さりとて否定す可きものではない。此の原則を證明するに絕好である筈の、恐怖症の研究も、これを確立することが出來ない、のみならず却つてこれに直接に反するが如き觀がある。動物恐怖症の恐怖は、自我の去勢恐怖である。尙根本的研究は足らぬ

が、臨場恐怖 Agoraphobie は、一種の試行恐怖 Versuchungsphobie で、而もそれは發生上は去勢恐怖に關係してゐるに違ひないものであるやうに見える。斯く考へれば、多くの恐怖症は、現在我々が概觀してゐる限りに於ては、リビドの要求に對する自我の恐怖に歸着するのである。斯かる場合には常に、自我の恐怖傾向が、第一次的のものであり、且つ、壓迫現象への動機である。決して恐怖は、壓迫せられたリビドより出て來ない。余は以前に壓迫現象の後で、豫期せられるリビド出現の代りに、恐怖の一定量が現れるのであると言うて滿足して居つたが、余は今日でもこれを撤回せずともよいと思ふ。この記載は正しくもある。そして壓迫せらる可き衝動と、結果として生じた恐怖の强度との間に、この主張に相當するものが成り立つことは成り立つ。然し余は曾つて、これで單なる記載より以上のものを與へてゐると信じた。余は、リビドの恐怖への直接的變化の、超意識心理學的過程を知つたと考へてゐた。然し、余は今日ではこれ亦固執することは出來ない。以前にあつても、如何にして斯くの如き變化が完成せられるやを説明することが、余には出來なかつたのである。

何處から一體余は、斯くの如き變化があるとの思想を得たのであつたか。當時、自我のうちに於ける過程と、エスのうちに於ける過程とを、區別することには、尙甚だ遠かつたが、これは現實神經症の研究から得たものである。余は一定の性的實行、例へば中絶性交 Coitus interruptus、空虛興奮、

満足を制止せられ、又は中絶せられ、又は轉向せられた時に生ずるのであることを發見した。性的興奮は、リビド的本能衝動の現れであるから、リビドは斯くの如き障碍の作用に依つて恐怖に變化しゆくことを假定するも惡くないやうに見える。此の觀察は今日尙正しい。ところが他面、エス過程のリビドは、壓迫現象の生起することによつて、障碍を蒙るものであると言ふ事は否認することが出來ない。尙又、壓迫現象の場合に恐怖が本能衝動のリビド充塡から形成せられると言ふ事も、今なほ正しいであらう。然らば、恐怖症の恐怖は、自我の恐怖であること、自我のうちに形成せられて壓迫に依つて生ずるのではなく、却つて壓迫を生ぜしむるものであると言ふ事と、上述の結果とを、どう結合せしめる可きであらうか。これは矛盾で、簡單には解決せられぬやうに見える。この兩者の恐怖の原因を一つのものに歸せしむる事は、容易には行はれ難いことである。このことを、障碍せられた性交即ち中絶興奮や禁慾等の情況に於ては、自我は危險を感知し、依つて恐怖を以つて反應するとの假定によつて說明せんと試みた。然しこれは遂げられない。亦他方には、既にのべた恐怖症の分析は、訂正を許さぬのである。Non liquet!（證據不明!）

第五

症狀形成、及び斯く形成せられた症狀に對する自我の第二次的の爭鬪を研究しようと欲して、恐怖症を選んで見たがこれは餘り思はしい結果を得なかつた。此等の疾患像のうちで、目立つてゐる恐怖なるものは、今や事物關係を蔽ひ隱してゐる一種の合併症であるやうに見えて來たのである。少しも恐怖を示さぬやうな、神經症が多數ある。眞性轉換性ヒステリー症は此の一種で、この疾患にあつては最も重い症狀も恐怖症を交へぬことがあるのである。既に此の事實は、恐怖と症狀形成との間には殆ど結合がないと言ふことを我々に警告してゐるのであらう。然るに轉換性ヒステリー症は恐怖症に甚だ類似してゐるもので、此のものを「恐怖性ヒステリー症」として分類してもよいやうに見える。然し、誰も、轉換性ヒステリー症か、又は恐怖症かを、決定せしむ可き條件をきめたものはない。又誰もヒステリー症の恐怖の發生を生ず可き條件に根據を與へた人はないのである。

轉換性ヒステリー症の甚だ多數の症狀、即ち運動麻痺、拘攣、又は不隨意性動作、又は不隨意性發動、痛覺、幻覺、等は永久的に固定せられたる充塡過程か、又は間歇的の充塡過程であるか、說明を與へ

るには新しい困難がある。斯くの如き症狀については誰も多くは知らぬ。分析的研究に依つて初めて、此等の症狀は如何なる障碍せられたる興奮經過を代理してゐるかを經驗するのである。多くは此等の症狀自身が此の興奮經過に關與してゐる。卽ち恰もその經過の總エネルギーが、この一部分へと集中したかの如きものである。壓迫現象の生ずる情況には苦痛が存在する。幻覺は、此の場合には知覺であつた。運動麻痺は、此の情況に於て遂行せられねばならぬにも拘らず制止せられてゐる或る活動の防禦なのである。拘攣は多くは此の時に爲さんと考へた神經支配が、他の場所に移動して出て來たものである。痙攣發作 Krampfanfall は、自我による正常支配が無くなつたための情緒發動の表現である。症狀の發現を伴ふ不快感覺は、全く著しく變換的である。永久的の、運動性へと移動した症狀、例へば麻痺、拘攣等にあつては、不快感覺は殆ど全く缺けてゐる。卽ち自我は不快感覺に對して關與せざるかの如くに振舞ふのである。間歇的のもの、又は感覺的領域の症狀の場合には、原則として明かなる不快感覺が感知せられる。此の不快感覺は、苦痛症狀の場合には過度の高さに迄昇上するのである。此の如き複雜多樣のうちに、此の如き差異を生ぜしむ可き動機を求め、且つそれ等を單位的に說明せんとするには、甚だ困難がある。又、一度形成せられた症狀に對して、自我が爭闘をなすことはこの轉換性ヒステリー症にあつては、殆ど現れぬ。唯症狀として身體のある部分の苦痛過敏が生じ

てゐる場合には、此の者は二重の役目を演ずる立場に置かれてゐる。卽ち苦痛症狀は、此の如き身體部分が外部から觸れられる場合には確かに生じ來るが、內部からその部分に對して病的情況が聯想的に賦活せられる場合にも生ずる。而も自我は外部よりの認識によつて症狀が眼醒めて來るのを遠ざけるために、豫防策を取る。轉換性ヒステリーの場合に、何處から此の症狀形成の特別の不透明さが來るのであるかを知る事は出來ないが、然し、この事が、此の効果なき領域を捨て去る動機を我々に與へるのである。

さて我々は、强迫性神經症について見よう。此處では更に多く、症狀形成があるとの期待がある。强迫神經症の症狀は一般的に、二つの種類があり、二つの互ひに相反する傾向を持つてゐる。卽ち禁止とか豫防策とか、贖罪とか、又は其他の消極的性質のものか、或はこれに反して、代理滿足、甚だ屢〻象徵的變裝でやつて來る代理滿足かである。此の二つの群の中で、消極的の、防禦的の、刑罰的の方は、初期のものである。罹病の間が長くなると、如何なる防禦をも超えて了ふ滿足の方が益〻增加し來るのである。滿足で禁止に打ち勝つことが出來れば、それは症狀形成の勝利である。故に初めは防禦的であつた命令又は禁止も、遂に一種の滿足の意義を得て來、而もその滿足に人工的の結合をさせる方法も生じてくる。此の樣な働きをするために、我々が自我について旣によく知つてゐる合成

が示される。極端な例に於ては患者は、その症状の大部分にその起原的の意義と共に、それに對しては全く反對な意義をも獲得することが出來てゐる。これは對立兩存性の力である。そして何故であるかわからぬけれども、强迫神經症にあつては非常に大なる役目を演じてゐる。最も露はな例に於ては、症狀は兩時性である。言ひ換へれば、一定の處方を遂行する行爲が起ると、すぐに、直接に第二の行爲．卽ちそれを止めるやうな、又は逆行せしめるやうな第二の行爲があとから起つてくる。假令、その第二の行爲は、第一のものに全く反對するに至らないまでも。强迫症狀の此の如き粗暴なる概觀からでも、直ちに二つの印象が得られる。第一は此處に、壓迫せられたものに對する止みなき爭鬪が存在すること、それは常に益々壓迫した力には不利益となりつつあること、第二には、自我と超自我は此處では症狀形成に對して、特に大なる分擔をなしてゐることである。

强迫神經症は分析的硏究のためには、最も興味ある、そして最も感謝す可き對象である。然し問題としては尙甚しく征服が足らぬものである。我々がその本性のうちに深く穿入しようとするには、我我は、不確實な假定や、證明せられぬ臆測を、尙まだ仲々避くることが出來ぬ狀態に在ることを承認せねばならぬ。强迫神經症の出發情況は、ヒステリー症のそれと同じである。卽ちエディプス複合が

リビド的の要求に對しての必要なる防禦に外ならぬ。のみならず總ての强迫性神經症にあつては、甚だ早期に形成せられたヒステリー的症狀の、最も下なる層が必ず見出され得るやうである。然し更に進んでくるとその形態は、體質的因子に依つて決定的に變化せしめられる。リビドの性器的編成は最も弱く又餘りに抵抗の少いことがわかる。自我が、その防禦努力を始めると、第一の結果として、性器編成（男根統帥期）は全く、又は一部分、以前の虐待嗜好的肛門愛的階段に退行せられると言ふことで目的を達するのである。此の退行の事實は、總てこれに次ぎ來るものを決定するのである。

更に他の討究をなすことが出來る。恐らくは此の退行現象は、體質的の結果ではなくて、時間的因子の結果であるかも知れぬ。退行現象は、リビドの性器統帥が餘りに弱いがために生じ來るのではなくして、却つて自我の努力が、餘り早期に、卽ち尙虐待嗜好時期の繁榮期に始められたからであるかも知れぬ。此の點に關して確かな決定をなす勇氣が、余にはないし、分析的觀察も此の假定に好都合ではない。分析的觀察は、此の强迫神經症への轉向の生ずるのは、男根期が既に成就せられたからであることを示してゐる。さらに此の神經症の發する年齡は、ヒステリー症の發する年齡よりも後期（第二小兒期、潛伏期滿了の後）である。余の研究したうちで此の病症の甚だ遲い發育のあつた一例にあつては、それ迄全く正常であつた性器生活の眞の脫落が退行現象の條件を作り、從つて强迫神經症

の成立を釀したのが明瞭であつたのである。（註）

（註）「强迫神經症への素質」（本全集第五卷を見よ。）

退行現象の超意識心理學的の說明は、余は性器統帥期が始まると共に、虐待嗜好期の破壞的充塡に入り來つた、色情的成分の分裂、卽ち「本能分離」Triebentmischung から試みようとしてゐる。

退行現象の迫り來ることは、リビドの要求に對して防禦爭鬪をなす、自我の最初の結果を意味してゐる。此處に「防禦作用」の一般的傾向を單に防禦作用が用ひる機制の一つでしかない「壓迫作用」から區別するのが合目的なことである。恐らくは正常の場合及びヒステリー症の場合よりも明かに神經症の場合に在つては、防禦作用の動力として去勢複合を、防禦せられたものとして、エディプス複合の努力を認める事が出來る。斯くして潛伏期の初めにはエディプス複合の消退によつて、超自我の設定、又は超自我の確立 Konsolidierung 及び道德的及び審美的の埒が自我のうちに生じ來ることを見出すであらう。此の過程が强迫神經症の場合には、正常の程度をはるかに超えてゐる。卽ちエディプス複合の破壞の爲に、リビドは却つて退行性低下を生じ、超自我は特別に嚴格に且つ容赦なく、自我は超自我に對して從順となつて、良心、同情、純潔等の高い反動形成を發生するに至る。早期小兒の自慰は、一種の退行的の（虐待嗜好的肛門愛的）表象から生じてゐるものであるが、然し、尙男

根統帥編成の征服されてゐない部分を代表してゐるものであるから、甚だ峻嚴に拒否せられるが、必ずしもその峻嚴さが効果を現さぬ。此の場合、內的矛盾は、男性を保持せんとする興味（去勢恐怖）のうちに、正に此の男性の總ての活動が妨げられると言ふことに在る。然し此の矛盾も、强迫性神經症の場合には、單に度を超えてゐるだけで、正常と同じやうにエディプス複合を除去せんと固執するのである。如何に此の過度が、自己廢棄への萠芽を含んでゐるかは、强迫性神經症に於て明かに證明せられる。卽ち抑壓せられてゐる自慰が、强迫行爲の形式で、滿足への近接を更に益〻强制してゐるのである。

强迫神經症者の自我に於ける反動形成、卽ち我々が、正常人の性格形成の過度なるものとして認めてゐるものを、退行現象、壓迫現象の外に、尙防禦現象と言ふ一つの機制として新しく提擧せねばならぬ。此の反動形成は、ヒステリー症の場合には缺けてゐるか、或ははるかに弱いやうに思はれる。この事を顧れば、ヒステリー症の防禦過程は何處に現れてゐるかの臆測が得られる。それは、自我が好まざる本能衝動から轉向するために、かかる本能衝動を意識のなかへ移して了ふところの壓迫現象に限られてゐる。移してしまつた後はもはやその運命には何等自我は關與しなくなるのである。然し此の事は全く此上もなく正確であるとは言へない。何故ならばヒステリー症の症狀が、同時に超自我

の刑罰要求の充足を意味する樣な例もあるからである。然しとに角、それはヒステリー症の場合の自我の態度に於ける一般的特性を示してゐると言ひ得るであらう。

强迫神經症にあつて、斯くの如き嚴格なる超自我が形成せられてゐることは、單純に事實として假定する事も出來る。或は此の疾患の根本的の特徵はリビドの退行現象であると考へることも出來る。或は又、超自我の性質を、退行現象と結びつけようと試みることも出來る。事實に於ては、超自我はエスより出で來るもので、從つて其處に入り來る退行現象や、本能分離とは切り離すことは出來ないのである。此の如き場合に、超自我が正常發育の場合よりも迫害的であり、無情なものであるとしても驚くには當らぬのである。

潛伏期の間は、自慰遂行の防禦が、主なる問題として取り扱はれるやうに見える。此の爭鬪は、多くの人々の間に、定型的に反復される一種の症狀を生ぜしめる。而もそれは一般的には、儀式 Zeremoniell 的であると言ふ特性を帶びてゐる。これはまだ蒐集が足りず、且つ組織的に分析せられても居らぬが、神經症の最も早期の働きであるから、此處に述べられた症狀形成の機制に關して、最も早い光を投ずるものであらう。これは、後に甚だ重い疾患となるに當つて、益〻宿命的となつて來ると言ふ特徵を既に逸早く示してゐるものである。又それは後に自動的に行はる可き諸作業が手に付かな

くなること、例へば就眠の際に、洗面の際に、或は着衣の際に、歩行の際に、抑留のあること、及び反復せねばならなくなること、時間浪費の傾向、等となつて現れて來るのである。何故に斯くなるかは、まだ殆どわかつてはゐない。然し肛門愛的成分の昇華作用 Sublimierung が此の如き場合には明瞭なる役目を演じてゐるのは確かである。

思春期は强迫神經症の發生に於ては、決定的の時期をなしてゐる。此の時期に、旣に小兒時代に於て一旦破られた性器統帥は再び大なる力で生じて來る。然し、小兒時代の性的發育は、思春期の此の新しい初めに對して方向を與へるものであることを我々は知つてゐる。それは一方に於ては早期の攻擊的衝動が再び眼醒め來るのであるし、他方に於ては新しいリビド的衝動が、多少共——惡い場合には全部が、退行現象によつて豫め描いて置いた道を通つて入り來るのである。斯くて攻擊的及び破壞的の意圖として生じ來るに違ひないのである。色情的努力の此の變裝の結果、及び自我に於ける强い反動形成の結果、性慾に對する鬪爭は、道德的旗幟の下に更に導かれてゆくのである。自我は、殘酷なる、强力なる要求、それは彼に對してエスから意識へと送られたものであるが、その要求に對して自ら驚き、且つ反抗する。而もその場合、それが色情的願望を克服することであり、同時に然らされぱエスの抗議に逢ふであらう如きものをも克服することになる事には氣付かぬのである。餘りに嚴格

なる超自我は、性慾を抑壓することに於て、勢力的であればあるほど、意地惡い形式をとるやうになる。故に强迫神經症の場合の軋轢は二つの方向に尖銳化し、卽ち防禦するものは氣むづかしくなり、防禦せられるものは、堪へ難くなるのである。而も此の兩者は一つの動機、卽ちリビドの退行現象に依つて生ずるのである。

此の多くの前提に對する矛盾は、此の好まざる强迫表象が意識せられると云ふ點に存する。此の表象は、旣に壓迫現象のプロセスを通過してゐる事は何等の疑ひもない。多くの例に於て、攻擊的本能衝動の固有の主張は、自我には全く知られてゐない。これを意識せしめることが精神分析の大切な仕事に屬する。意識に齎されたものは、原則としては唯變形せられた代理者で、朦朧たる夢の如き不定さか、或は不合理な變装に依つて見分け難くせられたものである。壓迫現象は、攻擊的本能衝動の內容に力を及ぼさなかつた場合でも、確かにその本能衝動に伴ふ情緒だけは除外するのである。故に此の攻擊は、自我に對して衝動としてではなく、却つて患者自らの言ふ如く單なる「思考內容」で決して患者を苦しめるものではないやうに見える。だが此處に注意し置く可きは、それは外見だけであると言ふ點である。

强迫表象の認識に當つて節約せられた情緒は、他の場所に出現して來る。超自我は、恰も何等の壓

迫現象も生じなかつた如く、又、その正當なる權利を以つて、又完全なる情緒特徴を以つて、此の攻擊的衝動は旣に彼に知られて居るかの如くに振舞ふのである。そして自我を此等の前提の下に取り扱ふのである。自我は一方に於ては、無罪であると自ら知りつつも、他方では罪業感 Schuldgefühl を感じ、且つ如何に說明をすべきか自ら知らぬ責任感 Verantwortlichkeit をもつてゐる。此處に於て我々に與へられる謎は、初めに思はれた如く大なるものではない。超自我の態度は全く理解出來るし、自我のうちにある矛盾は、自我が壓迫現象を用ひてエスに對しては自ら戶を閉ざすにかかはらず、超自我からの影響は完全に達し得る狀態に在ることである。（註）

（註）ライク「告白、强迫及び刑罰要求」、一九二五年參照

更に別の疑問は、何故に自我は超自我の痛烈なる批判を避けようと試みないかと言ふことであるがこれは多數の例に於て實際には現れてゐるとの報告がある。但し、强迫神經症にも全く罪業感を缺いてゐるものもある。恐らくこれは我々の理解する範圍では、自我が、罪業感の認知を、更に新しい症狀、自白行爲、自己處罰への制限等に依つて除外してゐるのではないかと考へられる。然し、此の如き症狀は同時に被虐待嗜好症的本能衝動、而も退行現象に依つて增强を受けたこの本能衝動の滿足をも意味してゐる。

强迫神經症の現象の斯くの如き複雜さは此等の諸變異を相互關聯的に綜合することが殆ど出來ないほど大きいのである。人は定型的の關係を引き出さうと努めるが、然し、他の更に價値の少からぬ規則性を見逃さぬやう氣を付けねばならぬのである。

强迫神經症の症狀形成の一般的傾向は、既に述べてしまつた。即ち拒絕することをしないで、代理滿足へと多々益々場所をゆづると言ふことになる。初めは、自我の制限を意味した同じ症狀が、後には自我の綜合力を籍りて益々滿足に近づくやうな症狀になる。そしてこの後者の意義は漸次に益々重要となつて行くことは見逃し難いのである。極端に制限せられた、而もその滿足を症狀の中に求めることを頼りとしてゐる自我は、このプロセスの結果、最初の防禦努力の完全なる失敗に益々近づく。滿足を望む力の平衡を斯く移動せしむることは、自我の意志麻痺と言ふ恐る可き終末に導く。即ち總ての意志決定に當つて殆ど同じやうな强い衝擊が、兩側より來るやうな狀態となる。病氣を初めより支配してゐるエスと超自我との間の甚だ大なる軋轢は仲介の能力を持たぬ自我の總ての作業が、此の軋轢のうちに含み込まれることを決して避けることの出來ぬほど擴大して來るのである。

第六

此の爭鬪の間に、自我の二つの症狀形成の活動を見ることが出來る。卽ち一つは、明かに壓迫現象の代用品であるがために、特に興味の深いものであり、又その事から、その傾向や手法は直ちに說明せられ得るものである。恐らくは此の補助手法又は代理手法の生じ來ることを、正當なる壓迫現象の遂行が困難に遭遇したことの證跡として考へてよいであらう。强迫神經症にあつては、自我が、ヒステリー症の場合よりも、より屢〻症狀形成の舞臺であること、及び此の自我は實在に對するその關係、意識に對するその關係等を固く所有してゐながら、あらゆるその知的手段を盡すのであること、更に思考活動が超充塡せられ、色情化せられて現れ來ること等を注意するならば斯くの如き壓迫作用の變異に恐らくは近づき得たと言うてよいであらう。

上述の二つの手法とは、**出現抑止** Ungeschehenmachen と、**隔離** Isolieren とである。前者の應用範圍は甚だ大であつて、實際廣く應用せられてゐる。これは言はば、消極的の魔法 negative Magie とも言ふ可きもので、運動性象徵を籍りて、事柄の（印象の及び經驗の）結果を「吹いて祓ふ」wegblasen

のではなく、それ等のもの自身を「吹き祓」つて了ふことである。この吹いて祓ふと言ふ言葉を用ひて見ると、此の手法が如何なる役目を演じてゐるか、唯單に神經症の場合に於てのみならず、巫術や、民間習俗や、又は宗教的儀式等に於ても用ひられてゐることがわかるであらう。强迫性神經症に於ては、此の出現抑止は、兩立症狀 zweizeitige Symptomen 卽ち、實際に二つの症狀が現れ來る可き場合に、後の者の活動が、前の者の活動を止めさせて、殆ど何事もなかつた如くになす場合に見られるのである。强迫神經症の儀式的動作は、第一の根據の外に出現抑止の意圖に第二の根據を持つてゐる。第一とは、豫防、用心、等のことで、これに依つて、或る一定のものが現れて來ず、又は反復しないことになる。此の二つのものの區別は容易である。卽ち用心の方は合理的であるが、出現抑止によつて止めるのは不合理な、魔法的な性質がある。勿論この後者の根據は、古代の環境に對する萬有神靈的の見方から生じてゐることは想察するに難くない。正常人にもこの片影があることは出現抑止の努力は、何か事柄を non arrivé (未到着のもの)として處置しようとする決心のうちに見られる。然し正常人では、これがために何事も企圖するわけではなく、且つ、その事柄をも、その結果をも惱むことはない。これに反して、神經症者にあつては、過去そのものをすらも、何とかして無くなさしめ、又は運動的に壓迫しようと求めるのである。此の傾向が正に神經症に於て、甚だ屢ゝ起る、反復

せんとする強迫を説明せしめる。又これが行はれるに當つて、多くの互ひに相反する意圖が、共に見出される事になる。願望によつて出現しなくてはならなかつたもので出現し得なかつたものは、他の事が荐りに反復せられるために出現を抑止せられ、却つてその事に總ての動機が入り來り、反復に當つて低徊するのである。神經症の更に進んだ經過にあつては、屡々外傷性の經驗をも、初めからの症狀形成の動機と見做して、出現を抑止せしめる傾向が、甚しく露はとなつて來る。斯くして我々は、防禦作用の一つの新しい、運動性手法について、豫期せざりし一瞥を與へることが出來た。或は又、此處では少からぬ正確さを以つて、壓迫現象の新しい運動性手法とも言うてよろしいであらう。

此處に新しく記載する手法の他の一つは强迫神經症に固有に現れ來る、隔離作用である。これは同時に運動性領域にも關係し、好まざる事柄の後に、又は神經症の意味ある二三の活動の後に、一つの休憩期が入り込むこと、而も此の休憩期に於ては、何物も起さしめず、何の認識も作らず、又は何の行爲も行はれぬやうな休憩期のあることである。此の甚だ特別なる態度は、直ちにこれが壓迫現象に關係があることを示してゐるのである。既に我々は、ヒステリー症に於ては、外傷性の印象を忘却に陷らしめて了ふことが可能であることを知つてゐる。强迫性神經症に於てはこのことは出來ないこと

が多い。經驗は決して忘れられぬ。然しその情緒からは離れ、その聯想的關係は抑壓せられるか、又は中斷せられ、故に孤立して其處に存し思考活動の經驗中に再生せられることがないことはある。此の隔離の効果は、忘却による壓迫現象の場合と全く同じである。此の手法が、强迫性神經症の隔離であるが、此の場合には魔法的の意圖となつて運動性には增强されて來る。互ひに離れて居ても、正に聯想的には互ひに關係してゐるものである可きだが、運動性の隔離は、思考による此の關係を中斷する一つの保證なのである。神經症にこの方法があると言ふのは正常過程に集中 Konzentration なる過程があるに等しい。我々にとつて印象として見え、又は問題として見える、特に意義あるものは、他の思考方向、又は思考活動の同時的要求によつて決して妨げられてはならぬ。然し旣に正常人にあつても集中なることは、唯單に無關係なることや、附屬せぬことやを遠ざけるのみならず、先づ第一に適應しない反對物を遠ざけるに應用せられる。斯かる場合に最も障碍として感ぜられるものは起原的には關係して居つたもので、發育の進捗によつて互ひに分裂せしめられたものである。例へば、神に對する關係に於ける父複合の對立兩存性の表現、又は戀愛興奮の場合に排泄器の衝動の起るが如きものである。斯くの如きであるから、自我は正常にあつても思考經過の轉向に際しては大なる隔離の働きをなさねばならぬ。故に又、我々は、分析的手法を用ふる場合には、自我をして、此の、さなく

ば全く是認せらる可き機能を、却つて一時的に絶滅せしめるやうにせしめねばならぬのである。

我々は既に精神分析の根本規則を守ることは强迫神經症者にあつては特に困難であることのあらゆる經驗を有してゐる。恐らくこれは、その超自我とそのエスとの間の軋轢緊張の程度が頗る高いがために、その自我は眼醒めてゐるし、且つ自我の隔離も判然たるがためであらう。自我は思考の働きの間に、甚だ多く、例へば意識せられざる空想の混合や、對立兩存性努力の表現等を防禦せねばならぬのであらう。卽ち常に爭鬪準備をして居らなくてはならぬのである。集中と隔離とへの此の强迫は魔法的の隔離活動によつて支持せられてゐる。この隔離活動こそは、症狀としては斯くも著明でありそれ自らとしては勿論利用せられるところはないが、實際的には斯くも意義深くあり、且つ儀式の特性を所有してゐるものである。

聯想や、思考の結合やを妨げる事と同樣に、强迫性神經症の一つの最も古い且つ最も根本的な禁制がある。卽ち接觸のタブーである。神經症に於ては何故に此の接觸、結合、感染等の回避が大いなる役目を演じ、從つてその內容に於て甚だ複雜なる系統をなすであらうかとの疑問を提出するに、接觸身體的の結合等は、攻擊的にも亦情愛的にも對象充塡の最も近い目的であるからであるとの答を見出すであらう。エロスは接觸を欲する。何故ならばエロスは、自我とその愛する對象との間の合一、空

閉限界の撤去を求めんとするものであるからである。破壞も亦同樣に、飛道具の發見されぬ限りは、近くから與へられねばならぬから、身體的接觸、手をつけることを前提とせねばならぬ。婦人に觸れると言ふことは言葉の用法から言へば、性的對象として女を用ふると言ふ事の婉曲なる言辭である。おちんちに觸るなと言ふのは、自己色情的滿足の禁止の意味である。强迫神經症の場合には、初めは色情的接觸を追求するが、退行現象の後には、攻擊の假面を被つた接觸を追求するのは、神經症にとつては此の性慾なるものが、甚だ强く禁止せられてゐるものであり、且つその禁制系統の中心となるものであるからである。隔離現象は接觸可能性の廢絕であり、物を總ての接觸より奪ふ方法である。故に神經症者が一つの印象を、又は一つの活動を、休憩を與へて隔離してゐたとするならば、彼はそれ等のものについての思考を、他のものと聯想的接觸に來らしめないやうに望んでゐることが、象徵的にわかるのである。

症狀形成に關する我々の研究は、斯く迄遠く達し來つた。然しこれ等の研究を概要して見ると何等大したことはないのである。結果は貧しく、尙不完全で、殆ど旣に知られてゐたものに何物をも附加しないに等しいであらう。症狀形成は、恐怖症や、轉換性ヒステリー症や、强迫神經症以外の他の疾患では、更に觀察の見込み少く、更に僅かしか知られて居らぬのである。然し、此等三つの神經症の

總括から、重要なる、もはや延期す可からざる問題を生ぜしめる。卽ち此等三つの總てに對して、エディプス複合の破滅がその出發點をなすと言ふことである。就中、自我の反抗 Ichsträuben の動力として、去勢恐怖を假定せねばならぬと言ふ事である。恐怖症に於ては、旣に此の如き恐怖は現れて來てゐるので、このことが保證せられる。然し他の二つの型に於ては此のものから何が出て來てゐるか、又自我は如何にして此の恐怖を出さずに濟ますのであるかと問はねばならぬ。此の問題は、我々が旣に述べた可能性、卽ち恐怖は、その經過に於て障碍せられたるリビド充塡自身から、一種の醱酵の如きものによつて生じて來る、との可能性を考へて見ると尙重要となる。依つて更に去勢恐怖は壓迫現象の(防禦現象の)唯一の動力であることが確かなのであらうかと問はねばならぬ。女性の神經症について考へる時に、これは疑はれるに違ひない。何故ならば、去勢複合は女性の場合にも確實に確められるが、正しい意味の去勢恐怖は、旣に去勢が完了してゐる場合には、もはや考へられぬことであるから。

第七

再び小兒性動物恐怖症に返へつて見よう。小兒性恐怖症に就ては、他の場合よりもよくわかる。此の場合には、自我はエスのリビド的對象充塡（積極的或は消極的のエデイプス複合の充塡）に反對する爲に入り來るものである。何故ならばこの充塡については、去勢の危險が附け加はることがわかるからである。これは既に述べたところであるが、曩の討論には殘つてゐた疑を明かにせねばならぬのである。ハンス少年の場合には（その總ての積極的エデイプス複合の場合には）自我の防禦作用を生ぜしめたのは、母親に對する情愛的衝動であるか、或は父親に對する攻擊的衝動であるか、何れを假定せねばならぬのであらうか。實際的にはこれは何れでもよいやうに見える。特に此の兩衝動は互ひに條件づけられてゐるから。然し理論的の興味が此の疑問には結びついてゐる。何故ならば若しも母親に對する情愛的の情緒だけであつたならば、それは純粹な色情的なものと言はねばならなくなるからである。然るに攻擊的衝動は、その本能としては破壞本能に關係してゐる。而も神經症の場合には、自我はリビドの要求に對しては自己を防禦するけれども、他の本能に對しては決して防禦しないこと

を我々は知つてゐる。事實、恐怖症の形成後、情愛的の母親との結合は殆ど消失し去つて了ふ。即ち根本的に壓迫作用に依つて輕くせられて了ふ。これに反して、攻擊的衝動の代りには症狀(代理)形成が完全に行はれることがわかる。「狼の人」の例では、更に單純で、壓迫せられた衝動は實際に色情的なものであり、父親に對しての女性的趨向であり、そのために亦症狀形成が完成したのである。

斯くの如く永い研究にも拘らず、根本的關係の理解に對しては、益々困難であると言ふのは、殆ど恥づ可きことであらう。然し我々は徒らに單純化せしめ、或は隱さうとするのではない。若しも明かに見る事が出來なければ、寧ろその不分明さをはつきり見ようと欲する。さて此處で問題となつて來たのは、明かに、我々の本能學の發達が甚だ不十分であつたと言ふことである。我々は最初にリビドの編成を、口愛的段階の次に虐待嗜好的肛門的階段を、更に性器的階段へと追求して來た。此の場合に性的本能の總ての成分を同價としたのである。後に虐待嗜好症は他のものの侵略者で、エロスに對しては對立的の本能であることがわかつて來た。此の二つの本能群についての新しい理解は、リビド編成の時期のうちで、その早期の構成を全く破壞するやうに見える。然し此の困難から免れ出るために種々なる方法を今更新しく工夫する必要は少しもない。それは永い前より考へに浮んで來てゐることで、次のごときものから來てゐるのである。即ち我々は常に單純なるどれかの本能衝動にのみ關係

してゐるのではなくして、常に、二つの本能の樣々なる量的關係の混合をのみ取扱つて來てゐたためであると言ふ事である。虐待嗜好的對象充塡は、リビド的充塡として取り扱はれるのが正當である。故にリビドの編成は調査せられる必要がないものである。又、父親に對する攻擊的衝動は、壓迫現象の對象となる時には、母親に對する情愛的衝動と同じ權利を以つてゐる。斯く判斷する材料としては壓迫現象がリビドの性器的編成に對しては特別の關係を有する一過程であり得ることは除外してある。又自我は、編成の他の段階に於けるリビドに對して、自己を防ぐ時には自我は他の防禦手段をとることがあるかも知れぬと言ふことは除外してある。依つて次の如く言はねばならぬ。ハンス少年の例の如き場合では、何の決定も得られない。此の場合には攻擊的衝動か壓迫現象に依つて確かに輕減せられては居るが、性器的統帥編成が既に到達してゐるからである。

然し此の場合に恐怖に對する關係をも不問に附してはならぬ。自我は去勢危險を認めると直ちに恐怖信號を與へて、エスに於ける切迫せる充塡過程を、或る一種の知られ難き方法で、**快不快審判**に依つて制止するものであることは旣に述べたことがある。同時に、恐怖形成も完了する。但し去勢恐怖は他の對象をとり且つ歪められた表現をとる。卽ち父親に去勢せられる代りに馬に咬まれる（狼に喰はれる）となるのである。この代理形成には、二つの明かなる利得がある。第一のものは、これは對

立兩存性の軋轢を避けることが出來る點である。何故ならば父親は、同時に愛してゐる對象であるから。第二の利得はそれは自我から恐怖發育を取り去ることが出來ると言ふ點である。恐怖症の恐怖は言はば隨意的のもので、その對象が認識の對象物となつた時にのみ生ずるものである。それは確かに正しい。何故ならば、斯かる時にのみ危險情況があるのであるから。其處に居らぬ父親について、去勢を恐れる必要は毫もない。然し父親を除くことは出來ない。父親は欲する時に必ず現れる。然し父親が動物に依つて代理せられた時は、危險と恐怖とから自由になるためには、動物が來た時だけ避ければよい。故にハンス少年は、自我に一種の制限を置いて、馬に遭遇しないために外出せぬと言ふ制止を生ぜしめたのである。露西亞少年は更に都合よくやつた。即ち一定の寫眞帖を手に取らないと言ふことは、彼にとつては何等絶滅を意味しないのである。意地の惡い姉さんが、此の書物の中の、狼の立つてゐる圖を常に彼に見せる時より外には、彼はその恐怖に對しては全く不安を要しないのである。

余は曾つて恐怖症を、投射現象 Projektion の特質に歸した事がある。卽ち、內的本能危險を、外的知覺危險で代理してゐるものであるとなしたことがある。これは、外的の危險に對しては、認識を逃避し又は廻避することに依つてこれを防ぐことが出來ると言ふ利得をもつてゐるが、內的危險に對

しては何等の逃避も役に立たぬ點から來てゐる。余のこの考へは正しくないのではない。然し餘りに淺薄である。本能要求はそれ自身では決して危險ではない。それが眞の外的の危險、卽ち去勢を生ずることがあるので危險なのである。斯く考ふると、恐怖症の際には、根柢に於ては、一つの外的危險が他の外的危險で代理せられてゐると言ふことになる。恐怖症の際には、自我が、廻避又は制止症狀に依つて、恐怖を除くことが出來ると言ふことは、此の恐怖が一つの情緒信號に過ぎぬこと、及び經濟的の情況は何の變化も蒙つて居らぬとの解釋とよく一致するのである。

動物恐怖症の恐怖は、自我の危險に對する情緒反應 Affektreaktion である。此處に言ふ危險として信號せられるのは、去勢の危險である。自我が通常の危險情況で示す實在恐怖との區別は恐怖の內容が意識せられずして殘ること、これが變形の時にのみ意識せられると言ふことより外にはない。

此の解釋は、大人の恐怖症に對しても適用せられると余は信ずる。假令神經症を生ぜしめる材料が此處では甚しく豐富であり、且つ症狀形成の二三の動機が更に附け加はつてゐるとは言うても、その根柢に於ては同一のものである。臨場苦悶を有する人は、彼の自我に、本能危險より逃れんために制限を置いてゐるものである。本能危險は、色情的快感を追ひ求めしめることであり、從つてそれによつて再び、子供のときの如く去勢の危險、又はこれに類似のものを呼びかへさんとする試みとなるも

のである、單純なる例として、余は一人の若い男が臨場苦悶者となつた例を知つてゐる。卽ち彼は淫賣婦の誘惑に陷ること、及びその刑罰として梅毒に感染することを甚しく恐れて外出が出來なくなつたのである。

余は多くの例は更に複雜なる構成を示してゐること、及び他の多くの壓迫せられたる本能衝動も亦恐怖症に出口を求めるが、然し此等のものは寧ろ副なるもので、多くは神經症を核としてこれに追加して結合してゐるものであることを知つてゐる。臨場苦悶の症狀學は、自我が何かを絕滅するを以て滿足しないで、その情況から危險をとり去るために、何かを更に加へようとするために複雜となつてゐる。此の附加物は、多くは小兒期への一時的の退行（極端な場合には母胎へ迄退行するが、今日差し迫つてゐる危險に對して保護されてゐた時代へと退行してゆくのである。）であり、絕滅が起らぬやうな條件として生じ來るのである。斯くして町へ行くことに對する臨場苦悶者でも、小兒の如く彼の信賴する人物に同伴して貰へば町を步む事が出來るのである。此の如き顧慮によるのであるから自分の家から、一定の距離を遠ざかるだけの時とか、或は知らぬ土地でない限りとか、又は、知らぬ人の居ないところへ行くだけの場合とかには、單獨で外出する事も出來るのである。斯んな規定を選擇すると言ふ點に、小兒性の動機があること、及び、その小兒性の動機が、神經症となつて彼を支配

してゐるのであることがわかるのである。獨居の恐怖症は、斯かる小兒性退行現象なしでも生ずることは明かである。それは獨居自慰を避けようとすることより生ずる恐怖症である、此の如き小兒性退行現象の條件は、勿論、小兒時代からの時間的の遠隔である。

恐怖症は、原則としては、或る一定の狀態の下に――例へば街路で、汽車の中で、又は孤獨のうちで――最初の恐怖發作の經驗があつてから後に生じて來るものである。この恐怖はいつもは束縛せられてゐるのであるが、いつでもその保護條件が嚴守せられなくなると、直ちに再生して來る。恐怖症の機制は防禦方法としては甚だ役立つもので、且つ安定への傾向の大なるものである。防禦爭闘は更に進んで症狀に對して向けられることも甚だ屢ゝ生ずるが、然し、必ずしも常に然るものとは定まつてゐないのである。

恐怖症の際の恐怖について、我々の經驗したところは、尙强迫性神經症に對しても應用することが出來る。强迫性神經症の情況を、恐怖症の情況に還元することは困難ではない。總ての後の症狀形成の動力は、此處では明かに、超自我に對する自我の恐怖である。超自我の敵意は自我がそれより逃れねばならぬ危險情況である。此處には少しも外部へと投射する證跡がない。危險は全く內部的である。然し、自我は、超自我の側の何を恐れるのであるかとの疑問を起すならば、超自我の刑罰は去勢

刑罰の繼續であるとの見解が湧いてくる。超自我は、非人格となつた父親の如きもので、父親に依つて威嚇された去勢に對する不安が、不定なる社會的恐怖又は良心恐怖に變化されるのである。然し、此の恐怖は蔽はれてゐる。自我は此の恐怖から、自我に課せられた禁令、指令、懺悔行爲等を從順に行ふことによつて、此の恐怖より逃れる。若しもこれが防害せられると、忽ちにして非常に苦痛なる不快が來り、これは殆ど恐怖と同じに見ても宜しいもので、患者自身は恐怖と同じに取扱ふのである。さて我々の獲たるところは、次の如くである。即ち恐怖は危險情況に於ける反應である。恐怖は自我がその情況を避けるために、又はその情況より逃れるために何かをなすことによつて輕減されるのである。故に、症狀は、恐怖發生を避けるために形成せられるものであると言ふことが出來る。然し、これでは恰適ではない。次の如く言うた方が正しい。即ち症狀は恐怖發生によつて信號せられた危險情況を避けるために形成せられる。此の危險は、今まで觀察せられた例では、去勢又は何かこれに關聯したものであつた。

恐怖が、自我の危險に對する反應であるとすれば、外傷性神經症が過ぎて來た生命の危險を誘因として甚だ屢〻生ずることについては、生命恐怖又は死の恐怖の直接結果として理解す可きで、自我と去勢との關係は除外しても宜しいではないか。これは歐洲大戰によつて現れた外傷性神經症の多くの

觀察者によつて、次の如き證明を齎すものとして、勝ち誇つて報告せられた所のものであつた。卽ち自己保存本能の危險に瀕することが神經症を生ぜしめる。何等性慾には關係するところなく、且つ精神分析學の複雜なる假定に顧慮するところも要せぬと言ふのである。然し事實此等外傷性神經症に分析の應用せられた例が唯一つもなかつたと言ふことは寧ろ甚だ憐む可き事である。これを遺憾とするのは唯單に性慾性の病原的意義に對する反對意見のためのみではない。何故ならば、これに對しては自己愛症の導入によつて、卽ち自我のリビド的充塡を、對象充塡と同列に齎し、そして自己保存本能のリビド的本性を强調することによつて、既に永い前より無くなつてゐるのであるから。遺憾とする點は、此の分析の缺くるによつて、恐怖と症狀形成との間の關係に關して、決定的の解釋に對する價高き機會を失つた點にあるのである。日常生活の、單純な神經症の構成について我々の知つてゐるものの總てに從へば、神經症が、精神裝置の强い意識せられぬ層の關係することとなくして、危險に瀕する客觀的事實によつてのみ生じ來るとすることは甚だあり得べからざるところである。然し、無意識の中には我々の概念に、生命絕滅の內容を與へることの出來るものは何も存在しない。去勢は、腸內容の離斷の日常の經驗に依つて、又は母の胸からの離乳の經驗等によつて先づ表象することが出來る。然し何か死に類似せるものは、何も全く經驗するなどと言ふわけにはゆかない。又は人事不省と雖

も、何等の殘存する痕跡をも與へないのである。余は、依つて次の如き臆測に固執する。卽ち死の恐怖は去勢恐怖の類似として理解されるものである。又自我が反應するところの情況は、保護してゐる超自我の除却——運命の力による——で、依つて玆に於て、總ての危險に對する確保が無くなつて了ふことにあるのであると。この外に、外傷性神經症を生ぜしめる經驗に當つては、外界よりの刺戟防護が破れて了ひ、從つて精神裝置の中へは、過剩に大なる興奮量が入り來り、依つて此處に、恐怖が、情緖となつて信號せられるのみならず、情況の經濟的條件から新しく生ぜしめられると言ふことの第二の可能性があると言ふ事を觀察することが出來るのである。

この最後の注意によつて、規則的に繰返されたる、對象喪失によつて、自我が去勢へと準備せられてゐる場合に恐怖が生ずるのではないかと言ふ恐怖の新しい見解を得ることが出來る。從來は、恐怖を危險の情緖信號として見てゐた。然るに今や恐怖は、一つの喪失、又は別離への反應であるとして、去勢の危險に關係してゐると思はれるのである。此の結論に對して、直ちに生じて來る多くのものは、我々にとつては甚だ注目に價する一致を思ひ付かしめるのである。人間の最初の恐怖經驗は、少くとも出產である。而もこれは客觀的には、母からの別離を意味し、母の去勢（小兒は卽ち陰莖と譬へれば）に譬ふ可きものである。さて然し、恐怖が、別離の象徵として、總ての後の別離に於ても

繰りかへされるならば、甚だ滿足であるが、然し、出產は主觀的に、何等母からの別離としては經驗せられない處に困難がある。何故ならば、母親は、全自己愛的の胎兒には、對象としては完全に知られてゐないと言ふ事によつて、此の一致共鳴の應用は、成立し難いものとなるからである。他の考案が、別離は情緒的反應であることを示し、而もその情緒的反應は恐怖としてではなく、苦痛と、悲哀として感受するのであることを示してゐる。此處に於て、我々は、曾つて悲哀を論ずるに當つて何故に別離が苦痛にみちてゐるかを說明することが出來なかつたのを思ひ出すのである。

第八

さて考察を試みる可き時が來た。我々は明かに、恐怖の本態が示し來る洞察を求めんとしてゐる。恐怖に關して眞理が誤謬より區別せられる、これか、然らずんば彼かを求めんとしてゐるのである。然し、それは困難である。恐怖は單純には理解することが出來ない。既に前から、矛盾より外には達し得られなかつた。而も矛盾の間には先入見なしには何等の選擇も不可能である。故に、今や別の方法をとらねばならぬ。卽ち我々は恐怖について言ひ得可き總てを先づ公平に總括して見なくてはならぬ。輕々しく、新しい綜合をなすが如き期待は、これを斷念してかからねばならぬ。

斯くして見ると、恐怖と言ふものは、兎も角も何か感覺せられたもの Empfundenes である。我我はこの恐れられたものを情緒狀態 Affektzustand と呼ぶ。假令情緒とは何であるかを知らないとしても、先づさう呼ぶ。此のものは、感覺としては明かに不快と言ふ特質を持つてゐる。然し不快なるものが直ちに恐怖の性質をなすのではない。又總ての不快感覺を恐怖と呼ぶのではない。不快特質を有する感覺は別にも澤山ある。(例へば、緊張、苦痛、悲哀等である)故に恐怖となるには、確かに

此等の不快特質の外に何か他の特性を有するに違ひない。斯くして疑問が生ずる。卽ち此等の種々なる不快情緒の間の區別を理解することが果して出來るであらうか。

恐怖の感覺から、我々は常に何かを抽き出すことが出來る。例へば、その不快感覺は、恐怖に對して特別に必要なものであるらしい。それは證明するのには困難であるが、有り得べきことである。而も恐らくは、それは決して偶然のものではない。尙これ等の區別し難い固有性質の外に、我々は恐怖には特定の器官に關係してゐるところの特定の身體的感覺を認める事が出來る。然し此處では、恐怖の生理學は興味がない。唯此等の感覺の個々の代表者を擧げるに滿足しよう。最も屢〻で、且つ明瞭なるは、呼吸器官と心臟とである。此等の器官の關係してゐる事は、運動性神經支配が、恐怖の全體としての排出過程に與つてゐることの證據を示すものである。故に怖恐狀態を分析して見れば、次の三つのものより成り立つてゐるのである。

（一）特異なる不快性質

（二）排出活動

（三）排出活動の知覺

此のうち、（二）及び（三）の點は、旣にこれと類似の狀態、例へば悲哀や、苦痛の如きものから恐怖

を區別せしめる點である。悲哀や苦痛には運動性表現は加はつてゐない。此等のものが存在する場合にあつても、明かにそれは全體の成分として現れるのではない。却つてその結果又は反應として出てくるのである。故に恐怖は、一定の道を通す排出活動を有する、特別の不快狀態なのである。一般的の見解から見れば、恐怖には先づ興奮の增强と言ふ事がその根基に橫はつてゐ、これは一方には不快性質を形作り、他方にはそれを、所謂排出作用によつて輕減しようとしてゐるのである。然しこの全然生理學的考察だけでは滿足が出來ない。我々は、其處には、恐怖の感覺とその神經支配とを、互ひに固く結合せしめてゐる歷史的原因が存してゐると假定をし度いのである。他の言葉で言へば、恐怖狀態には、過去の經驗の再生がある。この經驗が、斯かる刺戟增强及び排出作用の條件を、特定の道に保たしめてゐるもので、この道に依つて、恐怖の不快感は、その特別の性質を有するやうになつてくるのである。斯くの如き典型的の經驗としては、人間にとつては出產と言ふものが與へられてゐる。依つて我々は、恐怖狀態には、出產外傷の再生作用があることを知るのである。

我々は、情緒狀態のうちに、恐怖のために一つの除外例をあけて置く可きであるとは曾つて主張したことはなかつた。思ふに、他の情緒と雖も、古い、生命に對して必要なる、偶然に前個性的經驗vorindividuelle の再生である。そして我々は斯かる情緒を、一般的なる、定型的なる、生れながら

に持ち來たれる、ヒステリー的の發作と名付ける。後に個人的に獲得した、ヒステリー症性神經症の襲來に於ける追想象徵として、分析學上に、その原因や意義の明かにせられてゐる情緖と比較對立せしめる。勿論、此の如き見解を、總ての他の情緖にも、證明として應用することが出來れば甚だ望ましいことであるが、我々は今日のところではそれからは全く遠ざかつてゐると言はねばならぬ。

恐怖を、出產經驗に歸せしめることは、直ちに起り來るであらう駁論に對して、辯護せねばならぬであらう。恐怖は、恐らくは、總ての生物に、又は總ての高等なる生物に來る反應である。然るに出產なるものは、哺乳動物より外は經驗しないものである。依つてこれが、總てのものに對して外傷たるの意義を有するものであらうかとの疑問が生ずるのである。卽ち出產典型 Geburtsvorbild なしでも恐怖は存するのであらうか。然し、此の如き駁論は、生物學と心理學との間の領域を超えてゐる。何故ならば恐怖は生物學的に缺く可からざる機能を充す可きもので、危險の狀態に於ける反應として種々なる生物が種々なる方法に於て有し居るに違ひないのである。我々は人間から遠く隔つてゐる生物にあつても、人間の場合と同じ樣に、感覺と神經支配との內容を有するや否やは知らない。然しこの事が、人間の場合には、恐怖は出產過程をその典型として有して居る、となすに何の妨げもないのである。

果して、恐怖の構成と、恐怖の由來とが斯かるものであるとすれば、更に別の疑問が生じて來る。然らば何が恐怖の機能であるか、如何なる機會を以つて恐怖は再生せられるか。これに對する答は、既に明白且つ適切である。即ち恐怖は、危險 Gefahr の狀態に對する反應として生じ來るもので、此の如き狀態が再び生じ來れば、必ず再生せられるものである、と。

然し、これに對して、二三注意せねばならぬものがある。最初の恐怖狀態の神經支配は恐らくは意味に滿ちたものであり、且つ合目的のものであつたに違ひない。最初のヒステリー的發作の時の動作は正にさうであつたに違ひない。故に、ヒステリー性發作を說明せんとせば、その發作の如き運動が、正當なる行爲として與かつて居たやうな情況を追求すればよいのである。斯くして出產の際には、呼吸器への神經支配の方向が、肺の活動を準備してゐたであらうし、血液の中毒に對しては心臟搏動の頻促することが促されねばならなかつたのであらう。此の合目的性は、勿論後の恐怖狀態の情緒としての再生の際にも含まれてゐるに違ひない。假令、繰りかへされるヒステリー的發作の際には、現れぬことがあるとは言つても。斯くして、個體が、一つの新しい危險情況に偶然にも遇ふ時には現在に適したる反應を生ずる代りに、却つて前の危險に對する反應なる、恐怖狀態を以つて答へるので容易に非合目的となるのである。然し、此の合目的性は、危險情況が、近づいて來るのが知られ、且つこ

れが恐怖發生によつて信號せられた時は、再び現れて來る。そして、斯かる場合には、恐怖は直ちに適當なる手段によつて放散せられることが出來る。斯くの如くであるから、恐怖の發現に對する可能性は二つある。第一は、新しい危險情況に對する非合目的性の場合であり、他は、斯くの如き危險に對する、信號又は防衛としての合目的性の場合である。

然らば「危險」とは一體何であるか。出産行爲には、生命の保持に對する客觀的の危險は成立する。而もそれが實在性に於ては何を意味してゐるかもよくわかる。然し、心理學的にそれは何物をも示さない。出産の危險は何等心理學的の內容を有さぬ。確かに我々は、胎兒が何か、生命の斷絶せられることの可能性についての知識を有するものであるとは、決して前提することが出來ぬ。胎兒は、その自己愛的リビドの經濟に於て、大なる障碍を受ける場合より外には何も認むることは出來ない。出産の際は大なる興奮總量が、胎兒に迫り來り、新しい不快感覺を作り、多くの器官は高められたる充塡を迫るのであるが、これ等のものは、直ちに始まる對象充塡の前技とも稱す可きものであるに過ぎぬ。然らば、此等のもののうちで何を、「危險情況」の目標として價値づければよいのであらうか。

此等の問に直接に答へるためには遺憾ながら、極く僅かしか、初生兒の精神的理解については知つて居らぬ。余は、今述べたことの有用なるや否やに對して、曾つて一度も保證を與へたことはない。

然し初生兒と雖も、出産の經驗を思ひ出す總ての情況に對して、恐怖情緒を繰返すであらうことは容易に言ひ得るところである。然し、何によつて、又は何に即してそれを追想するかの決定的の點が殘つてゐる」

乳兒又は、それより少しく大きな小兒が、恐怖發生に對して、起因となすのは何であるかを研究することが殘つてゐる重要なことである。ランクは、その著書「出産の外傷」のうちで、小兒の最も早期の恐怖症も、出産經驗に對する關係を示すと言ふ甚だ勞力多き研究をなしてゐる。但し余にはその例が恰適なりとは思はぬのである。即ちこれに對しては二樣の非難があるであらう。第一には、小兒が一定の感性印象、特に、視覺的の印象を、その出産の時に當つて有してゐて、それが、出産外傷の追想であり、これによつて恐怖反應が生じ來るとなす點である。此の假定は、全く證明することは出來ぬ。而も甚しく有り得可からざるやうに見える。小兒が、出産過程についての觸覺と一般感覺の外に、何か感覺を有するとは信じられぬことである。後に小動物に對して、殊に、穴の中に消失し、又は穴より覗いてくる、小動物に對して恐怖を示すのは、ランクに依れば類推の認知によつて生ずる反應であるとなすのであるけれども、それは小兒は誰でも有するもので、恐怖症にのみあるのではない。第二には、ランクが、後の恐怖情況を評價するに當つて、子宮内の幸福なる存在を思ひ出すこと及びそ

の幸福が外傷的に障碍せられることが與つて力ありとなしてゐる點で、從つて、意味づけをなす場合に手前勝手に陷つてゐる點である。小兒恐怖の個々の例は、ランクの原理の應用には直接に、寧ろ反對となつてゐる。例へば小兒が、暗闇のうちや、孤獨のうちに置かれた時は、子宮內の情況の此の再現については小兒は滿足を以つて受け入れるに違ひないと寧ろ期待せねばならぬ。然るに事實は、これを恐怖に感ずるのは、出產に依つて此の幸福の障碍せられたことを思ひ出すのに歸す可きであるとなすならば、此の如きこぢつけの說明に對しては、永くは誤られることが出來ぬであらう。

依つて余は、最も早期の小兒性恐怖症は、出產行爲の印象へ直接的に歸せしめてはならぬこと、從つて今日に至る迄この說明は與へられて居らぬとの結論を與へねばならぬ。乳兒に一定の恐怖準備があるのは明かである。而もこれは、出產の直後に於て最も強いもので、漸次にこれが減じてゆくやうなものではない。精神發育の進捗と共に、後に至つて初めて生じ來るもので、小兒期の一定期間存在するものである。斯かる早期恐怖症が、更に此の時期を超えて擴がり來れば、これは神經症性障碍の疑ひを起さしめるが、明かなる後期小兒性神經症への關係は殆ど洞察し得ぬのである。

小兒性の恐怖表現は、極く僅かの例しか、我々には理解し得られてはゐない。故に此等の例について語るに止めよう。先づ、小兒が唯一人であつた時、又は暗闇の中に置かれた時、又は彼の信賴する

人（母親）の代りに外の人物を見出したとき、此等の三つの場合は、唯一つの條件、卽ち愛する人（熱望する人）の喪失に歸することが出來る。このことから、恐怖の理解への道、又は恐怖に結合してゐるやうに見える多くの矛盾が一致し來る道が開けて來る。

愛慕する人の追想像は、確かに強く、恐らくは、最初は幻覺的に充塡せられるであらう。然し、これはそれだけでは何等の結果をも示さず、却つて、此の憧憬が、恐怖に變化したかの如き觀を呈するのである。この場合の恐怖は恰も、尙未だよく發育してゐない者が、此の憧憬の充塡がより良き何物をもたらさぬので當惑してゐるかの如き印象を與へてゐる。卽ち恐怖は正に對象の喪失に對する反應として現れるのである。且つ、去勢恐怖も、亦同じやうに高く評價せられてゐた對象との別離をその內容として持つてゐること、及び最も起原的の恐怖（出產の場合の「原恐怖」Urangst　なるもの）は、母親との別離から生じ來るものであることを示すものである。

さて第二に、此の如き對象喪失の主張に關して考察せねばならぬ。乳兒が、母親を認識することを求め望むのは、これは、乳兒が、旣に母親は總ての彼の要求を、遲滯なしに滿足せしめることを知つてゐることに基いてゐるのである。故に乳兒が危險としてはかる情況は、卽ち、それに對して確保せられてゐることを望むやうな情況は、不滿足の情況で、要求緊張の蓄積で、これにたいして乳兒が無

力であるところのものである。余は、此の見地から見て、總てのものを順序づけることが出來ると思ふ。卽ち不滿足の情況、刺戟の强度が、不快に充ちた高さに迄到達し、心理的の轉向や排出に依つて打ち勝つことの出來ぬ情況は、乳兒に對しては出產經驗との類似、危險情況の繰返しであるに違ひない。此の二つの共通するところは、輕減を要求する刺戟が、大量に蓄積し來ることによつて生ずる經濟的障碍であり、此の動機が、同時に、危險の固有なる核である點に在る。此の二つの場合共に、恐怖反應が入り來る。この恐怖反應は、乳兒にあつては尙合目的であることが示される。呼吸は發聲筋に排出の方向が現れ、母親を呼ぶこととなつて來ること、恰も以前には內部的刺戟を除くために肺活動が生じたのと同樣なのである。危險の此の如き證跡こそ小兒がその出產に當つて、防禦せねばならなかつた所のものなのである。

認識によつて捉ふることの出來る、外界の或る對象が、出產を思はしめる危險なる情況を終らしめて吳れるとの經驗から推して、今や危險の內容は、經濟的情況から、その條件、卽ち對象の喪失に移つたのである。斯くて母親の居なくなつた事は、今や危險になつてくる。卽ちこれが乳兒にとつては恐る可き經濟的情況の入り來る前に、恐怖信號となる。此の變化は、自己保存に對する顧慮に於ける最初の大なる進步を意味する。同時にそれは望まざる恐怖が、自動的に發生することが止んで、危險

信號としての意味を以つて恐怖の再生が生ずるやうになつて來たこと、即ちその移行を示してゐるのである。

此の二つの觀察によつて、救助信號としても、亦自動的現象としても、恐怖は、乳兒の心理的無力の產物として現れることがわかる。この心理的無力は、明かに生物學的無力の、對象である。出產の恐怖と、乳兒の恐怖とは、共に母親からの別離の條件を示すと言ふ、此の著しい一致は、何等の心理的解釋をも必要としない。これは生物學的に極く單純に、母親、即ち最初は總ての胎兒の要求を、その身體の適應によつて全く鎭靜せしめる母親が、出產の後には、他の方法を以つて同じ機能に與かつて居ると言ふ事實から容易く說明せられるのである。子宮內生活と、最初の小兒期とは、殆ど一つの繼續であつて、出產行爲を著しい句切りとして考へるよりは全く一つの繼續と考ふ可きである。心理的の母親對象が、小兒にあつては生物學的の胎兒情況の代りとなつてゐるのである。依つて我々は、子宮內生活に於ては、母親は、何等の對象ではなかつたし、且つその時は對象なるものは何もなかつたことを忘れてはならぬ。

斯かる關係であるから、出產外傷からの離脫 Abreagierung など言ふこととの起り得る何等の餘地もないことになる。且つ恐怖の他の機能も危險情況を避けるための信號としての機能にあると言ふて

とが出來なくなつて來るのは見易き事である。而も對象喪失の恐怖條件は、その全體が更に持續せられる。恐怖の第二の轉向、卽ち男根期にあつては去勢恐怖は、同じく別離の恐怖であり、且つ同じ條件を有するものである。此處では、危險は性との別離にある。フエレンチの思想は此の點に於て全く正しいと思はれる。卽ち此處に、危險情況の早期の內容との關係が、一線をなして示されてゐるからである。陰莖に對する高い自己愛的評價は、此の器官の所有は、性交の行爲に於て、母親と再び結合し得る保證（母親代理）であることに基いてゐる。故に陰莖の奪去は、新しく母親と別離すると等しいもので、再び、不快に充ちた要求緊張（出產の際の如き）が、止むなく行はれることを意味するのである。高まることが恐れられるやうな要求は、旣に分化して來た、性器的リビドの要求であつて、もはや乳兒時代の如く任意のものではない。更に余は此處に附け加へ度いのは、母胎への復歸の空想は、不能者 Impotent（去勢强迫によつて制止せられたる）の性交代理であると言ふ事である。フエレンチの意味に於ては、彼の性器に依つて母胎へと復歸せんと欲する個體は、退行的となつた場合には此の器官で彼の全身體を代理するのである。

小兒の發育の進捗、その獨立性の增加、その精神裝置が多くの審判力を判然と確立し來ること、新しい要求の出現、等は危險情況の內容に影響を與ふることなしではすまさないのである。この如き影

響は、母親對象の喪失から去勢への轉向に先づこれを見ることが出來るが、更にこれに次ぐ一歩は、超自我の力によつて原因せられる。卽ち去勢で嚇かした兩親審判が、非個人化して來ると共に危險は不定となる。去勢恐怖はやがて良心恐怖に發育し來り、更に社會的恐怖へと至るのである。此處に至つて、この恐怖は何を恐れるのであるかは、容易には言ふことが出來ない。公式「別離、――群集からの除外」は、社會的典型に依據して發育し來つた超自我の後期の一部であつて、攝取 introjiziert せられたる兩親審判に相當する、超自我の核ではない。一般的に言へば、それは怒りである。――卽ち超自我の刑罰であり、超自我から見た戀愛喪失であり、自我が危險として感じ、且つ恐怖信號で答へるものである。超自我に對する恐怖のこの如き轉向は、余には死の恐怖(生命恐怖)卽ち超自我の、運命力への投射現象に對する恐怖であると考へられる。

余は旣に、曾つて、壓迫現象によつて除去せられた充塡は、恐怖排出として轉向を受けるとの命題に高い價を置いた事があつた。然しこれは今日では、殆ど顧慮の要なきものと思はれる。此の差別は余が前には恐怖は總て、經濟的過程によつて、自動的に生じ來るものであると信じて居たるに反し、現在では、恐怖に對する見解は、自我によつて快不快審判の影響を目的として意圖せられた信號であつて、此の如き經濟的强迫とは無關係であると解してゐる點にあるのである。從つて勿論、自我は壓

迫現象の際に奪去せられて自由となるエネルギーを、情緒を眼醒ましむることに向けるのであるとの假定には抗議することが出來ない。然し、如何なる部分のエネルギーによつてこのことが現れ來るかとの問題は意義なきことになつたのである。

曾つて余が言ひ出したもう一つの命題をも、此處に此の新しい見解の光の下に再檢して見なくてはならぬ。それは、自我こそ固有の恐怖所在であるとなした事である。余は、此の主張は、未だに恰適せるものであると考へる。我々は超自我に、何か恐怖表現ありとなす何等の根據をも有さぬ。更に又「エスの恐怖」と言ふならば、此處には何等の抗議もないが、唯その適切ならざる表現を訂正せねばならなくなる。恐怖は一の情緒狀態であつて、勿論、自我によつて感ぜられるものである。エスは自我の如く恐怖は所有しない。何故ならばそれは何等の編成をもなして居らぬものであるから、從つて危險情況を分ち有することは出來ない。これに反して、エスのうちに、自我に對して恐怖發生を生ぜしむるごとき諸過程が用意せられ、且つ遂行せられるとの素質は十分存する。事實に於て、恐らくは最も早期の壓迫現象は、總ての後期のものと同樣に、エスに於ける個々の過程に基く、自我の恐怖に依つて動機をあたへられてゐるものであらう。我々は、此處で再び二つの場合を區別せなくてはならぬ。卽ち自我に對する危險情況の一つが賦活せられて來て、依つてこれを制止するために恐怖信號を

與へるやうに動き來るものが、エスのうちに所有せられてゐるやうな場合と、エスのうちに出産外傷に類似の情況が生じ來り、依つてこれが自動的に恐怖反應として現れ來る如き場合とを區別する十分なる根據がある。此の二つの場合を、總括するためには、第二のものこそ、最初の、且つ起原的の危險情況に相當するもので、第一のものは、却つて後に第二のものより誘導せられ來つた恐怖條件であると考へねばならぬのである。或は又、實際に現れ來る病的情緒としては、第二の場合は現實神經症 Aktualneurose の病因として現れ來るもので、第一のものは精神神經症 Psychoneurose に特有なるものであるとなしても宜しい。

さて、我々は、從前の發表を決して無價値とするがためではなく、新しく得られた洞察と結合せしむるを要するのである。例へば、禁慾、性的興奮の經過に於ける濫用障碍、精神的影響による性的興奮の轉向等は、直接に恐怖をリビドより生じ來ることとは否定し難いところである。卽ち、過剩なる要求緊張に對する自我の無力狀態が生じ來るのであつて、これは恰も出產の際に、恐怖の發生が生ずる如きもので、利用し切れぬリビドの過剩が、その排出を恐怖發生の方へ見出すと言ふ可能性が、共通であり、甚だ可能なのである。此の如き現實神經症の根柢に於て、特に容易に精神神經症が發生し得ること、卽ち言ひ換へれば、自我が、暫時の間は浮動してゐる恐怖を節約し、症狀形成に依つてこれ

を結合するのである。外傷性戰時神經症なる名前は甚だ多種なる病症を總括してゐるのであるが、この神經症の分析は、恐らくは、そのうちの一部は必ず現實神經症の特質をもつてゐることが明かにせられるであらう。

種々なる危險情況の發生を、起原的には總て出產典型から描き出し來ると言うても、總ての後期の恐怖條件は、早期のものを單純に無力にするものであると主張することは出來ない。自我發育の進捗が早期の危險情況を無價値となし、且つ除外することを努めるのである。故に或る一定の發育年齡に於ては、或る一定の恐怖條件が適合して頒たれてゐるとなす可きで、心理的無力の危險は、自我の未熟の年齡に適合してゐるし、對象喪失の危險は、小兒齡第一年の、非獨立性に適合してゐる。去勢危險は男根期に、超自我恐怖は、潛伏期に適合してゐる。然し、總て此の如き危險情況、及び恐怖條件は、互ひに同時に存在することも出來るし、自我は、後期の相應ずる時期よりも遲れて恐怖反應を示し來ることも出來るし、又は多くの恐怖情況を同時に實際に入り來らしめることも出來るのである。最も可能なるは、實際の危險情況と、これについで生ずる神經症の形式との間には恐らく甚だ近接なる關係が存するのであらうと言ふことである。

（註）自我とエスとの區別をなして以來、我々の壓迫現象の問題に對する興味は、新しい激勵を經驗したので

ある。以前は、壓迫過程の自我に向けられた側では、意識からの拒否と、運動性からの拒否と、代理(症狀)形成とだけを眼につけるを以つて滿足してゐたのである。壓迫せられた本能衝動それ自身に對しては、それは無意識のうちに一定しない長期に存し、而も變化を受けることなく存すると假定してゐたのである。今や、興味は、此の壓迫せられたるものの運命に向けられて見ると、斯くの如き變化を受けざるもの、斯かる變化を受くる傾向なき繼續は、自明ではない、恐らくは甚だ尋常なものではない事を思はねばならない。起原的の本能衝動は、總ての場合に於て壓迫現象によつて制止せられ、その目的とする所を轉向せしめられる。然し、その無意識のうちへの所屬はそのまま殘り、而も、生活時期がそれを變化せしめんとし、これを無價値ならしめんとする、その影響に對しては抵抗を示すのであらうか。斯くて、古い願望、即ちその早期の存在が分析上知られて來た古い願望が尙存續するであらうか。これに對する答は明かに次の如く確言し得るやうに思はれる。壓迫せられた古い願望は、無意識のうちに尙ずつと存在するに違ひない。何故ならば我々はその誘導體、即ち症狀を尙今でも實際に見出す位であるから。然しこの答は全く決定的であるとは言へない。この答は二つの可能性の間を決定せしめては居らぬ。即ち古い願望は、その總てのエネルギー充塡を有してゐる所の誘導體に依つて作用を現してゐるのであるか、或はこの誘導體の外に、尙自身殘つてゐるのであるかとの二つの可能性である。若しもその運命が、その誘導體の充塡で消費つくされて了ふのであつたならば、第三の可能性、即ち、その運命は

神經症の經過中退行現象によつて再び生命を與へられ、依つて季節はづれに、現在して來るかも知れぬとの可能性もある。斯かる叙述は無駄事と思つてはならぬ。病患の場合も、正常精神生活の場合も、此の疑問設定を要することがあるからである。余の、エディプス複合の轉換現象に關する研究の中には、唯單に古い願望の壓迫せられたことと、實際に廢絕して了つたものとの區別について論じて置いたことがある。

單なる神經症的病症以外の場合に於ける、去勢恐怖の意義に關する、研究の早期のものに於て、余は此の去勢なる動機は決して過剰に評價せられてはならぬことを書いて置いたことがある。何故ならば凡そ女性に對しては、卽ち神經症に傾いてゐる女性に對しては、去勢なる動機は確かに決定的であるとは言ひ兼ねるからである。だから我々は、去勢恐怖を、神經症に導かれる防禦過程の、唯一の動機であるとして說明してはならぬ。余は他の場所に於て、小さい女兒の發育が、去勢複合によつて、情愛的對象充塡に轉向せられた例を書いたことがある。正に女性にあつては、對象喪失の危險情況は最も實際的のものである。故に我々は、女性に對する恐怖條件については少しく變形を與へねばならぬ。卽ち、對象の見失ひ、又は眞の喪失に關係あるのではなく、對象の側からの戀愛の喪失にあるとせねばならぬのである。ヒステリー症が女性へ最も大なる親和力のあること、强迫神經症が男性に浸

も現れ易いこと等は、ヒステリーの際には、戀愛喪失の恐怖條件が主役を演ずるものであり、强迫性神經症の際には超自我が、恐怖症の際には去勢威嚇が同じやうに主役を演ずるのであるとの臆測を正に裏づけるものである。

第九

さて今殘つてゐるものは、症狀形成と、恐怖發生との間の關係を如何に取り扱ふかと言ふ問題である。

二つの考へ方が、此の問題については、廣く信ぜられてゐる。その一つは恐怖それ自身が神經症の症狀の一つであるとなすもので、他の考へ方は、此の兩者は非常に密接な關係があるが、別物であるとなすものである。前者に從へば總ての症狀形成は、恐怖を避けるために試みられてゐるもので、症狀は心理的エネルギーを結合してゐるが、若しさうでなければ恐怖となつて排出せられたに違ひないもので、故に恐怖こそ神經症の根本現象であり、且つ根本問題であることになる。

第二の主張の、少くとも部分的に是認せらる可きことは、的確なる例によつて證明することが出來る。例へば一人の臨場苦悶者に伴うて街に出て、其處で置き放しにしたとすると、此の患者は恐怖發作を起して來る。又强迫神經症者の手に觸つて置きながらその手を洗はせぬやうに妨げて見ると、此の患者は殆ど堪へることとの出來ない恐怖の虜となるであらう。其處で、一緒についてゆくこととの條件

るのである。

及び手を洗ふことの强迫動作は、斯かる恐怖發出を防がうとする意圖を有し、且つ結果をも持つてゐるのである。

此の意味に於ては、自我が課する總ての制止は、症狀と名付けてよいであらう。

さて恐怖發生を危險情況に歸せしめて考へて來たのであるから、症狀は自我を危險情況より除くために形成せられるのであると言ふことが出來る。此の症狀形成が妨げられると、危險が實際に生じ來る。卽ち自我が、絕え間なく生じ來る本能要求に對して無力であること恰も出產に類似の情況が生じ來ることが、第一の、そして起原的の恐怖條件である。我々の見るところでは、恐怖と症狀との間の關係は、從來假定せられてゐる所では間隙が存すると思はれる。依つてこの二つのものの間に、危險情況なる一要素を挿入するのである。更にこれに補足するために、恐怖發生が、症狀形成を導き入れるものであること、卽ち恐怖發生の方が、必要なる前提であることを附け加へねばならぬ。何故ならば、自我が恐怖發生に依つて、快不快審判を眼醒ましめるのではないのであるから、エスの中に準備せられた、危險に迫る過程を止めしむる力を得ることが出來ない筈だからである。此處に於て恐怖發生は極く少量に限るやうな傾向、卽ち恐怖は唯信號として用ふるのみである樣な傾向が明瞭となつて來る。何故ならば、然らざれば、快感原理の意圖からの結果ではないもので而も神經症の場合に屢〻

生ずるやうなものを、唯他の場所に移さんとするだけで、本能過程より來る强迫的の不快を得ねばならぬことになるからである。

症狀形成は、斯くして危險情況を止めしむると言ふ眞の結果を生ずる。而も症狀形成には二つの側を有する。一つは卽ち、我々に隱されてゐるもので、エスのうちで變化を生じ、この變化によつて、自我が危險より逃れるところのものである。他の一つは明かに示されてゐるもので、影響せられる本能過程の代りに形成せられるもの、卽ち代理形成である。

然し、更に正しくこれを表現すれば、我々が、症狀形成について今まで說明したものは、寧ろ防禦過程に歸す可きものである。そして、症狀形成なる言葉自身は、寧ろ代理形成の同義語として用ひる可きものである。斯くて、防禦過程は、自我がそれによつて外界より迫り來る危險から逃れる逃避と全く類似するものであることが明かとなる。從つて此の防禦過程は、本能危險に對する逃避の試みとして描かれるものであることも明かとなつた。此の如き比較に考へつくことは、更に說明をなすに助けとなる。第一には、對象喪失（對象の側から言へば戀愛喪失）及び去勢威嚇は同じやうに危險である。これは嚙みつく獸の如くに外より來るものであつて、本能危險ではないと言うてもいい位である。然し、この兩者は全く同じでない事は言ふ迄もない。狼は恐らくは我々に飛びかかるであらう。

如何にそれに對して我々が或る態度をとつても同じことである。然し若しも我々が一定の感情又は意圖を我々の內界に近づけないであらうならば、愛する人は我々から愛を奪はない。去勢は我々に迫つつ來ない。而も斯かる本能衝動は、外界の危險條件になつて、依つて自ら危險となるのであるから、我々は外界の危險に對して逆に今や內界の危險に對する手段を用ひて打ち勝たねばならないことになる。動物恐怖症にあつては、危險は全く、外界のものとして感受せられるやうに見えるし、症狀としても亦、外界への移動として經驗せられる。然し强迫性神經症にあつては、これははるかに內的のもので、超自我に對する恐怖の一部が、社會的恐怖となつたものである。卽ち外界の危險の代理物が、內界に代表せられてゐるもので、更に他の一部、卽ち良心恐怖に至つては全く內心理的 endopsychisch のものである。

第二の駁論、迫り來る外界の危險に對する逃避の試みは、我々と危險との間に成る可く大きな餘地を作るにあるのではないか。然るにこの意味に於ては我々は危險を防禦してはゐない。危險に對して他の場合の如く何物をか變化せんと試みてはゐない。狼に對して丸太棒を以つて突進してゆくのでもなく、又は武器を以つて狼に向つて發砲するのでもない。故に此の防禦過程は逃避の試みよりも何かより以上のことを行うてゐると見なくてはならぬ。卽ち防禦過程は迫り來る本能經過を攻擊してそれ

を何とか抑へつけ、その目的を外らさしめ、依つて殆ど危險なくせしむるのではないかと言ふ駁論である。此の駁論は却下することは出來ない。我々はこの駁論は斟酌しなくてはならぬ。逃避の試みに正當に比較し得る防禦過程、即ち自我が更にはるかに防禦をなし、强力なる反對行動をとるやうな場合も存在することは確かであらう。防禦と逃避との比較は、自我と、エスの中なる本能とが、同じ統帥下にあり、小兒と狼との如く分つことの出來ぬ存在であり、依つて自我の總ての態度が本能過程に相應じて作用すると言ふやうな事情にあつては、全く正當とせらる可きものであると考へる。

恐怖條件の硏究に依つて、我々は防禦の際自我の態度を、言はば合理的の淨化作用 Verklärung として觀察せねばならなかつた。總ての危險情況は、精神裝置の一定の生活期、又は一定の發育期に相應し、又それ等に對して是認せられるやうに見える。早期小兒期の本態は、外からも內からもやつてくる大なる興奮總量を心理的に克服す可く、よく實際に裝備せられてはゐない。或る一定の年齡に至る迄、依賴する人が、情愛の配慮を撤去しないことは、甚だ重要なる利益がある。男の子が、力の强いその父親を、母親に關しては競爭者として感ずる時に、その父親に對する攻擊的の傾向と、母親に對する性的の意圖とを同時に有するのであつて、彼は十分父親に對して恐れる理由があるのである。且つ、彼の刑罰に對する恐怖は去勢恐怖として宗族發生的に增强を受けて表現せられるのである。社

會的關係に入り込むと、恐怖は超自我に對して生じ來り、良心が重要なるものとなつてくる。此の動機がなくなると、大なる軋轢や危險の生じ來る源泉となるのである。然し、此のことに踵をついで、更に新しい問題がある。

暫時の間、恐怖情緒を、他のもの例へば苦痛情緒によつて代理させて考へて見よう。我々は四歳の少女が、彼女の人形が壞れた時に、苦痛を以つて泣き、六歳の時に、女教師に叱られて泣き、又十六歳の時に彼女の愛人が彼女のことを構ひつけなかつた時に、又二十五歳の時に、恐らくは、彼女が子供を野邊送りする時に、苦痛で泣いたとすれば、全く正常のことと考へられる。總てこれ等の苦痛條件はその時代時代に各〻相應ずるものであり、これが經過し盡すによつて消失して了ふのである。但し、この最後のものの如き一定の苦痛條件は、生涯を通じて存するのである。然し、此の少女が、婦人となつてから、又は母となつてから、玩具の壞れたことについて泣いたであらうならば、それは甚しく不思議なことと言はねばならぬ。然し神經症者には斯くの如きことがふんだんにある。彼等の精神裝置は旣に永い前から、刺戟克服の總ての審判が、更に大なる範圍に亙つて形成せられ、多くはその要求を自ら滿足せんために十分成長してゐる。永き前より、去勢はもはや刑罰として作用するのではないことを十分承知してゐるのであるに拘らず、しかも尙その古い危險情況が尙成立し得るものと

して態度をとるのであり、總ての早期の恐怖條件に固執してゐるのである。

これに對する答は、少しく廣汎に亙る。先づ第一に事實を篩ひ分けねばならぬ。多數の例に於ては古い恐怖條件はそれが神經症的反應を既に生じてしまつた後は、實際に脱却してしまつてゐる。小さい小兒達の恐怖症、例へば獨りぼつちについての、暗闇に對しての、又は見知らぬ人に對しての恐怖症は、殆ど正常のものと名付くることが出來る。然しこれ等も或る年齢となつてからは、多くの他の小兒性障碍についても同樣であるが「小供の着物が間に合はなくなる」如く消失してゆくのである。甚だ屢〻現れる動物恐怖症も亦同一の運命を辿る。多くの小兒期の轉換性ヒステリー症も、後には殆ど繼續を見出さぬ。潛伏期に於ける儀式も、甚しく屢〻現れるものであるが、然し極く僅かのプロセントだけが後に强迫性神經症にまで發展し來るはかりである。小兒性神經症は、殆ど、――我々の經驗した高い文化要求に投ぜられてゐる白人種の都會の子供に於ける範圍內に於ては――發育の途上に於ける規則的なる挿話でしかない。假令それについて尙僅かな研究しか與へられては居ないけれども、又小兒性神經症の證跡は、成人の神經症者に、必ずしも存するものではない。又はその證跡を存する總ての子供が、後に神經症者となるのでもない。故に成熟の經過中に、恐怖條件は消失し去るに違ひない。且つ危險情況も亦その意義を失つて了ふに違ひない。然し、此の危險情況の若干のものは、

その危險條件が時宜に應じて變改せられることによつて、後年にも倘面影を止めてゐることもある。斯くの如きは、例へば去勢恐怖が、梅毒恐怖の假面に於て再生する如きものである。去勢はもはや、性的慾望の自由放任に對する刑罰ではなくなつてゐるが、然し、このために、本能自由は重大なる病患に陷つてゐるのである。恐怖條件の他のものは、一般に消失して了ふとは限らない。超自我に對する恐怖の如きは却つて人間に對しては、生涯を通じて伴ふものである。斯くて神經症者が正常人と區別せられるところは、神經症者は危險に對する反應を過度に高くする點にある。起原的の外傷性恐怖情況の歸り來ることに對しては、成人と雖も何等の保護を有するものではない。それは各人に一定の限界が與へられてゐるのであつて、彼の精神裝置は、これを輕減し克服するために、要求する興奮量をその限界を越すと拒否することになるのである。

此の短い訂正も、次に述べる如き事實を覆へす決定となることは不可能である。その事實とは卽ち、危險に對する態度に於ては、小兒の如くに止まつてゐて、旣に年古りたる恐怖條件をも打ち勝つことが出來ぬやうな人が甚だ多いではないかと言ふ點である。然し事實はそれが神經症の事實を否定することにはならぬ。却つて斯かる人々をこそ正に神經症者と呼ぶ可きものなのである。然し、それは如何にして可能なのであらうか。何故に、總ての神經症が、次の時期に到達するに於て、全く除外

せられるであらうところの、發育上の挿話でないのであらうか。何處から、危險に對する此の反應の永續的動機が來るのであらうか。又何處から、此の恐怖情緒が總ての他の情況の上に享有してゐる優越、卽ちこれのみが他のものから非正常として分たれる反應を生じ來り、生命の流れに對して非合目的として對立してゐる優越は、何處から來るのであらうか。他の語を以つて言へば、我々が甚だ屢と問はれる魔法の質問、卽ち、神經症は一體何から來るのか、何が神經症に特有なる、最大の動因であるのかと言ふ質問の前に、又しても立つに至つたのである。分析的研究の十年の後に、此の問題は再び我々の前に立つてゐるのである。少しも觸れられたことなく、その初めのものと全く同一な姿で。

第十

恐怖は危險に對する反應である。恐怖情況が、精神的經濟の上から除外例を强制するとしても、恐怖か危險の本性に大なる關係があるとの觀念を否むことは出來ない。然し危險は一般的には人間的なもので、總ての個人に對して共通のものである。我々の必要とするもので、且つ今まで何處分の出來なかつた所は、個人の差異を我々に理解せしめる動機である。この選擇とは、恐怖情況を、その特別さにも拘らず、正常の精神的衝動に投げ入れて了ふ人もあるに拘らず、此の問題に坐礁せねばならぬ人もあるとのことである。余は、此の如き動機を發見する二つの試みがなされてゐるのを思ひ浮べる。この二つの試みは何れも同情的の容認が期待せられるには違ひない。何故ならばその試みは、苦しみつつある要求に補助を與へるからである。此の二つの試みは互ひに補促し合ふものであつた。此等は互ひに反對側に對立する終局を攻めてゐるのであつたからである。第一のものは、旣に十年以上もアルフレド・アドラーが建築してゐたものである。アドラーは、彼の最も內的なる核心に還元して次の如く主張してゐる。卽ち危險によつて提出せられた問題の克服をなすことの出來ぬ人々は、その器官の劣等なることにその力點があつた人々であると言ふのである。Simplex sigillum veri（單純は

眞理を示す」と言ふのが正しいならば斯くの如き解決は、寧ろ救濟として視ふ可きものである。然し、これと反對に、既に過ぎ去つた十年の批評は、此の說明が全く不十分なること、卽ち精神分析學に依つて發見せられた事實の全領域は全然此の說明に對して外れてゐることを、證明してしまつたのである。

第二の試みは、オツト・ランクが一九二五年に彼の著書「出產の外傷」に於て企てたものである。これは、或る意味に於て、此の事を主張したものとして、アドレルの試みと同列に置くのは不公平であるもので、且つ分析的の問題の解決について、正當なる努力として認めらる可きものであるからである。何故ならばそれは全く精神分析學のうちに基礎を有してゐ、且つ精神分析學の思考行程を續けて、危險の變化する强度に歸してゐるのである。出產過程は、最初の危險情況である。それから生じ來る經濟的擾亂は、恐怖反應の典型である。此の最初の危險情況と、總ての後期恐怖條件とを結合してゐるところの發育線を追求した。そしてそれは、何か共通なるものを保持してゐるものであること、或る意味に於ては總て母親からの別離を意味してゐるものであること、先づ第一に、唯生物學的見地に於て、然る後に、直接なる對象喪失の意味に於て、後には、間接的なる意味に於て、何れも母

親からの別離と關係あるものとして見るのである。此の如き大なる關係を發見したことはランクの構成として爭ふ可からざる貢獻である。さて出產の外傷は、各個の個人に對して、種々なる强度で出て來る。此の外傷の强さで恐怖反應の猛烈さも亦異る。そしてランクに從へば、その個體がそれを征服し得るか否か、卽ちそれが、神經症的となるか、又は正常となるかは、此の恐怖發育の最初の大さに關係せねばならぬと言ふのである。

此のランクの見解を個々に批評することは、當面の問題ではない。唯それが我々の問題の解決に對して用ひ得るや否やの檢定が問題なのである。ランクの公式、卽ち神經症者は、出產外傷の强かつた爲に、此のものを、完全に、離脫 abreagieren することが出來なかつた人であると言ふのは、理論的に甚だ、不備なるものである。外傷の離脫の意味するところは何であるかを正しく知ることが出來ない。言葉通りに考へて見れば、神經症者は、恐怖情況を、屢々、且つ强く生ずれば生ずるほど、健康に近づくものであるとの、首肯し能はぬ結論に至るのである。此の如き矛盾のために、實際に余はランクの此の離脫の學說を捨て去らねばならぬ。而もこの離脫と稱ふるは[illegible]利療法に於て大なる役目を演じ來つたと同じものである。出產外傷の變化のある强度と言ふ主張には、遺傳的體質となす正しい要求を無視することになる。卽ちこの主張では體質なるものに對して、恰も一つの偶然性を與へる

有機的の動機を主張することになる。卽ち、多くの、偶然と名付けられたる影響、例へば、出產に當つての時宜を得たる救助處置に關係してゐるもので體質を決定することとなる。斯くてランクの學說は、宗族發生的因子を考へに入れて居らぬと同樣に、體質をも考へに入れてはゐない。然し、若しも體質の意義に對して、何か制限を加へることによつて餘地を與へるとするならば、却つて、如何に甚しく個體は、出產外傷の變化ある强さに反應するものであるかと言ふことが問題となつてくる。斯く考へれば此の學說からは意義が奪ひ取られて了ひ、新しくその副役として導入せられた因子に、却つて制限されることになるのである。神經症になる原因に關しての決定は、斯くして、更に他の未だ知られざる領域に橫はつてゐることになる。

人間は、出產過程を、他の補乳動物と同樣に所有して居るのに、人間に對してのみ、特別なる神經症への素質を許し、動物に對する特殊なる優越點であるとなすのは、ランクの學說に對しては、不都合となる事實である。主なる駁論は、ランクの學說は、確かなる觀察によつて支持せられて居らぬ空中樓閣であると言ふ點にある。難產で且つ、長びいた出產は、例外なく神經症の發生と一致するや否やに關しては、確かなる硏究はない。更に、斯くして生れた子供のみが、他のものに比して早期小兒性恐怖の現象を、更に永く、且つ更に强く現すや否やについては不明である。墜落出產、卽ち母親の

ためには容易なる出產が、却つて小兒に對しては、重い外傷となり得ると言ふことが信ぜられて居るが、窒息を生ぜしめるやうな出產こそ却つて、此の主張せられる如き結果を確かに現す筈であるとするのは正當であらう。ランクの病因論には、その再試が、經驗を材料として可能であると言ふ點が取り柄である。だから人が此の如き檢索を實際に企てざる以上、その價値を定める事は不可能である。

これに反して、余は、ランクの學說は、從來精神分析學に於て、認めてゐた性慾本能の病因學的意義に相反するものであるとは考へられない。何故ならばそれは、個體と危險情況との關係にのみ關係してゐるものではあるが、最初から危險に打ち勝ち得なかつたものは、後に生じ來る性的危險の情況に於ても失敗するに違ひなく、依つて以つて神經症に追ひやられるのであるとの豫知をなさしめるからである。

余は、ランクの試みが、神經症の根據に對する我々の疑問に答を與へ得るとは信ずることが出來ない。又如何に大なる寄與を、此の疑問の解決のために與へたかを決定することも出來ぬと考へるのである。難產が神經症への素質へ影響するとのことに關する硏究が、否定的の結果を得たならば、此の學說は何等寄與するところがないと言はねばならぬ。神經質 Nervosität の理解し得る、單位的なる「決定的原因」を求めんとする要求は、未だに不滿足に止まつてゐることは遺憾である。理想的の例・

例へば分離することが出來るし、純粋培養することが出來る細菌の如き、卽ち、その注射が、誰にでも同じやうな病症を起さしめる細菌の如き例を、今日も尙醫師は憧れてゐるのである。或は亦、更に少しく空想を除けば、或る化學的物質、それを與へると一定の神經症を生ぜしめ又は癒し得るやうな化學物質の檢出が出來るとよいのである。然し我々の問題は、斯くの如き解決に對しては全く蓋然さがない。

精神分析學も亦、更に單純ならざる且つ、不滿足なる報告をしか與へ得なかつた。余は、此處に、既に永い前より知られてゐたものを繰返すだけである。何等新しいものを附加することが出來ない。自我が、或る危險なる本能衝動を防禦することが出來たとしたならば、例へば壓迫現象の過程によつて、これが出來たとしたならば、エスの此の部分は正に制止せられ、且つ傷害せられたのであるが、然し、そのエスには、同時に少しく獨立性が與へられ、自我は却つて少しく、固有の支配權を失ふのである。このことは、壓迫現象の本性からさうなつて來るのであつて、その根柢は勿論逃避の試みである。壓迫せられたるものは、自我の大なる統帥編成から、追放せられたるもの Vogelfrei として除外せられて了ひ、無意識界を支配してゐる法則にのみ從ふのである。さて若しも危險情況が變化したとすると、自我は、此の新しい、壓迫せられてゐた本能衝動と類似のものに對しては何等防禦の動機

も有しないから、自我制限によつて起る結果が著明となつて來るのである。依つて此の新しい本能經過は、自動性 Automatismus の影響の下に完成し、――余は、言ふことを躊躇するが、繰りかへしの强迫の影響の下に、――既に前に壓迫せられたものと同樣なる道をさ迷ひ、恰も打ち勝つた危險情況が尙存在するが如くになるのであらう。故に壓迫現象へと固定せられた動機は、正常にあつては、自我の自由運動的の作用に依つて止められる筈であるところの、意識せられざるエスの反復强迫となる。自我は自ら立ててゐる壓迫現象の埒を破り、依つてその本能衝動に對する自我の影響を再び得ることが出來、從つて新しい本能經過を、變化せられた危險情況として誘導することが出來ると考へるかも知れぬ。然し事實に於ては、この事は生じないこと、且つ、その壓迫作用なるものは逆行せられることは出來ないと言ふ事が示されてゐる。量的關係は、此の爭鬪の現れとして標準となすことが出來るかも知れぬ。然しこの結論は、寧ろ無理であつて、壓迫せられた衝動の退行的引力と、壓迫作用の强度とは、甚だ大であるために、此の新しい衝動は却つて反復强迫に從ふことが出來るのみであるとの印象が、多數の例から得られるのである。他の場合では、別の力が補足として入り來つてゐることが認められるもので、依つて壓迫せられた原型の有する引力は、新しい本能衝動の經過に反對して生じ來る、眞の困難に依つて拒絕せられるから、却つて增强せしめられるのである。

壓迫現象への固定の此の由來、及びもはや現實の危險情況ではないものの此の保持は、分析療法の決定的の、然しながら理論的には何等評價せられ過ぎてゐるものでない事實のうちに、その證跡を見出すのである。我々が、自我に對して、分析によつて助けを與へて、その壓迫現象を止めしめるやうにせしめてやると、自我は再びその力をエスの上に得來り、そして本能衝動を、恰も、古い危險情況はもはや存在せぬ如く、經過せしめることが出來るやうになる。斯くして我々の達したるところは、我々の醫學的活動に於ては、これ以外の領域にも同じやうなやり方があるが、それとよく一致するのである。一般的には、我々の療法は、迅速に、且つ確實に、極く僅かの消費で、良い結果を將來し、且つそれは都合よい事情の下にあつては自發的に成就し得るやうな結果を將來するを以つて滿足とするのである。

上述のことは、量的關係なるものは、直接には示すことが出來ないものであること、唯古い危險情況が固執せられてゐるか、或は自我の壓迫現象が支持せられてゐるか、或は小兒神經症が尙その繼續を見出してゐるか否か等を決定する歸結の方法によつてのみ理解し得るものである事を示してゐる。神經症の原因をなすものに關與してゐるところの因子、卽ち心理的の力が互ひに力比べをするところの條件を構成してゐる因子のうちで・我々の理解には略三つのものが存する。卽ち生物學的、宗族發

生學的、及び純粋の心理學的のものである。此處に生物學的と稱するのは、人間の小兒が永く有する、無力さと依賴とのことである。人間の子宮內存在は、多くの動物に比して比較的に短く、從つて此の世界に送られ來る場合に、尙未完成であるやうに見える。依つて實在の外界世界の影響は強く與へられ、自我とエスとの分化は早期に促され、外界世界の危險はその意義が高められ、從つて、唯それのみがこの危險より保護し、且つ子宮內生活を代理する處の對象の價値は、過剩に高いことになるのである。此の如き生物學的の動機は、最初の危險情況を形作り、且つ、愛せられねばならぬとの、人間から決して消失しない要求を生ぜしむるものである。

第二のもの、卽ち宗族發生的の因子と言ふは、推論から來たものである。卽ちリビド發育の甚だ著しい事實は、此の假定をなさしめる。人間の性的生活は、人間に近い動物が、初めから成熟まで絕えず發育してゐるやうなものではない。それは最初の早期開花の五歲迄の後に、強い中絕が來り、後、思春期となつて新しく高められ、これが小兒性の時代のものに結合するのである。我々は、斯かる性的發育の中絕は、歷史的の沈澱物として殘されたもので、何か重要なる意義が人類の運命上偶然にも附加してあるに違ひないと考へるのである。此の動機の病的意義は小兒性性慾の多くの本能要求は、自我から危險として處理せられ、そして防禦せられることから生じ來つてゐる。故に後の思春期の性

的衝動は自我によつて正しいとせられるものであるが、小兒性典型の引力に從ふと危險となつて來るもので、依つて初めて壓迫されることになるものである。此處に我々は、神經症の最も直接なる病因につき當る。注意す可きことは、この性慾の要求と早期に於て接すると云ふ事實は、自我に對しては、外界と早期に於て接觸すると全く同じやうに作用することである。

第三の、卽ち心理學的因子は、我々の精神裝置の不完全さに見出可すきものである。卽ち、自我とエスとに分化することが大なる關係を有することである。而も最終に於ては、やはり外界の影響に歸す可きものである。實在の危險を顧慮することによつて、自我は一定のエスの本能衝動に對して抵抗する。その時その本能を危險として取り扱ふ必要があるのである。自我は、然し、內的の本能危險に對しては、彼より外にある實在の一部に對しての如く、有効に自衞をすることは出來ぬ。エス自身と親しく結合し、依つて初めて本能危險を防禦することが出來るのである。斯くて、彼の固有の編成を制限し、症狀形成を代理として、本能の侵害に適合せしめるのである。斯くて拒絕せられたる本能の衝動が、新たに起つて來る時に、自我に對して、我々が神經症として知つてゐる、總ての困難が生じ來るのである。

斯く考へ來ると余は、神經症の本態、及び原因についての我々の洞察は、單に暫定的のものではな

いと信ずるのである。

第十一 補遺

以上の叙述の中には、種々なる主題に觸れて來たが、暫くそのままに打ち過ぎて置いたものがある。それを此處に一括して、それ等が要求する部位を明かならしめ度いと思ふ。

A 既に述べた見解の補正

(a) 抵抗、及び反對充塡

壓迫現象が、一時的の過程ではなくして、永くつづく消費を要するものであることは壓迫現象の學說のうちで最も重要なる點である。此の消費がなくなつたならば、その源より連續的の供給を受けてゐた、その壓迫せられた本能は、直ちに曾つて抑壓される時に通つて來た前の道を踏み出すに至るであらう。然らばまたその結果に對して壓迫現象が生ぜねばならず、又は不定に屢々繰りかへし壓迫せねばならなくなる。斯く本能は、その本性上連續的のものであるから、自我は、卽ち繼續消費によつてその防禦行爲を保證しようとするのである。壓迫現象の支持に對する此の行爲こそ、我々が治療的動作の場合には**抵抗**として感ずる處のものである。この抵抗なるものは必然的に、我々の既に**反對充塡**

Gegenbesetzung と稱したるものを前提せしめる。斯くの如き反對充塡なる現象は、强迫性神經症の場合にはよく判る。この反對充塡なるものは、此處では壓迫せられてゐた本能方向に對して、反對である處の趨向（例へば同情、良心、純潔等）が增强することに依つて自我變化、自我內に於ける反動形成として現れるものである。强迫性神經症の此の如き反動形成は誇張されてはゐるが、發育中の性格特徵の潛伏期の經過にあつては、全く普通の事なのである。ヒステリー症の場合に、反對充塡を求めるのは、論理的にはこの期待がある筈であり乍ら、少しく困難である。卽ちヒステリー症にあつては、此處でも、反動形成に依る自我變化がどれ位あるかどうかは不明である。且つ多くの關係に於てその狀態の主症狀として注意を引くことは極めて稀である。斯くの如き方法に依つて、例へばヒステリー症の對立兩存的軋轢は解釋せられる。愛人に對する憎みは、その人に對する情愛の過剩に依つて、及びその人についての不安に依つて抑制せられるのである。だから、强迫性神經症との間の區別としては、斯くの如き反動形成は、性格特徵の一般的性質をなしてゐるのではなく、全く特別なる關係に限られてゐることを力說せねばならぬ。ヒステリー症、例へばその心の底に於ては憎んでゐる小兒を、特別に情愛を以つて取り扱ふ如きは、そのために却つて、他の婦人よりも、全體として愛情がないことになるし、從つて他の子供に對しては曾つて情愛的ではないのである。故にヒステリー症の

反動形成は或る一定の對象に對して強く固定してゐるのである。だから自我の一般的素質にならぬのである。强迫性神經症にとつては、これは全く一般化せられ、對象關係が確固とせず、對象選擇への移動も容易であること等が特性的のものである。

他の反對充塡の種類は、ヒステリー症に固有の種類の如くに見える。壓迫せられたる本能衝動は、二つの側より賦活せらる（新しく充塡せられる）ことが出來る。一つはその內部的興奮根源から出て、本能を强めることによつて內部からであり、第二は外部から、本能に對して好ましいやうな對象の認識に依つてせられるのである。ヒステリー症の反對充塡は、主として外部に向つて、危險なる認識に對して向けられる。それは自我制限に依つて、その危險認識が生ずる如き情況を避ける特別なる警戒の形式を假りに取る。そして斯くの如き認識から、その認識の浮び生じたる時に注意力を奪取することによつてそれを成しとげる。佛蘭西の詩人ラフオルグは、簡單に、斯かるヒステリー症の働き方を、特別の名卽ち「部分視」Skotomisation と稱した。ヒステリー症よりも此の反對充塡の手法の更に著しいのは、恐怖症である。卽ち恐怖症の努力は、恐れられてゐる認識の可能性から常に遠ざからうと言ふことに主として集中せられてゐる。ヒステリー症と恐怖症との間の反對充塡の方向が反對であること、及び他方ヒステリー症と强迫性神經症との間の反對充塡の方向も亦反對であることは、そ

れが何等絶對的のものでないので、甚だ深い意義を有する事になる。それは我々をして次の如き事を假定せしめる。卽ち壓迫現象と、外的反對充塡との間は、退行現象と、內的反對充塡（反動形成による自我の變化）の間の如くに、最も親しい關係によつて成立してゐると言ふことである。危險なる認識よりの逃避は神經症の一般的宿題である。强迫神經症の數多の命令や禁令は、共に同じ意圖に役立つのである。

我々が精神分析に於て打ち勝たねばならぬ抵抗は、自我より來てゐて、その反對充塡に依つて固定せられてゐる事は既に一度明かになしたところである。自我はその注意力を、以前には原則として回避してゐた如き認識や表象に向けることは少しく困難である。或は亦卽ち彼に固有なるものと信じてゐたところと全く完全なる反對のものを形成するところの衝動を自分自身のものとして認めることは困難である。分析學に於て抵抗に打ち勝たねばならぬと言ふことは、自我を斯く理解するからである。壓迫せられたるものとの關係上、それ自身意識せられざることが屢々であるが。その樣な時も抵抗は意識することが出來る。我々はその抵抗が、意識せらるるや否や、或は意識せられたる後は常に、抵抗に對して論理的論議を以つて反對する。又自我に對しては、若しも自我が抵抗を癈絶せしめたる時には、利益と優位とを約束する。斯くの如く自我の抵抗については、疑ふ可くもないし、又は訂正

す可くもない。然しこれに對して、果してその抵抗のみが分析に當つて、關係す可き事物關係を蔽ふものであるかどうかは疑問である。我々は自我は、壓迫現象を逆に歸へすために常に困難を見出すと言ふ經驗がある。自我が、その抵抗を捨ることを企てた後でもさうである。而も、此の稱讃す可き企圖の後に、「推敲」Durcharbeiten と呼ばれる、劣力の時期がある事を經驗してゐる。さて今や此の如き推敲を必要とし、且つ理解せしむる力學的動機があることを認めねばならぬ。即ちその動機とは自我の抵抗が終つた後もまだ、無意識の原型が壓迫せられたる本能過程に及ぼす引力、即ち反復强迫の力を打ち勝たねばならぬことである。この動機は、意識せられざるものの抵抗と言はれても宜しい。斯くの如き訂正をも我々は決して厭はぬ。それは、若しも我々の理解を一歩でも進ましむるものならば、寧ろ望む可きであるし、それが既に述べたところと矛盾せず、更にそれを豐富にするものならば同時に一般論を少しく制限するとしても、餘りに狹かつた理解を擴げしむるのであるから、それは少しも汚辱ではない。

我々は、此の訂正に依つて、我々が分析に於て遭遇した抵抗のあらゆる種類を概觀することが出來たとは言ひ兼ねる。更に深く追求することによつて、我々は五種類の抵抗に打ち勝たねばならなかつたことを知るであらう。その五種類は三方面、即ち自我、エス、及び超自我より來つたものであるが、

何れも自我が此の三者の源泉であり、それ等の力學的の區別ある形式を示してゐるのである。此の三つの自我抵抗の第一のものは既に取り扱はれてゐる壓迫性抵抗であるが、これに對して新しく言ふほどのことはない。此の者より出た、轉授性抵抗 Übertragungswiderstand も同一性質のものであるが、然し分析に於ては、他の、はるかに鮮明なる現象を示すものである。即ち、分析的の情況、又は分析者の人格に對する關係から來る抵抗であつて、依つて唯追想せられるに過ぎぬ壓迫現象が、再びもとの如く鮮かによみがへることが出來ることになるのであるから、更に有意義なる現象である。更に、自我抵抗なるものは更に全く他の性質のものであるが、これは病症利得 Krankheitsgewinn より生じ自我のうちに症狀との關係をつけるものである。それは、滿足又は輕減を癈絕することに對する反抗に相當する。第四の抵抗は——即ちエスより生じた抵抗は、推蔵現象から、これを設定する必要を認めるものである。第五の抵抗、即ち超自我より來るものは、最も終りに知られたもので、從つて最も不明に屬するものである。然し、常に貧弱なものとは言へない。それは罪惡意識又は罰則要求から生じ來るもので、それは分析に由來する結果にも反對するものである。

(b)リビドの變形から生じた恐怖

此の論文に於て提出せられた恐怖の見解は、我々が從來正しとして居つた見解とは、少しく異る

ものである。從來余は、恐怖なるものは不快の條件の下に於ける自我の一般的反應であると考へてゐた。そして恐怖が生じ來ることを常に是認しようとして、且つ、眞性神經症の硏究によつて支持せられて、次の如き假定を置いてゐた。卽ち自我に依つて拒否せられた、又は使用せられなかつた、リビド(性的興奮)は、恐怖の形式に於て直接排出をなすのであると云ふ事である。然し、斯くの如き種種なる決定は、一致せぬこと、少くとも必ずしも互ひに依存してゐないことは、見逃し難いところである。更に此の上に、恐怖とリビドとの間に特別に親しい關係の見ゆることも、亦、不快反應としての恐怖の一般特性とは調和しないのである。

此の見解に對する異議は、自我を、唯一つの恐怖所在となさうと言ふ傾向より來てゐる。故に、これは「自我とエス」のうちで論じた、精神裝置の分析論の結果の一つであつた。從來の見解は、壓迫せられたる本能衝動のリビドを、恐怖の源泉と見るのである。新しい見解では、却つて自我を、此の如き恐怖の責任者と考へるのである。卽ち、自我恐怖又は本能(エス)恐怖と言うてよい。自我は脫性慾的エネルギーで働いてゐるのであるから、新しい見解では恐怖とリビドとの親しい關係が薄弱となつてゐる。余は、少くとも、不確實ではあるがその略圖を示して、此の矛盾を明瞭にし度いと思ふのである。

ランクの臆測即ち恐怖情緒は、余自身既に主張してゐた如く、出産過程の一結果であり、且つ、その時遭遇した情況の反復であるとする考へは、恐怖問題の新しい檢索に對して必要である。外傷として考へ、恐怖狀態を排出反應として考へ、各〻の新しい恐怖情緒を、外傷を完全に離脫せんとする試みであると考へる、氏の固有の見解を以つてしては、余は進むことは出來ない。故に、是非とも恐怖反應から、危險情況へと歸着せしめる必要が存する。此の動機を導入することに依つて觀察の新しい見地が與へられた。出產は總ての後に生ずるもの、即ち變化しゆく存在形態の新しい條件、及び進歩し行く心理的發育に伴ふ新しい條件の下に生ずる危險情況の典型をなすものである。然もその本來の意義は此の危險に對する典型的關係に限られてゐる。出產に際して感ずる恐怖も、他の情緒と同樣な運命を有する一つの情緒狀態の典型である。それは最初の危險情況に於ては合目的であつたのであるが、今は自動的に、その初めの情況に類似する情況によつて、合目的ならざる反應形式として、生じ來るのである。或は、自我が此の如き情緒に對して權力を得、自身でそれを生ぜしめ、危險の警告として、又快不快機制の發現を眼覺さしめるために役立たしめるのである。恐怖情緒の生物學的意義は、恐怖が危險に對する一般的反應として認められるのが正當である。恐怖の所在としての自我の役目は、自我に、その要求に從つて恐怖情緒を生ぜしめる餘地を與へてあることに依つて確められるで

あらう。恐怖は後の生涯にあつては二つの起原を示してゐる。卽ち一つは、出產時と同樣な危險情況が生じたときには意志せられざる、自動的の、常に經濟的に是認せられるものとして生じ、もう一つは、斯くの如き情況がさし迫つた時には、それを囘避することを促すために自我のうちから生じ來ることである。此の第二の場合にあつては、自我は、恐怖を恰も豫防注射のごとくに扱ふのである。卽ち、弱められたる病症發作に依つて、强くやつてくる發作に對抗するために。その場合には此の苦痛ある經驗を指令、又は信號として用ひ、見誤られないために、危險情況は生き生きとして表象せられる。斯かる時には、如何に種々なる危險情況が、それからそれへと生じ來るか、又、その起原的に互ひに相連絡してゐるかは既に個々の例によつて示したところである。神經症の恐怖と、現實の恐怖との間の關係についての問題を攻究するならば恐らくは、恐怖の理解に更に一步を步み入ることが出來るであらう。

從來主張せられてゐた、リビドが直接に恐怖へ變化すると言ふことは、我々の興味に對しては既に僅かの意義しか無くなつた。然しこの事を參考とするならば、我々は多くの例を區別することが出來るであらう。自我がその信號として生ぜしめた恐怖に對しては、此の關係は考へには入れない。又自我が壓迫現象の導入のために働いたところの危險情況の總てに對しても通用せられない。然し轉換性

ヒステリー症の際の壓迫せられたるリビド的充塡は、最も著明に恐怖への變化として、又恐怖としての、排出としての應用例である。我々は、危險情況について更に討究する時は、明かに他のものとして區別せられねばならぬ恐怖發育の例にもつき當るであらう。

（c）壓迫現象と防禦作用

恐怖問題に關する叙述のうちで、余は一つの概念を――或はより謙遜な言葉を使へば――一つの語彙を――再び取り入れた。これは既に三十年前の余の研究の初めに當つて、專ら用ひてゐたのであるが、後これを止めてゐたものである。

（註） 防禦神經精神症（本全集第一卷）を參照せよ。

余は、壓迫現象なる語の代りに此の語を代理せしめた事があるが、然し此の兩者の關係はまだ未決定である。今は余は、此の古い概念卽ち防禦なる概念を再び用ふることに、確實なる長所ありと考へる。但しこれを用ふるに就ては、此の概念は、自我が偶然に神經症に對して生ぜしめた軋轢の場合に、用ひられる總ての手法に對する一般的表現でなくてはならぬこと、及び壓迫現象なる語は、一定の防禦方法卽ち我々の研究の結果としてよく知られて來た彼の防禦方法の名稱であることを、確立して置いた上でのことである。

語彙の革新は唯、新しい觀察方法、又は我々の洞察の擴張の表現である場合にのみ是認せらる可きである。防禦概念を再び取り上げること、從つて壓迫概念に制限を與へることは既に廣く豫想せられてゐた、而も或る新しい根據に依つて初めてその意義が得られた事實がなくてはならぬ。我々の壓迫現象及び症狀形成の最初の經驗はヒステリー症から得たものである。卽ち一度經驗せられた認識內容、及び病的思考形成の表象內容等が忘却せられ、或は記憶のうちに閉ぢ込められて再生を封じられてゐること、從つて意識より除外せられてゐることはヒステリー症の壓迫現象の主特性として知られてゐることを見て來た。其の後、强迫性神經症を研究するに及んで、此の病症にあつては病因となつた出來事は決して忘却せられぬことを發見した。その出來事は意識せられて殘つてゐる。然し表象として現れぬ樣に「隔離せられて」居る。故に殆ど、ヒステリー症に於ける忘却と同じ樣な結果となつてはゐるが、然しこの差異は、甚だ大で我々の臆測を是認せしめるに十分である。强迫神經症が本能要求を除外する道となる過程は、ヒステリー症の場合とは同じではあり得ない。更に研究を進めて次の如き事が知られた。卽ち强迫性神經症にあつては、自我反抗の影響のために、本能衝動が、以前のリビド時期に退行することが行はれる。これは壓迫現象では餘り見ないところであるが、明かに、同じ意味に於て、壓迫現象のやうに作用をなすのである。我々は更にヒステリー症の場合に假定せらる

可き反對充塡は、强迫性神經症の場合には、反動性自我變化として、自我防衛のために大なる役目を演じてゐることを知る。我々は「隔離」なる方法に注意せしめられる。而もこの方法が直接に症狀的表現を生ずる技巧に至つては、尙未だ明かとなすことは出來ぬのである。又魔術的に名付けられた、「出現抑止」の方法をも注意して來た。此等の方法に防禦的傾向があることに關しては、何等の疑ひも有り得ない。然し「壓迫現象」の過程とは類似がないのである。此の如き經驗は、防禦の古い概念を再び取り入れるために十分なる根據を與へるものである。この防禦なる語は、總てのこれと同樣なる傾向にある過程――本能要求に對する自我の防禦――を一括する言葉である。而もこれに對して、壓迫現象をその特別結果として包括す可く十分なる根據を與へる。斯くの如き命名の意義は、我々の研究を深めゆくと、卽ちこの防禦と特定の病症との間に、例へば壓迫現象とヒステリー症との間に於ける如く、近い關係依存を與へることが出來ることの可能性を參考するならば、斯くの如き命名の意義は十分高められるであらう。我々の期待は、更に、他の意義深き依存の可能性に向けられてゐる。精神裝置は、自我とエスとの嚴格なる區別が生ずる前、又、超自我の確立せられる前には、此の如き編我階段に到達した後よりは、種々なる防禦の方法が容易に生ずるであらう、と言ふことである。

B、恐怖に對する補遺

恐怖情緒は、研究によつて更に明瞭となり得るやうな二三の點を有してゐる。恐怖は、見逃す可からざる關係を、期待 Erwartung に對して有してゐる。期待とは、何かに對する恐怖であるとも言ひ得る。卽ち恐怖には、不定と言ふことと、對象のないと言ふ、この二つの特性が附着してゐる。正しい言語の用ひ方によれば、恐怖が一つの對象を發見した時は、その名稱自身を變へて、畏怖 Furcht と言ふ字を用ひなくてはならぬ。恐怖は神經症者にとつては、危險に對する關係の外に、更に以上のものである。この闡明に對して、既に我々は永き前より苦勞してゐる。何故に總ての恐怖反應が神經症的ではないのであるが、卽ち何故に多くの恐怖は正常と見做すのであるかと言ふ疑問がある。これは遂に、現實恐怖と、神經症の恐怖との間の區別を、根本的に批判せねばならぬことになる。

此の最後の問題から出發しよう。我々の進步は、危險の情況に對する恐怖の反應について顧慮することにある。實在恐怖の問題に此の問題を變化して考へれば、解譯は容易である。實在の危險は、我我の認める事の出來る危險のことである。實在恐怖はその危險に對する恐怖である。然るに神經症的の恐怖は、認めることの出來ぬ危險に對する恐怖である。そこで神經症的の危險を第一に攻究して見

なくてはならぬ。分析學は、これは本能危險であることを教へた。我々が、此の自我に知られざる危險を、意識に齎す時には、我々は、實在恐怖と神經症的恐怖との區別を消し去り、この後者をも前者と同樣に取り扱ふことが出來るのである。

實在危險にあつては二つの反應が生ずる。卽ち情緒的恐怖發出と、保護行爲とである。本能危險にあつても同じものが現れ來るのは見易いところである。我々は、此の二つの反應が合目的に共同作用をなす例を知つてゐる。卽ちこの場合には、その一つは他のものの信號として來るのである。然し、合目的ならざる所も亦存する。その如き場合には一つのものが、他のものを使用して擴がる如き恐怖麻痺 Angstlahmung の例である。

其處には、實在恐怖と神經症的の恐怖との特性が相混合して示されてゐる例もある。危險は知られてゐるし、且つ現實的である。然し、それに對する恐怖は、過剩に大であり、我々の判斷から見て然る可しと考へられるよりも大である場合である。此の如き過剩にこそ、神經症的の要素が見えるのである。然し、此の如き例は、理論上何等新しいものではない。分析より見れば、此の知られたる現實の危險が、知られざる本能危險に結合したのである。

恐怖を危險に歸着せしむることを以つて滿足しないならば、更に進んで見よう。何が核であるか。

何が危險情況の意義であるか。明かにこれは、危險の强さに比較して我々の强さを査定して見て、如何に、我々が助けなきかを認容することにある。卽ち實在恐怖の場合には實質的無力であり、本能危險の場合には心理的無力である。我々の判斷は、此の際實際上の經驗からなされる。故にその評價が誤つてゐるや否やは、結果としては同じことになる。この如き經驗せられたる無力の情況を、外傷性 Traumatische と呼ばうならば、危險情況と、外傷性情況とは區別す可き十分の根據がある。

斯くの如き無力さの外傷性情況が、やつて來る迄待たれるのでなく、豫め見る事が出來、或は豫期せられるならば、我々の自己保存に對しては重要なる進捗があるのである。此の如き豫期を生ずる條件が存する情況は、卽ち危險情況であつて、この情況によつて恐怖信號が與へられるのである。故に、余は、無力の情況が與へられた、或は、現在の情況が、余をして以前に經驗した外傷性の經驗を思ひ起さしめる、と言ふ可きである。依つて、余は此の如き外傷を豫知し、旣にそれが來てゐるかの如く振舞ふことによつてそれを避ける時間を有することになるのである。故に恐怖は或る場合には、外傷の期待である。他面に於ては外傷の和げられたる繰りかへしである。恐怖に關して我々が知つた此の二つの特性は、尙種々なる原因を有する。期待に對する恐怖の關係は、危險情況に屬してゐる。その不定さと、無對象とは危險情況として豫知され得る、無力なることの外傷性情況に屬するもので

ある。

恐怖——危險——無力(外傷)と言ふ工合に發展し來つた後、我々は下の如く總括する事が出來る。卽ち危險情況は、無力さの、現に知り居る、又は思ひ出されたる、或は豫期せられたる情況なのである。恐怖は外傷に於ける無力さに對する原始的の反應で、この反應は、後に、危險情況に於て、救助信號として再生せしめられるものである。外傷を受動的に經驗する自我は、かくして弱められたるその再生を繰りかへす。その經過を、自分で導くことの出來るやうに希望しつつ。我々は子供が、總ての彼に苦痛なる印象に對して同樣に振舞ふのを見る。卽ち子供は遊戲としてこれを常に再生する。受動性より能動性へと移りゆかしめるこの方法に依つて、子供は、彼の生活印象を心理的に克服せんと試みるのである。若しもこれが外傷の離脫 Abreagieren の意味であるならば、これに對して何物も抗議することは出來ぬ。然し、この決定は、恐怖反應が、その無力情況に於ける起原からその期待への、卽ち危險情況への最初の移動である。更にこの危險から、危險の條件への他の移動が來る。卽ち對象喪失、及び對象の既に述べた如き制限への移動である。

子供にある「甘やかされ」は、對象喪失——無力の總ての情況に對する保護としての對象——の危險が、他の總ての危險より高められることであつて、誠に望まれざる結果である。これは、だから、

いつまでも子供の狀態に引き留め置くこと、卽ち運動的にも、心理的にも無力を特徵とする子供時代に引き留め置くこととなるのである。

從來は我々は、實在恐怖を、神經症性恐怖とは別物であると考へる何等の基礎をも持たなかつた。然し、やがて、實在危險は、外界の對象から迫るもの、神經症性危險は、本能要求から來るものとの區別を知つた。此の本能要求が、何か實在的なものであれば、神經症性恐怖も實在として基礎づけられることは明かである。我々は恐怖と神經症との間の特に近しい關係が現れるのは、次の如き事實に基くものと考へてゐた。卽ち自我は本能危險による恐怖反應の助けを以つて、外界の實在危險と同樣に、防禦をなすのである。然し防禦活動の此の方向は、その精神裝置の不完全さがある場合には神經症となつてゆくのであると考へてゐた。我々は更に、此の本能要求なるものは、從つて屢々（內的）危險となると言ふ確信を有する。何故ならばその滿足は、外界の危險を招致するであらうから、この內的危險は外的危險で代表せられることになるからである。

他面に於ては亦、此の外的實在危險は、若しもそれが自我に對して有意義となるであらうならば、內部的に變化することも見出さるるであらう。外的危險は無力さの經驗せられたる情況に對するその關係に於て、認知せられるに違ひない。（註）

（註）正に斯くの如きものとして見做されてゐる危險情況のうちで、實在恐怖に對して、少しく本能恐怖が附け加はつてゐる場合が屢〻現れて來る。本能要求即ち自我がこの滿足に對して恐れるところの本能要求は、故に被虐待嗜好的、即ち自分自身に向けられたる破壞本能であらう。恐らくは此の附加物が、恐怖反應の過剩で、非合目的で、痲痺的に生じ來る場合を說明するであらう。高所恐怖症（窓、塔、絕壁）はこのやうな由來を有し得る。その祕密なる、女性的なる意味は、被虐待嗜好症に近い。

外界から迫り來る危險を、本能的に知ることは、人間にとつては、與へられてはゐない。或は與へられても極く僅かな程度しか與へられては居らぬ。小兒は絕えず、生命の危險を齎すやうな事柄を行ふ。故にこれを保護する對象を缺くことは出來ないのである。人がそれに對して無力である、外傷性情況に對しては恰も外的及び內的の危險、即ち現實危險も本能要求も合一して來ることがある。自我が或る場合に、絕えざる苦痛を經驗してゐることや、又他の場合では、全く滿足を見出し得ざる、要求の停滯があること等から見れば、此の二つの場合に對する經濟的情況は、同じもので、運動的無力が心理的無力のうちにその表現を見出してゐるのである。

まだ幼い小兒に於ける謎の如き恐怖症は、此の場所に於て更に言及する必要がある。これ等の恐怖症のうちの一つ、例へば獨り居ることとの恐怖、闇黑恐怖、見知らぬ人に對する恐怖等は――對象喪失

の危險に對する反應として理解することが出來る。他の恐怖症――卽ち小動物に對する、又は雷に對する、及びその他――は、恐らく、それが、實在危險に對する遺傳性の用意の、萎縮したる殘物であり他の動物の場合では恐らく明瞭に生じ來るものであることを知らしめてゐるであらう。人間に對しては、唯此の如き太古的遺傳性の一部、卽ち對象喪失に關係する一部のみが合目的である。此の如き小兒恐怖症が固定せられ、强められ、尙後年に至る迄持ち越されると、分析が示す如く、その內容が、本能要求と結合し、內部的危險として出て來るのである。

C　恐怖、苦痛、及び、悲哀

感情過程の心理學にあつては、次の如き臆病なる注意に對しても、寬大なる判斷を要求するやうなことは許されぬ。卽ち次のやうな問題である。我々は、恐怖は對象喪失の危險に對する反應であると定めた。然るに更にも一つ、我々は斯くの如き對象喪失に對する反應があるのを旣に知つてゐる。卽ち悲哀である。然らば何時悲哀となり、何時恐怖となるのであるか。悲哀については旣に論じたことがある。（註）

（註）「悲哀と憂鬱」全集第五卷參照（本書第一四一頁）

然し悲哀に於ける一面、卽ちその特別なる苦痛性については、全くまだわかつてはゐなかつた。それにもかかはらず對象との別離が苦痛を生ずることは、自明のことのやうに見える。斯くてこの問題は更に複雜となつた。卽ち對象との離別が或る時は恐怖となり、或る時は悲哀となり、又或る時は單なる苦痛となるのであるか。

此の問題に答へを與へる何等の見込みもないことを率直に言はねばならぬ。唯、我々は、二三の判別と二三の意味分けとを見出すことが出來るばかりである。

我々の出發點はやはり一つの情況である。卽ち我々の信じ得る一つの情況、その母親の代りに見知らぬ人を見た、幼兒の情況を考へて見よう。此の場合には、對象喪失の危險と信ぜらる可き恐怖がある。然しこの恐怖は複雜であり、更に討論に値するものである。幼兒の恐怖については何等の疑ひもない。顏貌や、啼泣の反應やは、更に特別に苦痛をもつてゐるのであると假定せしめるものである。此の場合には、後に分類する如き二三のものが一緒になつてゐるやうに見える。幼兒は一時的の見失ひも、永久的の喪失もまだ區別は出來ない。幼兒では、一度母親が眼の前から除けられると、恰も再び母親を見る事が出來ぬかの如くに感ずるやうに見える。故に幼兒が此の如き母親の消失は、再び母親が現れ來るものであるとの事を知る迄にはこれを繰りかへして、再び母親の現れ來る慰めの經驗を

與へることを要する。母親は、幼兒に對する此の重要なる知識を、あの有名な遊戲、居ない居ないばあで敎へ込むのである。幼兒は斯くて、疑惑の件はざる、言はば憧憬を感ずるに至るのである。

幼兒が母親を見失うた情況は、母親が居ないと誤り考へたのであつたとすれば、何等危險情況とは言へない。却つて外傷性の情況と言はる可きである。或は、更に正確に言へば、此の時に幼兒が、母親を求めんとする要求を感知するならば、外傷性情況である可きで、この情況は、此の要求が實行され難い時に初めて危險情況となるのである。卽ち自我自身が感ずる第一の恐怖の條件は、認識喪失で、これは對象喪失と同樣と見做し得るものである。戀愛喪失はまだ現れぬ。後年に至つて、對象は尙別に存在すると言ふ經驗を學ぶのであるが、小兒にとつてはこれは却つて惡いことになるのであつて、斯くて戀愛の喪失が、對象の側より新しく、更により確實なる危險及び恐怖の條件となるのである。

母親を見失ふと言ふ外傷性情況は、出產の外傷性情況とは、判然たる、全く別個のものである。出產の場合には、見失はる可き對象は存在してゐなかつたので、唯恐怖のみが現れ來る唯一つの反應である。其後母親なる對象が、反復せられたる滿足の情況を形成して來た。依つて此の對象は、要求のある場合には、强い、「憧憬的」とも名付く可き充塡を感ぜしめるのである。此の更新に依つて苦痛

の反應が關係して來るのである。故に苦痛なるものは、對象喪失に對する本來の反應であり、恐怖なるものは危險に對する本來の反應なのである。この危險なるものは對象喪失によつて生ずるもので、對象喪失の危險それ自身へと更に移動するものである。

苦痛に對しても極く僅かしか我々は知つてゐない。唯一つの確實なる內容は、苦痛は——先づ第一に且つ一般的に考へて——末梢神經に與へられた刺戟が刺戟に對する保護を破り入つて、今や、繼續的なる本能刺戟の如く作用する場合に生ずると言ふ事實である。何故ならば本能刺戟に對しては、外の場合には有効なる、刺戟せられた場所を刺戟より奪ふ筋運動も全く無力だからである。苦痛が、皮膚の一部位からではなく、內部臟器から來つた場合でもその情況に變りはない。卽ち外部の場所の代りに、內部の末梢神經に關係してゐるのである。小兒は明かに斯くの如き苦痛の經驗をその要求經驗とは無關係に經驗す可き機會を持つ。苦痛の成立條件は、對象喪失とは類似してゐない。又苦痛に對する本質的の動機であるところの末梢刺戟は、小兒の憧憬情況に於ては全く缺けてゐる。而も此の言語が內部的の、卽ち精神的の苦痛の概念を與ふることは無意味ではない。又この言語が對象喪失の感覺を全く身體的の苦痛と同列に置いた事も無意味ではない。

身體的苦痛にあつては、高い、痛みある體部の自己愛的と名付けらる可き、充塡、それは益々增加

しゆき、遂に自我の上に排出せられる充塡が成立する。我々は、內臟の痛みの場合に、然らざれば全く意識的の表象を得る能はざる、斯かる身體の部分について、空間的な、又はその他の、表象を初めて得るものであることはよく知られてゐることである。又非常に強い身體的苦痛は、他の種類の興味に依つて心理的轉向が生ずる際には生じ來らぬ（此處では意識せられぬと言ふ語を用ひてはまづい）と言ふ最も注意す可き事實は、苦痛ある身體部分の心理的代表者に、充塡の集中があると言ふ事實で說明が出來るであらう。さて此の點に於て類推、卽ち苦痛感覺の精神領域への移轉が生じ得ると言ふことが出來る。見失はれたる（失はれたる）對象の增しゆく憧憬充塡、その鎭め難さによつて、甚だ強いこの充塡は、傷けられた身體部分の苦痛充塡の如く、同じ經濟的の條件を形作るのである。そして、身體苦痛の末梢的條件から眼を轉ずることが可能となるのである！。身體苦痛の精神苦痛への移行は自己愛的充塡より對象充塡への移りゆきである。要求によつて十分に充塡せられた對象表象は、刺戟增加によつて充塡せられた身體部分の役目をなすのである。充塡過程の繼續と、制止し難さとは心理的無力さの同じ狀態を生ぜしめる。斯くして生じた不快感覺は恐怖の反動形式として表現する代りに特異なる殆ど名狀し難い苦痛の特性をもつてゐるとするならば、然らざれば說明を要求せられなかつた或る一つの動機がこれに關與してゐることがわかる。卽ちその動機とは充塡と、結合との關係

の高い水準に於て此の不快感覺に導かれる過程を完成せしむるものである。

我々は、對象喪失に對する、更にも一つの感情反應を知つてゐる。卽ち悲哀である。然しこの說明はもはや困難ではない。卽ち悲哀は、對象がもはや存在せぬ故に、對象より別れねばならぬと範疇として命令する現實檢査の影響の下に生ずるものである。故に悲哀は、曾つてその對象が高い充塡の的であつた總ての情況のうちで、對象からの脫却を完成せしめると言ふ働きを遂行せねばならぬ。斯くの如き別離の、苦痛に充ちた特性は、對象とお別れをした情況が再生してくると、高い、そして充たし難い對象への憧憬充塡が生じてくると言ふことに依つて、既に述べた說明によく合ふことになるのである。

「精神分析學」と「リビド學說」

此の二抄錄は一九二二年の夏「性慾科學總鑑」Handbuch für Sexualwissenschaften
のために書かれたもので、一九二三年に發表せられたものである。

第一　精神分析學

精神分析學　精神分析學とは(1)然らざれば達し難き精神過程の研究に對する一方法の名である。(2)此の研究の上に基礎を置かれた、神經症的障碍の治療方法でもあり、同時に(3)心理學的な、此の法によつて得られたる見解、而も漸次に新しい科學的の一學科を形成しつつある見解の名稱でもある。

歴史　精神分析學はその生ひ立ちと發達とを追求して見れば最もよく理解することが出來る。一八八〇年及び一八八一年に、內科醫であり同時に實驗生理學者として有名であつた、ウイーンのジョセフ・ブロイエル博士は、病んでゐる父親を看護してゐる間に重いヒステリー症に罹つた一人の少女の治療に從つてゐた。此の娘の病像は、運動痲痺、運動制止、意識障碍であつた。此の知的な患者の承諾を得て、彼は此の患者に催眠術をかけたところ、彼女は今彼女を支配してゐる氣分と思考とを打ちあけることが出來、此のことに依つて偶然にも正常の精神機能に復歸することが出來たのである。苦勞して此の同じ方法を繰返し施行し、遂にブロイエルは、此の患者の總ての制止及び痲痺を除くこと

が出來た。結局斯くして彼の骨折りは、謎の如きこの神經症の本態に、豫期せざりし洞察を與へる可き、一つの大なる治療結果を得た事に依つて報いられたのである。然るにブロイエルは、此の發見を更に追求することなく、又此の結果を發表することもなくして十年を過した。此の抄著者はその十年の後個人的にブロイエルを勵まし、(フロイドは一八八六年、シャルコーの處の勉强を終つて、再びウインに歸つた)、此の結果を再び研究の對象として選び、これに關する共同勞作を生ぜしめたのであつた。ブロイエル及びフロイドは、一八九三年「ヒステリー現象の心理的機制について」と言ふ豫報を發表し、ついで一八九五年「ヒステリー症の研究」の一著をなした(此の書は一九二二年第四版を發行した)。此の書物の中で右の如き療法を「通利療法」と命名したのである。

通利療法 Die Katharsis ブロイエルとフロイドとが研究根據を與へた此の實驗からは、先づ、二つの結果が與へられた。此等の結果は、其後の研究に依つても決して動搖しなかつたものである。第一は、ヒステリー症の症狀は意味と解釋とを有すること、卽ち症狀は精神活動の代理物であること、第二は、此の知られざる意味を發くや否や、その症狀は消失し去ること、故に此處に科學的研究と治療的勞力とは一致するのである。此の觀察は多くの患者によつて試みられた。ブロイエルの最初の患者の如く、深い催眠狀態に置かれ、而も結果は輝くばかりであつたが、後に此の療法の弱點が發見せ

られた。ブロイエルとフロイドとが、此の時に持つて居た理論的の表象は、既にシャルコーの學派に依つて、外傷性ヒステリー症に關して試みられて居り、その學派のジャネエの研究も亦同じものであつて、これは既に「ヒステリー症の研究」よりも早く發表せられてゐたのであつたが、ブロイエルの最初の例よりは遲かつたものである。何れにしても初めより、此等の例では、情緒的動機の方が目立つてゐた。卽ちヒステリー症の症狀は、强い情緒經驗に依つて負はされた精神過程が、何かの原因に依つて隱されてゐて、正常の、意識や運動の生じ來る道を通つて出て來る(卽ち離脫する abreagieren)事が出來ないので、これがために「嵌入してゐる」情緒は、僞りの道を辿り、身體神經支配のうちに逃げ道を發見する(卽ち轉換 Konversion する)ために生ずるのである。斯かる病的の「表象」が生ずる機會は、ブロイエル及びフロイドに依つて心理的外傷と名付けられたが、これは永く時が經過する迄その場所に止まり、從つてヒステリー症は、大部分(消えざる)回想に惱む疾患であると言はれる。「通利療法」は、依つて意識への道を開いてやり、此の情緒に正常の放出を與へてやることを處置とするのである。故に無意識の精神過程の存すると言ふ假定は、此の學說には缺く可からざるものであることがよくわかる。ジャネエも亦、精神生活に於ける意識せられざる活動、なる言葉を用ひた。然しその後の精神分析學に對する論爭に當つて彼が主張した如く、彼にとつてはこれは一種の

補助表現、即ち一種の言ひ現し方 une manière de parler であるに過ぎなかつたもので、これが何等新しい洞察を意味してはゐなかつたのである。

此の研究の理論的の部分に於て、ブロイエルは精神のうちの興奮過程に關して若干の思索的思考を發表してゐる。これは此の學の將來に對して方向を與へるものであつたが、尙今日に於ても完全なる評價に到達してゐないものである。これだけでブロイエルの此の方面の研究は終りとなつて、間もなく彼は共同勞作から退いたのであつた。

精神分析學への移りゆき 既に上述の「ヒステリー症の研究」のうちにも、ブロイエルとフロイドとの意見の相違は見られる。ブロイエルは、病的表象は、精神の作用が特別なる制限を受けてゐる言はば半狀態 hypnoide にあるがために外傷性の作用を現すのであると假定した。然し此の抄著者はこの說明を拒否する。そして、一つの表象は、その內容が精神生活を支配して居る主傾向に反する時に病因的となるので、これは個體の防禦作用であると信ずるのである。(ジヤネエはヒステリー症を、その心理的內容の統一をなすことが體質的に不可能であるによる疾患であるとなした。此の點についても、ブロイエルとフロイドとの道はジヤネエからは異つてゐる。)此の抄著者はやがて通利療法を捨て去つたのであるが、此のためになした二つの改革は、既に「ヒステリー症研究」のうちにも述べてあ

る。此等はブロイエルが隱退した後に更に發達して行つたのであつた。

催眠術を捨てる　二つの改革のうちの一つとは實際的經驗に關係するもので、手法の變化をも來さしめたものであり、他の一つは神經症の臨床的知見の進步を根據としてゐるものである。催眠術を用ひて通利療法を行うても、治療的希望は或る意味に於ては達し難いものであつた。症狀の消失は、或る程度通利療法と併行して現れる。然し總體としての結果は、全く患者の醫者に對する關係に係つてゐるもので、恰も「暗示」の結果と異らぬ。此の關係が破壞されると、總ての症狀は直ちに再び歸つて來ること、恰も一度も解放せられなかつたと同じである。更に加ふるに或る人々にあつては、深い催眠にかけて、通利療法を應用するには、醫者として甚だ制限を感ずるやうな人もある。此等の根據から、此の抄著者は催眠術を捨てる決心をしたのであつた。同時に、著者は、催眠術のうちから、これに代る可き方法を引き出すことが出來たのである。

自由聯想 freie Assocaition　催眠狀態は患者をして、自由聯想の範圍を甚しく擴大するやうに作用する。卽ち意識ある反省の遠く及ばぬ道から、症狀と結合してゐる思考及び追想を見出さしめるやうに作用するが、催眠術が醒めると全く手がかりのない情況となつて了ふ。然し抄著者は、ベルンハイムが次の如き事を證明したのを知つてゐる。卽ち夢中遊行症 Somnanbulismus のうちで經驗したも

のは、總て見かけは全く忘れ去られてゐるけれども、醫師が强制的に君には記憶があると確言してやると、結局追想をなすことが出來る事である。依つて此の抄著者は、催眠術をかけてない患者に聯想を何でも打ち明けよと命じて、その材料に依つて、忘れ去られたるものへの道、及び擊退せられ居るものへの道を探求せんと試みた。後に尙、此の如き命令は寧ろ不必要で、患者は殆ど常に豐富なる思ひ付きを浮ばしめることが出來る。然し、此等の思ひ付きを、患者自らが抗議して、打ち明けることから、或は意識することから拒否してゐるのであることがわかつた。此の時はまだ不明であつたが、その後經驗の重なるにつれて確められた事は、此の患者に一定の出口となつて思ひ付かれるものは、此のものと親しい關係のあるものであること、患者に、總ての自分の批評的の見方を止めさせれば、出現して來る思ひ付きの材料は、求めてゐる關係の發見に利用することが出來るもので、手法として用ひ得るものであること等である。精神のうちに於ける決定の嚴格さに强く信頼することは、催眠術を捨てて、これに代る此の手法へ變り行つたことに與つて力あるものであつた。

手法的の根本規則 technische Grundregel 自由聯想の方法は、爾來精神分析學に於ける業蹟に固持せられることになつた。卽ち精神分析的療法は、先づ患者をして、自ら注意深い、且つそのために苦慮しない、自己觀察者となさしめ、益々意識の表面のみを讀むやうにせしめることによつて始まる

のである。一方に於ては完全なる正直さを義務となさしめ、他方に於ては總ての思ひ付きを打ち明けしめるやうにせねばならぬ。尙又（1）それが不愉快であつても、（2）無意味のやうに思はれても、（3）重要でないと思はれても、（4）何か求めてゐるものでないやうな場合でも打ち明けねばならぬ。この最後に述べてあるやうな事柄が生じて來た時、正に、その思ひ付きこそは、忘れ去つてゐるものを發見せしむる特別なる價値を有するものであることが常である。

解釋の技術 Deutungskunst としての精神分析學　此の新しい手法は、治療の印象を全く新たにした。醫師と患者との間には新しい關係を作り、その結果たるや、通利療法の名を有する方法よりも、全く異るやうな驚く可きものを生ぜしめるのである。此の抄著者は此の治療法は他の多くの神經症的障碍にも應用し得るによつて、此の名を精神分析學と名付けた。此の精神分析學は先づ第一に解釋の技術であつて、ブロイエルの偉大なる發見、卽ち神經症の症狀は、他の抑壓されてゐる精神活動の、意味深い代理であるとの發見を更に深めたものである。患者の思ひ付きが齎す材料は、恰も隱れたる意味を指し示すもので、從つてこれよりその意味を推量し得るものである。精神分析醫自身が患者自身の意識せられぬ精神活動と同樣に、注意の動搖するに任せて、意識的の期待による反省や、想像を出來るだけ避け、聞いたものについて、何ものをも特に其の記憶に留めようと欲せず、恰も患者の意

識せられぬものを、自分自身の意識せられざるもので聞くが如く行ふ時に、最も目的を遂げ得るのであることが、やがて經驗上知ることが出來るやうになつた。斯くすれば、その關係が都合よくゆく場合には、患者の思ひ付きが與へられたる主題についての暗示に觸れるのがわかる。而も患者自身にも隱されてゐるものを知り、それを更に患者に話してやることが出來るためには、更に一歩を進めればいいのである。確かにこの解釋の仕事は、嚴格に規則として言ひ現すことは出來ない。のみならず、醫師の氣轉及び醫師の習熟を必要とする餘地が十分ある。唯、公平無私と練習とを結合する場合にのみ、同じやうな例で必ず繰返される確かな結果のある、言はば規則とも言ふ可きものに到達することが出來る。時としては、此の無意識なるものについても、神經症の體質についても、その底にある病的過程についても、何等知られて居らぬ場合にも、此の手法を用ひることが出來て滿足する事がある。尙又假令理論的にこれが適合す可きことが知られて居らぬ場合でも、今日は既に此の手法を、更に確實なる感情を以つて、而もその埒を更によく心得て、用ひることになつてゐるのである。

失錯行爲及び偶然行爲の解釋　正常人に屢〻生ずる一定の精神的活動で、從來は心理學的の說明が決して出來なかつたこと、神經症者の症狀と同樣であつたもの、例へば、一つの意味を持つてゐる可きでありながらこの意義の不明であつたものが、分析的研究によつて容易に見出し得ることが明かと

なつた。これは精神分析學の解釋の技術に對して一つの勝利であつた。卽ち、よく知つてゐる言語とか、名前とか、の一時的のど忘れ、やらうと思うた事の一時的の忘却、甚だ屢〻ある言ひ間違ひ、讀み間違ひ、聞き違ひ、見失ひ、物の置き忘れ、その他の間違ひ、見かけは全く偶然な、自己損傷の行ひ、全く企圖もしないやうな運動、考へなしに唸る何かのメロデイ、及びその他であるが——此等總てのものについて、とに角硏究せられ、嚴格に決定的にせられた生理學的の說明はないのである。此等のものは、正にその時の人の抑壓せられたる、又は、その時に意識せられざる意圖であるか、或は永く意識せられずに殘つてゐた、二つの意圖の干涉の結果であることがわかつたのである。心理學に對する此の如き寄與は單純なものではない。卽ち精神的決定の範圍は、今まで考へられぬほど擴大せられた。言ひかへれば、從來假定せられて居た正常精神形態と、病的精神形態との間隙は急に縮小せられたのである。此の精神力の活劇、卽ちかかる現象の背後に存在するものに見入るに都合のよい例が澤山にある。斯くして、他の何物よりも意識せられぬ精神活動の存在を信じ得る材料を得たのである。意識せられざる心理の假定は、殆ど思ひも及ばず且つ甚しく空なことの如く思うて居た人々に對しても、信ぜしむる材料を得たのである。眞の失錯行爲及び偶然行爲の硏究は、これについては多くの機會があるので、今日でも尙精神分析學に入門する最も良い準備となるであらう。又精神分析學的治療

法に於ても失錯行爲の解釋は殆ど思ひ付きの意義に劣らず重要なる、意識せられざるものの發見についての、一材料として重要視せられるところである。

夢の解釋　精神生活の深部への新しい道は、自由聯想法を、夢、卽ち自分の夢、又は分析を受ける患者の夢に應用するに至つて初めて開けて來る。事實、我々が意識せられぬ精神の深層に於ける諸過程について知つてゐる最も勝れたもの、最も良きものは、夢の解釋から來てゐるのである。精神分析學は夢に再び意義を與へた。夢は古代に一度意義あるものとせられて居たが、然しそれとは今度の場合は無關係である。これは夢判斷者の機智ではない。却つて夢を見る人自身に大なる問題を與へるもので、その聯想によつて、夢の個々の單位を探求せしむることである。此の聯想を更に追求してゆくと、此の夢を完全に蔽ひつくしてゐる思考についての知見にも到達するのである。しかも――精密に――目醒めてゐる時の精神活動の最も價値ある、且つよく理解せられる部分を知り得るのである。追想せられたる夢を、夢の支配內容 manifester Trauminhalt となし、この夢の解釋より見出される潛在夢思考 latente Traumgedanken と區別對立せしめる。この後者が前者、卽ち「夢」に、變化する過程及び解釋の仕事によつて逆にせられることを共に、夢の仕事 Traumarbeit と名付ける。

潛在する夢思考は、覺醒生活に對して關係があるので、これを日中の殘物 Tagesreste と呼ぶ。こ

れは夢の仕事が創造的のものであるとなすは全く正しくないことの證據となるもので、卽ちその著しいことは、濃縮せられること、心理的强度の移動による變形、及び視覺形像として描かれること及び尙その上に、それが夢の支配內容となつて現れ來る前に、第二次的改作によつて新しい形像、卽ち感覺だの關係だのの如きものが附加せられる事である。此の後者の過程は旣に本來は夢の仕事には屬さぬものである。

夢形成の力學的學說　夢形成の力學は斯くて大した困難はなく與へられた。夢形成に對する本能力は潛在する夢の思考、又は日中の殘物からは出て來ない。却つて意識せられぬ、日中は壓迫せられ居る一種の努力が日中の殘物と結合すること、及び潛在する思考を材料として、願望充足を補足することから出て來るのである。故に總ての夢は、一面に於ては意識せられざるものの願望を充すことに當り、他面に於ては、睡眠狀態に對して障碍があることを警告し、依つて睡眠を導き入れるやうにして、正常の睡眠願望を充たさしめることにも當るのである。故に夢形成に關する意識せられざる補足を取り去り、そして夢をその潛在する思考に還元して見ると、覺醒生活が關與してゐた總てのもの、例へば、判斷、警告、命令、直ぐ將來への準備、又は同樣に、充たされざる願望の滿足等を推察する事が出來る。現れた夢の朦朧たること、見慣れざるものなること、有り得可からざるものである事等

は、一部分は夢の思考が、古代的 archaisch とも言はる可き風をそなへ來るためであり、一部分は、制限をなし、批評的に拒否をなす審判、卽ち睡眠中も全くは廢止せられぬ審判のあるために生ずるのである。夢の思考が夢となる場合の變形に對して、最初に與へられる「夢の檢閲」Traumzensur は同じ精神的の力の表現であつて、これが日中は、意識せられぬ願望衝動を除外し、壓迫して居つたと假定すれば大過ないのである。

夢の說明に更に近づくことが出來るのは、分析的業蹟が、夢形成の力學は、症狀形成の力學と同一のものであることを示す點に在る。此の兩者には共に二つの傾向の衝突が見られる。卽ち一方、意識せられざる、或は壓迫せられたる、滿足への、——又は願望充足への——努力と、他方、見かけは意識せられる自我に屬する、拒否したり、且つ壓迫したりする力との衝突で、此の軋轢の結果として妥協形成——夢、症狀——が現れ、この中に兩傾向が不完全の表現を見出すのである。夢は決して病的現象ではないから、夢があると言ふことは卽ち病的症狀を作る精神的機制が、正常精神生活にも存在してゐること、及び正常時も非正常時も同一の規則性のあること、及び神經症者及び精神症者の研究結果は、健常心理の理解のために決して意味のないものではないこと、等の證明を齎すことになるのである。

象徵 Symbolik 夢の仕事に依つて作られた表現方法の硏究に當つて、驚く可き事實に突き當る。卽ち或る對象物、方向、關係等は夢にあつては一定の間接なる「象徵」に依つて描寫せられること、而も夢を見る人もその意味を知らずしてこれを用ひてゐること、從つて通常は聯想だもしないものが現れて來ることである。然し此等の意味を飜譯して知ることは、分析學者のなす可き事であるが、此の飜譯そのものは唯經驗的のもので、試みに與へたものによつて關係づけて見るに過ぎぬ。然し後に、言語の用法、神話、傳說等は夢の象徵に豐富なる類推を有するものであることが判明した。象徵は、最も興味深い、まだ尙解けぬ問題に結びついてゐるが、確かに極く太古より遺傳し來つた精神的の賜である。故に象徵結合は、言語結合に對して關係がある。

性的生活の病原的意義　自由聯想の手法を催眠術の代りに用ひ始めてから後に得た、更にもう一つの新しい事は、臨床的の性質のもので、ヒステリー症の症狀がそれから出て來てゐると考へられる外傷的の經驗を、繼續的に硏究してゐるうちに發見せられたものである。此の追求を注意深く行へば行ふほど、益々明かに、此の病原として意義ある、一聯の印象を發くことが出來る。然もそれは、益々その神經症者の思春期又は小兒期に關係することになるのである。同時にそれは、單位的な特性を假定することが出來るやうになり、遂に明瞭なる事實の前に屈せねばならなくなる。卽ち、總ての症狀

形成の根本に、早期の性的生活からの外傷性の印象が見出されると言ふ事實である。性的外傷は、平凡な外傷の代りに入り來るのであるが、この後者と雖も、病原的の意義を有するためには聯想的又は象徵的關係によつて、これに先立つてゐる性的外傷と結合せねばならぬのである。通常神經衰弱 Neurasthenie と恐怖神經症 Angstneurose として分類せられる神經質 Nervosität の數例を同時に研究することによつて、此等の障碍は總て、性的生活の實際的の誤用に歸せられるもので、依つてその復正により取り去るを得るものであるとの結論を得るに至つた。故に、神經症は一般に、性的生活の障碍の表現であるとの結果となる。例へば現實神經症 Aktualneurose は、現在の性的生活の表現（化學的の道を通つた）であり、精神神經症 Psychoneurose は、永い以前の、生物學的に甚だ重要なる、而も科學からは永く捨て置かれたる、性機能の傷碍の表現（心理的に現れて來た）であると言ふ可きである。精神分析學の提唱のうちで極めて頑强に不信を得てゐたのは、此の神經症に對する性的生活の病原的の意義よりも甚しきはなかつた。然し精神分析學は、その發祥より今日に至る迄此の主張を引込ます何等の理由をも見出さなかつたことは、明かに認められるところである。

小兒性慾 infantile Sexualität　精神分析學は、その病原的の研究から、更に一つの主題を取り扱はねばならなくなつた。然しこの主題の存在は、全く豫想もせられなかつたものである。誰でも、科學

のは、非正常なる早熟、又は變性の稀有なる例となすのが常である。精神分析學は今や小兒の性的機能は、出生後直ちに生起し來るものであると考へざるを得ないところの規則正しい現象として十分注意す可きものなることを發き出した。然しこれ等のことが如何にして今まで見逃されてゐたのであらうかと人は問ふであらう。小兒性性慾の最初の洞察は、やはり或る人の分析的研究から得られた。然し成人となつてからの回顧では、疑問や誤差の餘地が多かつたが、後に（一九〇八年以來）小兒それ自身を分析し、公平なる觀察を行つて、此の新しい考への事實上の內容に對して根據を得たのである。

小兒性性慾は、多くの部分に於て、成人の性慾とは異る像を呈する。卽ち成人では「倒錯」Perversion と稱さる可き多くの特徵を、却つて小兒が有してゐるのは驚く可きことである。故に此の場合には、性的生活なるものの概念を擴大して、兩性が性行爲によつて合一すること、及び性器に一定の快感覺の起ることを追求すること以外に、更に多くを包括せしめねばならぬ。然しこの概念の擴大は、確かに小兒性の性生活と、正常人の性生活と倒錯者の性生活とを、一括した關係に置くことが出來るもので、十分價を與へられ得るものである。

此の抄著者の分析的研究は、先づ第一に小兒の性的現象の原因として誘惑 Verführung を餘り高

く見ると言ふ誤謬、及び小兒の性的現象を、症狀形成の根基であると考へる誤謬に思ひ當つた。斯かる錯覺は神經症者の精神生活に於ては空想活動 Phantasietätigkeit が大なる役目を演じてゐるのが見られるもので、この空想活動は、神經症に對しては、外界の現實よりも明かに決定的のものであることが知られるに至つて初めて打ち勝つことが出來たのである。此の想像の背後から性的機能の發育について次に述べる如き材料が現れて來たのである。

リビドの發育 性的本能の力學的の現れ方を「リビド」と名付けてある。リビドは、部分本能の集まつたもので、從つて各部分に分れることも出來るのである。そしてこの部分本能が漸次に一定の統帥編成 Organisation となつて合一して來るものである。此等の部分本能の根源は、幾つかの身體器官であつて、殊に、一定の著しい發情帶 erogene Zonen である。然しこの外にリビドの補足者として、身體內の總ての重要なる機能的過程が與かつてゐるのである。個々の部分本能は、最初は互ひに無關係に滿足を求めるが、然し、發育の經過中に於て益〻合一するやうになり、中央集權的になつてゆく。第一の統帥編成期(卽ち前性器的編成)は口愛的 orale と稱せられるもので、乳兒の主なる興味に相應するもので、口脣帶 Mundzone が主役を演ずる時期である。これに次ぐ時期は虐待嗜好的肛門愛的 sadisitsch-anale 統帥編成で、此の場合には虐待嗜好(サディスムス)症の部分本能、

及び肛門帶 Afterzone が特に際立つてゐる時期である。性的差別は此處では唯能動的と、受動的との對立となつて入つて來てゐるに過ぎぬ。第三の、而して最後の編成期は、總ての部分本能を性器帶 Genitalzone を優位として合一して來る時期である。此の發育は、一般的には極く速かで缺くる處なく經過するが、その本能の一部分が、此の最後段階の前段階に留まることもある。斯かる場合は、リビドの固定 Fixierung と稱し、これが後に至つて、壓迫せられたる努力の捌け口となつてくる素質であるによつて重要となり、遂に神經症や、倒錯症の發現に一定の關係を有するに至るのである（此の點については、後節リビド學說を參照せよ）。

對象の發見及びエディプス複合 Edipus-komplex 口愛的部分本能は、最初に榮養要求の飽和を機緣として、その滿足を見出す。そして對象は母の乳房である。その後これは解放せられ、自然に、或は同時に自己色情的 autoerotisch に、卽ちその對象を自分自身の身體のうちに發見するに至る。この他の部分本能も最初は皆自己色情的であつて、後來初めて他物を對象とするに至るのである。特に意義のある事は、發情帶の各部分本能も、一般に必ず、强い自己色情的の滿足を經過すると言ふ點である。リビドの最後の性器統帥編成は、總ての部分本能に一樣に應用することは出來ない。そのうちの二三は（例へば肛門は）これより取り除けられ、抑壓せられるか、又は複雜なる變化を受けるので

ある。

既に極く小兒の時（例へば二歳より五歳）に於ても、性的努力の或る種の總括は生じてゐる。その對象は、男の兒にあつては母親である。此の對象選擇、及びこの對象選擇に附屬する、父親に對する競爭又は敵意は、所謂エデイプス複合の內容をなすものである。此のエデイプス複合こそは、總ての人にとつて、その戀愛生活の最終形態に對して重大なる意義が生じ來るのである。此のエデイプス複合を超克し得ることが正常人の特性であるに反し、神經症者にあつてはいつまでもこれに固着してゐると言うて宜しいのである。

性的發育の二大劃期 性的生活の早期は、略五歳位の時に、通常ならば終りを告げる。そして完全さには多少の程度があるが、潛伏期 Latenz なる時期の間中斷せられて了ふ。この潛伏期の間は、エデイプス複合の願望衝動に反對する保護形成として、道德的の制限が構成せられるのである。此の次の時期卽ち思春期にあつては、エデイプス複合は、無意識界に新生を生じ、更に變形を蒙ることになる。思春期になつて初めて性的本能は完全なる强度に發育する。然し此の發育の方向、及び總てのこれに關係してゐる素質は、既に從前に經過して來てゐた性慾の小兒性の早期開花に依つて決定せられるのである。此の二期の、而して潛伏期間に依つて中斷せられる性的機能の發育に依つて、生物學的

に人類は特別のものであることが示されるもので、此處に神經症の成因の條件が存在するのである。

壓迫學說 Verdrängungslehre 此の學說の知見と、分析的業蹟の直接の印象との關係は、神經症の理解のために出て來たのである。神經症は卽ち、その最も生な輪廓を言ひ現して見れば次の如くになる。卽ち神經症とは自我と、自我にとつて、その安全のために、或はその道德的要求のために協和し難き性的傾向との間の軋轢の表現である。卽ち自我は此の自分に適應せぬ性的傾向を、壓迫し、それらから自分の興味を剝奪し、又はそれ等が意識せられることも滿足への運動となる排出をも奪ひ取るのである。故に分析的の仕事によつて、此の壓迫せられた衝動を、意識せしめんと求むるならば、此の壓迫する力は必ず抵抗 Widerstand として感知せられるであらう。壓迫現象の作用は、特に性的本能を容易く拒否する。故に此の堆積したリビドは、無意識から他の出口を作る。卽ち早期の發育時期又は早期の對象趨向へと退行して行つて、其處で小兒性固定を見出して、リビド發育の弱い場所から意識の方へ、又は排出の方へと破り出てゆくのである。斯くして形成せられるものが症狀である。故に此の症狀なるものは、卽ち根柢に於ては一つの性的代理形成である。然し症狀と雖も、自我の壓迫する力の影響からは全くは奪はれて居らぬ。それ故變形及び轉移等が生じ——夢と全く同樣に——それによつてその本性が性的滿足であることを隱して了ふのである。症狀は、故に、壓迫せられたる性

的衝動と、壓迫する自我本能との間の妥協形成をなすもので、同時に、又兩方共、軋轢の互ひの相手にとつては不完全なる願望充足をなすものである。此の事は、ヒステリー症の症狀に對して、全く嚴格に適合する。然し强迫神經症の症狀では屢〻、壓迫する審判者の一部分が、反動形成（性的滿足に反對する保證）の生起するによつて、更に强い表現を示すのである。

轉授現象 Uebertragung 神經症の症狀形成の本能力は、性的性質を有するものであるとの命題の、も一つの證據が要求せられるならば、次の如き事實に見出すことが出來るであらう。即ち分析療法を施しつつある間に、醫者と患者との間には、一種特別なる感情關係が生ずること、而もこの關係ははるかに合理的程度を超えるもので、最も情愛ある獻身より、頑强なる敵意までに、變異するのである。而もこの總ての特性は、早期の、意識せられずして生じたる、患者の戀愛趨向から借り來つてゐるものである。これは卽ち轉授現象であつて、積極的より、消極的の形式に於て、抵抗として仕へるものである。これは醫師の手に依つて、治療のための力强い補助手段として用ひられるもので、治癒過程の力學のうちでは、いくら高く評價せられても足りぬ役目を演じてゐるのである。

精神分析學說の根本的礎石 意識せられざる精神生活の假定、抵抗、壓迫等の學說の承認、性慾、及びエディプス複合の重視等は精神分析學の主內容であり、此の學說の根據である。此等のものを尊

否せざる人あらば、それは精神分析學者のうちに數へられぬ人である。

精神分析學の次期の運命　上述する處は精神分析學が、殆ど十年以上を唯獨り歩んだ時代のもので此の抄著者の業蹟に依つてのみ進み來つた處である。一九〇六年、スヰスの精神病學者ブロイレル及びユングが分析學において活躍するに至つて、一九〇七年ザルツブルグに於て、精神分析學者の第一回の集會が行はれた。忽ちにして、此の若い科學は精神病學者の人氣の中心となつたばかりでなく、素人の間にも人氣を博した。然るに此の獨逸の科學に對して當の獨逸國は、權柄にも少しも受け入れず、評判を湧かしもしなかつた。これが冷靜なるブロイレルの如き學者をも、勇敢なる防戰者となさしめた所以であつた。然し、公共的の判斷、集會の完成等は、內部的の生長をも、精神分析學の外的の宣布をも發達せしめた。次の十年に於ては、遠く全歐洲を越えて進出し、特に北米合衆國に於ては最もポピユラーとなり、僅少ならざる喜びには、ジエ・プトナム（ボストン）、アーネスト・ジヨーンズ、（トロント、後にロンドン）、フルーノイ（ジエネバ）、フエレンチ（ブダペスト）アブラハム（ベルリン）及びその他澤山の共勞者を得たことである。精神分析學に對する反對者あることは却つて、此の贊成者を馳つて、國際的の編成會を合成せしめるに至つた。此の學會は今年（一九二二年）第八回私集會をベルリンで開催し、現在既に、ウイーン、ブダペスト、ベルリン、オランダ、チユーリヒ、ロンドン、

ニューヨーク、カルカッタ、モスカウ等の場所にも各〻集會があつた。世界大戰と雖も、此の學の發育を中絶せしむる事は出來なかつた。一九一八年より一九一九年にかけて、アントン・フォン・フロインド（ブダペスト）に依つて國際精神分析出版社が打ち建てられ、此處から精神分析學のための雜誌、及び書物を發行した。一九二〇年エム・アイチンゴンによつて「精神分析的臨床講義」が、ベルリンに於て、無資產の神經症者の治療のために開かれた。此の抄著者の主著の飜譯は、佛語に、伊太利亞語になされ、スペイン語には現在飜譯中である。斯くて羅典民族の間にも、精神分析學に對する興味を喚起したのである。一九一一年より一九一三年に至る年代に精神分析學より、二つの方向が分れ出たが、それは明かに精神分析學との衝突を避けるために分れ出たものである。此の二つの方向のうちの一つは、ユングに依つて提擧せられたもので、道德的要求を是認し、エディプス複合からその現實的の意義を奪ひ去り、象徵的の價値と變化せしめ、そして實施の際には、歷史以前とも名を付けられるやうな忘れ去られてゐた小兒期の發見を却つて輕く見ることであつた。他の一方向とは、ウィーンに於けるアルフレッド・アドレルを、創唱者とするもので、精神分析學の多くの動因を、他の名稱に改めたのであつた。例へば、性的理解の壓迫作用を、「男性抗議」mänlicher Protest と呼ぶやうなことをなし始めた。無意識から、及び性的本能から、眼をそむけて、性格發育、及び神經症の發生を共

に權力への意志に歸せしめた。權力への意志とは、器官劣等で脅嚇せられてゐる危險を、超代償によつて退けんと試みることである。此の二つの系統的に建設せられた方向は、精神分析學の發育に對して、持續的の影響を與へたわけではない。アドレル派については、忽ちにして、その學派が代らんと欲した　精神分析とは似ても似つかぬものである事が明かとせられて來た。

精神分析學の新しい進步　精神分析學の業蹟範圍が、多數の觀察者になつて以來、此の學は豐富にせられ、且つ深められて來た。然し此等の事柄については、つづいて極く僅かな叙述を與へるのみである。

自己愛症 Narzissmus　最も重要なる學說的の進步は、リビド學說を、壓迫する自我へと應用したことである。即ち自我自身は、リビドの——自己愛的と呼ばれてゐる——貯蓄者として表象する事が出來る。對象のリビド充塡は此の貯藏から流出する。又此のうちで此の充塡が再び剝奪せられる。此の表象の助けにより、自我の分析に入り込むこと、及び精神神經症の臨床的區別即ち轉授神經症と、自己愛性の疾患との區別を企てることが可能となつたのである。前者の場合では（ヒステリー症及び强迫神經症）他の對象への轉授に對して努力するリビドの量、即ち分析的治療法を遂行する事に對して要求されるところのリビドの量は、意のままになる。然るに自己愛的障碍（例へば早發性痴呆、偏

執症、憂鬱症）はこれに反してリビドを對象より奪取することによつて特性づけられてゐる。依つてこのために分析的治療法は達し難いのである。然し、此の如き治療的の不十分さも、分析を妨げるわけではなく、此の精神症に是認せられる苦惱の、深い理解のためには豐富なる參考となるものである。

手法の變化　解釋手法が完成せられた後には、卽ち言はば分析家の知識慾が滿足せられたる後にはどの道によつて目的に最もよく副ふ影響を患者に達せしめ得るかと言ふ問題に、興味が向けられねばならぬ。醫師にとつての第二の問題としては、患者に抵抗の知識、又は抵抗の超克に對して補助してやる可きであるとの問題が生じて來る。この抵抗と言ふのは治療の間に生じて來るもので、初めは自ら意識せられぬものである。又同時に、治癒業蹟の本質的の部分は、此の抵抗に打ち勝つことによつて成立すること、及び此の如き働きなくば、永續的の患者の精神的壓迫作用は目的を達し難いのである。分析者の業蹟が、患者の抵抗に對して主力を注ぐやうになつて以來、分析的手法は、確立と精巧とを得、外科的手法にも譬ふ可きものとなるに至つた。斯くて、嚴格なる練習なくしては、精神分析的療法を志すことは、よくよく諫止す可きものに屬するものである。又醫者と雖も國家で認められた免狀に信賴して、此の手法を冒險的に試みる如き醫師は、素人より却つて害惡を流すものである。

治療法としての精神分析學　精神分析學は決して萬病に効く藥ではない。又は何か要求せられたる

必要なることは言ふまでもない、或る疾患に對しては、唯一の可能なる方法であり、他のものに對しても最も善い又は永續する結果を與へる方法である。補助作業の問題に迄は、まだ到達せぬ醫師に對しても、精神分析學は、その勞力に對して精神生活の紛糾のうちへの、又精神と身體との間の關係に對する、豐富にして且つ全く豫期せざる洞察を與へる點に於て、報ゆるところがあるであらう。精神分析學は現在救濟を與へることが出來ず、唯理論的の理解を與へることが出來るばかりである神經障碍に對しても、恐らくは將來、直接影響を與へるやうな道を開拓するであらう。此の學の業蹟範圍は、先づ第一に、二つの轉授神經症即ちヒステリー症及び强迫神經症であつて、此の二つに對しては、その内部構成の發見、及び同時に實際の機制の發見をも與へ來つたのである。更にこの外に恐怖症、制止、性格合成、性的倒錯等の總ての種類、及び更に戀愛生活の困難なる問題も亦此の學の範圍に屬するのである。若干の分析學者の報告によれば、廣い部分に亙る器質的疾患の分析學的療法も必ずしも見込みなきものではない(ジェリフ、グロデック、フェリツクス、ドイッチュ)。何故ならば、此等の疾患の發生及び繼續には心理的因子の伴ふことが甚だ稀ならざるものであるからである。精神分析學は患者の心理的可塑性 Plastizität の一定度を要求するが故に、その施行には一定の年齢限界を選

擇せねばならぬ。また此の方法は一人の患者のために、永い又甚だ强い浚頭を必要とするのであるから、全く價値なき個體で而も神經症を有するものに對して斯かる消費を與へる場合には決して經濟的なものではない。此の精神分析學的治療を廣く民衆層に到達せしめ、そして知識薄弱者に適合せしめるためには如何なる改良を加へねばならぬかと言ふことは臨床的材料による經驗について學ぶの外はないのである。

催眠術的又は暗示的療法との比較　精神分析的療法は、總ての暗示療法、說得療法、及びその類似のものとは全く異るものである。何故ならば、此の方法は、患者の精神的現象を何等權威を以つて壓倒するものではないから。この方法は唯現象の原因する處を確めて、その成立條件を長くかかつて變化せしむるにこと依つて除き去る方法である。避くることを得ぬ醫師の暗示的影響も、精神分析學に就ては、患者に自分の抵抗に打ち勝つことの問題、卽ち治癒の仕事を與へて、これに依つて避けるやうにしてある。患者の追想した答が、暗示に依つて僞作せられる危險に對しては、手法の注意深いやり方に依つて防ぐことが出來る。然し一般には、暗示の影響の惡い作用に對しては、抵抗の發現が却つてこれを防ぐ結果となる。治療の目的は、抵抗の除去、患者の壓迫作用の檢査、患者の自我の擴大した統一、及び增强を生ぜしむることに在る。斯くて患者をして、その內的軋轢に對する心理的消費

を不用となさしめ、患者の能力及びその稟質を最もよく發揮せしめ、活動に於ても享樂に於ても十分なる可能性を與へしめることにある。苦痛症狀の奪除のみが、特別の目的として努力せられるのではない。これは分析の規則正しい逐行によつて、同時に副產物として得られることである。分析學者は患者の個性を尊敬するのであつて、決して醫師の個人的の理想を、モデルとして患者に求めるのではない。若しも醫師の忠告が極く僅かですみ、而も分析の了解が得られたならば、却つてそれが宜しいのである。

精神病學に對する關係　精神病學は既に現在に至る迄、本質的に記載的の且つ分類的の科學であつた。更に益〻心理學的と言ふよりは、體質學的に開拓せられてゐるのであつて、從つて却つて觀察せられた現象に對する說明は不可能なる有樣になつてゐるのである。精神分析學は敢てこれと反對に對立するものではないことは、精神病醫の、調和的な態度によつて知ることが出來るであらう。此の學は却つて、深部心理學　Tiefenpsychologie　卽ち精神生活のうちで意識から全く除外せられた部分の心理學である。而も精神生活に對しては、除くことの出來ぬ下建築をなすものであり、その今日に於ける制限を撤回せしむるに役立つものである。將來に於ては、恐らくは精神分析學を總論としたる科學的精神病學が建設せらるることになるであらう。

精神分析學についての諸批評及び誤解　精神分析學に反對する、科學的論文のうちに引文せられてゐる多くのものは、感情的抵抗によつて根據づけられた、不完全なる報告にかかつてゐるものであるやうに見受けられる。精神分折學が「汎性欲説」Pansexualismusであると非難するのは誤りである。又精神分析學は、總ての精神的なるものを性慾より導き來り、且つ性慾に歸せしめるとなすも亦誤りである。此の學は却つて、その最初より性慾本能を他の本能より區別して、他の本能は別に自我本能Ichtriebeと名付けてある。又此の學は總てのものを性慾によつて説明してゐるのではない。神經症ですらも、性慾のみでは説明してゐない。性的努力と、自我との軋轢で説明してゐるのである。リビドなる名稱は、精神分析學に於て（ユングだけは除外である。）單に、性慾本能の心理的エネルギーを意味してゐるのではなく、性慾本能の本能力を意味してゐるのである。總ての夢が性的願望充足であるとの主張などは、曾つて建てられたこともない。精神的の無意識の科學として、その特定なる、且つ制限ある研究領域を所有して居る精神分析學に對して、偏見であるとの非難をするならば、化學に對しても同じ非難を與へねばなるまい。惡意ある、且つ喰はず嫌ひなる誤解は、精神分析學が、神經症の苦痛を、その性慾をほしいままになす生活によつて治癒せしむる方法であるとする點にある。壓迫せられたる性的慾望を分析によつて意識せしめることが、却つて既に存在してゐた壓迫作用によつ

てよりはよく性慾を統禦せしめ得るのである。故に寧ろ、分析學は神經症者をして性慾の束縛から解き放してやるのであると言ふ可きである。更に甚しきは、精神分折學を恰もそれが宗敎や、權力や、道德やを顚覆するものであるとする、非科學的の非難である。我々は總ての科學は、拘束されることなく、各々その意圖を知り、現實の一部分を、誤りなく理解せんとするものであると思ふ。最後に精神分析學は、所謂至當なる人類の善、考究、藝術、戀愛、道德的及び社會的感性等を、皆單位的なる動物的なる本能衝動より來りたるものであると指し示すがために、此等のものの價値を貶し、これ等のものの將來を失はしめるとの恐れを抱く人あらば、これぞ愚直なる人であると言はなくてはならぬであらう。

精神分析學の醫學以外の應用及び關係　精神分析學は、醫學の學科としても、既に精神科學に對して關係があるのみならず、宗敎史、文化史、神話、文學等に對しても、精神病學に對すると同樣な意義を、その概念のうちに得ねばならぬことを記さざれば、精神分析學の評價は完全ではない。此の學がその起原に於ては、唯單に神經症の症狀の理解及び影響を目的として居りしに拘らず、遂に斯くなつて來たのは驚異に値するであらう。然らば如何なる點に於て、精神科學へのかけ橋たるであらうかを擧げるのは容易である。先づ、夢の分析として、意識せられざる精神過程への洞察を與へる。又病

的症狀が生ずる機制は正常精神生活にも存することを示す。更に又精神分析學は深部心理學となり、而も斯くなるにより、精神科學への應用は十分可能となり、術學的の意識心理學が全く無力なる多くの問題を解き得ること等を示すのである。既に長き前より人類の宗族發生學 Phylogenese に對する關係なるものが確立せられてゐる。例へば病的機能なるものは、正常の早期の發育段階への退行現象 Regression に違ひないことは知れてゐた。ユングは最初に、早發性痴呆症患者の想像と、原始民族の神話形成との間には驚く可き一致が存することを示した。此の抄著者も亦、エディプス複合を合成してゐる二つの願望衝動は、その內容として、トテミスムス Totemismus の二つの主なる禁制（尊族を殺害せざること、同族の女と婚せざること）と完全なる一致のある事を注意し、尙更にこれより諸種の結論を得た。エディプス複合の意義は、原始時代の人類の社會的秩序、道德、法律、宗教等が、エディプス複合に對する反動形成として發生し來つたことを考ふるならば、至大なる意義ある事を知り得るであらう。オットー・ランクは精神分析學的洞察の應用から、神話及び文學史に對して光を投げた。同樣に、ライクは道德及び宗教の歷史に對して、牧師オ・ビステル（チュリヒ）は牧師や教師の興味を眼覺ましめ、精神分析的見地の教育學への價値を理解せしめた。精神分析學の此の如き應用に就てのこれ以上の說明は、此處には餘白がない。故に唯この學の應用の廣さは尙未だに測り知られ

ぬと附記するのみで滿足しよう。

精神分析學の經驗科學としての特徴　精神分析學は、正確に定義づけられた二三の根本概念より出て、全宇宙を總括せんとする學ではない。而も、新しい發見にも、よりよい洞察にももはや餘地なき、一應完了したる哲學の如き體系をなす學ではない。この學は、唯その業蹟領域の事實に固執するもので、最も隣する問題を觀察に訴へて解き、又更に經驗によつて觸れんとするものである。常に未完にして常に將來を望み、その敎義を是正し、又は變改せんとしてゐるのである。此の學は物理學や化學の如くその最高概念は不明であり、その前提は暫定的であり、その判然たる決定は、將來の業蹟に期待するものであることを承認するのである。

第二　リビドの學説

リビド Libido と言ふのは、本能學に於ける術語で、性慾の力學的の現れを言ふ言葉である。此の意味に於て、アー・モルに依つて初めて用ひられ（Untersuchungen über die Libido sexualis 1898）、此の抄著者に依つて精神分析學へ導き入れられたものである。次に、精神分析學に就て、本能學は如何なる發育（それはまだ終つて了つたのではないが）を經て來たかを描き出さねばならぬ。

性慾本能と自我本能との反對　總ての精神的の現象は、單位的の各本能の、力の演技の上に建てられてゐるものであるとなす精神分析學は、最も都合惡しき立場に在る。何故ならば、本能學は心理學の中にもないので、誰も、一體本能とは何であるかを言ふことが出來ぬからである。殆どそれは勝手に、總ての心理學が、自分に都合のよいやうに數多くの本能を假定してゐる。精神分析學が最初に研究せられた現象領域は、所謂轉授性神經症（ヒステリー症及び强迫神經症）であつた。此等の疾患の症狀は、性的本能衝動が、人格によつて（自我によつて）拒絕せられ（壓迫せられ）、無意識を廻り道して別の現れを作つたことによつて生ずるのである。故に性的本能を自我本能（自己保存の本能）に

相對立せしめるのが宜いのである。斯くて世界を動かす動力は餓と色とであると言ふ通俗的の諺と甚しく一致するのである。リビドはこの意味に於ける色の力表現であつて、饑は自己保存の力表現であつた。自我本能の本性は、此の場合には先づ不定で、分析學と雖も自我の他の總ての特性に對するごとく、斷定し難いところである。此の二つの本能の種類の間には果して質的の區別ありや、又ありとせば如何なるものなりやは、遽かに決定し難い。

原リビド Urlibido ユングが思索的方法に依つて上記の不明を征服せんと試み、先づ唯一つの原リビドなるものを假定し、これが一方性慾化せられ、他方性慾脫却を受けたものとなした。故に精神的エネルギーについては、その事態を全く同じうすると考へた。此の新しい考へは、方法的には尙攻擊出來るものであると言ふのは、これは却つて錯雜なことになり、リビドなる語を、蛇足なる同義語に貶し、臨床に當つては常に性慾的と非性慾的リビドを區別せねばならぬこととなる。性慾本能と、他の目的の本能との間の區別は、此の新しい定義に從つても無くなつたものではない。

昇華作用 唯分析的にのみ到達し得る、性慾的努力の愼重なる研究は、注意す可き個々の洞察を與へた。吾人が性慾本能と名付け居るものは、極めて綜合的のもので、これは再びその部分本能に分裂することが出來るものである。その爲にこの部分本能が、その根源に依つて、卽ちそれから興奮を生

ずる身體部分、言ひ換へれば性慾帶の如き根源に依つて、不變なる特性を有するのである。その外尚、性慾本能にとつては對象及び目的を區別する事が出來る。目的とは、常に滿足の放失を意味する。但し本能の目的は、能動型より受動型に移行することが出來る。對象は本能に對しては、從來考へられて居た如く固く結合してゐるものではない。それは容易に他のものに依つて倒錯されるのである。故に外界に對象を有する本能が、自己自身に向けられることがあるのである。一つ一つの本能は互ひに無關係であるか、或は——まだ明瞭ではないが——同じ仕事に融合し、又結合をする場合もある。それは互ひに込み入り合ひ、又はそのリビド充塡を轉換し合ふことが出來る。故に、他の滿足の代りに、別の滿足が入り來ることがある。最も意義あるのは、昇華作用としての本能運命であると思はれる。此の場合には對象と目的とが交叉し、依つて始原にあつては性慾的本能であつたものが、今や決して性慾的ではなく、社會的又は道德的の高さに向けられた働きが滿足を生ずるやうになつたものである。然し此等のものは未だ何等全體像として關係綜合せしめられる迄には到達してゐない。

自己愛 Narzissmus　早發性痴呆症及び他の精神症的疾患の分析に於て研究し、依つて自我自身卽ち從來は唯壓迫的の及び反抗的の審判としてのみ知られた、自我自身を主として研究し始めるや、決定的の進步が生じ來つた。早發性痴呆症の病源過程としては、リビドが對象より奪ひ去られて、自我

のうちに導入せられるものであることを知つた。而も、此の擾亂的疾患現象は既に忘れ去られてゐるリビドの勵行に依つて起り、對象への復歸を見出さんと努力するがためである。卽ち對象リビドは、自我充塡にも轉化し得ること、及びこの逆のことも可能である。更に考察するに、此の過程は、恐らくは、自我が却つて大なるリビド貯藏として見られねばならぬことを假定せしめる。この貯藏よりリビドは對象の方へ發達せられ、常に對象から逆流して來るリビドを吸收せんとしてゐることを假定せしめる。自己保存の本能は、故にリビド性の本性を有するものであり、而も外界の對象の代りに、自己自身の自我を對象に受け取るところの性的本能であつた。臨床的の經驗から、恰もその人が著しく自分自らを愛してゐるかの如き振舞をする人の例を知つてゐる。そしてこの一種の倒錯を自己愛と名付けた。故に今や自己保存のリビドを自己愛性リビドと呼ぶ。この如き自分自身を愛することは、原始的、及び正常狀態に於ても甚しく見得るところである。轉授性神經症に對する從來の公式は、今や正しいとは言へなくなつた。一つの制限を必要とするに至つた。卽ち性的本能と、自我本能との間の軋轢の代りに、對象リビドと自我リビドとの間の軋轢と言ふ可きである。或は本能の本性は、對象充塡と、自我との間にあると言はねばならぬ。

ユングの主張への見かけの近接　斯くして、原リビドについてのユングの思索の精神分析學的研究

は徐々として追求せられ、特に對象リビドが、自己愛へと移行すること、一定の性慾脱却現象、卽ち特別なる性慾目的の放棄と結合してゐるかの如き外觀を得るに至つた。然し、自我の自己保存本能がリビド的のものとして認められるとしても、自我のうちには何等他の本能は作用しないと言ふことの證明とはならぬとの考察が必然的に生じ來る。

集團本能 Herdentrieb　特別なる、生れつきの、決して解除し得ぬ「集團本能」なるものがあつて、人間の社會的態度を定め、個々の人を、大なる共同に結合せしめると言ふ事が、多方面より主張せられてゐる。然し精神分析學は斯かる主張には反對せねばならぬ。社會的の本能は成るほど生れつきではあらうが、それは原始のリビド的の對象充塡に歸せしむるのに困難はない。それは小兒期の個體に對して敵意ある競爭趨向に對する反動形成として發達し來つたものである。卽ちそれは特別の仕方で他人と同一視することに基いてゐるのである。

目的の制止せられた性的努力　社會的の本能は、まだ昇華とは名付け難い。然しながらこれと極く近接してゐる本能の一層に屬するものである。此の本能は直接なる性的目的を棄て去つたのではない。それに近づくことを内的抵抗に依つて禁じてゐるだけである。滿足の一定の近くまでゆくことで滿足し、此のことを固執し、人々の間に永續する結合を生ぜしめて居るのである。此の如きものは、

特に子供と兩親との間の原始的には全性慾的の情愛關係、友情の感情、夫婦に於ける性的依倚から二次的に生じてくる感情的結合の如きものがこれである。

精神生活に於ける二種の本能の識別　此の外に精神分析學的業蹟が努めつつあるのは、此の學の教義として、出來るだけ他の科學の教義からは無關係に發展せしめることである。それにも拘らず、本能學に對しては生物學に依賴を求める必要がある。生命が作り出し、且つ遂に死に迄導きゆく諸過程についての更に進んだ考察の根據としては、生物のうちの合成及び分解の互ひに相對するプロセスに照應して、二つの本能の種類を認めねばならぬことは確かである。その一つの本能は、根柢に於て音もなく働いてゐるもので、生物を死の方へ導きゆかんとするものであるから、死の本能 Todestrieb なる名前を負うてゐる。多細胞性の單位生物の合同作用に依つて、外界に向つて轉向せられ、「破壞傾向」又は「攻擊傾向」として現はれ來るのである。もう一つの本能は、我々にとつては分析學によりも更によく知られてゐる、リビド的の性的又は生活的本能であつて、エロス Eros として總括するのが最もよいのである。それは生活物質を、常に更に大なる單位となさしめ、さらに生命の永續をなさしめ、それを高い發育に導かうとするものである。生物にあつては色情本能と死の本能とは、規則正しい混合をなしてゐる。然しこの分離も亦可能である。卽ち生命はこの二つの本能種の軋轢又は干涉

の表現で成立してゐる。そして個體に對しては破壞本能の勝利を死によつて齎し、同時にエロスの勝利を生殖に依つて齎すのである。

本能の本態 此の如き理解を根據として、本能に對してその特性を與へることが出來る。即ち本能なるものは生活物質に內在する傾向で、早期の狀態を再び現ぜんとする傾向である。これを歷史的に見れば保守的性質であり、同時に有機物の慣性又は彈性の表現である。二つの本能、即ちエロスと死の本能とは、生命の創始以來、作用し且つ相互に働いてゐるものである。

精神分析學の梗概

倫敦及び紐育大英百科全書出版書肆より一九二四年に出版せられた「These eventful years. The twentieth Century in the making as told by many of its makers」の第二巻第七十三章として英語で發表せられたもの（英譯者は A. A. Brill 氏）獨逸語では一九二八年フロイド全集第十一巻に採錄迄印刷せられなかつたもの。此の譯は全集獨逸文による。

一

精神分析學は第二十世紀に生れたものであると言うて宜い。兎も角も新しいものとして世に現れたのは、私の「夢判斷」の發表であつたが、これは一九〇〇年の事であつた。然し、此の學は、自ら明かなる如く、石から湧き出でたものでもなく、天から降つたものでもない。やはり古いものより出で、それを伸ばし、それに刺戟せられ、そしてそれを改訂して出で來つたものである。故に此の學の歷史を描くには、此の學の生ひ立ちに與つて力あつた諸影響より始めねばならぬ、のみならず、その創始以前の時代や狀態を記すことも忘れてはならぬ。

精神分析學は、極めて狹い基地に生え出でた。卽ち最初は唯一つの目的を目ざしてゐたのみであつて、それは所謂「官能性」神經疾患と呼ばれて居たるものの本態について、何かを理解せんとするにあつた。此の疾患は其れまでは醫の治療が全く無力であつたが、その無力を克服せんとしたのであつた。恰もその時代の神經學者は、化學物理的及び病理解剖的事實に高い價値を與へて居つた。そしてヒツチヒ及びフリツチュ、フエリエ、ゴルツ等の人々の發見卽ち腦髓の一定の部分に、一定の機能が

親しく恐らく確實に結合してゐることを示した發見にひどく影響せられてゐた。神經學者は、心理的動機に關しては何等關心せず、又それを理解することも出來ず、只管これを哲學者、神祕論者、或は又――素人療治の術者等に委し去り、却つてこれを非科學的のものと考へて放棄し去つてゐた。必然の結果として神經症、就中、神經症なる一屬の典型である謎の如き「ヒステリー症」の祕密には、何等の手懸りも開けては居なかつたのである。一八八五年に私がサルペトリエールの聽講生であつた頃にはまだ、ヒステリー症性の痲痺に對しては、それは腦の一部位の輕い官能性障碍に由來するものであつて、その障碍が重くなればそれに相當する器質的の痲痺を生ぜしむ可きものであるとの公式を以つて滿足してゐたのである。

此の理解の不足によつて、言ふまでもなくこの病症の治療法も亦駄目であつた。卽ちその治療法は一般的强壯補助の方法に、或は藥劑の投與に、或は多くは甚だ合目的ならざる、粗暴に行はれる精神的療法、卽ち意志を呼び醒すための威嚇、嘲罵、督促の如き試み等に集中してゐたのである。神經症的狀態に對する特効療法としては電氣療法が用ひられてゐた。然し此のエルブの處方を詳細に施行しようと努める人は誰でも、見かけは正確科學であるが、空想が何と言ふ廣い場所を主張してゐるであらうかと驚いて居たやうな次第であつた。一八八〇年代に催眠現象が再び醫學に入り込んで來た時

に、決定的の轉換期が來たのである。これについてはリエボール、ベルンハイム、ハイデンハイン、フォレル等の人々の業蹟が、既に屢々現れた總てのものよりも、より良い結果を齎したのを銘記せねばならぬ。それは第一は、此の現象の不純ならざるを人が認めたことに存する。斯くして此の催眠術より、二つの根本的な、忘る可からざる教義が引き出された。卽ち第一は、著しい肉體的の變化が、人工的に起さしめた精神的影響の結果として起り得るものであると言ふ事で、第二は、特に催眠術後の被驗者の態度から、「無意識」と名付けて宜いやうな精神的過程の存在についての明瞭なる印象を得たと言ふ事であつた。「無意識」なるものは、既に永い前より、哲學者間に理論的概念として討論せられて居た。然し、此處では、催眠術の現象にあつてはそれは具體的な、把握し得る、實驗の對象となつた。そして更に、此の催眠的現象は、多くの神經症の表現との看過し難き類似を示してゐることがわかつて來たのである。

精神分析學の創成史にとつて、催眠術の意義は如何に高く評價してもよい。理論的にも治療的にも精神分析學は、催眠術から受け取つた嗣子を管理してゐるのである。

催眠現象は、神經症、殊にヒステリー症の研究に對して價値に充ちた補助手段たるを示した。シャルコーの實驗が、大なる印象を與へた。彼は外傷（卽ち偶然なる不幸）の後に現れ來る一定の麻痺が

ヒステリー症の本性であらう。そして實際に催眠狀態のうちで與へられた外傷の暗示に依つて、同一特性を有する麻痺が人工的に起さしめ得るに違ひないと推測した。爾來、外傷性影響は、ヒステリー症の病狀の成立には、一般的に必ず伴ふものであらうとの期待が用ひられてゐた。シャルコー自身は更にヒステリー性神經症の心理學的理解を追ひもとめはしなかつたが、然し、彼の弟子である、ジャネエが此の研究を取り上げて、ヒステリー症の疾患表現は或る一定の意識せられざる思考（卽ち固定思考（idées fixes）に重大なる關係があることを、催眠術を用ひて證明したのである。ジャネエはヒステリー症の特徵なるものは精神過程を統括することが、體質的不可能に陷つてゐることであると假定した。これに依つて精神生活の分裂（解離）が生じ來るものであることを主張したのである。

精神分析學は、然し、ジャネエの此の研究とは關係がない。此の學に對してはウイーンの一醫、ジヨセフ・ブロイエルの經驗が指導的のものであつた。卽ち彼は、何等の外からの示唆なしに、一八八一年に、一人のヒステリー症に罹患した娘を、催眠術の著しい助けに依つて研究し、且つ恢復せしめることが出來た。ブロイエルの得た此の結果は、十五年後に、彼が此の抄著者たる私を共同研究者となして後に、初めて發表せられたのである。彼に依つて治療せられた此の例は、今日に至る迄倘神經症の理解のための、並びなき意義を持つてゐる。故に、此の事を暫く叙述するのは止むを得ないの

である。即ちブロイエルの例の特有なる點は何處に存するかを明かにすることが必要である。此の娘は、その愛する父親の看護をしてから病氣になつた。ブロイエルは彼女の總ての症狀は此の病氣看護に關係があることを看破し、このことに依つて病症の說明をすることが出來た。斯くて、初めて、此の謎の如き神經症の一例が、殘りなく見透され、そして總ての病症現象が意味に充ちてゐることが明かにされたのである。更に、或る行爲の衝動が遂行せられずして却つて他の動機に從つて抑壓せられて存する情況から症狀が生ずると言ふことが、この疾患の症狀の一般的特質であることがわかつた。此の抑壓せられてゐる活動の代りに、正にその症狀が生じ來つたのである。故にヒステリー性症狀の病因に對しては、感情生活（情緒性 Affektivität）や精神力の働き（即ち力學性 Dynamismus）が擧げられる。そして此の二つの見地は、從來決して見逃されてはならぬものとせられたのである。

症狀の成立に對する素地は、ブロイエルに依つて、シャルコーの所謂外傷に類す可きものとせられた。此の外傷性素地、これに結合してゐる總ての精神的衝動は、全然患者の追想から失はれ、恰もそれが曾つて生じたことはなかつたものの如くであるが、その作用、即ち症狀は、時間に依つても何等減少しないかの如く、不變に繼續すると言ふ事は最も注意す可きである。故に此處にも、意識せられざる、然し正に、それがために特に力强い、恰も旣に催眠術術後作用に於て知つた如き精神的過程の

存在に對する、新しい證明を見出したのである。ブロイエルの用ひた治療法は、患者を催眠術にかけて、忘れてゐる外傷を思ひ出さしめ、力のこもつた、情緒表白をもつて、その外傷に反應せしめることである。斯くすれば症狀は消失する。症狀は、それまでは斯くの如き感情表白の代りに生じてゐたものである。此の如き操作は、研究と同時に苦惱の除去にもなる。そして此の珍しい一致が後に精神分析學によつて更に確められたのである。

此の抄著者が、一九九〇年代の初めに、此のブロイエルの經驗を、多數の患者に依つて確めた後で、二人の者卽ちブロイエルとフロイドとは、此等の經驗と、この經驗に基いた學說の試みを書いた著書を、出版せんことを決心したのであつた（ヒステリー症の研究一八九五年）。此の書は、ヒステリーの症狀は、强く感情的に充塡せられた精神的過程の情緒が、正常の意識せられたる改作現象に依つて壓迫せられ、依つて惡い道に追ひやられたることに依つて生ずると言ふ事を言明してゐる。これは、ヒステリー症の例に於けるが如く、通常ならざる身體神經支配に移行する（卽ち轉換 Konversion）。然し、催眠現象に於て、此の經驗が新たにせられることに依つて、轉向せしめられ、そして解放せられる（卽ち、離脫 Abreaktio）ことが出來るのである。著者等は此の現象を通利（Katharsis）と稱する淸洗、又は壓縮せられたる情緒からの解放）。

通利的の方法は、精神分析學に對しては不離の先驅者である。そして經驗の總ての擴張、學說の總ての改訂にもかかはらず、尙常にこれが核となつて此の學のうちに在るのである。斯くて、此の學は一定の神經症性の疾患の醫術的影響に對する新しい道であつた。そして遂に一般的の興味の對象ともなり、同時に强い反抗の對象ともなつたことは誰も初めは豫想し能はなかつたところであつた。

二

「ヒステリー症の研究」を發表した後間もなく、ブロイエルとフロイドの共同作業は終りとなつた。ブロイエルは、元來は內科醫であつたので、遂に神經疾患の治療に從ふのを止めて了つたのである。そしてフロイドが、此の昔の同學者から殘された武器を更に完全にするために刻苦した。遂に彼が用ひ始めた手法の改新、及び彼が成した發見は通利的療法を精神分析學へと變へしめたのである。此の結果する處重大なる步武は、彼が催眠術を治療的手法に用ひざることを決心することから始まつた。彼はこの事を二つの動機からなした。第一は、彼がナンシイのベルンハイムの處で臨床修業をなしたにかかはらず、患者の多數に催眠術をかけ得ることが出來なかつたことであり、第二は催眠術によつて行はれた通利療法の治療的結果は、甚だ不滿足なるものであつたことからである。催眠術の結果は著しく、且つ少しく處置をつづけると、必ず現れては來るけれどもそれは永くつづかぬこと、及び患者の醫師に對する人格的關係に大なる關係がある事等がわかつたからである。催眠術を捨てた事は、それまでの此の療法の發達との絕緣を意味し、且つ新しい第一步を意味するものであつた。

然し催眠術は甚だ役立つた。卽ち患者をして忘れて居たものを彼の追想のうちに引き出すことの出

來る點である。此の點は他の手法で代置せられねばならぬ。そこでフロイドは此の催眠術の代りに、自由聯想の方法を思ひついた。卽ちフロイドは、患者をして、總ての意識的の反省を一切捨てしめ、代りに靜かに集中して、偶然落ち來る思ひ付き卽ち意志せざる思ひ付き、を追求せしめる方法を取つた（意識の表面を拭うて了ふこと）。斯かる思ひ付きは、如何にそれに對する反抗を感じても醫師には打ち開けねばならぬ。例へばその思考が不愉快のものであつても、又重要でないものであつても、或は不合理なものであつても、又は無關係なことでも、打ち開けねばならぬと定められたのである。忘れて居た、意識せられざるものを研究する助けとして、自由聯想を選んだことは甚だ珍しい事に見ゆるであらうから、一言なかる可からずである。フロイドは所謂自由聯想なるものは實は不自由聯想、卽ち總ての意識せられる思考意圖を抑壓した後は、思ひ付きの決定は、意識せられてゐない、材料に依つて現れてくるであらうとの豫期に導かれてゐたのである。果せる哉、この豫期は經驗上確認せられた。既に述べた「分析の根本規則」を嚴守して自由聯想を追求すれば、その患者に依つて既に忘れて居られる痕跡から生じて來た思ひ付きの、豐富なる材料が得られる。此の材料と言ふのは忘れ去られたるもの自身を持ち來るのではない。然し、醫師が一定の補足と解釋とを與へて、その忘れ居たものを知り得る（再構成する rekonstruieren）やうな、明瞭な、豐富な意味を齎すのである。自由聯想

と、解釋技術 Deutungskunst とは、從前の催眠術と同じ事をなすのである。

此の仕事は甚だむづかしく且つ複雜に見える。然し價高き收穫がある。卽ち觀察者をして催眠狀態が開いて見せて吳れたものと同じ精神力の演技を、瞥見せしめる事が出來るのである。此の病源となつてゐた、忘れたものを發見する仕事は、不變の、且つ甚だ力强い抵抗に打ち勝たねばならぬ。旣に述べた患者が自分に浮んで來た思ひ付きを、批判的抗議から打ち明けるのを拒み度いと思ふが如きは、此の抵抗の現れである。而もそのために、分析學上の「根本規則」があるのである。此の抵抗現象の批判から精神分析的神經症學の礎石の一つ、卽ち壓迫現象の學說 Theorie der Verdängung が生じたのである。これは、病源となる材料を意識にのぼすことに對して反抗する力が現在し、而もこの努力が結果となつて現れ來つてゐることを假定するに在る。斯くの如くして、今や神經症の症狀の病因學に於ける一間隙は充たされた。今や症狀がその代理となつてゐる。諸種印象、及び精神的諸衝動は、決して根據なきものではない。又はジヤネエの考へた如く、これを綜合することが體質的に不可能なる結果として、忘れ去られてゐるのでもない。却つてそれは、他の精神的の力の影響に依つて、壓迫を蒙つてゐるのである。意識より遠ざけられてゐたり、又追想より除外せられてゐるのは、正にその壓迫の結果であり、更に、此の壓迫現象のためにこそ、それ等が病源性を有することになつ

たのである。言ひ換へればそれ等は通常ならざる道を通つて、遂に症狀としての表現を形成し來つたのである。

壓迫現象の動機として、又それ故に、總ての神經症的疾患の原因としては、精神的努力の二つの主群の間の軋轢を擧げねばならぬ。而も今や經驗は、此の互ひにしのぎを削る二つの力の全く新しい、そして驚く可き事實を知らしめた。壓迫現象は正しく、患者の意識的の人格（即ち自我）から出て來たもので、道德的及び審美的の動機がこれを呼び起したのである。一般に人が惡として總括する、自惚、殘酷等の衝動は、此の壓迫現象に遭遇するのである。就中、性的願望衝動は、最も甚しく、且つ最も禁止せられたものとして壓迫せられるのである。疾患症狀は、だから、禁ぜられたる滿足に對する代理であつた。そして、疾患そのものが、人間に於ける不道德なるものとの不完全なる結合物に相當するものである。

知識の進歩は、如何に性的願望衝動が精神生活に在つて、限りもなく大なる役目をなしてゐるものであるかを、愈〻益〻明瞭にせしめる。そして性的本能の本性及び發育を、益〻深く研究す可き刺戟を與へる（フロイド、性學說に關する三論文一九〇五年參照）。加ふるに、他の純粹に經驗的結果、即ち早期の幼年期に於ける經驗及び軋轢は、個性の發育に豫期せざるほど重要なる役目を演じ、且つ成

人時代に對しても、消し難い素質を殘すものであることの發見があつた。更に、これまでは科學が全く見のがして居つた、小兒性性慾 infantile Sexualität 即ち極く幼少時より精神的慾望として と同じやうに、肉體的反應として現れ來る小兒期性慾を發見したのである。此の幼年期の性慾を、成人の所謂正常及び異常倒錯の性生活と一致せしむることによつて、性慾そのものの概念が、顧慮と擴大とを受けた。而もそれは性的本能の發育史に依つて是認せられるのである。

催眠術を、自由聯想の手法に依つて代へて以來、ブロイエルの通利療法は、精神分析學と變つた。而もこの學は、殆ど十年、此の抄著者(フロイド)一人に依つて開拓せられ來つたのである。精神分析學も、近頃に至つて漸く、神經症の症狀の成立には意味と意圖とがあることを示し得る手段を與へ、且つ苦惱の除去に努力する醫療に合理的の根據を與へる學說の位置を得て來た。私は此の學說の內容を形作る動機をもう一度總括して置き度いと思ふ。即ち、本能生活(情緒性の力說)精神力學の提唱、見かけは殆ど暗黑である意志的な精神現象に深い意義があり、且つ決定力のあることの主張等がそれである。心理的軋轢や壓迫現象の病源的本性についての學であり、疾患症狀の代理的滿足としての理解であり、性生活、特に小兒期性慾に關係ある病源的意義の知見等である。哲學的見地から言へば、此の學說は、精神は常に意識に依つて總括せられるものではないとの立場、精神的過程はそれ自

らとしては無意識であつて、唯特別なる器官（特別なる審判 Instanzen 又は系 Systeme）の働きに依つて初めて意識的となるとの立場をとるのである。私はこの上に尚追補の意味でつけ加へる。卽ち小兒の情緒的慾望のうちには、兩親に對する複雜なる感情關係、所謂エデイプス複合が生ずる。而もこのうちに常に各種神經症の明かなる核が認められること、及び被分析者の醫師に對する態度のうちには、感情轉授 Gefühlsübertragung なる一定の現象が現れて來るもので、これこそ學說に對しても、手法に對しても同樣に大なる意義を有すると言ふ事である。

神經症についての精神分析學的學說は、斯くの如き外形を具へて居るものであるから、既に多くのこの主要領、主傾向に對する反對、及び局外者には、珍奇感、不贊成、及び不信等を惹き起したのであつた。殊に無意識の問題に對する意見、小兒性性慾の承認、及び精神生活一般のうちに性的動機を力說すること等がその主なるもので、更にこれに別のものも附け加はつてゐるのである。

ヒステリー症の少女では、如何にして禁ぜられた性的願望が、苦痛ある症状に轉化せられるか。この事を理解するためには、精神装置の構造、及び働きに關して、深く突き入つた、然し乍ら混沌とした假定をとも角も作らねばならなかつた。而もその假定のうちには明かに消費と結果との間には矛盾があつた。然るに精神分析學上より主張せらる關係が、實際に成立し而もそれが根本的の性質であるならば、單にヒステリー症の現象のみでなく、他の諸現象にも自ら應用することが出來ねばならぬ。此の結果が正しいとしたならば、精神分析學は、單に神經學者に對して興味あるのみではないことになる。斯くて此の學は、心理學的研究が意義ありと考へる總ての事柄に注意を換起したのであつた。卽ち此の學の結果は、啻に病理的精神生活の領域に對して問題となつたばかりでなく、正常機能の理解に對しても見逃す可からざるものであつた。

三

精神分析學が病的精神生活より外のものの闡明にも用ひ得ることの證明は、逸早く二種の現象に對して出て來た。卽ち日常屢々見られる、間違ひ行爲、忘却、言ひ誤り、置き忘れ、等の現象と、健康

なる、心理的に正常なる人々にもある、夢とについてである。些細な失錯行爲、常によく知つてゐる固有名詞の忘却、言ひ間違ひ、書き間違ひ、及びこれに類似の事柄は、從來は殆ど說明が出來てゐなかつたか、或は疲勞、注意の轉向等によつて僅かに說明せられて居た處である。此の抄著者は、その著書「日常生活の心理的病理學」(一九〇一、一九〇四年)のうちで、此等の事柄は甚だ意味のあるものなること、及び意識的の企圖の障碍に依つて、或は他の抑壓せられてゐる、或は屢々直接に意識せられざるものに依つて、生じてゐることを示した。多くは直ちに意味付けが與へられる。或は短い分析的硏究によつてこの障碍をなした影響が見出される。此の如き失錯行爲、例へば、言ひ間違ひの如きが屢々生ずるのは、誰にも容易に意識せられぬ精神的の過程の存在を確信せしめることが出來る。意識はせられぬが有効であり、且つ少くとも、他の企圖せられた活動に對して、制止又は制限を生ぜしめるものが存するのである。

更に夢の分析については、此の抄著者が旣に一九〇〇年に「夢判斷」を發表してゐる。これは、夢は、神經症的症狀より外の何物でもないと言ふ事から來てゐる。夢は全く珍しい、且つ意味のないもののやうに見える。然し、夢を精神分析に應用せられる自由聯想と異らぬ手法に依つて分析するならば、現れた夢の主內容から、その祕密の意味に至る迄のものが、皆潛在的夢思考から生じ居ることを

知るのである。此の潜在する意味は、常に願望であつて、それは實際に於けるよりは、夢では充たされて描かれるのである。然し極く幼い小兒に於て、或は絶對的の身體要求に依つてより外は、此の如き祕密の願望は決して言明せられることはない。かかる場合先づ第一に變造作用を受けるが、それは夢を見る人の身體のうちの制限的の、或は檢閱的の力のなした仕事である。斯くの如くにして實際の夢が生じて來る。覺醒時に追想せられる時には、檢閱作用に免許されたものだけが夢に現れるのであるから殆ど見分け難きまでに變形せられて居る。然し、それは分析的研究に依つて、滿足情況又は、願望充足の表現として現れるのである。二つの互ひに戰ひつつある精神的努力の群の間の妥協は、恰もヒステリー症の症狀に見出さるる如きものである。夢は一つの（壓迫せられたる）願望の（假裝せられたる）充足であると言ふ公式は、根柢に於て夢の本態に最もよく適合してゐる。潜在する夢願望が、顯現する夢內容に變化する（卽ち夢の仕事）過程を研究することに依つて、無意識的精神生活について我々の知り得る處のものの、最も良いものを經驗したのである。

斯くして夢は何等の病的症狀ではない。却つて正常精神生活の働きであると言へる。夢が充たされたものとして描く願望は、神經症にあつては壓迫作用のうちに陷入るところの同じ願望である。夢の成立の可能であるのは、單に人間の運動性が痲痺してゐる睡眠狀態の間に於ては、壓迫作用が夢の檢

閾に對して減少してゐると言ふ、最もよい條件があるからである。然し夢の形成が、一定の限界を踏み越えてゐる時には、夢を見る人は、それに終結を與へ、驚いて眼をさますのである。卽ち正常精神生活に於ても、病氣の際と全く同樣に、此の如き力と此の如き過程とが、相互の間に成り立つと言ふことがわかる。夢判斷から精神分析學は二つの意味を持つた。卽ち分析は神經症の新しい療法の一つであるばかりではなく、これは一つの新しい心理學である。卽ち精神分析學は、唯單に神經症によつてのみならず、精神科學を攻究する總ての人によつて顧みられねばならぬことになるのである。

然しこれが科學の世界に受け取られた有樣は、少しも同情的なものではなかつた。殆ど十年の間フロイドの業蹟に對しては誰も見向きもしなかつた。凡そ一九〇七年頃に至つて、スヰスの精神病學者(チューリヒのブロイエル及びユング)の一群が、精神分析學に注意を向けた。恰もこの頃獨逸國に於ては特に、憤激の嵐がまき起つた。然しそれは、その方法と論議とに於て、鎭め難きものではなかつた。斯くて精神分析學はこの場合、總ての新しいものの受ける運命を受けたのであつたが、一定の時日の經過の後に、一般的に認められるやうになつた。實際分析學が特に甚だ強い反抗を呼び起したのは、此の學の本性に存する。精神分析學は文化人の偏見を、特にその最も感受性の高い場所に於て傷けた。そして一定度迄は總ての人間に、分析的反應を起さしめた。卽ち分析學は、無意識の中に壓

迫せられて居たところのものをこれ等一般の人々のうちに發見し、依つてこの學は、分析的處置を受ける場合に病患者が先づ第一に抵抗を現して來ると同樣に、一般の人々をして、抵抗を現さしめたのである。精神分析學の正しさを自ら信ずることも、亦分析の使用について教授を受けるのも甚だ容易ではないことはこれによつてもよくわかるであらう。

此の一般的の敵意も、精神分析學が次の十年の經過の間に確實に二つの方向に伸展して行くことを妨げることは出來なかつた。卽ち、地圖上から言うて、精神分析學等に對する興味が、常に益々新しい土地に浸潤してゆくこと、及び精神科學の領野に於て、常に益々新しい學科にその應用を見出したと言ふことである。一九〇九年、スタンレイ・ホールは、自ら率ゆるクラーク大學（マッサッチユセツト州、ウスターに於ける）で、精神分析學の講演をなす可く、フロイドとユングとを招聘し、而も同情ある歡迎を頒つた。爾來、精神分析學は、アメリカに於て有名となつた。尤もアメリカに於ては、多くの淺薄と、多くの誤解とが此の名を汚したのではあるが。既に一九一一年にハヴエロツク・エリスは、分析學が唯に墺太利及び瑞西のみならず、合衆國に於ても英國、印度、加奈陀及び恐らくは濠洲までも廣まつてゐることを確めた。

歐洲大戰の時及び平和克服の初めに、全く精神分析學のみに關する文獻的機關が生じた。卽ち「精

神分析學的、及び精神病理的研究年鑑」Jahrbuch für psychoanalytische und psychopathologische Forschungen. がブロイエルに依つて編輯せられ、ユングに依つて補助せられて發行せられた(一九〇九—一九一四年)。これは大戰争の勃發するや休刊せられた。「精神分析學中央雜誌」Zentralblatt für Psychoanalyse は(一九一一年)アドラー及びステケルに補輯せられて、後間もなく「精神分析學國際雜誌」と改題せられて(一九一三年現在に至る十年間)發行せられた。更に一九一二年以來ランク及びザツクスに依つて「イマゴ」Imago 卽ち精神科學への精神分析學の應用を主とした雜誌が創刊せられた。英國及び米國の醫師に與へた大なる興味は、一九一三年に創刊せられた「精神分析學雜誌」Psychoanalytic Review に依つてよくわかる。この雜誌はホワイト及びジエリツフ兩氏に依つて編輯せられ現在尙續刊してゐる。その後、一九二〇年には英國に限られた、エルンスト・ジヨーンスの編輯になる「精神分析國際雜誌」International Journal of Psycho-Analysis が發刊せられた。獨逸の國際精神分析學出版社及びこれに相當する英國の出版社は、國際精神分析文庫(英國でも同名)の名の下に分析學的書籍の續刊が試みられてゐる。勿論、精神分析學の文獻は、此の如き精神分析聯盟に依つて多くは爲されてゐる定期刊行物のみに限られてゐるのではない。科學的又は文學的作物に於て澤山の場所にあちらこちら發行せられてゐるのである。精神分析學の特別なる注意を受け

てゐる羅馬市の發行雜誌のうちには、リマに於けるデルガド（ペルー）の指導してゐる「精神分析誌」Rivista de Psiquiatria を擧げなくてはならぬ。

此の精神分析學の第二の十年が、第一の十年と異る點は、抄著者がもはや唯一の主張者ではないと言ふ點にある。學徒及び追從者の漸次に增しゆく仲間は、先づ第一に精神分析學的教義の擴布のために注がれ、ついでこれを繼續し、補足し、深めてゆくことに力を注がれてゐる。此等の追從者から年月の經過するに從つて、落伍する人もあるのは避け難いことである。その固有の道を行くか、又は精神分析學の發育の連續がをびやかされる如く見ゆる迄に、全く反對の方面迄迷ひ出づる者もある。一九一一年より一九一三年の間に、チュリヒのユングと、ウイーンのアドラーとは、分析的事實の解釋を全く變革することと及び分析の見地より轉向せんと努むること等に依つて、或る震駭を惹起したのである。然し直ちに、此等の脫退が、何等の障碍をもあとに殘すことは出來なかつた事がわかつて來た。何が彼等をして一時的の結果を來さしめたかと言ふ事は、容易に、精神分析學の結果が呈する壓力から自由にならうとする群集の覺悟からであると言ひ得るのである。斯かる道は常に彼等に對して開かれて居るからである。然し共同作業者の優越せる多數が、忍耐して殘つた。そして依然として、示されて居る方向直線を追ひ求めて進んでゐる。それ等の名は次章の、甚だ短い、精神分析學の成果の描寫

に當り、その應用の多樣なる領域に於て、繰返し出て來るのである。

醫界の方面から精神分析學に加へられた喧々囂々たる拒絶も、此の學の追從者を離反せしむることは出來なかつた。彼等は此の學本來の意圖、卽ち神經症の特別なる病理學及び治療學、卽ち今日と雖も尙未だ完全に解決し居らざる此の問題を發展せしめる可く努力した。否定し得ざる治癒結果、而も從來の成績をはるかに超える結果は、常に新しい努力を激勵し、此の材料の中に深く穿入することの困難さを打ち勝たしめ、分析的手法の根據ある改善、及び此の學說の假定及び前提に意味深い改訂をなさしめた。

四

精神分析學の手法は、此の間益々發展して、他の醫學的專門科目の如くに、一定し來り、精細となり來つた。此の事實は誤解されてゐるが、それは特に英國及び合衆國に罪がある。卽ち此等の國では、唯講演を聞いただけで精神分析學の文獻的知識を得、直ちに分析的治療を施し得ると考へ、特別の習熟なしにこれを試みる人が多かつた。此の如き先走りの結果は、學問のためにも、又患者のためにも不結果である。そして精神分析學に對する不信を引き起さざるを得ない。精神分析學的臨床講義（一

九二〇年、ベルリンに於て、アイチンゴンに依つて始められた）が始められたことは此の意味に於て、即ち臨床的意義に於て價高き一歩であつた。此の研究所は、一方に於ては分析療法を更に廣い公衆に傳へると共に、一方に於ては、醫師を臨床分析家に養成せんがために講習をなすのである。だから、學ぶものが自ら精神分析を施行することを條件とする講習である。

醫師をして分析的材料を、十分處置し得しめるためには、一定の補助概念が必要である。先づ第一にこれを「リビド」と名付けた。リビドと言ふ文字は、精神分析では、先づ第一に、對象に向けられた性的本能（これは分析學説によつて意義を擴張せられたが）の力を意味するのである。（此の力は勿論、量的の變化も起るし、且つそれが測定し得ると考へる。）更に研究を進めて、此の如き「對象リビド」の外に、自己自身に向けられた「自己愛的リビド」又は「自我リビド」なるものをも提出せしむる必要が生じた。そして此の二つの力の交互作用が、精神生活の正常及び病態過程の澤山の現象を、正しく解せしむることが出來るのである。斯くして所謂「轉授性神經症」を自己愛的病症から大別することが出來た。前者（ヒステリー症及び强迫神經症）は精神分析療法の本來の研究對象であつた。後者即ち自己愛性病症は、分析を補助手段として研究をなすことが出來るけれども、治療的影響は原理上からむづかしいものである。勿論、精神分析學に於けるリビド學説はまだ決定的のものではなく、

且つ此の說が他の一般的本能學說に對する關係もまだ闡明せられてはゐないことは眞實である。精神分析學はまだほんの若い、殆ど不成熟な、急速に發達し來つた科學である。然し此處に力說し置く可きことは甚だ屢〻精神分析學に對して擧げられた汎性慾學說 Pansexualismus の非難は如何に誤りであるかについてである。その非難は言ふ。精神分析學說は精神的の本能の力を、唯性慾的のものとのみ解するものではないかと。斯くて此の非難は衆俗的偏見を利用して「性慾的」と言ふのを分析的の意味にではなく、粗野なる意味に誤解してゐるのである。

自己愛的病症と精神分析學で言ふのは、精神病學に所謂、官能性精神症 funktionelle Psychose と名付けて居る總ての疾患を指してゐるのである。然し神經症と精神症とは判然たる限界は與へられてゐないことは疑ふ可くもない事である。恰も健康狀態と神經症との間に區別の少いと同じである。斯かる謎の如き精神的現象の說明に對して、從來同樣に不明であつた神經症についての洞察を應用することは可能である。旣に此の抄著者は倘一人で硏究をしつつある間に、偏執病（パラノイア）の一例を、分析學的硏究によつて、殆ど理解し得るやうになし、そして此の如き、疑ひもなく精神症である病症にあつても、單純なる神經症と同じやうな內容（複合）同じ樣な力の演技を證明したことがある。ブロイエルは精神症の殆ど總てにおいて、彼が「フロイド的の機制」と名付けたところのものが

あることを追求した。又ユングは一九〇一年に、早發性痴呆症の末期に於ける特殊の症状に對して、此の患者の個人的生活史から説明を與へて、分析學者としての大なる威望を一擧にして得た。ブロイエルに依つて與へられた、精神分離症 Schizophrenie なる總括的研究は、斯くして精神分析學的見地からの是認が、此の精神症の理解に對し、恐らくは是非に必要であることを示したのである。

斯くの如くであるから、精神病學は、精神分析學の最も近い應用領域となり、現在も亦その通りである。神經症の深い分析的知見に對して多くをなした同じ研究者が、例へば伯林のアブラハム、ブタペストのフエレンチ（最も勝れた人と稱す可き）等の如きが精神症にあつてもその分析的闡明に於て指導的の位置を占めてゐる。神經症的の、及び、精神症的の現象として知られてゐる、總ての障碍について、その單位及び相互關係についての確信は、精神病學者の總ての努力にも拘らず益々強く貫徹せられてゐる。漸く人は――特にアメリカに於ては――神經症の精神分析學的研究のみが、精神症の理解に對する準備となることを理解し始めてゐる。故に精神分析學は將來に於ては科學的精神病學となる可能性あり、精神病學はもはや、特別なる狀態型や理解し難い經過の記載ではなく、又大まかな解剖學的及び中毒學的外傷の、我々の知見に達し得られる精神器官への影響を追求することのみで滿足するを要しなくなるであらう。

五

精神分析學は、精神病學に對する意義から知識階級の注意を喚起したことはなかつた。又曾つては「現代の歴史」The History of our times の一頁をも割かしめたことはなかつた。然しやがて、精神分析學は正常人の精神生活に對する關係から世の視聽を引いたのである。却つて精神分析學の病的精神生活に對する關係は注意を引かなかつた。分析的研究は最初、勿論病的の精神狀態の成立條件(成立原因)を基礎づけることを志したのであるが、此の努力をつづける間に、一つの新しい心理學を建設せねばならぬと言ふ、根本的の意義からの關係を見出すことになつた。故に斯くの如き發見の適用範圍は唯單に病理學の領域にのみ限らるることは不可能となつた。此の結論の正しいことについての決定的の證明が與へられてゐることは既に述べた。即ち分析的手法による夢の解釋である。夢は正常人の精神生活に屬してゐるのみならず本來健康の條件下でも規則正しく現れ來る病的產物である。夢の研究に依つて得た、分析學的の洞察を固く有する人は、更に一步を進めて、精神分析學を、深部の、意識には到達せぬ精神過程の學、即ち「深部心理學」Tiefenpsychologie とも名付く可き學とし

て殆ど總ての精神科學に應用し得るであらう。又此の步武は更に個人の精神活動から人間の集團又は民族の心理的作業に、即ち個體心理學より集團心理學への移行にもなり、實際多くの驚く可き類推によつて、それに迫りつつあるを見るであらう。例へば、意識せられぬ精神活動の深い層に於ては、反對對立は互ひに區別せられて居らず、同じ要素によつて表現せられてくることが經驗せられた。即ち言語學者アベルは、既に一八八四年に、(「原始言語の反對意味について」参照)我々の知り得る最も古い言語は、此の對立で生じ來つたものに違ひないと言ふ主張を立ててゐる。古代エヂプトでは、例へば强いと言ふ意味も、弱いと言ふ意味も唯一つの語であつたが、後に至つて初めて僅かな改訂を加へて、對立意義が生じ來つたものである。近代の言語にも、此の兩義語の明かなる殘りがある。例へば獨逸語の「Boden」――これは家の床と天井とを意味するもので羅典語の「Altus」――高い及び深い――と似てゐるのである。故に夢では相對立するものが同列に取り扱はれるのは、人間の思考の一般的古代的特徴なのである。他の領域からの例を擧げれば次の如くである。强迫患者の强迫行爲と、全世界の宗敎信者の、宗敎的行動との間に存する完全なる一致の印象は、除かうとしても除き得ない。强迫神經症の多くの例には、戯畫化せられた私的宗教の如く振舞ふものがある。故に公の宗敎でも、その一般性を失うたものは、强迫神經症と同一に取扱ひ得るであらう。多くの宗敎信者にとつて、恐

らくは驚く可きこの比較は、然し心理學的には甚だ効果大なるものである。何故ならば、强迫神經症に對して精神分析學は、此處に如何なる力が互ひに闘爭して居るか、卽ちその軋轢を强迫行爲の儀禮行爲に依つて著しく現し來る迄、その闘爭が高まることを知るからである。宗敎的儀禮に對しては、父親關係に對する宗敎的感情の歸着は、此處にその最も深い根があり、類同せる力學的情況が證明されるとなすよりも近い臆測は何もない。此の如き例は、更に讀者をして、精神分析學の醫學的領域以外への應用は、確信せられてゐる偏見を傷け、深く根ざしたる感受性に觸れ、從つて、本來激情的の素地を有する人々に敵意を呼び起すことなしには出來ないことが想像に難くないであらう。

意識せられぬ精神生活の一般的關係(本能衝動の軋轢、壓迫現象、代理形成滿足)は、何の領域にも存するものであり、且つ又此の關係の知識を得しめる深部心理學なるものが存するとするならば、人間精神活動の複雜なる領域への精神分析學の應用が、何の領域でも重要な、從來は到達し得ざりし結果を生ぜしめるであらうことは容易に期待し得るところである。オツトー・ランク、及びハー・ザックスの內容豐富なる一九一五年の研究は精神分析學者の業蹟が、如何に此の如き期待を充たすことが出來たかを示し得るものである。紙數が少いので此處に此の方面の詳細なる說明を試みることは出來ない。唯私は最も重要なる結果だけを揭げ、個々のものは二三だけを附加するに止めよう。

餘りよくは知られてゐない內部的衝動を論外とすれば、人間の文化發展の主動力は、人間の自然的要求の適當なる滿足を拒絕し、代りに甚しき危險を與へる外界の現實的なる困急から來たものであると言ふ事を言ひ得るのであらう。此の如き外部よりの拒絕は、人間をして現實との鬪爭を强制する。鬪爭とは一部分はこの危險に對する適應を生ぜしめることにあり、一部は此の危險を征服するにある。然しその同類と共勞し、共存するためには、既に數多くの、社會的に滿足せられざる本能衝動の、絕滅が必要となつてくる。卽ち文化が更に進步すればするほど此の壓迫現象の要求が生じて來る。文化は、卽ち、殆ど本能絕滅の上に建設せられてゐると言うてもよい。そして各ゝの個體は、小兒期より成人に至る間に於て、自ら人類の此の發達と妥協する諦めを繰返すに違ひない。精神分析學は、全く決定的にではないが、斯くの如き文化的抑壓を蒙つたもののうち、その主なるものは性的本能衝動であることを明かにした。その性的本能の一部は、今や價値高き性質を示す。卽ちその切實なる目的を轉向せしめ、所謂昇華の努力として、そのエネルギーを文化的發達のために與へるのである。然しその他の部分は無意識界に於ける、滿足せられざる願望衝動として殘り、假令歪められてゐても、何かの滿足を求めてゐるのである。

人間の精神活動の一部は、現實的なる外界世界の克服に向けられてゐると述べた。精神分析學は、

今や更に、他の、特に高く評價せらるる精神現象の一部も、願望充足に仕へること、小兒時代より滿足せられずして各人の精神のうちに住み來つた、各〻の壓迫せられた願望の代理滿足に仕へることを、附加せねばならぬ。即ち神話、詩、藝術等は認め得ざる、無意識との關係ありと思ふ場所から出るものである。そして實際に、精神分析學者の業蹟は、神話學や、文學論や、藝術心理學等の領域に迄輝かなる光を投げたのである。その典型的なものとして、此處には、オットー・ランクの業蹟を述べれば足るであらう。神話やお伽噺は、夢と同じやうに解釋を與へることが出來ることがわかつた。此の意識せられぬ願望の衝動に依つて藝術的制作が實現せられる道を追求する事が出來た。又藝術的作品の激情的作用が觀賞者に理解せられ、藝術家自身にあつても、その內的の親和力も、その多樣性も、神經症患者から說明せられたのである。又その素地、その偶然的經驗及びその行動との間の關係がすつかり說明せられた。藝術作品の審査的評價や、藝術的天賦の說明は、精神分析學の問題としてまだ觀察せられた事はない。然し、精神分析學は人間の空想生活 Phantasieleben の關係するあらゆる問題に對して、決定的の言葉を發することが出來る筈である。

さて第三には、精神分析學が、更に驚く可きことを知らしめる。即ち所謂エディプス複合が、言ひ換へれば子供の、その兩親に對する情緒的關係が、人間の精神生活のうちで如何に至大なる役目を演

ずるかと言ふ事である。此の驚きは、エディプス複合は、二つの基本的なる生物學的事實の心理的相關であることを理解すれば、すぐわかるであらう。此の二つの事實とは、卽ち、人間は永い小兒的の依賴性を有すると言ふ事實と、人間の性生活は三歲又は四歲で第一の最極頂に達し、ついで制止の一時期あり、思春期に於て再び新しく入り來ると言ふ著しい事實とである。然し、斯くして人間の精神活動に於ける、第三の此の重大なる部分が、宗敎や、法律や、道德の大なる制度、總ての公共形式を形作つたのであるが、その根柢に於ては、各個人としてはそのエディプス複合の克服を可能ならしめるため、そしてそのリビドを小兒性の結合から、結局然らざる可からざる社會的の結合に導き移す爲であることがわかるのである。精神分析學の、宗敎科學及び社會學(フロイド、レイク、プイステル)への應用は、此の結果を導き出したもので、尙若く、且つ滿足には遂げられ居らぬものである。然し更に硏究を進める事に依つて、此の重要なる解明の確實さは、唯價値を增すばかりであることは疑ひを入れぬところである。

さて附加として更に述ぶ可きことがある。卽ち敎育學と雖も、子供の精神生活の分析的硏究が與へた暗示を利用せずに置くことは出來ない。更に又、治療家の間にも、重い器質的疾患でも、精神分析學的處置が、望み多きものであること、何故ならば多くの此の如き病症に於ても、影響の多い心理的

因子が必ず隨伴してゐるものであるからであることも亦主張せられるに至つてゐる。（グロデック・ジエリッフエ）

斯くの如くであるから、精神分析學、即ちその發達や、從來の活躍について、此處に短い、盡きざる描寫をなしたのであるが、それは必ず來る可き時代の文化的發達に於ては重要なる酵素として入り込み、そして生命に害ありと考へられる多くのものに打ち勝つために役立つであらうとの期待を言明することが出來る。精神分析學は、それ自身だけでは一つの完全なる世界觀を作ることは出來ないと言ふことを忘れてはならぬ。既に私が簡單に示唆した如く、精神裝置のうちで外界に向けられてゐる、意識を以つて飾られてゐる自我と、意識せられざる、本能要求に依つて支配せられて居るエスとを分ち居る區別を假定するならば、精神分析學は、このエスの（及び自我に對するその侵害の）心理學を示してゐることとなる。故に精神分析學は、總ての知識界に於ては自我の心理學からの補遺として參考を與へる。この補遺こそは正に事實の本質的なもので永く知られ居らざりし、精神的の無意識が我々の人生に對して要求する意義を示してゐるものである。

超意識心理學

定價金壹圓八拾錢

昭和七年四月二十八日印刷
昭和七年四月三十日發行

譯著者　林髞

發行者　北原鐵雄
東京市神田區今川小路二ノ一

印刷者　宮下桃太郎
東京府戸塚町下戸塚一〇九

發行所　東京市神田區今川小路二ノ一　アルス
電話九段（二一七五番・二一七六番）
振替東京二四八八八番

Freud
Metapsychologie

フロイド精神分析大系

最近の學界を惡魔の如く攪亂し神の如く驚倒歸依せしめたる

大膽奇拔の新學說『精神分析』とは何ぞや

こは……人間行爲の錯誤、夢の諸現象を分析闡明する微妙なる心理研究の結晶である。

こは……人間の現實生活を左右する驚くべき恐るべき潜任意識の摘抉である。

こは……神と惡魔とを同時に忌憚なく暴露し人間内奥の眞を示す新しき哲學である。

こは……勃起恐怖、中絶性交、潜在的同性愛、近親相姦等精神と性慾の聯關交錯を立證せる新しき實驗科學である。

こは……恐怖、假面、催眠狀態、死の象徵、詩的描寫、處女錯綜、夢の怪奇性、罪惡意識等精神作用の神祕を解明せる新心理學である。

こは……狂氣、ヒステリー、一切の精神病の原因を分析し、適切なる療法を明示せる最新の醫學である。

豫約に非ず選擇隨意

超意識心理學

フロイド精神分析大系

フロイド著

林髞訳

ARS

超意識心理學

フロイド精神分析大系

今後の文藝、美術、哲學、凡そ人間生活を基礎とする萬般の諸問題精神分析に依つてのみ解釋される。心の不思議、性の祕密を知らんとする人は讀め！赤刷は既刊

巻	書名	内容	譯者
第一巻	ヒステリー	ヒステリー研究・ヒステリーの病理	醫學博士 安田德太郎
第二巻	夢判斷(上)		學習院教授 東大講師 新關良三
第三巻	夢判斷(下)		學習院教授 東大講師 新關良三
第四巻	日常生活の異常心理		東北帝大教授 醫學博士 丸井清泰
第五巻	戀愛生活の心理	リビド說・文化的性道德と近代生活・戀愛生活の心理	醫學士 經濟學士 木村廉吉
第六巻	快感原則の彼岸	集團心理・快感原則の彼岸	廣島文理大教授 文學博士 久保良英
第七巻	精神分析入門(上)		醫學博士 安田德太郎
第八巻	精神分析入門(下)		醫學博士 安田德太郎
第九巻	洒落の精神分析		醫學博士 正木不如丘
第十巻	藝術の分析	レオナルド・妄想と夢・作爲と眞實・ミケランゼロ	慶大教授 茅野蕭々
第十一巻	トーテムとダブー	トーテムとタブウ・精神分析運動史	大阪商大講師 關榮吉
第十二巻	幻想の未來	幻想の未來・素人分析・自傳	帝大助教授 木村謹治
第十三巻	超意識心理學		慶大助教授 林髞
第十四巻	文化の不安		浪花高校教授 菊池榮一
第十五巻	異常性欲の分析		慶大助教授 林髞 醫學士 小沼十寸穗

譯者は悉く學界の最高權威！　現代に於て求む得べき最適者のみであります。

フロイド精神分析大系は始祖フロイドの全集により其の全學說を譯出したものです。

豫約に非ず選擇隨意

フロイド精神分析大系

最近の學界を悪魔の如く攪亂し神の如く驚倒歸依せしめたる

大膽奇抜の新學説『精神分析』とは何ぞや

こは……人間行爲の錯誤、夢の諸現象を分析闡明する微妙なる心理研究の結晶である。

こは……人間の現實生活を左右する驚くべき恐るべき潜在意識の摘抉である。

こは……神と悪魔とを同時に忌憚なく暴露し人間内奥の眞を示す新しき哲學である。

こは……勃起恐怖、中絶性交、潜在的同性愛、近親相姦等精神と性慾の聯關交錯を立證せる新しき實驗科學である。

こは……恐怖、假面、催眠狀態、死の象徴、詩的描寫、處女錯綜、夢の怪奇性、罪悪意識等精神作用の神祕を解明せる新心理學である。

こは……狂氣、ヒステリー、一切の精神病の原因を分析し、適切なる療法を明示せる最新の醫學である。

豫約に非ず選擇隨意

フロイド精神分析大系

今後の文藝、美術、哲學、凡そ人間生活を基礎とする萬般の諸問題精神分析に依つてのみ解釋される。心の不思議、性の祕密を知らんとする人は讀め！赤刷は既刊

巻	書名	内容	譯者
第一巻	ヒステリー	ヒステリー研究・ヒステリーの病理	醫學博士 安田德太郎
第二巻	夢判斷（上）		學習院教授 東大講師 新關良三
第三巻	夢判斷（下）		學習院教授 東大講師 新關良三
第四巻	日常生活の異常心理		東北帝大教授 醫學博士 丸井清泰
第五巻	戀愛生活の心理	リビド説・文化的性道德と近代生活・戀愛生活の心理	醫學士 經濟學士 木村廉吉
第六巻	快感原則の彼岸	集團心理・快感原則の彼岸	廣島文理大教授 文學博士 久保良英
第七巻	精神分析入門（上）		醫學博士 安田德太郎
第八巻	精神分析入門（下）		醫學博士 安田德太郎
第九巻	洒落の精神分析		醫學博士 正木不如丘
第十巻	藝術の分析	レオナルド・妄想と夢・作爲と眞實・ミケランゼロ	慶大教授 茅野蕭々
第十一巻	トーテムとタブー	トーテムとタブウ・精神分析運動史	大阪商大講師 關榮吉
第十二巻	幻想の未來	幻想の未來・素人分析・自傳	帝大助教授 木村謹治
第十三巻	超意識心理學		慶大助教授 林髞
第十四巻	文化の不安		浪花高校教授 菊池榮一
第十五巻	異常性欲の分析		慶大助教授 林髞 醫學士 小沼十寸穗

譯者は悉く學界の最高權威！ 現代に於て求む得べき最適者のみであります。

フロイド精神分析大系は始祖フロイドの全集により其の全學説を譯出したものです。

豫約に非ず選擇隨意